



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	＜モビリティ＞社会におけるボランティア・ツーリズムの研究
Author(s)	依田, 真美
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(観光学)
Dissertation Number	甲第13191号
Issue Date	2018-03-22
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k13191
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/71065
Type	doctoral thesis
File Information	Mami_Yoda.pdf



北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院
博 士 学 位 論 文

＜モビリティ＞社会におけるボランティア・ツーリズムの研究

依 田 真 美

＜モビリティ＞社会におけるボランティア・ツーリズムの研究

第1章 序論

1-1 研究の背景	1
(1) 社会的背景	1
(2) 学術的背景	8
1-2 研究の目的	11
1-3 本論文における用語の定義と本論文の構成	12
(1) 本論文における用語の定義	16
(2) 本論文の構成	17

第2章 先行研究の整理と本論文の独自性

2-1 先行研究整理の視点	19
2-2 ＜モビリティ＞社会とその特徴	20
(1) ポストモダン地理学における空間論と共同体	20
(2) 21世紀の＜モビリティ＞概念	22
(3) ＜モビリティ＞と観光	25
(4) ＜モビリティ＞社会とつながり、共同体	26
2-3 ボランティア・ツーリズム研究の動向	30
(1) ボランティア・ツーリズム研究の概要	30
(2) ボランティア・ツーリズムの類型	31
(3) 「もうひとつの」観光としてのボランティア・ツーリズム	31
(4) 先行研究にみるボランティア・ツーリズムへの期待	32
(5) ボランティア・ツーリストの動機	36
(6) ボランティア・ツーリストへの影響	38
(7) ホストコミュニティの動機とホストコミュニティへの影響	40
(8) 主催運営機関や仲介機関の役割について	41

(9) ボランティア・ツーリズム研究の課題	42
2-4 ボランティア組織やボランティアの動機について	42
(1) 活動積極要因	43
(2) ボランティアとリーダーシップ	45
2-5 先行研究のまとめと本研究の独自性	46

第3章 研究の方法と事例の概要

3-1 研究の方法	48
3-2 調査対象プロジェクトの選定	50
(1) 調査対象プロジェクトの選定条件	50
(2) 調査対象プロジェクトの妥当性	50
3-3 調査対象プロジェクトの概要	52
(1) 「小樽雪あかりの路」とOKOVOの概要	52
(2) 「越後妻有大地の芸術祭」と「こへび隊」の概要	58
(3) <こへび隊>の概要と特徴	63

第4章 地域イベントにおけるボランティア・ツーリスト団体の役割の時系列変化：小樽雪あかりの路 韓国人ボランティア団（OKOVO）を事例として

4-1 調査の目的と方法	65
4-2 小樽雪あかりの路におけるボランティアの種類と仕事	66
(1) 会場の特徴と変遷	66
(2) 展示の分類	67
(3) ボランティアの役割と変遷	67
(4) OKOVOの成り立ちと活動内容	69
4-3 OKOVOを例にしたボランティア・ツーリストの役割の変遷	80
(1) 観光的要素の強い参加（2003年）	80
(2) 人数での貢献と自発的活動の始まり（2004～2005年）	80

（３）内部体制構築（2006～2007年）	81
（４）主要団体として区画を担当（2008～2012年）	82
（５）合宿型ボランティアの拡大（2013年～2016年）	85
4－4 考察：ボランティア・ツーリストが地域イベントで果たす役割	86
（１）ボランティア・ツーリストの役割とその変化	86
（２）相互作用としての役割の変化とその要因	89
4－5 まとめ	91

第5章 <モビリティ>社会におけるボランティア・ツーリストの初参加および継続動機：小樽雪あかりの路 韓国人ボランティア団（OKOVO）

5－1 研究の目的と方法	92
（１）研究方法と事例の選定	92
5－2 ボランティア・ツーリストの初期参加動機と継続動機	94
（１）アンケートに基づくボランティア・ツーリストの参加動機	94
（２）アンケートに基づくリピーターの継続動機	95
（３）インタビュー結果に基づく初期参加動機と継続動機	99
5－3 雪あかりの路における「小樽」と体験の意味	106
（１）ボランティアツーリストにとっての小樽	106
（２）自分自身の変化	112
（３）OKOVO体験の他の類似観光との違い	116
5－4 考察	120
（１）変化する動機と交流の重要性	120
（２）OKOVO参加者にとっての小樽と雪あかりの路	121
5－5 まとめ	123

第6章 ボランティア・ツーリストの初期参加および継続動機：「越後妻有大地の芸術祭」 <こへび隊>

6-1 調査の目的と方法	124
6-2 大地の芸術祭における〈こへび隊〉の位置付けと活動内容	126
(1) 大地の芸術祭における〈こへび隊〉の位置付け	126
(2) 〈こへび隊〉の自律性	127
(3) こへび隊の現況と課題	130
(4) 〈こへび〉の活動内容と運営体制	130
6-3 2012年大地の芸術祭を事例として	133
(1) 〈こへび隊〉のプロフィール	133
6-4 〈こへび隊〉の運営の特徴と継続性	138
(1) 〈こへび隊〉の活動状況	138
(2) 〈こへび隊〉活動を継続するための課題	139
(3) 非公式な支援体制の重要性	140
6-5 長期継続参加者の活動継続動機	142
(1) 当初参加理由	142
(2) 継続参加理由	144
(3) アンケートに見る当初参加動機と継続参加動機	146
6-6 考察	147
(1) 「ホスト-ゲスト」という二項対立の限界と協働者としての視点	147
(2) 他の参加者との関係性の重要性	148
(3) コミュニティという視点	149
6-7 まとめ	150

第7章 総合考察

7-1 ボランティア・ツーリスト（団体）が地域で果たす役割と組織的特徴	152
(1) OKOVOとこへび隊の組織的な共通点と相違点	154
7-2 継続ボランティア・ツーリストの初参加動機と継続動機	160
(1) OKOVOと〈こへび隊〉の初参加動機と継続動機の比較	160

(2) 継続動機を生み出した要因	161
7-3 <モビリティ>社会における観光の役割-ボランティア・ツーリスト（団体）と受け入れ地域の関係性構築プロセスの視点から	165
(1) 継続するボランティア・ツーリスト（団体）と受け入れ地域のシステム	165
(2) 創発とコミュニケーション・コミュニティとしての可能性	169
7-4 まとめ	171
第8章 結語	
8-1 全体のまとめ	172
8-2 本論文の限界と今後の課題	175
謝辞	176
参考文献	177

＜モビリティ＞社会におけるボランティア・ツーリズムの研究

第1章 序論

1-1 研究の背景

(1) 社会的背景

1) ＜モビリティ＞社会の到来

私たちは歴史上かつてないほどに移動をしている。普通の人々が1日に移動する距離は、1800年の米国では50メートルを超えることはなく、多くの人は家やその周辺にとどまり、住む場所で働いていた (Buchanan 2002=2005:199)。それに対し、現在の1日あたりの平均移動距離はほぼ50キロメートルになった。船、鉄道、自動車、航空機などの技術が発達し、移動が格段と容易になったためである。自家用車やバスや電車で仕事や学校に行くことや、新幹線や飛行機に乗って出張や観光に行くことは、現代の日本でもありふれた日常の一場面である。

国境を超えた移動も珍しいことではなくなった。1950年には2,500万人であった他国への合法的な入国者数は、2015年には12億人に達した (UNWTO 2017)。世界の有償航空旅客数は1996年の13.9億人から2015年には35.3億人となり、20年ほどで2.5倍以上に増えている (ICAO 2016)。世界で最多の搭乗者数を持つ米国アトランタのハートフィールド国際空港の2016年の搭乗者数は1億417万人であり、第2位の中国北京国際空港の搭乗者数は9,439万人であった (International Airport Review 2017)。

移動しているのは、人だけではない。物質も常に移動している。工業製品が複数の国で生産された部品で作られることや、各国から新鮮な食材が「空輸」されることは、当たり前になっている (Urry 2007=2015:14)。さらに、通信技術の発達で情報もこれまでにない速さで移動している。世界のインターネット利用者数は、2005年の10億人から2017年6月末には39億人にまで増加した (Internet World Stats 2017)。これは、世界人口の約半数である。また、インターネットは、地理的距離を超えて、人びとを結びつけている。Facebookの利用者は、2017年6月末時点で20億人となった (Facebook 2017)。

このように、「移動」－英語では、モビリティ (Mobility)－は、今や私たちの日常に

すっかり組み込まれている。しかし、「モビリティ」は封建社会では場所を持たないヴァガボンドなどマイノリティの行動と見做され、初期近代においては自由の象徴であった（Cresswell 2006:11-20）。つまり、初期近代までのモビリティは、日常に対峙する概念だったのである。

今日のように日常に組み込まれた「モビリティ」という概念については、社会学では、主に21世紀に入ってから活発に論じられるようになった。2006年には、このようなモビリティをテーマとして*Mobilities*という学術誌も発刊された。その冒頭で、Hannam, Sheller, and Urryは「モビリティ」の定義を「世界中の人、モノ、資本、情報の大規模な動きだけでなく、日常の交通手段、公共空間を通じた移動、日常生活の中の物質的なものの移動というローカルプロセスの両方を含む概念である」¹としている（Hannam et al. 2006:1）。また、Urryは、このように『移動』の『レンズ』を通した思考（Urry 2007=2015:32）を「モビリティーズ・パラダイム」と称し、既存の領域や分野を超えた新たな視点を提言した（Urry 2007=2015:31-33）。本論文では、21世紀に入り論じられたこのモビリティ概念と一般名詞のモビリティを区別するために、前者を<モビリティ>と表記する。

2) <モビリティ>がライフスタイルに与える影響

移動が常態化した<モビリティ>社会の到来は、人びとのライフスタイルにも大きな影響を与えている。Urry (2002:256) は、通信技術が発達しバーチャルなコミュニケーションが進歩したにも関わらず、身体的移動が増加しているのは、「移動していること(being on the move)」が、「多くの人にとって一つの“生き方(way of life)”となっているからだ」と指摘している。Cohen et al. (2015) は、旅行、レジャー、移民の交差する分野に関する理論的な議論を進めるために、「ライフスタイル・モビリティ (lifestyle mobilities)」という概念を提唱した。同概念についても、移動が常態化した<モビリティ>に関連したものとして、以下ではカッコ付きの<ライフスタイル・モビリティ>と記す。

Cohen et al. (2015) は、自主的に継続するモバイル・ライフスタイル（「移動」を伴うライフスタイル）の影響として、以下の4点を挙げている（Cohen et al. 2015:156）。

¹ 日本語訳は、張（2014:34）による。原文は以下のとおりである。

‘The concept of mobilities encompasses both the large-scale movements of people, objects, capital and information across the world, as well as the more local processes of daily transportation, movement through public space and the travel of material things within everyday life.’

1. 旅行、レジャー、移住の境界が曖昧になること
2. 仕事とレジャーの二分法が崩壊するかもしれないこと
3. 「ホーム」と「アウェイ」の二項対立が不安定化すること
4. 常に移動をしていることで、所属やアイデンティティが複雑になること

さらに、Cohen et al.は、「＜モビリティ＞の基底には、トランスナショナリズム(脱国家または超国家的な理念や動き)やグローバリゼーション(グローバル化)があることに触れ、それは日常の生活のみならず、場(所)の創造にも影響を与えること」を指摘している(Cohen et al. 2015:162)。それは、＜ライフスタイル・モビリティ＞は、「場所での、場所への、また場所との帰属 (belonging in, to and with place)」(Cohen et al. 2015:162)の問題に関わってくるからだ。Cohen et al. (2015) は、「人は「ホーム」の感覚や「市民」としての感覚、場所への親近感を通して、無数の方法で場所と関係している」(Cohen et al. 2015:162) ことを述べた上で、＜モビリティ＞社会では「『ホーム』が一つの場所に根付いていると考えるのは恐らく時代遅れである」(Cohen et al. 2015:162) ことを指摘している。このような人と場所との関係の流動化は、個人や特定の場所の意味に影響を与えるだけでなく、人びとの生活を支える集団の意味付けにも影響を与える (Cohen et al. 2015:164)。

3) 新しい社会参加への希求

＜モビリティ＞社会では、これまでにない人の結びつきが可能となる一方で、人と場所の結び付きが流動化し、個人化が進むと考えられる。そのような変化は、モダニティに始まった共同体の崩壊や個人化の進行、および、その結果としてのアイデンティティの崩壊など²を加速する。しかし、さらに注目したいのは、その揺り戻しとして、新しい形での社会参加を模索する動きが始まっていることである。例えば、個人による社会貢献活動や、フェアトレードなどエシカル消費への関心の高まりである。

例えば、日本においても、内閣府の「社会意識に関する世論調査」によれば、社会に役

² この点については、Giddens(1991=2005)の「自己再帰的」な社会や、Bauman (2000=2001)の「リキッド・モダニティ」、Beck(1986=1998)「リスク社会」などについての議論を参照されたい。

立ちたいと思う人の割合は1990年代を通して上昇し、その後も2000年代は60%前後の回答者が「社会に貢献したいと思っている」と回答した。同比率はさらに上昇し、2010年代では、65%前後で推移している（図1－1）。また、総務省（2017b）の『社会生活基本調査』によれば、2000年代に入ってから約1/4の国民が何らかのボランティア活動に参加している。

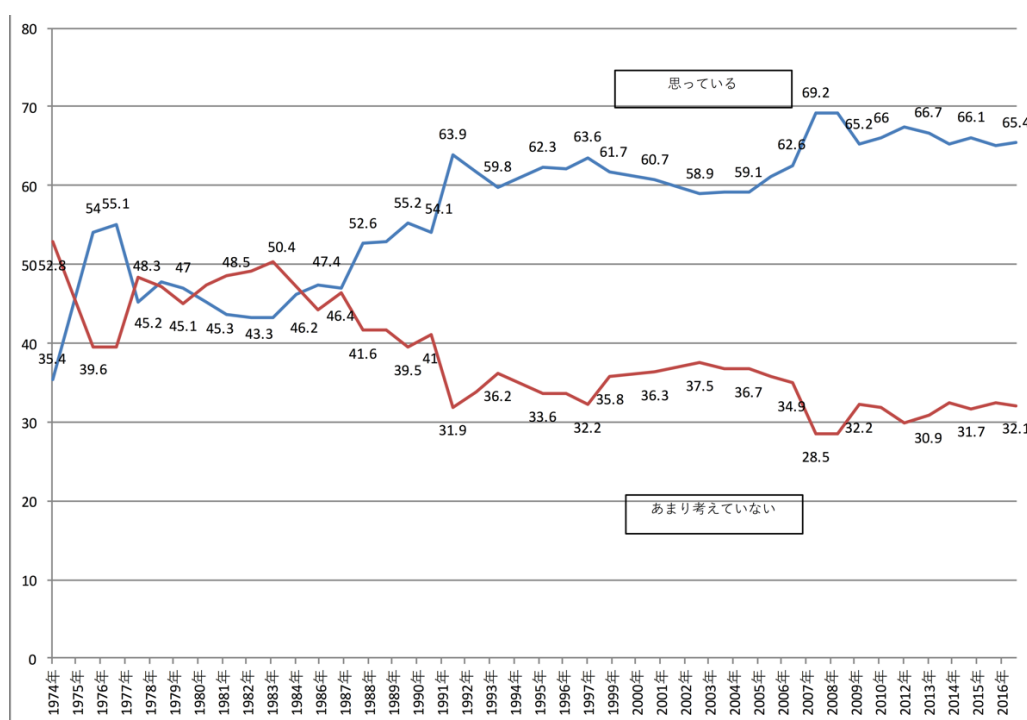


図1－1 社会への貢献意識（時系列）

出典：内閣府『社会意識に関する世論調査』1974年～2016年を元に、筆者作成

企業においても社会貢献への関心は高まっており、企業の社会的責任（CSR）活動や社会人によるプロボノも注目を集めている。また、本業により社会的意味を向上させる「Creative Shared Value(CSV)」という考え方も広まっている。このような企業の意識変化に伴い、先進国の多くでは、就職時にボランティアを含む社会参加経験が問われることも多くなってきた。

<モビリティ>社会の到来と社会貢献活動への関心の高まりは、ツーリズム分野へも影響を与えている。その一例としては、1990年代後半から急速に参加者数が増加したと推定されるボランティアを旅の目的とするツーリズムーボランティア・ツーリズムと呼ばれる

ーが挙げられる（Tourism Research and Marketing 2008）。その数は、英国と米国だけでも少なくとも12万人を超えると推計され、2000年代に入ってから、これを新たな商業機会と捉えた旅行会社の参入も増加している。

世界のボランティア・ツーリズムの参加者に関する統計はなく、その全体像を把握することは難しい。しかし、その広がりやすさについては、国際連合が運営しているボランティア活動（UN Volunteer）参加者数が参考になろう。同参加者数は1989年には2,000人あまりであったが、2001年には5,000名を超え、2005年には過去最多の8,122名に達した（United Nations Volunteers 2017）。その後、2011年までは7,000人台で推移し、2012年以降は6,000人台で推移している。1989年当時と比べると参加者は3倍以上になり、日常生活圏外でのボランティア活動が拡大し、定着した様子が伺える。

ボランティア・ツーリストが急増した直接的な理由の一つとしては、欧米やオセアニアにおいて「gap year」が普及したことがある（Callanan and Thomas 2005）。「gap year」とは、一定期間、仕事や学業を離れて異なる活動に従事することで、大学入学前後の世代が取ることが多い。また、前節で触れたような、企業が就職に際して海外でのボランティア活動を評価する傾向や、ボランティア活動を学校で単位として認める動きなども、ボランティア・ツーリズム参加者の増加を加速させている。

4）ボランティア・ツーリズムへの期待と課題

参加者が増加しているボランティア・ツーリズムには、これまでの旅行にはない社会的な効果や役割に対する期待がある一方で、懸念も生まれている。ボランティア・ツーリズムへの期待は、同ツーリズムがボランティア活動という社会貢献を目的とした旅行であることや、地域の人とより長い時間、より密接に活動を通じて交流できるという特徴に基づいている。例えば、同ツーリズムへの参加者の「発見、学習」や、地域と参加者の相互理解や関係性構築の機会が社会変革に結びつくのではないかというような期待である。しかし、同時に、ボランティア・ツーリズムの成果はプログラムの内容により差があること、自動的に生まれてくるものではないことも指摘されている（Wearing and Ponting 2006）

また、課題としては、ボランティアという「与える」行為を通じて、ホストコミュニティの依存を促進する可能性があることや、仕事の非効率性や質の低さなども問題として指摘されている（Sin 2009）。このような課題に対しては、継続的に活動が続けることが一つ

の解決策になるのではないかという視点も紹介されている（Fitzpatrick 2007）。

5) 日本のボランティア・ツーリズム

先に社会貢献への関心が日本においても高まっていることを示したが、日本でもボランティア・ツーリズム、または、居住地域以外でのボランティア活動はより活発になってきていると考えられる。ボランティア・ツーリスト数に関する統計は日本においても存在しないが、依田（2012）が行った首都圏住民を対象としたネット調査が参考になろう。東日本大震災のあった2011年の東北3県でのボランティアを除いたとしても、1990年代後半より参加数が増え始め、2000年代後半からはさらに参加数が増えつつある様子が伺える。

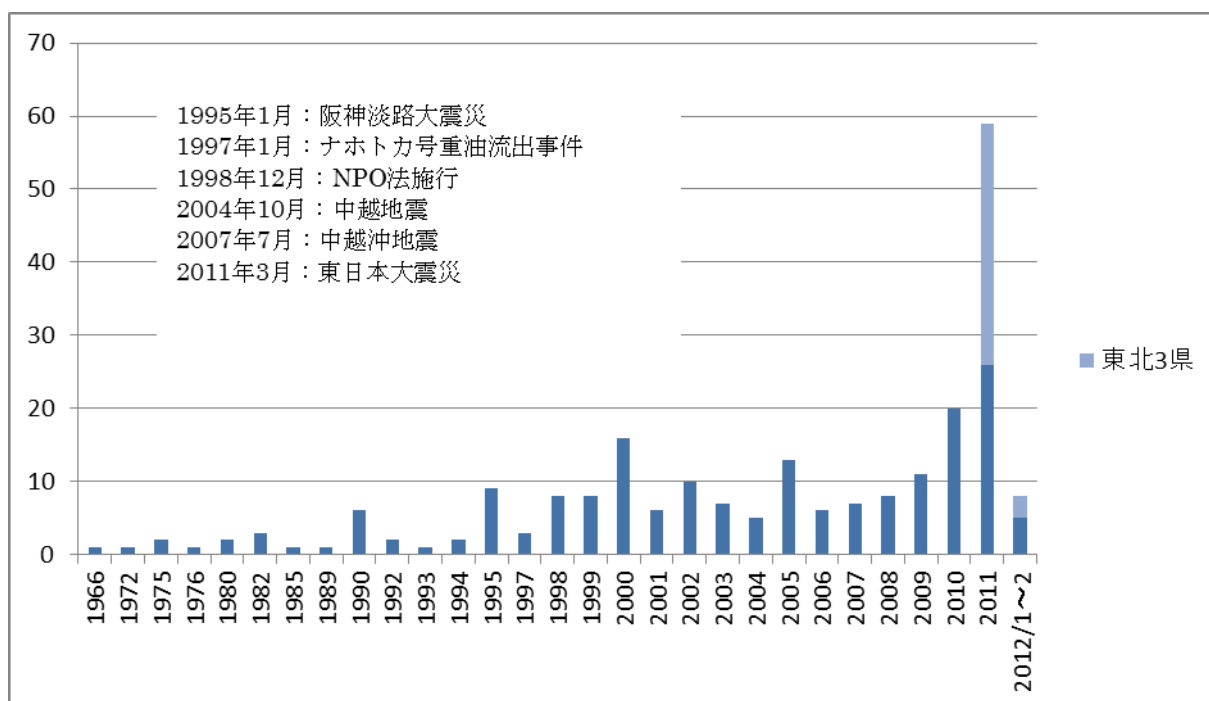


図1-2 日常生活圏外ボランティア活動参加（開始）数の推移

出典：依田（2012）「首都圏住民のボランティア・ツーリズムの参加と意識にかんする調査（2012年）」p. 5

また、同調査によれば、2000年以降2012年2月までに日常生活圏外でボランティア活動を行った回答者は7.3%となった。参加回数としては、1回の参加者が最も多く、約1/3を占めるが、ついで多いのは6回以上のリピーターとなっている（表1-1）。

表 1－1 日常生活圏外でのボランティア参加率³

(2000年以降、東日本大震災支援除く、回答者ベース)

	回答者数 (人)	構成比
1回	25	2.5%
2回	13	1.3%
3回	13	1.3%
4回	2	0.2%
5回	2	0.2%
6回以上	19	1.9%
参加経験なし	946	92.7%
合計	1,020	100.0%

出典: 依田 (2012) 「首都圏住民のボランティア・ツーリズムの参加と意識にかんする調査 (2012年)」 p. 8

日本での参加状況を欧米豪州と比較すると、滞在期間の短さが特徴となっている。同調査によると、1回あたりの平均滞在日数は、国内の単発参加では4日、継続参加では3日となっている。中央値はさらに短く、各3日、1日となっている。欧米豪州では、1ヶ月以下のボランティア・ツアーは短期と考えられることが多いが (Callanan and Thomas 2005:197)、日本の参加日数の中央値は国内でも国外でも1週間に及ばない (表 1－2)。

このような滞在期間の短さを踏まえると、ボランティア・ツーリズムの特徴である、地域の人たちとの交流の長さや密度が限られ、同ツーリズムに期待される参加者の「発見、学習」や、地域と参加者の相互理解や関係性構築なども限定的になるのではないかと考えられる。同時に、地域外の人が期間限定的に参加することによる作業の非効率性や質の低さなどの弊害は、欧米豪州の事例などよりも、一層深刻になる可能性があるのではないかと懸念される。しかし、一方で、表 1－2 では、56人の全回答者の26%を占める12人が継続参加者である。加えて、依田 (2012:38) によれば、77%の参加者が今後も日常生活圏外でのボランティア活動への参加意思を示している。このように自分の居住地以外でボランティア活動を継続的に行っていることは、複数の場所に所属する<モビリティ>社会の表れの一つであると同時に、このような継続活動や継続への意思を活用することが、前節でも指摘したように、ボランティア・ツーリズムの弊害を低減する一つの有効な方策となると考えられる。

³ 2011年3月以降は、東日本大震災の復興支援活動参加者が一時的に増えていると考えられる。その直接的な影響を取り除くために、東北3県2011年3月以降の活動を除いて集計した。

表 1－2 2000年以降の活動日数、回数、および費用

		国内		国外		合計
		単発 (36件)	継続 (10件)	単発 (8件)	継続 (2件)	
活動日数 (日/回)	平均	4.0	3.0	49.8*	2.0	7.0
	中央値	3.0	1.0	5.0	2.0	1.0
活動回数 (回/年)	平均	－	11.0	－	5.0	－
	中央値	－	7.0	－	5.0	－
費用(円)	平均	11,146		183,000		19,657
	中央値	10,000		150,000		－

出典：依田（2012）「首都圏住民のボランティア・ツーリズムの参加と意識にかんする調査（2012年）」p.16をもとに筆者作成

*中央値より平均が高くなっているのは、活動日数が150日のサンプルが1つ含まれていたことの影響が大きい。

（2）学術的背景

1）＜モビリティ＞社会と新たな共同の形

本研究では、＜モビリティ＞社会における観光の意味を検討するが、＜モビリティ＞という概念が生まれるまでの学術的背景としては、社会学、地理学、哲学などにおける空間論的展開がある。その中でも、「新しい地理学」（水内ほか 1997:64）とも呼ばれるポストモダンにおける空間論は、＜モビリティ＞概念への移行の基礎にあると考えられる（水内ほか 1997:64-65）。ポストモダンにおける空間論は、モダニティへの批判とともに、Heideggerの空間論を批判的に継承する形態で展開された。居住と場所、共同体などについて、Heideggerは、居住の経験は還元不可能なものであり、場所と環境はあくまでも特殊性を持つことを主張し、現代社会では、住まうことが失われ、場所に根ざすことがなくなり、共同体は消滅していると主張した。一方、ポストモダンにおける空間論では、空間を社会的に構築されたものとして捉えた。David Harveyの「時間-空間の圧縮」（Harvey 1989=1999:308）、Doreen Masseyの「先進的な場所感覚（progressive sense of place）」（Massey 1993=1997:66）の概念とともに、個人レベルにおいてのみならず、社会レベルにおいても空間を流動的なものとして捉えている点が特徴である。すなわち、ここでは、共同体は構築されるものであり、複数属することが可能なものとして捉えられている。

次に、John Urryが2000年代に提示した<モビリティ>についてであるが、先述のとおり、<モビリティ>社会では、人とモノの移動と流動性がグローバル、ローカルの両方において常に日常化されている状態を意味する。ここでは、このような人と場所との関係の流動化が、個人や特定の場所の意味に影響を与えるだけでなく、人びとの生活を支える集団、すなわち、共同体やコミュニティの意味付けにも影響を与える点が重要である（Cohen et al. 2015:164）。

以上は、空間論を中心とした議論の展開であるが、一方で、人と場所との関係の流動化が人びとの生活を支える集団に与える影響については、共同体やコミュニティ分野での議論にも目を向けることが重要である。この点にかんしては、社会学者であるDelantyが、ポストモダン社会におけるコミュニティを「対話的（コミュニカティヴ）なプロセスの中で構築されるもの」と主張し、「意味を産出する能力のある」（Delanty 2003=2006:263）コミュニケーション・システムとして解釈できるとしている（Delanty 2003=2006:262）。しかし、そのようなコミュニティは心地よい幻想に過ぎない場合が多く、コミュニティが場所との結びつきを確立できるかが、重要な論点となると指摘している（Delanty 2003=2006:272）。

2）二項対立を超える観光の形としてのボランティア・ツーリズム

一方で、社会科学における観光研究は、マスツーリズムに関する議論から始まった。マスツーリズムによる観光の商業化の進展は観光地に経済的メリットを生じる可能性をもたらしたが、観光地を単に消費の対象としてみる商品化の視点は、地域文化の変容や環境負荷の増大、ホストコミュニティの外部依存などの課題も引き起こした。そのような観光の負の側面が注目される中、マスツーリズムに対する反省から「オルタナティブ・ツーリズム(alternative tourism)」という概念が1980年代に生まれた（Lyons and Wearing 2008:4-6）。

「オルタナティブ・ツーリズム」は、ホストコミュニティにも恩恵があり、社会的文化的環境に配慮したツーリズムのことを指す。こうした受け入れ地域と自然環境にとってより良い旅行の形式を開発するための概念としては、「オルタナティブ・ツーリズム」以外にも、「持続可能な観光（sustainable tourism）」や「責任ある観光（responsible tourism）」なども生まれた。

このような社会的な責任を意識した観光の形態として先行したのはエコツーリズムであるが、エコツーリズムはこれまでに商品化（commodification）が進行したと指摘され、社会貢献であるボランティアを旅行の目的とするボランティア・ツーリズムが観光の商品化

傾向を変える形態として2000年代に入り、観光研究の分野で新たに期待されようになった（Lyons and Wearng 2008）。しかし、ボランティア・ツーリズムにかんしても、先述のとおり、弊害が指摘され始めている。一方で、その弊害をどのように克服し、受け入れ地域と旅行者双方にとって良い観光が実現するのか、その具体的なプロセスについての研究はほとんど進んでいない。

1-2 研究の目的

本研究の目的は、このようにヒト、モノ、情報の移動が常態化し、新たなコミュニティの形が模索されている<モビリティ>社会で、観光が果たす意味や役割を再考することである。そのために、<モビリティ>の一形態である観光と社会参加の交差であるボランティア・ツーリズムを取り上げる。その際、特定の地域を継続的に訪問し、自律的に活動するボランティア・ツーリスト（団体）を取り上げ、地域と観光者の関係性とその関係性をもたらす要因について、そこで具体的に起こっている事象の新たな側面を実証的に発見し、経験的仮説の構築を試みる。具体的には、以下のリサーチクエスチョンに答える。

(i) 組織レベルでの地域とボランティア・ツーリスト（団体）の関係性

地域とボランティア・ツーリスト（団体）は、どのような関係性を構築し、ボランティア・ツーリスト（団体）は、地域においてどのような役割を果たしているのか？また、どのような経緯や要因で、今日のような関係性にたどりついたのか？

(ii) 個人レベルでの継続参加の動機

継続的に活動に参加しているボランティア・ツーリストの継続参加動機は何なのか？どのような組織の仕組みや、地域との関わりが、そのような動機を生み出しているのか？

(iii) 地域、組織、個人を統合した継続

(i)と(ii)を統合した時に、継続的に自律的に活動するボランティア・ツーリズムはどのように実現されているのか？

1-3 本論文における用語の定義と本論文の構成

(1) 本論文における用語の定義

本項では、本論文における主な用語の定義を行う。

1) ボランティア・ツーリズム、ボランティア・ツーリスト

「ボランティア・ツーリズム」という言葉が一般に広く使われるようになったのは、2000年代に入ってからである。ツーリズム研究では、2001年にStephen Wearingが“Volunteer Tourism: Experiences that make a difference”を記したのが「ボランティア・ツーリズム」という言葉が使われるようになった最初である (Wearing 2001)。

これまでの研究で、最もよく参照されている「ボランティア・ツーリズム」の定義は、Wearing (2001)による「自由時間においてさまざまな動機に基づき、社会における物的貧困の緩和、援助、また特定の環境の保護や社会や環境の調査などの組織化されたボランティア活動」で⁴ある。しかし、Lyons and Wearing(2008)は、Wearing(2001)の定義はボランティア・ツーリズムを狭く定義しすぎていると指摘した上で、ボランティアと旅行行動の交差に注目することが重要であると主張する。Guttentag(2009)も「旅行過程でボランティア活動に従事する旅行者は誰でも」ボランティア・ツーリストであると定義をし、ボランティア・ツーリズムとみなされる要件を「旅行 (travel)」と「ボランティア」に絞っている。ここでは、Guttentagは、「旅行(travel)」という言葉をも「ツーリズム」と交換可能な言葉として扱っている。以下でより詳細に「ボランティア」と「ツーリズム」について定義を行うが、本研究でも「ボランティア」と「ツーリズム」双方を含む活動一般を「ボランティア・ツーリズム」と定義し、個別のツアーを「ボランティア・ツアー」、その参加者を「ボランティア・ツーリスト」と呼ぶことにする。

① 「ボランティア」の定義

本論文では、実践と研究の双方で広く採用されているボランティア三原則「強制されず、無償で、他者を助ける活動 (Kendall and Knapp 1996)」を基本的な「ボランティア」の定義として採用する。

⁴日本語訳は、中村憲司、松本秀人、敷田麻実(2008)：「『労働』と観光が融合したボランティアツーリズムに関する研究」日本観光研究学会全国大会学術論文集2008年11月による。

ここで注意したいのは、この三原則自体がボランティア活動の多様化や隣接分野の発展とともに揺らいでいることである(Lyons 2003)。例えば、米国では、罰則としてのコミュニティサービスや就職活動の一環として行われる学生のボランティア活動などを取り上げ、「強制されるボランティア」の存在が指摘されているが(Ellis 1997:31)、これは米国だけに見られる傾向ではない。さらに、現金や現金と同様の報奨(in-kind incentives; 大学授業料補助など)の提供などにより、有償無償の垣根もあいまいになってきている(Ellis 1997:29)。また、ボランティアの動機が、他者を助ける利他の精神だけではなく、自らの興味や関心などの利己的動機を含む、複数の複雑な次元の要因から成り立っていることは、今日の動機研究で最も支持されている考え方である(桜井2007:28)。

このように、ボランティアの三原則には曖昧な部分も出てきているが、多くのボランティア・ツーリズム研究は、ボランティア三原則を厳密に満たさないボランティアを研究対象から排除するのではなく、「ボランティア」と一般に呼ばれている活動を広く対象としている。本研究でもその方針に基本的には従うこととするが、観光研究としての「ボランティア・ツーリズム」を対象とした研究であることを明確にするため、「余暇」としての「ボランティア」(Stebbins 2004:49-55)であることを研究対象の条件とする。従って、参加者が実質的に断る選択肢を持たない「強制的」なボランティアや「報酬を得ることが主とした目的となっている」ボランティアについては、本論文の対象とはしない。同様の理由から、災害支援ボランティアについては、特殊な技術や許可が必要な緊急フェーズの「ボランティア」も対象としない⁵。

② ツーリズムの定義

次に、「ツーリズム(tourism)」の定義を検討する。「ツーリズム」の定義については、国連世界観光機関(UNWTO)の定義に従う。その基本的な概念は、「目的に関わらず、継続して1年を超えない範囲で、日常生活圏外を訪問する訪問者による諸活動」と定義され

⁵災害支援ボランティアについては、社会福祉協議会や支援NPOなどの受け入れ団体が、一般ボランティアを受け入れる仕組みができ、旅行業者が一般募集ツアーを組成できる状態になって以降を研究対象とする。

ている⁶ (United Nations1994:5)。この定義は、「楽しみ」以外の目的、例えば、仕事や治療療養、教育等の目的も含める点で、一般に考えられる「観光」より広い概念を含む。しかし、関連する研究分野では、「tourism」の訳語として「観光」が用いられることが多いことを考慮し、本論文では、「ツーリズム」は余暇目的を基本的に対象とし、「観光」と互換的に使うこととする。

また、ボランティア・ツーリズムは、社会貢献であるボランティア活動を旅行の目的としているために、「もう一つの観光 (alternative tourism)」「持続可能な観光 (sustainable tourism)」「責任ある観光 (responsible tourism)」などの観光の一形態として言及されることも多い。全てのボランティア・ツーリズムがこれらの観光概念の条件を満たしているとは限らないが、一部は満たすと考えられる (図1-3)。

③ 「ボランティア・ツーリズム」の定義まとめ

上記の「ボランティア」と「ツーリズム」の定義を踏まえ、本論文での「ボランティア・ツーリズム」の定義を以下のようにまとめる。

「継続して1年を超えない範囲で、日常生活圏外で行う、強制されない、無償の、他者を助ける活動を含む余暇行為」

この定義に基づき、本論文の対象には、旅行会社が主催するパッケージのボランティアツアー以外に、NPO・NGOなどによるボランティア機会、移動、宿泊の提供や仲介などの組み合わせによる現地集合現地解散の活動も含める。また、仲介機関や運営機関への謝金の支払いの有無は問わないが、活動に必要な交通費、食費、宿泊費、活動費などの諸経費について、何らかの自己負担があるものを対象とする。

従って、一般に「国際ボランティア」と呼ばれている、国外でのボランティア活動は本研究の対象となる (図1-3)。独立行政法人国際協力機構 (JICA) の青年海外協力隊事業については、従来は2年の派遣が基本であるが、活動期間が1~11ヶ月の短期ボランティ

⁶ UNWTOによる観光統計のガイドラインは2008年に改定されているが (“International Recommendations for Tourism Statistics 2008”)、「ツーリズム」の基本概念については、1994年ガイドラインが簡潔に要約しているため、本研究ではこの要約を用いる。

アも募集している（JICA-2017）。この短期ボランティアは「ボランティア・ツーリズム」の分析対象となるが、2年間の長期プログラムは対象外である。また、学校で正課授業の一環として行われる社会奉仕活動であるサービスラーニング（service learning）については、サービスラーニングの活動地域が学生の日常生活圏ではなく、参加が強制されていない場合は、ボランティア・ツーリズムの一部と考えることはできる。しかし、本論文では、一般的に「ボランティア」と呼ばれていない活動は基本的に対象外とする。

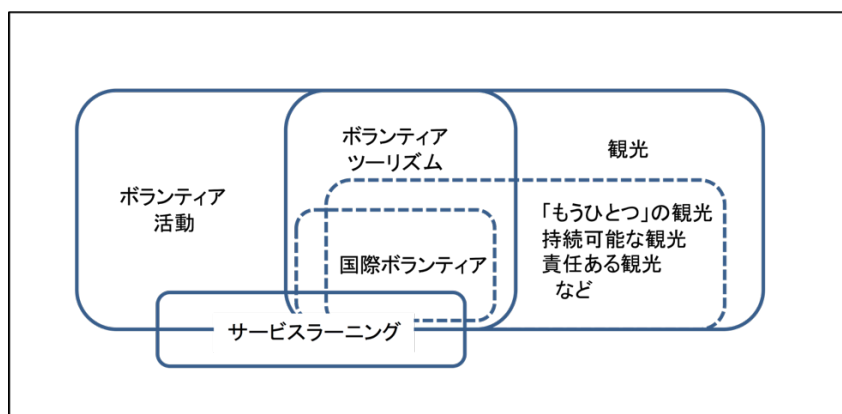


図1-3 ボランティア・ツーリズムと近接する概念

出典：筆者作成

2) <モビリティ>

モビリティの日本語訳は、移動または移動性であるが、本論文で扱うモビリティは、先述のとおり、社会学において主に21世紀に入ってから議論されているモビリティである。その定義は、学術誌*Mobilities*の「世界中の人、モノ、資本、情報の大規模な動きだけでなく、日常の交通手段、公共空間を通じた移動、日常生活の中の物質的なものの移動というローカルプロセスの両方を含む概念」とする（Hannam et al. 2006:1）。また、繰り返しになるが、本論文では、21世紀に入り論じられたこのモビリティ概念と一般名詞のモビリティを区別するために、前者をカッコ付きの<モビリティ>と表記する。

また、本章の（1）1）で述べたとおり、<モビリティ>はライフスタイルへ影響を与える。繰り返しになるが、旅行、レジャー、移住などを包含し、ライフスタイルへの影響を与えている<モビリティ>を<ライフスタイル・モビリティ>と本論文では、カッコ付きで示す。

また、関連して、Urry (2007=2015)は「(こうした)移動の『レンズ』を通した思考によって、これまでとは一線を画す社会科学がもたらされる」と述べ、その超領域的なアプローチを「モビリティーズ・パラダイム」と呼んでいる (Urry 2007=2015:31-33)が、本論文ではこのように用いられている場合には、<>は用いない。

3) コミュニティ、共同体

<モビリティ>社会の人びとと集団への影響を論じる際に出てくる重要な概念として、「コミュニティ」「共同体」「共同性」がある。「共同体」は一般に「コミュニティ (community)」の訳語として使われることが多いため (例えば、『広辞苑』の「コミュニティ」を参照)、本論文では「コミュニティ」と「共同体」は互換的に使うこととする。

「コミュニティ」という概念には数多くの多様な定義が存在する。Hillery(1955)は94のコミュニティの定義を調査したが、その中で、全ての定義に共通する要素は「コミュニティには人びとが含まれる」という点だけだったとしている。しかし、それ以外にも、一定の地理的領域内で社会的相互作用を行なっている何らかの共通の絆を持った人びとから成り立っているという点では、多くの定義が一致していることが明らかになったという。従って、従来の「コミュニティ」概念の主たる定義とは、「地域に根ざした集団」とまとめられる (日本社会学会社会学辞典刊行委員会編 2010:722)。

しかし、「コミュニティ」については、先述のとおり、数多くの定義があり、現在も議論が続いている。本章の(1) 1)でも述べたとおり、<モビリティ>の進展により、場所と人の関係も揺らいでいおり、Delanty (2003=2006:7)は、「コミュニティとは帰属に関わるとする見解に他ならない」と述べている。従って、本研究では、「コミュニティ」を「地域に根ざした集団」と定義することはなく、「何かしらの共通目的や関心の元に集まった、社会的相互作用を持つ集団」と、より広義に定義する。

(2) 本論文の構成

これまで、ヒト、モノ、情報の移動が常態化した<モビリティ>社会では、新たなコミュニティの形が模索されていることを述べてきた。本研究では、その一つの形としてボランティア・ツーリズムを取り上げ、観光が果たす意味や役割の可能性を再考する。

そのために、第1章では、移動が常態化した<モビリティ>とその社会への影響と、新

たなコミュニティへの参加が模索されていることを述べた。また、その一つの現れとしてのボランティア・ツーリズムの可能性に触れ、同ツーリズムの現状と期待、課題について述べた。また、継続的かつ自律的に活動が続けるボランティア・ツーリスト（団体）を取り上げることの重要性について述べた。

さらに、本研究の目的として、＜モビリティ＞社会で観光が果たす役割を検討するために、継続的かつ自律的に活動が続けるボランティア・ツーリスト（団体）を取り上げ、地域とボランティア・ツーリストの関係性や、ボランティア・ツーリスト（団体）が地域で果たす役割とそれを可能とする要因、継続参加者の動機やその背景などについて明らかにすることを述べた。加えて、本研究で用いる用語の定義を行なった。

第2章では、先行研究の整理と本論文の独自性について述べた。＜モビリティ＞を理論的に理解するために、ポストモダン地理学における代表的な議論を振り返った上で、＜モビリティ＞社会の特徴について述べた。また、＜モビリティ＞社会においては、コミュニティ概念の見直しが重要となっていることに触れ、Delanty(2003=2006)を中心にコミュニティについて検討した。

さらに、研究対象であるボランティア・ツーリズム分野の既往研究を取り上げ、同ツーリズムの特徴や同ツーリズムへの期待や課題、参加者の体験や動機などについては、研究が進んでいるが、時系列で継続的なボランティア・ツーリズム事例を取り上げた研究がほとんどないことを指摘した。また、ボランティア・ツーリスト団体やボランティア・ツーリストの動機や特徴を理解するために、非営利組織経営の分野におけるボランティアの動機や組織上の課題を確認した。

その上で、継続的に自律的な活動を行なっているボランティア・ツーリスト団体を対象に時系列な研究を行い、経験的仮説を立てる本研究の独自性について述べた。

次に、第3章では、研究方法と事例選定の条件を述べた上で、事例の概要をまとめた。研究方法としては、ボランティア・ツーリズムという複雑な事象を扱うために、質的研究を採用することと、事例の選定にあたっては、活動の継続実績があり、ボランティア・ツーリストが多様な役割をとる可能性のある事例であることの重要性を説明した。その条件を踏まえ、調査対象となった小樽雪あかりの路のOKOVOと越後妻有大地の芸術祭くこへび隊の概要を紹介した。

第4章では、小樽雪あかりの路のOKOVOが、同イベントにおいて、観光者的な位置付

けから重要な役割を担うに至った経緯を時系列で整理した。さらに、その段階的な変化は、受け入れ地域と観光者の間の相互作用の結果として起こったこと、また、その過程においては、交流や組織化、受け入れ地域による観光者の自律的な活動の受容が大切であったことを明らかにした。

第5章では、継続するボランティア・ツーリスト団体の鍵である継続ボランティア・ツーリストに焦点を当て、小樽雪あかりの路のOKOVOの継続参加者にインタビューとアンケートを行い、その初期参加動機と継続参加動機を明らかにした。その結果、初期参加動機は、行き先などが重視される観光的な動機が多かったが、継続動機では小樽という場所の魅力や自団体や他団体などのメンバーとの交流が重要であることが明らかになった。

次に、第6章では、越後妻有大地の芸術祭のサポーターであるくこへび隊>を取り上げ、くこへび隊>の成り立ちや大地の芸術祭および地域における位置付けを確認したのち、継続参加者の自律的な運営や支援が活動継続には重要であることを指摘した。その上で、運営の鍵となる継続参加者の初参加動機と継続動機を調査し、初参加動機では現代アートなど自らの関心が重要であったが、継続動機では、他者との交流や出会いなどが重要な動機となったこと、また当初から継続参加を予定していた訳ではないことが明らかになった。

第7章では、それまでに明らかになったOKOVOとくこへび隊>の組織的な特徴と継続参加者個人の動機を比較整理し、さらに組織と個人の変化をループ図でまとめ、俯瞰した。その上で、新たなコミュニティが模索されているくモビリティ>社会における観光の役割や意味を考察した。

第8章は、本研究全体のまとめの章とした。第1章から第7章までの論点を要約し、それらを踏まえ、くモビリティ>社会における観光の特徴とその意味や役割について、一般的な可能性を示唆した。さらに、本研究が、観光者と地域の関係性の変化や継続動機に着目し、経験的仮説を構築するという点や、領域横断的にボランティア・ツーリズムを分析した貢献に触れた上で、本研究の課題として、研究対象となった事例が2事例と限定的であることと、各領域の知見に基づく深耕の必要性を挙げた。

第2章 先行研究の整理と本論文の独自性

2-1 先行研究整理の視点

第1章で述べたとおり本研究は「＜モビリティ＞社会における観光」について、ボランティア・ツーリズムを事例として考察する研究である。中でも、単発ではなく継続するボランティア・ツーリズムに焦点を当てる。従って、先行研究は、＜モビリティ＞が社会に与える影響、ボランティア・ツーリズムの特徴、そしてボランティア・ツーリストの活動の継続という3つの観点でまとめていく。その際、＜モビリティ＞社会とその影響については社会学や地理学の先行研究を、ボランティア・ツーリズムの特徴については、観光学の、主に社会学に依拠して行われた議論を、ボランティア・ツーリストの活動の継続については、経営学の組織論の議論を参照する。このように複数の学問領域を横断的にカバーしていくのは、社会学を中心とした考察により事象の意味を紐解くと同時に、その考察の成果を観光現場での実践に反映するために、より実践的な学問である経営学的な考察への接続が必要だと考えるためである。

2-2 <モビリティ>社会とその特徴

「モビリティ (mobilities)」の字義的な日本語訳は「移動性」である。しかし、「序論」で述べたとおり、本研究が取り扱う<モビリティ>は、John Urry (2000a, 2000b) によって提示された新たな独自の<モビリティ>概念である。Hannam, Sheller and Urry (2006) は、その概念を「世界中の人、モノ、資本、情報の大規模な動きだけでなく、日常の交通手段、公共空間を通じた移動、日常生活の中の物質的なものの移動という、よりローカルなプロセスの両方を含む概念である」と述べている(Hannam et al. 2006:1)。

UrryはDavid HarveyやDoreen Masseyに代表されるポストモダン地理学や、社会学分野ではZygmunt Baumanのノマド論(例えば、Bauman 2000=2001)、文化人類学分野ではAnnemarie MolとJohn Lawによる「液状空間(Fluid Space)」(Mol and Law 1994)の議論をもとに、<モビリティ>概念を提示した(Larsen et al. 2006; Urry 2000a, 2000b)。そこで、以下では、その中でも<モビリティ>論の基礎となっていると考えられるポストモダン地理学における議論の中から、代表的なHarveyとMasseyの議論を批判的に検討し、その後で、<モビリティ論>を紹介し、観光との関係を論じる。

(1) ポストモダン地理学における空間論と共同体

1) Harveyによる「時間-空間」の圧縮

Harveyは、1970年代以降の地理学における「空間論的転回 (spatial turn)」と呼ばれる「空間」を基軸とした地理学の展開に大きな影響を与えたマルクス主義のポストモダン地理学者である。「空間論的転回」とは、議論の焦点が「空間構造から空間形成へ、つまり形態 (form) から過程 (process) へと移行」(加藤・大城 2006:i-ii) することを意味する。

Harveyは、グローバル資本主義の進展により流動化する場所感覚を「時間-空間の圧縮 (time-space compression)」と呼んでいる。時間-空間の圧縮とは、「われわれの空間的、時間的な諸世界が「圧縮」している」という感覚である (Harvey 1989=1999:308)。資本主義は資本の回転時間を短くすることによって、より多くの利益を上げようとするが、商品の流通等に必要なのは、そうした時間の加速化の妨げとなる。そこで、資本主義は交通手段や運輸手段を創造することで、時間の加速化を進めるのである。そのような「時間-空間の圧縮」の急速な進展は、これまでの時間と空間の感覚を変容させ、「永続的な不安定な状態」(Harvey 1989=1999:145-150) をもたらすとHarveyは主張する。

このような資本主義を背景とした「時間－空間の圧縮」の進展は、また、資本を引き付けるための競争に地域を巻き込み、グローバル化を押し進め、地域の画一化を進める。しかし、そうした地域間競争は、一方で、地域間の差異をより重要なものとする。そのことをHarveyは「特別な質を持った場所の生産をめぐる、ローカリティ、都市、地域、国家のあいだで空間的競争が行われる。」（Harvey 1989=1999:380）と述べている。また、このような差異を生み出すための努力は、場所のアイデンティティへの注目や伝統を創造しようとする努力となるが、このような変化に抗して歴史を固定化する「時間の空間化」は、19世紀末にも見られたもので、決して新しいことではないことも指摘している（Harvey 1989=1999:348-349）。

Harveyは、また、「弁証法的」に場所を捉えようとした（Harvey 1996）。Harveyが定義する弁証法とは、「『物』ではなく『過程』や『関係』を中心とした思考」である（加藤・大城 2006:221）。こうした弁証法的思考によれば、物や要素からなる空間的諸関係は、過程や関係性などにより、絶えず構築され、維持され、解体されるものとして捉えられる。Harveyは、また、このような空間的諸関係と体験の関係について、「空間的諸関係が特定の〈場所〉での体験と独立に理解できるわけではないのと同様に、〈場所〉での体験は、〈場所〉を支えている空間的諸関係なしでは理解できないのである」（Harvey 1993=1997:94）と述べ、〈場所〉は空間的諸関係と相互作用的であり、流動的であると主張している。

2）プロセスとしての場所：Masseyの空間論

MasseyはHarvey同様に、マルクス主義のポストモダン地理学者である。Masseyの場所認識の特徴は、場所を動的で連続的な概念として捉えている点である。Masseyは、「空間」や「場所」を存在として捉えるHeideggerの観点を否定し、「場所がプロセスである」こと、「場所が境界を保つ必要がない」こと、「場所が単一のアイデンティティを持たない」ことから、場所の感覚は常に進化・進歩するという「進歩的場所感覚(progressive sense of place)」の概念を提示した（Massey 1993:66）。

この「場所が境界を保つ必要がなく」「場所が固有のアイデンティティを持たない」という点に関連して、MasseyはHarveyの「時間－空間の圧縮」を批判している（Massey 1993=1997:128）。Masseyによれば、グローバリゼーションを時間と空間の圧縮として捉えていく視座は、グローバリゼーションに対抗してローカルやナショナルな空間の同一性に

固執していく視座を生むことになる。そのような見方は、境界で区切られた領域にアイデンティティを内在するものとする考えに通じるからである。それに対し、Masseyは「社会的なものはまたどうしようもなく空間的なものであるという事実」(Massey 1993=1997:132)を重要視し、「支配的思考となるべきは「時間による断面」ではない」(Massey 1993=1997:133)ことを主張し、空間を創出している社会的関係を、「ダイナミックなものとして以外概念化され得ない(中略)同時共存」として捉えることの重要性を述べている。

また、Masseyは、「空間的なものに存在するカオス的な要素に注目し、それが社会的現象に対して影響を与えている」と指摘している(Massey 1993=1997:135)。そして、その「結果」としての空間形態が、のちに続く出来事に影響を与える新たな力を持つこと、すなわち、「空間形態は、歴史自体が取る未来の進路を、変えることができる」と主張している。

このように、HarveyとMasseyは、時間と空間の位置付けについての主張の相違はあるものの、流動性を中心とする空間認識を持つ点においては、共通の認識を持つ。このような流動性を中心とした空間認識は、2000年代に登場する<モビリティ>論へ影響を与えた。次節では、<モビリティ>の概念と空間・場所論への影響についてレビューする。

(2) 21世紀の<モビリティ>概念

1) 生活の原理としての<モビリティ>

「モビリティ」の字義的な意味は、移動性である。その概念は、近代以前から議論されていた。Cresswell (2006)によれば、モビリティの議論は、封建社会では場所を持たないヴァガボンドなどマイノリティの行動として、初期近代においては自由の象徴として、モダニティにおいては、社会的流動性を表す概念として変化してきた(Cresswell 2006:11-20)。

Cresswellによれば、21世紀の<モビリティ>概念とそれ以前のモビリティ概念の相違点は、「それ(21世紀の<モビリティ>)が生活における根本的な地理的事実として移動を捉えていて、なお重要な役割を果たしている点にある」(Cresswell 2010:551)。つまり、中世におけるヴァガボンドのような捉え方、モダニティにおける日常生活に対向的に位置する理想としてのモビリティではなく、移動性そのものが我々の生活の原理となっているのが、新たな<モビリティ>概念の特徴ということである。それ故、Cohen, Duncan and Thulemark (2015)は、移民、観光、レジャーを包含する概念としての<モビリティ>を、「ラ

イフスタイルモビリティ」という概念で提示している。

2) <モビリティ>と複雑性と創発

Urryはまた、<モビリティーズ・パラダイム>の祖型は、Georg Simmelがほぼ一世紀前に素描したと述べている(Urry 2007=2015:45)。その指摘は、特にSimmelが社会生活の複雑な性格について述べているためである。すなわち、それが単純なフローや純粋なフローではなく、不動と移動の複雑な交錯であり、生氣論的な流動であるという主張であり、このような主張は、移動と複雑性の親和性を示唆したものと捉えられている。

また、Urryは、このような動的なシステムの中心にあるモチーフとして「創発」に触れている(Urry 2007=2015:49)。つまり、システムの構成要素が、要素同士の相互作用を通して、集合的な特性ないしパターンを「おのずから」発展させる転換のことである。よって、<モビリティ>によってもたらされる「複雑性により探求されるのは、創発的で、動的で、自己組織化し、相互依存しているシステムであり、そこでの相互作用は、のちの確率に影響を及ぼすかたちでなされるのだ」と、Ilya Prigogine (1984:29-30) を引用して述べている。また、以上の分析で重要なものとして「非線形の正のフィードバック・ループ」を挙げている。

3) <モビリティ>が生活に与える影響

次に、物や人や情報が物理的にさまざまな方法で常態的に移動する状況が、人びとの暮らしに与える影響、中でも、本研究に関係の深い観光や交流に関係する側面について取り上げる。

① 「ホーム」と「アウェイ」の境界の曖昧化

移動が常態化することの影響の一つは、「ホーム」と「アウェイ」という区分が曖昧になることである(Cohen et al. 2015:162)。さらに、Cohenほかは、そのような曖昧化が、場所への愛着やアイデンティティといった「個人によって引き受けられる移動範囲の背後にある意味」(Hall 2005, 2008:15)の形成に与える影響について理解することがより重要になってくると述べている(Cohen et al. 2015:165)。また、「アイデンティティや所属の脱

領土化」(Sheller and Urry 2006)といった課題が生じることや、個人が一つの場所へ持つ愛着は薄れ、「多重所属(多重国籍という可能性すら含め)」が普通となっていると述べている(Cohen et al. 2015:165-166)。さらに、それゆえに、国境の重要性は薄れ、家族や友人のネットワークが(身体的にであれ、バーチャルであれ)重要性を高める可能性を指摘している。

Hannam et al. (2006) も、<モビリティ>社会では、「家に帰ること(homing)」(Brah 1996; Fortier 2000)と「再び根付くこと(re-grounding)」(Ahmed et al. 2003)の関係が複雑になっていることを指摘している(Hannam et al. 2006:10)。つまり、旅をしていることと住んでいること、家と外との間の単純だった関係が、複雑な相互関係へと変化している兆しであるという指摘である。Hannam et al. (2006) は、Tolia-Kelly (2006) を引用し、そのような複雑な関係性は、「移動する人びとが発地の一部分(お土産や織物、食べ物、色、臭い、音など)をその場所を離れるにあたり携え持ち、到着地で想像上または具体的に再構成することで起こっている」(Hannam et al. 2006:10)と述べている。Hannam et al. (2006) は、また、こうした傾向は、休暇と知人訪問の区別の曖昧化としても生じていると指摘している。すなわち、「移民は、友達や親戚を訪問するために故郷に度々戻り、そこで表向きの『休暇』を取る(Duval 2002; O'Reilly 2003; Coles and Timothy 2004)」(Hannam et al. 2006:10)ということが生じているのである。

② 身体移動の活発化

先述のとおり、Urryは5つの<モビリティ>を示している。中でも、インターネットとデジタルイメージ、メッセージと情報による「バーチャルな旅行」の普及は、リアルな物理的な移動を代替する可能性があると考えられるが、Urry (2007=2015:244) は、Koku, Nazer, and Wellmanの実証研究を引き合いに出し、彼らが引用しているパットナムの言葉、すなわち「『インターネット上での頻繁な連絡は、頻繁な対面の連絡を補完するものであって、代替するものではない』[パットナム2006, 216ページの引用]」を紹介している。さらに、Wellman (2001) の研究を引用し、オンラインでのコミュニケーションを活用している人は、そうでない人よりも地域でのボランティアや政治活動により活発に参加し、ローカルであっても、より広いネットワークを有しており、身体移動をより活性化すると述べている(Urry 2007=2015:244, 338)。

その理由については、「集まって会うことが今なお重要」であるとしている。さらに、

Davidson and Cope (2003) を引用し、情報共有はオンライン上で可能となったことから、ビジネスにおいても、対面でのミーティングは、「社会的な財を交換する要素が強く」なり、「いっそう参加型になり感情を交えるもの」となるだろうと述べている (Urry 2007=2015:245)。また、Nandhakumar (1999) や Boden (1994) の研究に触れながら、「人格に基づく信頼関係はバーチャルなチームワークにとって不可欠でありであり、さらには、信頼関係はある程度バーチャルで維持できるものの、まずは、対面での社交が信頼を確立するために求められる」ことを指摘している (Urry 2007=2015:247)。こうした「共在 (co-presence)」によるミーティングには、豊かな情報フローとフィードバックがあり、また、このミーティングのために参加者は移動時間という贈与を相互にしていること (Urry 2007=2015:349-350)、そのような出会いの場所ではさまざまな演示が必要となる (Sheller and Urry 2004) が、それは五感を通し、情動を介して享受されることが指摘されている (Urry 2007=2015:373)。

(3) <モビリティ>と観光

次に、<モビリティ>社会の観光への影響について整理する。先に述べたとおり、<モビリティ>社会では、「ホーム」と「アウェイ」が曖昧になる一方で、バーチャルな旅の増加が身体的な移動を増加させることに触れてきた。このような社会的な変化のもとでは、距離的・時間的・文化的距離と地域内外の境界を前提として理解されていた観光現象においても、新たなパラダイムが必要となると考えられる。

「ホーム」と「アウェイ」が曖昧になるということは、観光における「ホスト」と「ゲスト」の境界が曖昧になることだと考えられる。なぜなら、これまでゲストとして訪ねていた場所が「ホーム」となり、ゲストではなくホストとして誰かを迎える立場になる可能性があるからだ。そして、その逆も然りである。一方で、ホストとゲストの行き来や、非日常の観光地と日常生活圏におけるモノの行き来は増加する。従来のホスト-ゲスト論では、ホストとゲストを対立する関係性として捉えていた。しかし、先述のとおり、場所論において1990年代半ばに、これまで移動者と切り離して考えられていた「場所」という概念を見直す必要が指摘されるようになった (Shurmer-Smith and Hannam 1994)。この考え方に基づけば、場所は固定されているものではなく、「ホスト、ゲスト、建物、モノ、機器」が偶発的に(contingently)特定の場所で特定の時に生み出すパフォーマンスである (Hannam et al. 2006:13)。

このような認識の変化のもとでは、ホスト-ゲスト間の関係性も固定した関係性とするのではなく、複雑性の一つとして、より動的な、流動的なものだと考えられよう。また、移動が常態化している環境では、「訪問先」という固定された場所における考察だけではなく、場所から場所へと移動する過程、旅行者が戻ってからの場所、バーチャルな空間なども含めた拡張された空間分析と、旅行前後も含む拡張された時間軸での分析、それらを統合してシステムとしてみる分析も重要になると考えられる。

（４）＜モビリティ＞社会とつながり、共同体

＜モビリティ＞社会における時空間と人びとの関係性の流動化は、個人や特定の場所の意味に影響を与えるだけではなく、人びとの生活を支える集団の意味付けにも影響を与える。つまり、「コミュニティの再定式化が場所論の再審と響きあうような形で重要な課題として浮かび上がってくる」（吉原 2008:102）のである。

Urry (2007=2015)は、「モビリティーズ・パラダイム」の特徴の一つとして、あらゆる諸関係は、多種多様な「つながり」を要しており、そのつながりには、さまざまな程度の「距離の隔たり」、固さ、強さが見られ、物理的な動きが見られるが、これまでの社会科学は、「地理的な近さの中で続いてきたコミュニティにあまりにも焦点をあて過ぎてきた」と指摘している (Urry 2007=2015:74-76)。その上で、Urryは人とのつながりや社会的な集まりの多くは、近さに基づいたものではなく、ともに存在すること（共在）と離れて存在していること（不在）との間を絶えず動くプロセスがあると述べている。また、不在の時には、「想像による現前」が生まれていること (Chayko 2002)、あらゆる社会生活は、「折に触れてなされる現前からの人間関係の上に成り立っていると同時に、不在のモードの上にも成り立っている」と指摘している。さらに、このような不在のモードは、「移動と通信の複合的なテクノロジーに部分的に立脚」（Urry 2007=2015:95）していること、また、距離の隔たりを克服しようとする取り組みは、相互に依存しあったプロセスの組み合わせによってなされていると述べている。また、Urry (2007=2015) は、そのプロセスを構成しているものとして、身体による旅、物の物理的な動き、メディアに登場する場所や人のイメージを通じた想像による旅、バーチャルな旅、通信による旅、の5つを挙げている。

ここで重要なのは、これまでの社会科学は、これらの一つのインフラに焦点をあてていたが、モビリティーズ・パラダイムにおいては、5つの移動の相互のつながりに焦点をあてることが重要だという主張である (Urry 2007=2015:76-77)。詳細は後述するが、これまで

の観光研究は「身体による旅」という一つのインフラにのみ注目して、分析することが多かった。しかし、＜モビリティ＞の視点を取り入れるのであれば、不在の時をも通して、観光を理解する視点も重要だと考えられる。また、それは先にUrry (2007=2015:74-76)によって指摘された「地理的な距離に重きを置きすぎるコミュニティの見方」を脇に置き、移動により共在と不在を繰り返す多様な相互的なつながりをコミュニティとして見る可能性も示唆している。

コミュニティ研究の分野では、Delanty (2003=2006) が、ポストモダン社会やグローバル化の進展、インターネットなどの技術の発達により、コミュニティ概念の見直しが重要になっていることを指摘し、コミュニティについて古代ギリシャから今日にいたるまで包括的に整理している。その詳細な考察についてはここでは紹介しないが、その中で「近接性を越えたコミュニティ」として、「コスモポリタン・コミュニティ」に言及している。Delantyがここで「コスモポリタン・コミュニティ」と呼ぶのは、「ローカルなもの」とグローバルなものとの交わり合いの中で生み出されたコミュニティであり、時間によっても空間によっても制約されないという特徴を持つ。」(Delanty 2003=2006:209) また、そのようなコミュニティは多くの形態や場所へと脱領域化され、散財するようになっていると言う。また、これらのコミュニティは、「対話的（コミュニケーション）なプロセスとトランスナショナルなプロセスによって、相互に結びついている」と指摘している⁷ (Delanty 2003=2006:209)。

さらに、コスモポリタン・コミュニティの例として、トランスナショナル・コミュニティ、サイバー・コミュニティまたはヴァーチャル・コミュニティを取り上げ、それらはローカルなものへの愛着により濃くも薄くもなるが、共通する特徴として「コミュニケーション」を取り上げ、これらを「コミュニケーション・コミュニティ」と呼んでいる (Delanty 2003=2006:230)。また、コミュニティの根幹は、「モダニティによって破壊された何かを探し求めること」であることに触れた上で、コミュニティを「不安定な世界の中での対話的（コミュニケーション）な帰属の経験」と呼んでいる (Delanty 2003=2006:260-261)。また、コミュニティの永続性は、不安定性を増す文脈において、「帰属のあり方について

7 Delantyは、Urryのコミュニティ論について、「グローバル時代にマッチしたカテゴリーとしてコミュニティの回復を持ち出した点については興味深い」としながらも、Urryのコミュニティ論には、①社会（ソサエティ）を置き換えるものにはならないこと、および②国民国家は終焉していないという点で限界があると批判している (Delanty 2003=2006:212-213)。

語り合う能力」にかかっており、その意味で、帰属としてのコミュニティは社会的組織や象徴的な意味形態ではなく、「対話的（コミュニケーション）なプロセスの中で構築されるもの」であると主張している。つまり、コミュニティとは、「帰属についての自由なコミュニケーション・システム」であり、単に意味を再生するのではなく、「意味を産出する能力」を持っているものだとして解釈できるとしている（Delanty 2003=2006:262）。

Delantyはさらに、そのような帰属の感覚によるコミュニティが現代における「不安定性の経験に対する中和剤となって」いることを指摘しつつ、それが提示するオルタナティブは「コミュニカルな楽園を基礎とした単なる心地よい幻想に過ぎない場合が多く、グローバル化の力に抗うことができないと述べ、そのような希求は「場所」に代わるものとはなっておらず、このような「コミュニティが場所との結びつきを確立できるか」が、重要な論点となると主張している（Delanty 2003=2006:272）。

このように、流動性とその結果としての不安定性に対応するための、帰属への希求としてのコミュニティが生まれているが、それが場所に代表される現実社会にどのように影響を与えるかが注目されている。その点について、観光分野においては、インターネットでの交流を通して発展したアニメ聖地巡礼の研究が参考になると考えられる。

社会学者の鈴木謙介は、＜モビリティ社会＞の特徴の一つである、ソーシャルメディアによる時空間に侵入するコミュニケーションを「多孔化」と呼んでいるが、「多孔化」により分断された社会を再生する方法の一つの例として、アニメ聖地巡礼を取り上げている（鈴木 2013:194）。鈴木は、中でもアニメファンの「振る舞いが聖地を作り、聖地が人々のアイデンティティを支え、それが現実の地域を変化させるという過程において見出される『空間の意味』に注目し、それこそが、多孔化によって分断された社会を上書きする要素となりうる」（鈴木 2013:194）と主張している。これは、Delantyが触れた「場所との結びつき」が確立されている一例と考えることもできる。

その上で、フランスの農村の伝統的な共同体に触れながら、「再生産性」の機能を持たないものは、共同体とは呼べないと述べる（鈴木 2013:216-217）。そして、その再生産の方法として、集合的記憶の継承を取り上げ、その具体的な方法としては、AR(仮想現実)サービスを利用した、身体を通じた個人としての記憶の継承を提案している（鈴木 2013:220-242）。

このように、＜モビリティ社会＞における共同体（コミュニティ）については、それが帰属の希求であり、対話的なプロセスであると考えられるが、その現実社会との接続一

のように現実の社会へ影響を与えるのかーがDelantyの議論においても鈴木の議論においても、今後の重要な探求課題として残されている。

2-3 ボランティア・ツーリズム研究の動向

前項では、＜モビリティ＞の定義や観光への影響、＜モビリティ＞社会における共同体についての先行研究をまとめた。本項では、それに続き、本研究の調査対象であるボランティア・ツーリズムについての先行研究を整理する。前項では、＜モビリティ＞社会においては、「ホーム」と「アウェイ」の境界が曖昧化することを指摘し、そのことが「ホスト」と「ゲスト」の境界の曖昧化へと結びつくと述べた。それは、旅行と住まうことの境界が曖昧になり、「ホーム」にいる者が「ホスト」であり、訪問者が「ゲスト」とあるという区別の、そもそもの前提が曖昧になっているからだ。この観点とは違った議論から始まった期待であるが、訪問地域でのボランティアを目的としたボランティア・ツーリズムは、新たなホストとゲストの関係性を実現すると期待され、オルタナティブ・ツーリズムの一つとして位置付けられている。以下では、その研究動向について整理する。

(1) ボランティア・ツーリズム研究の概要

ボランティアと観光の要素を持つボランティア・ツーリズムは、ボランティアと観光の両分野において、それぞれ研究対象となりうる。しかし、ボランティア分野においては、移動を伴うボランティアに注目した研究は少ない（依田 2009）。一方、観光分野での研究は2000年代以降本格化した。

観光分野におけるボランティア・ツーリズム研究で、これまで対象となった活動は、主に国際ボランティアであり、国内のツアーを対象とした研究の数は少ない。地域としては、米国、ヨーロッパ、オセアニアの先進国を発地とし、アフリカ、アジア、ラテンアメリカの発展途上国を訪問する事例が多い。その背景には、先述のとおり、これらの地域で多数の「gap year」世代の若者が、ボランティアツアーに参加したことが挙げられる。

当初は、自然環境保全活動や調査にかんする研究が多かったが、その対象は、各種建築作業、災害救助、キャンプカウンセラー、遺跡調査など多岐に渡っている（Wearing and McGehee 2013:121）。また、分析の内容は、参加者の動機やツアー参加からの影響にかんするものが多い。ボランティアを送り出す中間組織（sending organizations）や、ホストコミュニティの動機やホストコミュニティへの影響についての実証的な研究は少ない。以下に、ボランティア・ツーリズム研究の流れを概観し、＜モビリティ＞社会における観光を

研究するにあたっての課題を検討する。

（２）ボランティア・ツーリズムの類型

ボランティア・ツーリズム研究の対象が多様化するのと同時に、ボランティア・ツーリズムの類型化の試みも始まっている。Brownほか(2003)が、参加者の動機に着目して、ボランティア・ツーリストを「ボランティア重視型 (volunteer-minded tourist)」と、「休暇重視型 (vacation-minded tourist)」に分類しているほか、Callanan and Thomas (2005) は、多様なボランティア・ツーリズムを理解するためには、ボランティア・ツーリズムを再定義するよりも、要素分解することがより適切であると述べ、ボランティア・ツーリストとボランティア・ツーリズムプロジェクトを、ボランティアの動機やプロジェクトの特徴、参加への時間的技術的ハードルの高さ、地域への貢献などにより「浅い」「中間」「深い」の3種類に分類している。

一方で、Lyons (2003) は、J-1ビザで米国に渡ったオーストラリア人ボランティアが複数の矛盾する役割をこなしていたと感じていたことに言及し、分類の限界を指摘している。むしろ、より重要なのは、特定の文脈での意味付けの理解だと主張している。

（３）「もうひとつの」観光としてのボランティア・ツーリズム

分析対象や内容の幅が拡大しつつあるボランティア・ツーリズム研究だが、これらの研究の多くにはボランティア・ツーリズムをホストコミュニティの社会にとって良い観光としたいという共通の姿勢がある。それは、従来のマスツーリズムに対する『「もうひとつ」の観光（以下、オルタナティブ・ツーリズム）』としてのボランティア・ツーリズムの位置付けと、「利他の精神」をその動機に含む「ボランティア」を内包するという特性によると考えられる。

「オルタナティブ・ツーリズム」はマスツーリズムに対する反省から、1980年代に生まれた (Lyons and Wearing 2008:4-6)。大量輸送によるパッケージ化を特徴としたマスツーリズムによる開発では、ホストコミュニティが観光をコントロールする力をほとんど持たず (Lyons and Wearing 2008)、ホストコミュニティの自然・文化資源が過剰消費により破壊された上、外部による開発の結果、ホストコミュニティが外部依存体質となる弊害が指摘されている (Weaver 1991, 1995)。一方、オルタナティブ・ツーリズムは、ホストコミ

コミュニティにも恩恵があり、社会的文化的環境に配慮したツーリズムのことを指す。Lyons and Wearing (2008) は、オルタナティブ・ツーリズムは、観光を旅行者とホストコミュニティの相互作用の起こる空間に再構成することで、旅行者が創造的なアクターとして、ホストコミュニティやその環境にプラスの影響を与えるようにすると述べている。また、1990年代に入ると、「持続可能な観光 (sustainable tourism)」の創出が世界的課題になったが (Butler 1990, 1991; Cohen 1987; 石森 2001)、ボランティア・ツーリズムは「持続可能な観光」としても、受け入れ地域と自然環境にとってより良い旅行の形式を開発する試みと理解されている (Sin 2009)。Callanan and Thomas (2005) は、オルタナティブ・ツーリズムの下層概念では、ボランティア・ツーリズムを「社会的観光 (social tourism)」、「慈善観光 (charity tourism)」、「道徳的観光 (moral tourism)」、「責任ある観光 (responsible tourism)」とも分類できるとしている。

このように社会的な責任を意識した観光の形態として先行したのはエコツーリズムである。しかし、エコツーリズムはこの20年でかなり商品化 (commodification)⁸が進行したと指摘されており、ボランティア・ツーリズムが観光や観光研究の商品化傾向を変える形態として、新たに期待されている (Lyons and Wearing 2008)。しかし、詳細は後述するが、ボランティア・ツーリズムにかんしても、すでに商品化を含む弊害が指摘され始めている (Guttentag 2009; McGehee and Andereck 2008, 2009; McGehee and Santos 2005; Sin 2009; Butcher 2006; Gray and Campbell 2007)。

(4) 先行研究にみるボランティア・ツーリズムへの期待

前項では、ボランティア・ツーリズムがオルタナティブ・ツーリズムの一形態として捉えられ、その研究には、ボランティア・ツーリズムをホストコミュニティにとって「良い」観光としたいという共通の姿勢があることを指摘した。そこで、以下では、まず、観光やボランティアに期待される社会的意味や役割についての研究や動向を概観した後、ボランティア・ツーリズムの「良い」観光としての意味や役割に着目した先行研究を整理し、ボランティア・ツーリズムに期待される社会的意味や役割を明らかにする。

8 ここでの商品化 (commodification) とは、具体的な観光商品を作ることを指すのではなく、「利益を搾取するための消費対象としてホストコミュニティを扱う」ことを指す。(Wearing and Ponting 2009)。

1) 観光に期待される社会的意味や役割

観光の社会的意味や役割については、地域への経済的貢献や文化的な影響についての研究が多いが、最近では観光の「社会的な力」に注目した研究も出てきている（Krippendorf 1987; Higgins-Desbiolles 2003）。これらの研究では、観光を「産業」として論じるのではなく、観光の持つ発見や学習、人間関係構築といった力に着目しており、観光をより良い社会構築のための手段として捉えている。Ateljevic（2009）は、環境や経済、政治などさまざまな分野で、地域を超えた相互依存性が高まり、リスクの共有化が進んだことが、観光の持つ関係性構築の可能性に期待が高まっている背景だと指摘している。同様の視点から、国連の「持続可能な観光」の取り組みなどでも、観光は多様な文化にかんする意識向上や、人間関係性構築、平和の促進に欠かせない力として言及されている（UNWTO 2017）。一方、観光の異文化理解や平和構築の有効性にかんする疑問も呈されている（Brown 1989; Din 1988; Raymond and Hall 2008）。

2) ボランティアの社会的役割

ボランティア・ツーリズムのもう一つの構成要素であるボランティアには、社会的課題を解決するための労働力としての意味と、市民性創造（Drucker 1995）の機会としての意味がある。Drucker（1995:285）は、政治的経済的システムが巨大化した結果、現代社会においては人びとの社会参加の機会が稀になっていることを指摘し、ボランティアとして社会活動に参加することで、人びとは「一人ひとりの人間が、再び世の中を変えることができる」実感を持つことができると述べている。Korten（1990=2004:21）も、現代社会が抱える環境や南北問題などの経済的・社会的問題の解決のためには、経済第一主義の制度では不適切であり、そうではない広い基盤をもち、高度に個人的なものでなければならぬため、市民のボランタリー活動が本質的に重要な役割を負っていることを指摘している。国連においても、社会、経済、文化、人権、および平和構築分野での課題解決のために、より多くのボランティアが必要とされていることが認識され、2001年に国際ボランティア年が開始された。そのミッションステートメントでも、人びとに参加の機会を提供することや連帯の重要性が記されている。

3) 社会変革ツールとしてのボランティア・ツーリズム

発見・学習や関係性構築の力と社会変革活動への参加機会という社会的意味や役割を持つ観光とボランティアが融合したボランティア・ツーリズムにかんする研究では、同ツーリズムの社会変革のための手段としての可能性が論じられている。以下では、社会運動基盤の土壌、平和構築手段、脱商品化を実現する「第三の空間」としてのボランティア・ツーリズムについて論じた先行研究を整理し、これらに共通するボランティア・ツーリズムへの期待をまとめる。

① 社会運動基盤を築く土壌としてのボランティア・ツーリズム

初めに、McGehee and Santos (2005)の研究を紹介する。McGehee and Santosは、米国のボランティア・ツーリズム経験者へのフォーカス・グループ・インタビュー⁹の結果から、ボランティア・ツーリズムの社会運動を促進する土壌としての可能性を論じている。ここでいう社会運動 (social movements) とは、「社会のある大きな側面についての変化を実現（もしくは、抵抗）するために、多数の人びとが組織的な努力をすること」(Marshall 1994:489) である。こうした社会運動への参加や活動状態の重要な予測因子には、社会的なネットワークの形成と啓蒙体験があることが明らかになっているが (Knoke 1988; Klandermans 1992)、McGeheeらは、ボランティア・ツーリズムの場で、同様の興味を持った参加者同士の密度の濃い相互作用が強力なネットワーク形成と情報交換に有効であることを明らかにし、ボランティア・ツーリズムは社会運動を促進することを示唆した。McGeheeらは、また、こうしたネットワーク形成や情報交換に重要なのは、関わりの濃さであり、限られた時間での相互作用であっても、関わりの濃さが時間の短さを補完することが多いことも指摘している。

さらに、社会的運動を促進する啓蒙体験は、個人的な体験に基づく発見でなければならないが (Gordon 2002)、グループの文脈で起こる場合に有効であることが明らかになっており (Colquhoun and Martin 2001:7; Klandermans 1992:92)、まさにボランティア・ツーリズムという活動はそうした状況を作り出していること、またこうした啓蒙は、正式のプログラムの場合だけではなく、非公式な交流の場でも実現することを指摘している。ボランテ

⁹ フォーカス・グループ・インタビューとは、Flick(2007=2011)によれば、「市場調査などで用いられる調査研究法」であり、「あるグループに調査研究の対象に関してディスカッションするように求める」方法である。

ィア・ツーリズムを通じた個人的な体験が社会的な課題に対する啓蒙に結びつくことを Wearing (2001) も指摘している。

② 平和構築手段としてのボランティア・ツーリズム

次に、平和構築手段としてのボランティア・ツーリズムを論じている Higgins-Desbiolles (2003) の研究を紹介する。Higgins-Desbiolles は、平和を生み出し分断を仲介する「和解ツーリズム (reconciliation tourism)」をボランティア・ツーリズムのサブセグメントとして提唱している。Higgins-Desbiolles は、多くの先行研究が支持しているとおり、観光には、さまざまな場所にかんする知識の習得、共感の育成、自己の再認識と、その結果としての寛容の習得という効果があることを挙げ、観光を単なる娯楽や休息の場で終わらせるのではなく、「より高い目的」のために活用できる可能性を主張している。

そのような観光の活用事例として、高等教育機関の海外研修プログラムやアースウォッチ、Oxfam Community Aid Abroad (Oxfam CAA) に言及しているほか、オーストラリアにおけるアボリジニ観光を事例として挙げ、観光の推進がアボリジニらに経済的なメリットを与えていることに加え、自己尊厳の回復に貢献していることや、多様な人びととの交流を促し、先住民族間のネットワーク構築にも寄与していることを指摘している。しかし、Pizam (1996) の研究に言及し、観光の導入が自動的に敵対する者同士の関係性の改善に結びつくのではないことや、他の条件にも左右されることも認めている。

③ 脱商品化機会としてのボランティア・ツーリズム

最後に、Wearing and Ponting (2006, 2009) の脱商品化のきっかけおよび手法としてのボランティア・ツーリズムにかんする議論を紹介する。Wearing らは、ボランティア・ツーリズムのホストコミュニティと参加者との関係性構築や、参加者の自己成長などの特性に着目し、観光や観光研究で主流となっている「商品化」や新自由主義的な視点を問い直す機会や手法としてのボランティア・ツーリズムを提案している。ここでいう「商業化の問い直し」とは、観光をホストコミュニティの文化の搾取として批判するのではなく、旅行者と受け入れ側の融合した「第三の空間 (third space)」¹⁰ の創造行為と捉える視点である。この

10 「第三の空間」については、Bhabha, H.K. (1994=2005) *The Location of Culture* (『文化の場所 ポストコロニアリズムの位相』) を参照のこと。

第三の空間では、ホストコミュニティか訪問者のどちらかの文化に他方が吸収されるのではなく、両者が融合している。

一方で、ボランティア・ツーリズムの脱商業化的な特徴についても疑問が呈されている（Butcher 2006; Gray and Campbell 2007）。これらの指摘に対し、Wearing and Pontingは、Callanan and Thomas（2005）の定義による「浅い」ボランティア・ツーリズムでは商業化の要素が強いことを認めながらも、より「深い」ボランティア・ツーリズムでは脱商業化が可能であるとして反論している（Wearing and Ponting 2006, 2009）。

4）ボランティア・ツーリズムへの期待：まとめ

社会変革ツールとしてボランティア・ツーリズムに期待されている役割は、発見、学習、関係性構築、市民参加など、その特性を反映したものであり、前項で議論されたとおり、具体的な成功事例も出てきている。しかし、同時に、これらの成果はプログラムの内容により差があること、自動的に生まれてくるものではないことも明らかになった（Wearing and Ponting 2006）。それ以外にも、ボランティアという「与える」行為を通じて、ホストコミュニティの自立を促すのではなく、依存を促進するのではないかという懸念もある（Sin 2009）。さらに、Lyons and Wearing(2008)は、ボランティア・ツーリズムにボランティアと観光の双方の要素が含まれているため、そもそも複雑で、課題に満ちた観光であることを指摘している。

このようなリスクや限界を乗り越え、ボランティア・ツーリズムの持つ良い面が発揮されるためには、主催運営団体や仲介機関の適切なマーケティングやフォローアップが必要なことに加え、ホストコミュニティが主体的に関わることも重要である。規制の導入やボランティアの人数制限による管理（McGehee and Andereck 2008）が一つの方策だが、それに加えて、ホストコミュニティが計画や体制作りに参加することの重要性（Haywood 1988）もWearing and Ponting（2009）によって指摘されている。さらに、Wearing and McDonald（2002）は、コミュニティは単にトップダウンで決められたことを消極的に受け止めるだけでなく、毎日の生活に「知識」を同化させることができると指摘している。

（5）ボランティア・ツーリストの動機

ボランティア・ツーリストは、ボランティアとツーリスト両方の要素を有しているため、

その参加動機も両方の因子が含まれると考えられる（Gazley 2001）。ボランティアの動機については、後述するが、利他的な動機だけではなく利己的な動機も重要な動機であり、複数の動機を有しているという見方が多くの研究者に支持されている。

ツーリストの動機にかんしては、Dann（1977）は「プッシュ」と「プル」¹¹に大別されることが一般に受け入れられているとした上で、それまであまり研究の進んでいなかったプッシュ要因の重要性を主張し、アノミー¹²（全てのことから逃走したい欲求）とエゴエンハンスメント（自己を高めたい欲求）という2つのプッシュ要因を明らかにした。また、Crompton（1979）は、7つのプッシュ要因（日常からの逃避、自己探求ならびに評価、リラックス、名声、回帰、人間関係性向上、社会的交流の促進）と2つのプル要因（新奇性、教育）を明らかにしている。また、Iso-Ahola（1982）は旅行者の動機は逃避と追及に集約されるとしているほか、Pearce and Lee（2005）はマズローの欲求階層説を基盤とした旅行経験者階層構造説（Travel career ladder approach）により、動機は5段階の階層からなるとしている。

ボランティア・ツーリストの動機も、先のボランティアや観光の動機研究に挙げられている要素が確認されている。利他的な動機としては、他者への貢献や社会還元などが挙げられている（McIntosh and Zahra 2007; Sin 2009; Lo and Lee 2011; Wearing 2001; Yoda 2010）。

利己的な動機としては、旅行に関連した動機が多い。区分が一樣ではないが、具体的には、「旅行に行きたい」、「日常からの逃避」などが挙げられる（Broad 2003; Sin 2009; Lo and Lee 2011; Chen and Chen 2011; Wearing 2001; Yoda 2010）。また、国際ボランティアが研究の主たる対象となっていることもあり、海外に行くことを「挑戦」や「冒険」といった動機と捉えている例（Wearing 2001; Chen and Chen 2011; Sin 2009）や、「異文化交流」や「本物との出会い」なども挙げられている（Wearing 2001; Broad 2003; Sin 2009; McIntosh and Zahra 2007; Lo and Lo 2011; Chen and Chen 2011）。ここでの「挑戦」とは、自分が何者であるかを他者に示すため（Kernan and Domzal 1999）自身を証明する欲求を指すが、これは研

11前者は、旅行者や旅行者をとりまく社会の状況による社会的心理的な動機のことであり、後者は訪問先の魅力による動機である。（Dann 1977）

12 Dann（1977）はアノミーが社会学者デュルケムによって用いられた用語であり、社会的規範が失われ、社会が乱れて無統制になった状態であることが元来の意味であることを説明しつつ、ツーリズムの動機にかんする解釈としては、都市化や技術の高度化で親密感が欠けることによって起こる疎外感から逃れるため、また、田舎においてはプライバシーの欠如から逃れるために「こうした全てのことから逃走（“get away from it all”）」を願うことという意味で用いている。

究対象にgap yearの20代が多く含まれていることが背景にあると考えられる。この動機は、旅を挑戦や成人儀礼として捉える長距離旅行者やバックパッカーの動機（Desforbes 1998, 2000）に類似している。また、「本物との出会い」は、MacCannell（1976）の「旅行者は訪問先の生活を体験することを求めている」という主張と一致する。また、仲間と一緒に何かをしたいという社会的動機が見られたほか（Broad 2003）、将来の（仕事の）ため（Wearing 2001; Broad 2003）、親子で参加した場合の子供の教育（Lo and Lee 2011）、ツアーに加わることの利便性（Sin 2009）などのより現実の便益に基づいた動機を有する事例もあった。

これらの動機研究の結果は多様であり、利他的またはボランティア重視の動機がまさる例（McIntosh and Zahra 2007）、同じくらいの事例（Broad 2003; Yoda 2010）、旅行の動機がまさる事例（Wearing 2001; Sin 2009; Lo and Lee 2011; Chen and Chen 2011）に分かれる。ボランティア活動に従事する時間の長いプログラムでは、利他やボランティア重視の動機が強く、観光に従事する時間が長いプログラムや居住地と訪問地の距離が離れている場合では、観光や旅行にかんする動機が強くなる傾向がある。

（6）ボランティア・ツーリストへの影響

ボランティア・ツーリズム体験の大きな特徴の一つは、「密度の濃い」「相互作用」（Wearing 2001; Sin 2009）であることだ。それは、とおり過ぎる観光ではなく、ある程度の期間現地に滞在し、地域の人びととプロジェクトに携わるというボランティア・ツーリズムの特性を反映したものだと考えられる。また、Wearing（2001）やSin（2009）は、その相互作用が個人によって異なる複雑なものであること、さらにWearing は、ボランティア・ツーリズムの現場と言う空間の持つ相互作用的な側面は、時間が経つにつれ（または、短くとも密度の濃い時間の中で）、集団に社会的な意味を与えることや、コスタリカの自然保護活動の参加者の例を挙げ、社会価値を決める相互作用の対象が他のボランティアや地域の人びとばかりではなく、自然も含んでいたことを明らかにしている。また、濃い関わりを可能とするボランティア・ツーリズムの空間にかんしては、Broad（2003）がクルーズ観光との類似性を指摘している。

ボランティア・ツーリズム体験のもう一つの特徴は、オーセンティシティ(真正性)である。現地で一定期間滞在し、現地の人と交流をし、現地の人たちと同様の環境で宿泊や食事をするプログラムも含まれるボランティア・ツーリズムを、参加者たちは「本物の体験」と感じていた（Wearing 2001; Broad 2003; McIntosh and Zahra 2007）。これは

MacCannell(1976)による「裏舞台」の経験と考えられる。さらに、Wearing(2001)は、参加者が自分たちを「ツーリスト」と認識していないことを、Sin (2009)、Swarbrooke et al. (2003)、Campbell and Smith (2006)、Halpenny and Caissie (2003)、Ellis (2003)は「ボランティア・ツーリスト」ではなく、それぞれの活動（サービスマーケティング、アドベンチャーツーリズム、エコツーリズム、環境調査など）の参加者だと認識していることを明らかにした。このように「ツーリスト」としての自己認識を持っていないのは、MacCannell(1976, 1992)が指摘しているとおり、文化や環境について意識の高い旅行者は、（マス）ツーリズムを非常にマイナスとみているために、（マス）ツーリストとレッテルを貼られることを好まないことが一つの理由だと考えられる。

ボランティア・ツーリズムは、また同時に、学習の場であることが明らかになっているが、その内容は参加プログラムが関連した分野での知識の習得に留まらない。先行研究の対象の多くが国際ボランティアであることから、特に、公式・非公式の現地の人々との交流を通じ、異文化を受け入れ、異文化から学ぶ体験であることが指摘されている（Broad 2003; McIntosh and Zahra 2007）。それは、また、自分たちとは違う習慣や価値観を持つ文化や人々との出会いであり、自己や自国の文化を見直すことや、新たな人生観や世界観を持つきっかけとなっている（Sin 2009; Lo and Lee 2011）。さらに、同僚であるボランティア達との生活、プロジェクトの遂行、異なる環境での生活を通し、他者に対する寛容を養い、自分に対する自信を深めるといった体験ともなっている（Broad 2003; McGehee and Santos 2005; Sin 2009; Lo and Lee 2011）。

このような体験の影響は、ツアーから戻った後も続く。新たな人生観や自信を得たことで、職業選択や進路に大きな影響を受ける例が挙げられている（Broad 2003; Sin 2009）。Broad(2003)は、タイの動物保護活動に従事したボランティアの例を挙げ、その数は限られているものの、Starr(1994)がPeace Corpの分析で述べているような「人生の転機」を経験した参加者があることを述べている。また、そのような大きな影響でなくても、他者への寛容や自分に対する自信の高まりなどを、参加者がツアー後の変化として認識していることも明らかになっている（Broad 2003; Wearing 2001）。

ここまでは、ボランティア・ツーリズム体験の参加者にとってのプラスの側面を整理してきたが、マイナスの側面や限界があることも指摘されている（Guttentag 2009）。その一つは、現地の人びとや生活と自分や自分のおかれた環境との差異を大きく感じた結果生じる、現地の文化や人びとのステレオタイプ化だ（Simpson 2004; Sin 2009）。また、貧しく

でも幸せに暮らしている人びとに出会うことで、貧困を正当化する恐れや、貧困を社会的感情的豊かさに結び付け、理想化する例も明らかにされている（Lepp 2008; Simpson 2004; Raymond and Hall 2008; Ver Beek 2006）。また、Lyons（2003）は、米国におけるJ-1ビザ¹³を取得したオーストラリア人ボランティアの事例を通し、受け入れ先の人びとのボランティアに対するステレオタイプ化した見方や現地のボランティアとの扱いの差により怒りを感じたというマイナスの体験を明らかにしている。このことから、ボランティア・ツーリズムの体験には、主催運営団体の受け入れ側および参加者側双方に対しての適切な教育や、プログラム開発が必要であり、プラスの体験は自動的に発生するものではないことがわかる。

ボランティア・ツーリズムの限界としては、Bruner(1991)が指摘するように観光では人は変わらない側面が一定程度ボランティア・ツーリズムにも当てはまることが考えられる。Brunerの主張の背景には、観光の短い滞在期間、地元との交流の欠如、言語面における不自由による文化的宗教的な意味の理解不足が挙げられている。これらの点にかんしては、ボランティア・ツーリズムは通常のマスツーリズムよりは恵まれており、先述のとおり、参加者は自己や社会に対する考え方や感じ方に影響を受けているが、その後の行動の変化に結びついていないという指摘もある（Ver Beek 2006; Coghlan 2008）。ボランティア・ツーリズムで得られたプラスの変化を継続させるために、McGehee and Santos (2005)は、主催運営団体による参加後のデブリーフィングやネットワーク作りが必要と主張している。

（7）ホストコミュニティの動機とホストコミュニティへの影響

ホストコミュニティ側の動機にかんする実証研究はこれまでのところほとんどない。しかし、ホストコミュニティへの影響にかんする研究はいくつか出てきているので、以下にそれらを整理していく。

ボランティア・ツーリズムのホストコミュニティへの影響をGuttentag (2009)は以下のよう

に端的に表している。すなわち、「普通であれば観光客が来ないところに観光収入が落ち、観光客と直接接触をできることが、プラスの点だが、慣れない住民のパーソナルスペースに深く入り込むことで、マイナスの影響を与えることもある」（Guttentag 2009:547）。ボランティアにとってそうであったように、ホストコミュニティにも、マスツーリズムよりも

¹³ J-1ビザとは、米国の訪問交流ビザの一つであり、研修参加者等に発行される。

深い交流とその結果としての相互作用が影響を与えている。

プラスの影響が明らかになっている例は少ない。ボランティア・ツーリストが訪れることにより、地域の共通のゴールや価値観を持った人びととのネットワークが形成されることや、地域の人の意識が向上することがMcGehee and Santos (2005) に指摘されているほか、McIntosh and Zahra (2008) は、ボランティアがマオリ族の子供たちのロールモデルとなった事例を挙げている。

一方で、マイナスの影響や懸念事項は多く指摘されている (Guttentag 2009)。具体的には、ボランティアの技術や滞在期間の長さが十分でないことなどによるプロジェクトの効果に対する疑問 (McGehee and Andereck 2008; Simpson 2004; Callanan and Thomas 2005)、ボランティアが参入することによる現地の人の就業機会の喪失や給与水準への影響 (Raymond and Hall 2008)、依存サイクルを作り出す可能性 (Wearing 2001; MacGehee and Andereck 2008) などが指摘されている。さらに、文化的な側面では、ツーリストのライフスタイルや豊かな持ち物により、ホストコミュニティの文化が影響を受ける「デモンストレーション効果」 (Wall and Mathieson 2006:236) も懸念されている。また、より基本的な部分では、ホストコミュニティの望みとボランティアたちの望みが異なる可能性があることが指摘されている (Gray and Campbell 2007; McGehee and Andereck 2008)。たとえば、ボランティアたちは、コミュニティの変化を望まないことが多いが、地域は観光が発展してほしいと願う場合などである。この点にかんしては、そもそも主催団体が保全系の場合は、地域の考え方を代表していない場合があることが指摘されている (Scheyvens 2002; Matthews 2008)。

（８）主催運営機関や仲介機関の役割について

（６）や（７）において、ボランティア・ツーリズムのボランティア・ツーリストとホストコミュニティへの影響を整理したが、そのどちらにおいてもマイナスの影響を最小限にし、プラスの影響を持続するためには、ボランティア・ツーリズムを主催運営する団体や仲介機関の役割が重要であることが明らかになった。具体的には、地元のニーズの理解とそれに適したプログラムの企画、ホストコミュニティとボランティア双方に対する教育とネットワーク作りの支援などである。

主催運営機関や仲介機関などボランティア・ツーリズムを含むオルタナティブ・ツーリ

ズムに関わる団体の組織形態について、Wearing and McDonald (2005)は、NGOがベストプラクティスだと主張している。NGOにとっての観光は単なる休暇や逃避の空間をつくる産業や活動ではなく、旅行者とコミュニティに新たなプラスの態度、価値観、行動を可能とするためのものであるからだ。一方で、Lyons(2003)は、NGOと私企業が取引関係になることもあるため、その境界はあいまいだということも指摘している。Mdee and Emmott (2008)は、こうしたボランティア・ツーリズムの質を一定以上に担保するための方策として、企業形態に頼るのではなく、フェアトレードの認証システムを導入することを提案している。

(9) ボランティア・ツーリズム研究の課題

この15年で台頭してきたボランティア・ツーリズム研究の傾向を概観してきた。そこでは、どのような状況でも必ず発現するものではないものの、濃い相互作用や発見、学習機会としてのボランティア・ツーリズムが個人の変化や新しい関係性の構築を通じ、不平等や他者の「商品化」を是正するために有効なのではないかという期待があることがわかった。一方で、これまでの研究の中心は、個人のボランティア・ツーリストの動機や体験が中心であり、ホストコミュニティや仲介機関も加えた「システム」としての研究はほとんどない。また、単発のツアーが対象となっており、ボランティア・ツーリズムを通じたホストコミュニティとツーリストの関係性を継続的に研究したものはない。また、ホストコミュニティ対ボランティア・ツーリストという二項対立的な視点での分析がなされている。

<モビリティ>社会においては、共在、つまり、ツアーの最中だけではなく、不在の時も含めてのつながりが重要となっている。また、人、モノ、情報などの移動が常態化しており、それぞれの相互作用が重要である。従って、ホストとゲストが濃密な交流をもつボランティア・ツーリズムにおける活動の継続的な相互作用に注目し、動態的に分析することが必要だと考えられる。

2-4 ボランティア組織やボランティアの動機について

前項では、ボランティア・ツーリズムにかんする先行研究を整理し、<モビリティ>社会を踏まえた継続的な相互作用を動態的に分析することの重要性を指摘した。その際に問題となるのは、「地域外の人が一時的に訪問する」という観光の一過性である。先述のとおり、これまでのボランティア・ツーリズム研究では、継続するツアーとしてのボランテ

ィア・ツーリズムに焦点を当てたものではなく、単発のツアーが研究の対象となってきた。そこで、ボランティア・ツーリズムの継続性を理解するために、非営利組織経営学分野におけるボランティアの動機や組織研究を参照する。

（１）活動積極要因

組織論におけるボランティアの活動継続要因については、桜井（2007:68-84）がまとめている。桜井は、ボランティアをしている人たちのほとんどが今後の活動予定について現状維持の意向を持っていた（全国ボランティア活動振興センター 2002））ことを指摘した上で、彼ら彼女らが活動に積極的に取り組む行動を「活動積極行動」と呼び（桜井 2007:68）、組織論に基づき、その要因について考察を進めている。

１）組織均衡理論と組織の目的

先ず、ボランティア参加者は理念以外の多様な期待を持って参加しているとの西浦(1997)の指摘に言及し、「ボランティアを熱心にさせるものは本当に活動理念なのだろうか」（桜井 2007:69）と問題提起をした上で、組織存続を説明する中核的な理論である組織均衡理論に触れている。同理論の要旨については、占部が以下のとおりまとめている。

組織が人々に対して提供する「誘因」が、人々が組織へ「貢献」する量と同じか、それ以上である場合、個人は動機や目標が満たされ、組織への参加を続ける。その結果、組織は存続し、成長する、という理論である。もし、個人の貢献に対し、組織の誘因が足りないものであれば、人々は組織への参加を中止し、その組織は衰退し、死滅することになる。（占部 1974:102）

桜井は、この理論の基礎を築き上げたChester I. Bernardや、Herbert A. Simonが非営利組織も含む組織全般についてこの理論が適応されることを前提としていたことに言及した上で（桜井 2007:69）、Simonが「組織の目的は、参加者の管理体系の中ではかなり小さい役割しか果たさないものである」（Simon 1997:143）と言い切っている点に着目し、組織の目的（ミッション、組織理念）は、組織活動を方向づけるためには重要であるが、「組織理念はボランティアの活動積極性を十分に促す要因ではない」と結論づけている（桜井

2007:70)。

2) ボランティアと組織コミットメント

桜井(2007)は、次に組織コミットメント理論を援用して、ボランティアの活動積極性要因を整理している。「組織コミットメント理論とは、広く組織への帰属意識を表す概念として、組織心理学、または組織行動科学の分野で用いられる概念である。」(桜井 2007:70) 一般的に、組織コミットメントには、「情緒的(感情的)コミットメント」「功利的(または存続的)コミットメント」「規範的コミットメント」があるとされている(Allen and Meyer 1990)が、このうち、ボランティアには「功利的コミットメント」がないか、有給の従業員に比べて低いとする意見がある(Cnaan and Cascio 1999; Liao-Troth 2001) ことに触れた上で、桜井(2007:71)は、その理由として、ボランティアは自発的な参加が前提であるため、嫌な活動からは、すぐに撤退すると考えられているためだと述べている。

桜井(2007)は、またボランティアの組織コミットメントの性質について、Jessica R. Jenner (1981, 1984)の研究に言及し、ボランティアの組織コミットメントは、組織の一体感や、メンバーシップへの満足、活動頻度、今後の活動予定と正の関係が見られるが、組織コミットメントは永続的なものではないことや、必ずしも高い組織コミットメントが活動量と関係するものではないことにも触れている。また、「職務満足はボランティアの組織コミットメントを理解する上で重要」(Dailey 1986:22)であるが、ボランティアの活動への満足と組織コミットメントは直接に無関係であり、その双方に「組織アイデンティティ(organizational identification)」が影響しているというTidwell(2005)の議論を紹介している。組織アイデンティティとは、「個人が組織の中で形成する『組織の一員』意識のことであるが、なおかつ、自身と組織は絡み合った一体のものとして認識された状態の意識を指す」(Ashforth and Mael, 1989)。

3) ボランティアの心理的契約

桜井は、さらに「心理的契約」という概念に言及している(桜井 2007:72-74)。「心理的契約(psychological contract)」とは、Edgar H. Schein(1965)などが初めて紹介した概念であり、一般的に「個人と組織との間における相互的な義務についての個人側の信念であり、その義務は約束の知覚を基礎としており、必ずしも組織側の代理人による認識を必要とし

ない」と定義される（Morrison and Robinson 1997; Robinson 1996; Rousseau 1989）。

心理的契約概念の契約対象は、個人の側で擬人化された「組織」であり（Morrison and Robinson 1997; Rousseau 1989; Schein 1965）、その契約は、個人と、個人を取り巻く組織的環境との相互作用によって形成される（Shore and Tetrick 1994）。重要なのは、「個人が、組織が心理的契約に違反していると認識した場合（すなわち、個人の期待に組織が応えていないと認識した場合）、業績、職務態度、職務継続などを低下させ、さらに、職務満足とコミットメントを減少させると考えられている」（Robinson 1996; Robinson et al. 1994; Robinson and Morrison 1995; Robinson and Rousseau 1994）点である。

さらに、Steven M. Farmer and Donald B. Fedor（1999）は、「ボランティアは有給の従業員に比べて、明示された契約内容を持たないために、暗黙的な組織に対する相互の義務感・期待感（＝心理的契約）が強く働くことになる」ことを明らかにした。ただし、Matthew A. Liao-Troth（2005）は、ボランティアの心理的契約の内容は一樣ではなく、ボランティアの性格や動機が影響していることを指摘している。

（２）ボランティアとリーダーシップ

David H. Smith（2000:156-166）は、「有給職員が存在するNPOの場合には、マネジメントが強調されるが、ボランティアグループにおいては、リーダーシップがより強調されるとしている。その理由は、ボランティアグループを持続させるための指導や『社会的推進力』が、他に少ないためである」。そこで、以下では、ボランティアグループのリーダーシップについて概観する。

桜井（2007:74）は、一般的に、リーダーには「配慮（consideration）」と「構造作り（initiating structure）」という大きな二つの機能があるが、ボランティアグループのリーダーシップにおいては、前者の「配慮」がより重要と考えられていると述べている。それは、ボランティア活動は「仕事」ではなく「レジャー」であるために、「業務指導は最小限か、全く必要としていないためである」（Smith 2000:159）。しかし、ボランティアリーダーが、組織の長期的な目的と、各ボランティアメンバーの直接的なニーズとを調整するために用いることのできる方法は、実に弱いものでしかない（Harris 1998）。それは、リーダー自身もボランティアであることから、そのリーダーシップに何らかの権威や根拠づけがないことが多いためである。

加えて、桜井（2007:79-80）は、ボランティア組織では、リーダーの長期政権化が問題となることが多いことを指摘している。長期政権には、活動の安定化というメリットもあるが、デメリットとして、意思決定がリーダーやその周辺の少数者に常に限られることによる、民主的な運営の疎外の可能性が挙げられている。また、リーダー自身の負担が重くなるという弊害も考えられる。リーダーの継承が進まない理由については、ボランティアグループのリーダーには、報酬が存在していないため、個人の献身的な意識に依存することが多いことが理由ではないかと指摘している（桜井2007:80）。

また、ボランティアグループの意思決定については、当初は民主主義的になされる（Smith 2000）が、グループが拡大するにつれ、初期メンバーが「中核メンバー」として、リーダーとともに運営の中心にいるため、新規メンバーは「周辺メンバー」に位置付けられがちであることを指摘している。これは、「寡頭制の鉄則」（Lansley 1996; Perkins and Poole 1996）と呼ばれ、「周辺メンバーの参加意識を低下させるだけでなく、組織の新陳代謝を遅らせ、活動の停滞を招く原因ともなる」（桜井 2007:81）が、その対応は容易ではないことにも指摘している（桜井 2007:80-82）。

2-5 先行研究のまとめと本研究の独自性

本章では、本研究の問題意識となっている＜モビリティ＞の定義に始まり、＜モビリティ＞が社会や観光に与える影響についての先行研究を検討した。また、ボランティア・ツーリズムにかんするこれまでの研究を整理し、これまでのボランティア・ツーリズム研究は、ホスト・ゲストの関係性についての固定的な見方が主流であり、動態的な研究がほとんどないことを指摘した。その上で、動態的なボランティア・ツーリズムを研究する上では、単発のツアーを対象とするのではなく、長期間にわたって、継続している活動を対象とすることの重要性を指摘した。その上で、経営学分野のボランティア研究における継続動機や組織の課題についての先行研究をまとめた。

本章の冒頭で述べ、また、上記の先行研究のまとめからも明らかなように、本研究の独自性は、理論的な観点から述べると、社会学的な＜モビリティ＞や＜コミュニティ＞の議論と、経営学における組織論や動機論を接続し、観光という実践の場に近い議論を目指すところにある。また、実証的・経験的研究の観点からは、ボランティア・ツーリズム研究でこれまで対象となってきた事例は、欧米豪州の発展途上国を訪問する事例や、単発のツアーを対象にした研究がほとんどであった。本研究のように、10年以上にわたる実績を持

つボランティア・ツーリズムの事例を、活動の現場である訪問先と、参加者の居住地での交流を含めてフィールドワークを行い、時系列で分析した研究はない。

第3章 研究の方法と事例の概要

3-1 研究の方法

本研究は、＜モビリティ＞社会における観光の意味や役割を再考することを目的とし、そのために＜モビリティ＞と社会参加の交差であるボランティア・ツーリズムを取り上げ、そこで具体的に起こっている事象の新たな側面を実証的に発見し、経験的仮説を構築することを試みる。その際、質的研究をその基本的なアプローチとする。それは、「＜モビリティ＞社会における観光」という事象が、明確な因果関係のモデルに集約されるものではなく、「相互に依存し合って、複雑な織物を成している（Flick 2007=2011:18）」事象であるためである。「質的研究は、研究対象の複雑性に対して開かれた研究の方法を用いて、複雑な対象の研究を行おうとする」研究法であり、対象を「その複雑な姿のままに、自然な日常の文脈の中で研究」する（Flick 2007=2011:18）。

その調査戦略としては、エスノグラフィーを採用する。調査戦略としてのエスノグラフィーでは、観察と参加に他の方法が組み合わせて用いられる（Flick 2007=2011:284）。その特徴としては、少数または一つの事例を対象とし、長期にわたって、公然とあるいは隠れて人びとの日常生活に加わり、そこで起こることを観察し、研究上関心のある問題を明らかにするために、手に入るデータはなんでも集めること（Hammersley and Atkinson 1995:1; Atkinson and Hammersley 1998:110-1）が挙げられる。また、その成果は、言葉による記述と説明が中心であり、数量化や統計データは副次的な役割を持つにとどまる（Atkinson and Hammersley 1998:110-1）。

従って、本研究も、調査対象プロジェクトについての予備調査を実施したのちは、参与観察と半構造化インタビューを中心に調査を進めた。さらに、調査対象団体の協力が得られる場合には、アンケート調査を行い、質的データと量的データを組み合わせて（Flick 2007=2011:32）事象の分析を進めた。調査対象地域の選定についての詳細は後述するが、＜モビリティ＞社会の特徴と考えられる「共在」と「不在」を包含した観察ができるように、単発のツアーではなく、受け入れ地域と旅行者（ボランティア・ツーリスト）が継続的な関係性を有しているプロジェクトを選定した。同様の問題意識から、参与観察にあたっては、ツアー期間およびそれ以外の期間も含めた観察を実施した。

半構造化インタビューのサンプリングは、「理論的飽和」にいたるまで行った。「理論

的飽和」とは、「あるカテゴリーの特性を新たに展開できるデータが見つからない状態」を言う（Glaser and Strauss 1967=1996:85-87）。

3-2 調査対象プロジェクトの選定

(1) 調査対象プロジェクトの選定条件

本研究は、＜モビリティ＞社会におけるボランティア・ツーリストと地域が構築する関係性およびその背景にある両者の動機、関係性を支える仕組みについて明らかにする。＜モビリティ＞社会の特徴の一つは、旅行が終わった後にも関係性が続くことである。そこで事例の選定に当たっても、訪問地域でボランティア・プログラムが実施されている「共在」の時と訪問地域を離れた「不在」の時を含めて関係性が継続しているプロジェクトを調査対象とすることが重要である。

このように継続的な関係性を調査するためには、一定期間以上のボランティア・ツーリストの受け入れ実績のあるプロジェクトを取り上げ、その継続要因も含めて考察の対象とすることが重要であるが、単にプロジェクトが継続しているだけではなく、①一定数程度の継続者が存在していること、②活動継続のタイミングや内容が柔軟で、継続や継続支援に関する多様な選択肢があり、さまざまな観点から参加動機や継続動機、運営上の特徴を探求できることが必要だと考えられる。

さらに、先述の通り、ボランティア・ツーリズムには多様な分野での活動があるが、医療や一部の福祉など活動に必要とされる専門性が高い場合は、ボランティア・ツーリストが地域で果たす役割や協働プロセスの柔軟性は限られる可能性が高い。そこで、本研究では、特別な知識や技術が必要とされず、ボランティア・ツーリストが地域で役割を拡大できる可能性のある地域イベントに着目することとした。

(2) 調査対象プロジェクトの妥当性

前述した調査対象プロジェクト選定の条件を踏まえた上で、本研究では北海道小樽市で実施されている冬の観光イベント「小樽雪あかりの路」と新潟県十日町市および津南町で実施されている現代アート・プロジェクト「越後妻有大地の芸術祭」を取り上げることとした。両イベントとも多数の地域内外のボランティアを受けて入れており、その実績も15年程度ある。また、ボランティアの仕事内容は特殊な技術を必要としない内容であることに加え、参加期間についても、前者は2時間から、後者は1日からと自由度が高い。

両者とも複数のボランティア団体が参加しているが、前者では、同イベントに14年に渡って参加している韓国人ボランティアグループ「Otaru Snow Light Festival Korean Volunteers (以下、OKOVO)」を、後者では、同プロジェクト開始時から首都圏の大学生や社会人

を中心に活動をしている「こへび隊」を分析の中心とする。以下では、両プロジェクトの開催地およびプロジェクトの概要、対象ボランティア団体の概要について、説明する。

3-3 調査対象プロジェクトの概要

(1) 「小樽雪あかりの路」とOKOVOの概要

1) 小樽市の概要

① 小樽市の地勢および歴史的経緯

初めに、「小樽雪あかりの路」の実施地である小樽市の概要を述べる。小樽市は、北海道西海岸のほぼ中央に位置する人口12万人（総務省 2017a）の都市である。札幌市から約40kmの距離にあり、鉄道ではJR函館本線快速により約30分である。

三方を山に囲まれていることから、平地が少なく、坂や斜面の多い地形になっている。市域の海岸線は69kmで、その中央には天然の良港の小樽港がある。

気候は、気象庁の平年値（1981年から2010年）によると、気温の年平均地が8.6℃、月平均最高値は8月の21.7℃、最低値は1月の-3.3℃となっており、北海道にあつては、比較的寒暖の差が小さい海洋性の気候となっている。一方、降水量の年平均値は1,232mm、積雪最大値の年平均は122cmであり、降雪の多い地域である。

天然の良港に恵まれた小樽市は、北海道の中でも貿易の拠点として古い歴史を有しており、明治13年には道内で最初の鉄道が小樽市の手宮から札幌まで開通し、昭和初期にかけて、金融機関や世界的な船舶会社、商社などが次々と進出し、北海道経済の中心として発展を遂げたが、第二次世界大戦後は、道内他都市の港湾施設整備や商社や金融機関の札幌移転の結果、小樽経済は衰退し、人口も減少の一途を辿った。

そのような中で、小樽臨港線道路計画をきっかけに、1960年代後半から1980年代半ばにかけて、小樽運河の保存を巡る「運河論争」が起こり、運河は当初の半分の規模で保存され、古い倉庫や建物を利用した観光施設などが開設された。これらの論争により、小樽の知名度が上がったことや、北海道ブームなどもあり、1980年代以降、小樽は北海道でも有数の観光都市となった。しかし、観光産業からの経済効果は他の衰退する産業からの効果を補うには十分な規模ではなく、同市が置かれた経済的社会的現状は、後述の通り、厳しい状況となっている。

② 小樽市の課題

小樽市の直面する課題としては、経済の縮小と人口減少の影響が深刻である。前項でも

述べた通り、金融・商業などの札幌集中や、港湾物流の太平洋側へのシフトにより、地域経済の縮小が続いている。市内総生産は、2017年1月に2012年までの市内総生産（名目）が発表されたが、同金額は、10年間で4,318.9億円から3,615.5億円まで減少した。この減少率は、全国平均や北海道平均を上回る（小樽市 2017a）。今後の産業政策について、観光が重要な役割を果たすと認識されており、2015年に策定された同市の「総合戦略」でも、「観光をキーワードに産業間の関係を強化することにより、地場産業の競争力向上を図る必要」とあると述べられている(小樽市 2004:4)。

小樽市の人口は国勢調査では1960年の198,511人がピークであり、以降は毎年減少が続けている。2010年4月には総務省により「過疎地域」¹⁴に指定された（図5－2）。人口減少の要因としては、社会的減少、自然減少の両方の要因がある。これは、転出者に20代が多いためである。また、高齢化も急速に進んでおり、65歳以上の人口に占める割合を示す高齢化率は、国勢調査によると2015年で37.2%であった。

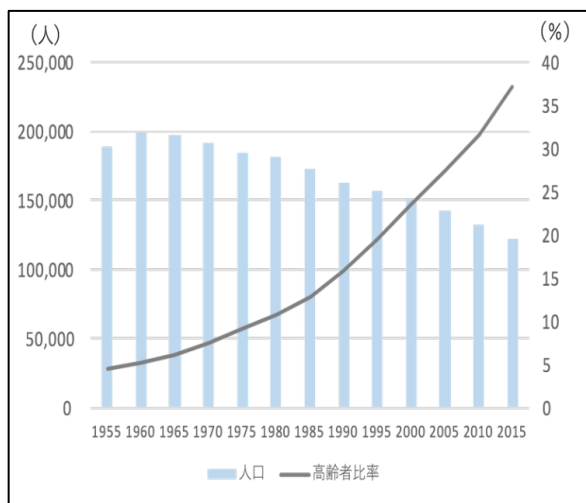


図3－1 小樽市の人口と高齢化比率の推移

出典：総務省統計局「国勢調査」にもとづき筆者作成

14「過疎法」による「過疎地域」に指定されると、過疎債の発行が認められ、公共事業の補助率がかさ上げされる。合併などの特別な理由なく、人口10万人以上の市が「過疎地域」に指定されるのは珍しい。

③ 小樽観光の概要

①で述べた通り、小樽の観光都市としての歴史は1980年代から始まった。その経緯は、本研究の調査対象となっている「小樽雪あかりの路」の趣旨を理解するために重要なので、ここで1980年代から2000年代までの流れをまとめる。

運河周辺の観光目的の再開発が本格化したのは、1978年に開催された「第一回ポートフェスティバル」で、2日間で8万人が来場したことがきっかけである。それまでの運河は、港湾労働者と釣り人以外に訪れる人がいないような状況だった。さらに、ポートフェスティバルの中心メンバーたちは1988年に「小樽・夢の街づくり実行委員会」を結成し、観光客のためだけではなく、市民が生き生きとできるような運河からのまちづくりをテーマに活動を開始した。

その後、バブルによる旅行需要の増加もあり、同委員会の取り組みとは関係なく小樽は観光ブームを迎えたが、委員会のメンバーたちは、そのようなブームを他律的な観光として冷静に捉えていた（小川原 2008）。そして、1998年には、運河論争での対立を超え、小樽市、商工会議所、観光協会に加え、まちづくり市民運動の担い手も参加した観光事業推進型の団体として「小樽観光誘致促進協議会」を設立した。ちょうどその頃、小樽の観光入込客数はピークを迎えた（図3-2）。

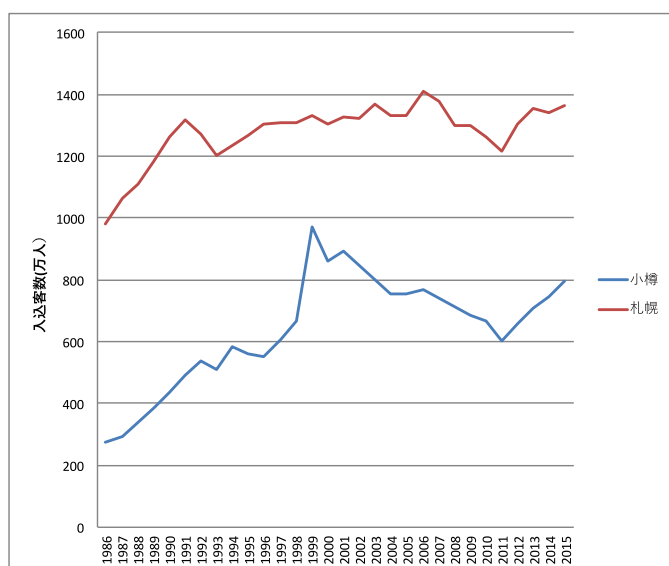


図3-2 観光入込客数の推移

出典：小樽市(2017b)「観光入り込み客数の推移」、札幌市「平成26年度観光入り込み状況」
「平成26年版 札幌の観光」をもとに筆者作成

同協議会は、小樽観光の未来を考える調査を実施したが、そこでは、観光の個人化やソフトおよび情報発信の重要性などが明らかにされた。そして、その調査の答えの一つとして誕生したのが、冬の観光イベント「小樽雪あかりの路」である。詳細は事項に譲る。

2) 「小樽雪あかりの路」の概要

① 成り立ち

小樽雪あかりの路は、先述の通り、「小樽観光誘致促進協議会¹⁵」の提案に基づき、1999年に始まった。そのデザインにおいては、リヨンの「光の祭典」というガラスの器とろうそくの祭りの話を参考に（小川原 2008）、小樽にある北海道唯一のろうそくメーカー、小樽と函館にしかない浮玉硝子などを取り入れた¹⁶。また、一つの特徴として、市民参加型のイベントであることで挙げられる。市民参加の背景には、「コミュニティでのコミュニケーションの復活」という狙いもあった（市役所ヒアリング2010年5月）。同イベントは、小樽にゆかりのある詩人、伊藤整（2006）の『雪明りの路』にちなんで命名された。下記に、同イベントのイメージの元になっている「雪夜」を紹介する。

あゝ 雪のあらしだ。

家々はその中に盲目になり 身を伏せて

埋もれてゐる。

この恐ろしい夜でも

そつと窓の雪を叩いて外を覗いてごらん。

あの吹雪が

木々に唸つて 狂つて

一しきり去つた後を

15 小樽観光誘致促進協議会は2007年3月に小樽観光協会と統合し、一般社団法人小樽観光協会となった。

16 実際のコンセプト制作にあたっては、雪あかりの路のシンボルとなる『蠟燭使用』を巡る論争（安全面を考慮して、イルミネーションでの安全策をとる意見と、小樽オンリーワンの浮玉キャンドルとスノーキャンドルを用いる案）があり、数カ月をわたって議論が続いた。（小川原 2008）

気づかれない様に覗いてごらん。

雪明りだよ。

案外に明るくて

もう道なんか無くなつてゐるが

しづかな青い雪明りだよ。

（伊藤整『雪明りの路』より「雪夜」）

② 小樽雪あかりの路の運営

同イベントを主催する「小樽雪あかりの路実行委員会」は、小樽市、商工会議所、小樽観光協会（観光事業者）、まちづくり市民運動家により構成される非営利任意団体であり、事務局は小樽市経済部観光課が担当している。開催にあたって、活動に対する国や道からの補助はなかったため、一部大型機械の使用や特殊技術が必要な作業を除いては、無償ボランティアを活用した運営方法を取るようになった。

会期中は、午後5時から9時まで市内各所の会場で、雪のオブジェや硝子玉にろうそくが設置され、灯が点される。ここ数年の来場者数は50万人ほどである（図3-3）。

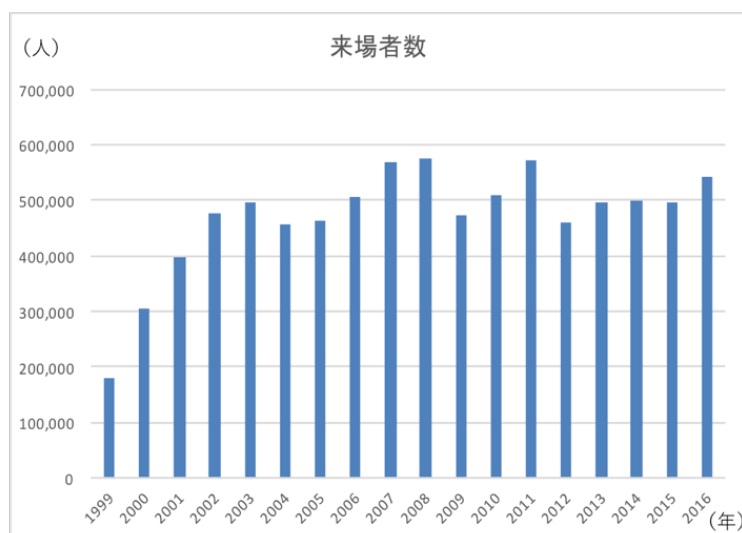


図3-3 「小樽雪あかりの路」来場者数の推移

出典：「小樽雪あかりの路」事業報告書を元に筆者作成

3) OKOVOの概要と特徴

「小樽雪あかりの路」の運営は、ボランティアに支えられているが、ボランティア延べ人数の1/3ほどを、地域外からの参加者を主とした合宿型ボランティアが占める。中でも、2003年から継続して参加している韓国人ボランティア・グループOKOVOは、参加人数と滞在時間の多さから、小樽雪あかりの路の合宿型ボランティアの中でも核となっている。小樽市役所によれば、2013年～2016年の実績に基づく、雪あかりの路ボランティア延べ人数は10日間で2,400～2,900名程度だが、実数では630～930人ほどである。その実数のうちの40～50名をOKOVOが占める。

OKOVOの成り立ちやこれまでの活動の経緯の詳細は次章に譲るが、その特徴としては、同団体が、「小樽雪あかりの路」の主催者である同実行委員会が企画運営している団体ではなく、過去に雪あかりに参加した韓国人ボランティアたちが設立し、自主的に企画運営する任意団体であることが挙げられる。＜モビリティ＞社会の特徴の一つとして、ツアー参加前後の交流がICT技術の発達により容易になったことが挙げられる。「観光」という文脈において、それは、ツアーがツアー期間だけで完結するのではなく、ツアー以前から関係が始まり、その後も関係が継続する可能性が高くなる、すなわち、「共在」と「不在」を通じて、関係性が継続することを意味する。そのような環境下での地域とボランティア・ツーリストの関係性を観察するためには、ツアー期間中や単年度の事象を対象とするのではなく、複数年に渡る参加実績のある団体を対象とすることが適切である。その点、OKOVOは14年に渡って雪あかりに参加した実績がある。さらに、雪あかりのボランティア延べ人数の約六分の一を占めるなど、同イベントで重要な役割を果たしているが、このように地域外部の参加団体が長期に渡って地域イベントに主要な役割を持って貢献している事例はほとんどない。そこで、地域とボランティア・ツーリストの継続的な関係性やその背景を探るのに、本事例は適切だと判断した。

「小樽雪あかりの路」には、OKOVO以外にも、中国の大学生を中心とした「eVol（エボル）」、日本の大学生を中心とした「橙（だいたい）」という合宿型のボランティア団体がある（表3-1）が、実績の長さや規模、「小樽雪あかりの路」で果たす役割の重要性を鑑みて、本研究では、参加団体の中でも、特にOKOVOに焦点を当てることにした。

表3-1 合宿型ボランティア団体概要（2017年時点）

団体名 (設立年)	居住国	参加者数（人）		参加者のプロフィール*				
		2017年	内 リピーター	男性 (人)	女性 (人)	平均年齢 (歳)	最年少/ 最高齢 (歳)	学生比率
OKOVO (2003)	韓国	45	11	18	25	24.3	20/34	66.7%
eVol (2008)	中国	13	5	6	7	23.8	20/30	69.2%
橙 (2012)	日本	24	11	8	16	21.8	18/25	100.0%

出典：アンケートに基づき、筆者作成

*年齢は、会期前の事前アンケート回答者データから算出した（橙の後半からの参加者は、到着時回答）。同アンケート回答者はOKOVO41名、eVol113名、橙22名である。

**橙の参加者の内、9名は小樽在住で、6名はリピーターである。

（２）「越後妻有大地の芸術祭」と「こへび隊」の概要

１）十日町市と津南町の概要

① 越後妻有という地域

次に、もう一つの事例である「こへび隊」が活動をする越後妻有と呼ばれる地域と、「越後妻有大地の芸術祭」について概要を述べる。

初めに、越後妻有と呼ばれる地域だが、同地域には、現在の新潟県十日町市と津南町が含まれる。十日町市は、2005年に川西町、中里村、松代町、松之山町を合併した。大地の芸術祭は、この平成の大合併を見据えた県の政策の中で行われた。位置的には、東京から約200km、新潟市からは約100kmの地点にある。十日町市と津南町を合わせた面積は約760km²と、東京都23区を上回る。

越後妻有という地名は、大地の芸術祭の実施のために、参加地域の歴史的背景に配慮して作られた名前である（北川2010:24）。平安時代に遡った地名、妻有庄（つまりのしょう；十日町・川西・中里・津南）の「妻有」に、より大きな地域を含む「越後」を加えたものである。

十日町市と津南町は、全国有数の豪雪地帯であり、その自然は厳しい。十日町市の例を挙げると、毎年、平均積雪は2mを超え、1年の3分の1以上が降積雪期間となっている。この気象条件が、同地域に独特の生活文化の形成や経済活動などに大きな影響を与えてきた。

湿度は年間を通して高く、十日町市の統計によると、過去5年の年間平均湿度は83%であ

る。寒暖の差も激しく、同最高気温は35.3度、最低気温は7.9度であり、最高気温が30度以上に達する日数は年間で48日、最高気温が0度未満の日数は9日に及ぶ（十日町市 2016）。

産業面では、同地域は魚沼産こしひかりの産地として知られる。しかし、従来盛んであった着物の製造を中心とした繊維産業は、日本人の着物離れと共に衰退した。2010年国勢調査による両自治体合計の産業別就業人口割合は、第1次産業14.9%、第2次産業30.3%、第3次産業54.8%である。

② 越後妻有の課題

越後妻有においても、産業の衰退と人口の減少が大きな課題となっている。国勢調査によれば、1950年をピークに人口は減少している。2015年の国勢調査での人口と高齢化率は、十日町市が54,917人、36.0%、津南町が10,029人、39.0%で、高齢化率は全国平均の26.7%を上回る。十日町市は、従来から過疎地域に指定されていた川西地域、中里地域、松代地域および松之山地域との合併を機に初めて過疎地域に指定された。

市内総生産額は景気の影響を受け、多少の上下の振れはありながらも、十日町市は2001年度の1,996億円から2014年度は1,660億円へ、津南町は同431億円から394億円へと減少傾向にある。

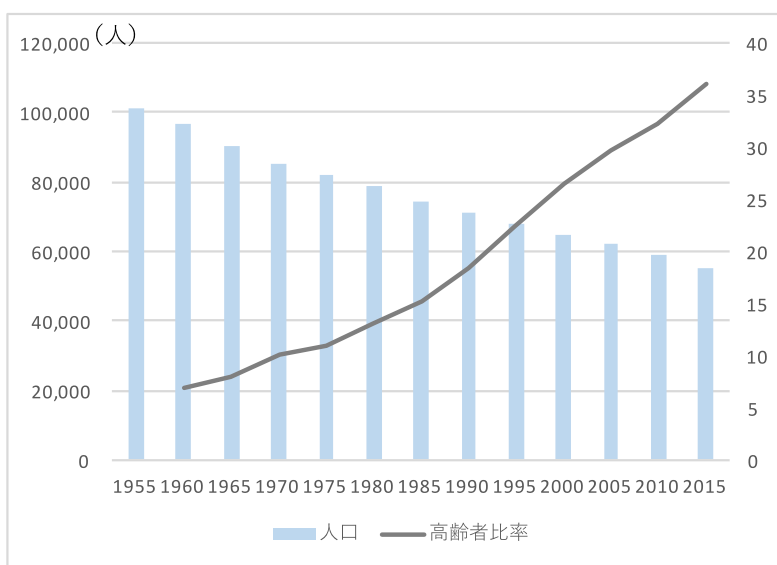


図3-4 十日町市の人口と高齢化比率の推移*

出典：総務省統計局「国勢調査」にもとづき筆者作成

*合併前の町村の人口も合計して計算した。

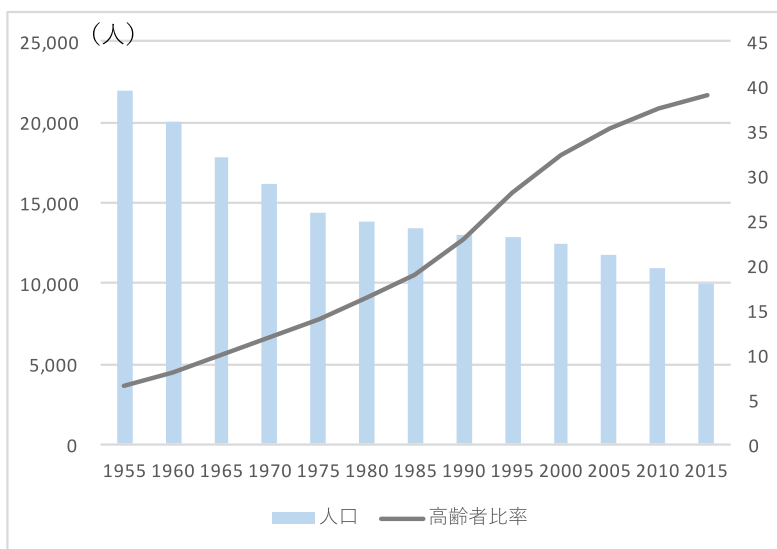


図3-5 津南町の人口と高齢化比率の推移

出典：総務省統計局「国勢調査」にもとづき筆者作成

2) 大地の芸術祭の概要

① 「ニューにいがた里創プラン」と大地の芸術祭

「大地の芸術祭」が開催されるきっかけとなったのは、新潟県の「ニューにいがた里創プラン」（1994年）であった（北川 2010:20-22）。同プランでは、県内の14広域行政圏それぞれが独自の価値を持った地域づくりを目指す施策に対し、県が支援をした。その背景には、平成の大合併による広域合併を見越し、地域の連携強化を図る意図があった。

大地の芸術祭の開催地も、同プランのもと、当時の十日町広域行政圏（十日町市・川西町・中里村・松代町・松之山町・津南町）として第1号認定を受け、1996年には、アートを活用した地域活性化施策をまとめた「越後妻有アートネックレス整備構想」を策定した（北川 2010:18-27）。当時ほとんど先例がなかったアートによる地域活性化を選択したのは、この地域の中核である十日町市の地場産業の低迷や、高齢化、過疎化などの課題に対し、従来通りのアプローチでは立ち行かなくなっていたという背景がある。同プランの名称にある「アートネックレス」という言葉は、当時6市町村に分かれていた十日町広域行政圏を「アートでつなぐ」という意味を込めて名付けられた。

同構想は主に4つの事業より構成された。それは、(i)越後妻有8万人のステキ発見事業、(ii)花の道事業、(iii)ステージ整備事業、(iv)大地の芸術祭の4事業であった。その中で「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」は、越後妻有アートネックレス整備構想の成果を3年に1回発表する場として企画された。

② 芸術祭の目的

芸術祭を実施するにあたり、そのコンセプトを作り、国内外のアーティストに声を掛けたのは、東京にあるアートギャラリー「アートフロントギャラリー」の北川フラム氏である¹⁷。同芸術祭の当初からの課題は、「過疎高齢化によって地域力が減退する中で何ができるか？」であった。それに対し、自らも新潟県の出身で、同芸術祭の総合プロデューサーに就任した北川氏は、芸術祭の基本コンセプトを「人間は自然に内包される」とし、厳しい自然と共生してきた越後妻有の自然と歴史に基づいた、地域内外の人々の協働による

17北川氏の「ニュー新潟里想プラン」関与のきっかけとなったのは、当時新潟県庁政策課に所属していた渡辺斉氏が、東京都立川市で実施されていたアートを取り入れた街づくり「ファーレ立川アートプロジェクト」を知ったことである。北川氏が同プロジェクトのプロデュースを担当した。（総務省2012:44等）

地域活性化を打ち出した（越後妻有大地の芸術祭実行委員会2001:17-19）。自然と歴史に基づいたとは、一つには、自然条件の厳しい越後妻有の地にあつて、自然に抗うのではなく、自然に同調し、親しむことで生きてきた先人の知恵を表現することである。加えて、同氏は「他者を受け入れること」を活性化案のもう一つの柱とした。それは、同地域が厳しい自然条件のために、古くから「化外の地」¹⁸であり、社会の中心にいられない人々が、追放され逃げてきた場所であることに基づいている（越後妻有里山協働機構2010:10）。すなわち、歴史的に、越後妻有はそのような外からの人びとを受け入れることによって、土地の力を活かしてきたのである。

これらのコンセプトを具体化する方策としては、現代アートが活用されたが、それは「アーティストは地域の特徴を発見し、その特徴を露わにする仕掛けとしての作品をつくる」ためである（北川・大地の芸術祭実行委員会 2012:4）。さらに、作品は他者の土地に作る必然があることから、「アーティストは、その土地の人々に許しをもらうために、土地について学び、交渉を重ね（北川・大地の芸術祭実行委員会 2012:4）」ることとなり、その過程で効率主義や排他性を超えるきっかけが生まれることを意図していた。また、それらの交渉に加え、実際の制作過程や作品管理に地域住民が加わることにより、地域内外の人々の間にさまざまな交流が生まれると同時に、住民同士の交流が増加することも狙いにあった。

③ 大地の芸術祭のステークホルダー

大地の芸術祭は、2000年に第1回が開催され、2015年夏まで6回開催された。主催は大地の芸術祭実行委員会である。実行委員会の構成団体は、平成の合併前は6市町村の各種団体であったが、合併後は十日町市と津南町で構成している。また、当初は「ニュー新潟里創プラン」として県の助成を10年間で最大5億円まで受けていた。同事業が終了した第4回（2009年）からは、同実行委員会とNPO法人越後妻有里山協働機構による共催となった。NPO法人越後妻有里山協働機構は、大地の芸術祭のサポートや住民が誇りをもって暮らしていける地域作りを目的として、2008年2月に設立された法人である。

それ以外のステークホルダーとしては、総合プロデューサーである北川フラム氏と、同氏が代表取締役会長を務める株式会社アートフロントギャラリーがある。アートフロントギャラリーは、必要に応じ、同社の社員を越後妻有里山協働機構に出向させているほか、

¹⁸三省堂『大辞林』によれば、「化外」とは、「国家の統治の及ばない所」という意味である。

同社の代官山にあるオフィスはこへび隊の集まりなどにも使用される。

加えて、作品を制作する参加アーティストがいる。参加アーティストの人数は年々増えている。第1回（2000年）は32の国や地域の148組が参加、第6回（2015年）では44国や地域から310組が参加した。参加アーティストには、世界的に有名なアーティストから公募による若手アーティストまで多様なアーティストが含まれる。

また、芸術祭の準備と運営には地域住民と各種サポート団体の支援が関わっている。地域内外の関係者により組織化され、芸術祭の運営を直接支援するサポート団体には、本研究の対象となっている「こへび隊」のほか、地元サポーターや臨時雇用職員もいる。

④ 「越後妻有大地の芸術祭」のこれまでのあゆみ

地域活性化を目的に掲げた大地の芸術祭であるが、当初はその趣旨を地域住民に理解してもらうことは困難であり、参加集落数も少なかった。しかし、その数は年を追うごとに増えている。大地の芸術祭の入込客数や会期中の作品数、こへびの人数などは表3-2の通りである。

表3-2 大地の芸術祭開催状況と＜こへび隊＞参加状況

開催年	入込客数 (人)	参加 集落数	会期中 作品数	こへび 延べ活動 人数 (会期中)	こへび 登録者 (人)	こへび 実働者 概数* (人)
2000	162,800	28	146	4,770	約800	—
2003	205,100	38	224	2,000	771	500
2006	348,997	67	329	2,500	930	480
2009	375,311	92	365	1,925	—	350
2012	488,848	102	367	2,497	1,246	427
2015	510,690	110	378	2,087	2,270	—

注) 2012年実働者概数は聞き取りによる。

出典：越後妻有大地の芸術祭実行委員会『報告書』（2001、2004、2007、2010、2013、2016）を元に筆者作成

（3）＜こへび隊＞の概要と特徴

こへび隊とは、大地の芸術祭を手伝うサポーターたちの総称であり、その一人ひとりを「こへび」と呼ぶ。（本論文では、＜こへび隊＞＜こへび＞と表記する。）

＜こへび隊＞が結成されたのは、1999年12月である。その背景としては、大地の芸術祭

についての地元の理解がなかなか進まず、準備が始まって3年が経過しても、地元からの反対の声が大きかったことがある。北川氏がメディア関係者に相談をしたところ、「主役を変えなければいけない」というアドバイスをもらい、そのアドバイスに基づき、北川氏ではなく、若者が前面に出て、芸術祭の理解を進めるための努力が始まった（北川 2010:76-77）。その若者らが＜こへび隊＞である。

詳細は第6章で触れるが、＜こへび隊＞の参加者の多くは首都圏からの大学生や20代~30代の若者である。＜こへび隊＞の活動は、大地の芸術祭実行委員会のもと、実質的には企画運営を担うNPO法人越後妻有里山協働機構(以降、NPO)のスタッフのもとに行われている。しかし、夏の芸術祭のように規模の大きなイベントが行われる時期には、N＜こへび隊＞による主体的な運営部分が多くなるように、＜こへび事務局＞が大学生を中心に3~5名で編成されることが通例となっている。

このように、＜こへび隊＞は実行委員会によって組織化された団体ではあるが、主体的な運営を期待されている点が特徴的である。また、1999年から15年以上の実績があることに加え、芸術祭期間中の複数回参加や期間延長が可能で柔軟な参加が可能で、複数年に渡る継続参加の実績もある。さらに、先述の通り、アートフロントギャラリーの東京オフィスでの関連活動もあるため、＜モビリティ＞社会における調査で重要な、越後妻有での「共在」と、それ以外の場所にいる「不在」の時の双方を調査対象とすることができる。また、活動内容が多岐にわたり、多様な役割を取る余地があるため、多面的に活動の継続性を考察できると判断した。

第4章 地域イベントにおけるボランティア・ツーリスト団体の役割の時系列変化：小樽雪あかりの路 韓国人ボランティア団（OKOVO）を事例として

4-1 調査の目的と方法

本章では、＜モビリティ＞社会におけるボランティア・ツーリストと地域の関係性について明らかにするために、「共在」と「不在」の双方を含む一定期間に、ボランティア・ツーリスト団体の役割が地域イベントでどのように変化するかを調査する。調査対象は、「小樽雪あかりの路（以下、「雪あかりの路」）」に14年に渡って参加している韓国人ボランティアグループ「Otaru Snow Light Festival Korean Volunteers（以下、OKOVO）」だ。

第3章で述べられたとおり、調査戦略はエスノグラフィーを採用する。2010年5月の小樽での予備調査と、OKOVO第9期生（2011年）および第10期生（2012年）の韓国での事前事後合宿の参与観察に加え、2011年から2017年2月に実施された雪あかりの路で参与観察を行った。また、同期間にOKOVO幹部、OB、参加者、小樽市役所担当者等関係者への半構造化インタビューを行った。

また、雪あかりの路には、OKOVO以外にも中国と日本の大学生を中心とした合宿型ボランティア団体であるeVolと＜橙＞がある。これらの団体との比較が、OKOVOの理解を深めると考えられるため、比較対象として調査に加える。

4-2 小樽雪あかりの路におけるボランティアの種類と仕事

(1) 会場の特徴と変遷

初めに、雪あかりの路におけるボランティアの種類と仕事について整理する。まず、仕事の全体像を理解するために、会場の特徴と変遷について整理する。

雪あかりの路の会場は、小樽駅から徒歩で移動可能なメイン会場、小樽駅からバス利用が必要な朝里川温泉会場と、町内会や商店街、学校などの単位で実施し、市内に点在する「あかりの路会場」の3種類に分類される。観光客が主に訪れ、OKOVOや他の一般ボランティアが活動を行うのはメイン会場である。同会場は、主要観光スポットである小樽運河沿いの通路を活用した「運河会場」と、旧国鉄手宮線跡地である「手宮線会場」で構成される(図4-1)。運河会場の内、「運河B」は雪あかりの路第2~12回で使用されたが、それ以降は、経費削減やボランティアやスタッフの適正配置のため、休止となっている。



図4-1 小樽雪あかりの路メイン会場の全体図

出典：「小樽観光基本マップ」(小樽市 2017c)に加筆して筆者作成

（２）展示の分類

次に、雪あかりの路の展示種類について整理する。雪あかりの路の展示は、(i)機械を使って委託事業者が制作するトンネルや滑り台などの大型展示物、(ii)スノーキャンドルや過去のオブジェデザインを活用した定型作品、(iii)テーマを持った「オブジェ」の3種類に大きく分けられる。「オブジェ」は、デザインや製作、維持管理について担当ボランティア団体が責任を持つため、事前に登録された団体が担当する。雪あかりの路では、2時間以上の作業に従事することを条件に、当日でも一般ボランティアを受け付けているが、「オブジェ」制作団体に所属しない一般ボランティアは、ボランティア部会の指示に基づき、(ii)や(iii)の作業の補助を主に担当する。

（３）ボランティアの役割と変遷

１）ボランティアの分類

「雪あかりの道」の事務局は市役所が担当しているが、それ以外のスタッフは、実行委員会メンバーも含め、全てボランティアである。当初は、小樽の市民団体や市内外から通う個人からなる「一般ボランティア」のみであったが、OKOVOの登場により「合宿型ボランティア」が2003年に始まった。これは、雪あかりの路でのボランティア活動を目的として、会期中に小樽市内で合宿生活を行うボランティアを指す。この「合宿型ボランティア」は、本研究の定義する「ボランティア・ツーリスト」に該当する。

また、2013年より、実行委員会が高校単位でのボランティア参加の呼び掛けを本格化した。その結果、同年より「高校生ボランティア」が新区分として加わった。

２）ボランティア数の推移

「雪あかりの道」メイン会場のボランティア延べ人数の推移は、以下のとおりである（図4-2）。2000年代を通して徐々に増加したが、2010年をピークに、2011年と2012年は減少した。これは、「運河B」会場休止と東日本大震災の影響によると実行委員会は考えている。その後、2013年からは高校生への積極的な勧誘や合宿型日本人ボランティアの導入などに取り組み、2013年は2010年を凌ぐ水準まで回復した。しかし、その後は毎年減少が続いている。これは、会期前の報道の状況と高齢化の影響だと実行委員会では考えている。このような状況のもとで、合宿型ボランティアや学校単位の参加など、組織的なボランテ

ィアの重要性が一層高まっている。

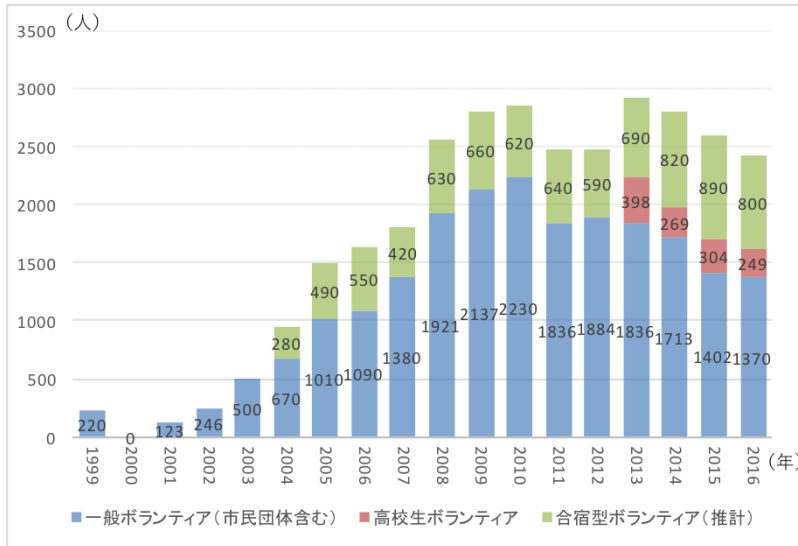


図４－２ メーン会場ボランティア延べ人数推移

出典：『小樽雪あかりの路実行委員会事業報告書』第１回～第18回をもとに筆者作成

（注）2000年は、延べ人数が不明であるが、実数は41名である。合宿参加延べ人数は、合宿参加者実数x10日間年で推計している。高校ボランティアは2013年以降に新たに作られた分類である。

３）主なボランティア団体

１）で述べたとおり、ボランティアは「一般ボランティア」「高校生ボランティア」「合宿型ボランティア」に分類される。その中で、2017年2月時点で「オブジェ」制作を担当する「一般ボランティア」団体としては、「杜のつどい」、「おたる緑のまちづくりの会」、「小樽おもてなしボランティアの会」「小樽青年会議所」「北海道建築士会小樽支部」「小樽潮まつり実行委員会」などがある。それ以外に、市内企業や任意団体が幅2メートル程度の小規模な自由テーマのオブジェを作成している。

合宿型団体としては、先述のとおり、韓国の大学生を中心とした「OKOVO（オコボ）」、中国の大学生を中心とした「eVol（エボル）」、日本の大学生を中心とした「橙（だいたい）」がある。これら3団体は、ボランティア活動を滞在の目的としているため、2時間程度の休憩を挟みながら、午後1時から午後9時半まで現場で活動する。一方、実行委員会によると、日常業務と兼務している地元ボランティアや、高齢のボランティアの1日当たりの活動時間は、2～5時間程度であることが多い。その結果、合宿型ボランティアの実働時間での貢献

は、人数の割合が示唆するよりも、さらに大きいと推定される。

（４）OKOVOの成り立ちと活動内容

１）OKOVOの成り立ち

OKOVOとは、2003年より「雪あかりの道」に参加している韓国人ボランティア団のことである。その設立のきっかけは、「雪あかりの道」実行委員会の米花正弘氏が、小樽商大を卒業後に米花氏が経営する会社で働いていた韓国人社員Yさんに声を掛け、Yさんが韓国に住む友人を雪あかりの路に誘ったことであった。2003年にYさんの友人を中心に全部で9名¹⁹が参加した。OKOVOの設立以来の経緯は、次節で詳細に述べるが、翌年にも日本在住だったYさんがインターネットを通じて募集をしたところ、29名が参加し、それ以降は毎年40名から50名ほどのボランティアが参加するようになった。当初は韓国人ボランティア団と呼ばれていたが、2008年にはOtaru Snow Light Festival Korean Volunteersと団体名を定め、その略称をOKOVOとした。

２）組織

OKOVOの構成メンバーは、現役とOBOGに大きく分かれる。現役は当該年度の「雪あかりの道」の活動に参加するメンバーで、毎年40名ほどが審査を経て選ばれる。メンバーの一部は、日本語通訳やビデオ撮影や写真担当として、特殊技術を持った者が採用される。ビデオや写真担当を早い段階から取り入れたのは、活動の記録や広報のためでもあるが、「雪あかりの道」の会場で活動をする際に、OKOVOメンバーが自分のための写真を撮影する必要がないような環境を作るためでもある。つまり、ボランティア活動に従事している間は、自分のことではなく、活動に集中するようにということである。

OBOGは、以前にOKOVOに参加したメンバーである。自分が現役として参加した期が終わると、新たにOBOGとなったメンバーから翌期の準備を担当する「運営チーム」が結成される。役職は年度により変わることもあるが、主たる役職は以下のとおりである（表 4

19 Y氏への聞き取りによると、4人が全参加、5人が部分参加で合計9名の参加ということだったが、実行委員会の記録では8名、北海道新聞2003年2月6日の記事によると、13人参加（3人が部分参加）となっている。Y氏が語っているとおり、雪あかりの路でのボランティアではなく、日本観光が主目的な参加者が多く、参加の度合いもさまざまであったため、参加者の定義も団体や個人により曖昧な状態であったと推測される。

－ 1) 。

表 4－1 OKOVO運営チームの代表的な構成

タイトル	主な責務
団長	全体統括
副団長	団長のサポート
企画チーム	国内での各種活動の企画
広報チーム	団体の広報活動
総務チーム	団体の財務や総務関連の運営
ウェブチーム	ウェブ・コンテンツの作成や管理
採用チーム	新規参加者の採用

出典：聞き取り調査をもとに筆者作成

「雪あかりの道」直後に開催される事後合宿（冬の総会）で、運営チームは選ばれる。団長と副団長は、立候補者や推薦を受けた者が簡単なスピーチを行い、その内容を踏まえた上で参加者全員による選挙で選ぶ。各チーム長はチームメンバーの話し合いで選ばれる。直前期に参加したメンバーは、全員いずれかのチームに所属することになっている（図 4－3）。



図 4－3 冬の総会の様子（1）

団長候補者が、選挙の前に短いスピーチをする。
出典：2012年2月筆者撮影



図 4－3 冬の総会の様子（2）

それぞれのチームに分かれて話し合いをする。
出典：2012年2月筆者撮影

この運営チームの責務は、翌年までの韓国における活動を運営することである。小樽における運営については、別途、現地団長以下、現地運営チームが結成される。これは、仕事や学業、参加費負担の関係で、韓国での運営チームのメンバーが、必ずしも翌期の雪あかりの路に参加できる訳ではないためである。現地運営チームの基本的な構成は以下のとおりである（表４－２）。各班長と副班長は直前合宿でチームごとに決める。また、写真・ビデオ担当、日本語担当は、先述のとおり、募集時に特別枠で募集する。

表４－２ OKOVO現地運営チームの代表的な構成

タイトル	担当	主な責務
現地団長	OBOG	全体統括
現地副団長	OBOG が基本	団長のサポート
各班長、副班長	現役	班の運営
写真・ビデオ担当	現役	写真・ビデオの撮影および募集
日本語担当	現役	日本語通訳

出典：聞き取り調査を元に筆者作成

３）年間の活動

OKOVOの活動は、冬の総会で運営メンバーが決まると、その後は、運営チームが小樽の事務局と連絡を取り合いながら、翌年度の参加者数を決定し、毎年7月頃には翌年の新規参加者の選考が行われる（表４－３）。運営メンバーの選出や年間の活動を含め、OKOVOの活動は雪あかりの路実行委員会の関与はない²⁰。

2008年頃から毎年約40名の新規参加者を募集するが、例年募集数を上回る応募がある。参加者の選考にあたっては、運営チーム以外のOBOGも加わり、応募者に課したエッセイをひとつひとつ審査する。また、運営チームメンバー（「幹部」と呼ばれる）とOBOG有志が集まり、夏の総会が開かれ、上半期の活動の反省と下半期の活動計画が議論される。

新規参加者の選考が終わった8月には、新規参加者向けのオリエンテーションを開催する。秋には親交を深めるために運動会やBBQなどの行事を実施しつつ、小樽の事務局との連絡

²⁰ 小樽における活動の準備のためのコーディネーションは行うが、小樽雪あかりの路実行委員会が韓国でのOKOVOの活動に指示を出すことはない。

を続け、航空券の手配をする。選考された参加者はインターン・プログラムなどOKOVO以外の活動に申し込んでいる場合もあるので、選抜後にキャンセルが出た場合はその補充をする。そして、1月には1泊2日の直前合宿をし、グループや班長等を決めると共に、雪あかりの路の目的や背景についての解説や、小樽での生活上の注意事項を伝えると共に、オブジェのデザインなどの準備を進める。この直前合宿への参加は、OKOVOに参加するための必須条件となっている（図4-4）。

これらの年間行事には、運営チーム以外のOBOGも積極的に参加している。また、韓国での準備を進める運営チームとは別に、雪あかりの路に団長、副団長、班長として同行するOBもいるが、彼らも他の参加者と同様に自費で参加する。小樽でのOKOVOの活動の全日程に参加できないOBOGが小樽を訪れ、一部期間だけOKOVOのメンバーと一緒にボランティア活動に参加する場合もある。OBOGの熱心な活動については、「OBがこれだけ熱心に活動をするグループは見たことがない。」「OBの人たちがOKOVOを大切にしているのが印象的だった。」とのコメントが、2012年新規参加者の直前合宿時にも聞かれた。

表4-3 OKOVOの年間活動*

時期	活動内容
6月末	団員募集開始
7月中頃	応募締切、審査開始
7月中頃	夏の総会（上半期の振り返りと下半期の計画）
8月	審査結果の発表
8月末	新入団員向けオリエンテーション
秋	運動会等
1月第2週週末	直前合宿（Membership Training, MT）
2月	小樽雪灯かりの路参加
2月末	冬の総会（反省会と翌年度役員選出）
春	ピクニック等

出典：OKOVO幹部へのヒアリングをもとに筆者作成

*ここに示された活動内容およびスケジュールは代表的な例であり、その年の事情により、実施時期や内容が多少変更になることもある。特に、秋や春の交流イベントにはその年の運営チームの意向が反映される。



図 4－4 直前合宿の様子（1）

小樽での活動や生活についての注意をする。

出典：2012年2月筆者撮影。



図 4－4 直前合宿の様子（2）

各グループでオブジェのデザインを決め、発表をし、OBOGからアドバイスをもらう。

出典：2012年1月筆者撮影



図 4－4 直前合宿の様子（3）

交流会を開き、親睦を深める。

出典：2012年1月筆者撮影



図 4－4 直前合宿の様子（4）

最後は全員で記念写真を撮る。右側は新規メンバーが記念撮影をしているところ。

左側は、自分たちの撮影の順番を待つOBOG。

出典：2012年1月筆者撮影

4) 小樽での活動

OKOVOの小樽における活動は以下のとおりである。到着の翌日から、帰国の3日前までは、雪あかりの路の作業が中心の生活となる。その年により内容や頻度は異なるが、雪あかりの路の会期中に、地元有志の厚意により、お寿司やお蕎麦など日本食を楽しむ機会や、国際交流の一環として学校訪問などをすることもある。

表 4－4 小樽でのOKOVOの日程表 2017年の場合

1月29日（日）韓国を出発し、札幌経由で小樽に移動。 作業で着用するスキーウェア配布および日用品の買い出し。
1月30日（月）オリエンテーション。グループツアー。
1月31日（火）オブジェ作りなどの作業開始。
2月 1日（水）オブジェ作り。夜は歓迎会。
2月 2日（木）オブジェ作り。
2月 3日（金）オブジェ作り終了。雪あかりの路開始。
2月12日（日）雪あかりの路終了。
2月13日（月）片付け。打ち上げパーティー。
2月14日（火）～15日（水）自由行動
2月16日（木）帰国

出典：OKOVO 2017年1月直前合宿資料を元に筆者作成

また、会期中の日程は表 4－5 のとおりである。午後1時過ぎにボランティア本部に集合し、作業の内容を確認したのちに、それぞれの持ち場に出向いて作業をする。OKOVO内部の仕事については、OKOVOの現地運営チームが分担を考え指示を出すため、ボランティア本部のメンバーは、各メンバーの名前を覚える必要はないが、ボランティア本部には名前と写真入りの名簿が用意しており、日本側スタッフもOKOVOや他の合宿型参加メンバーの名前を覚える努力をしている。一日の仕事が終わった後には、またボランティア本部に戻り、そこから宿舎までバスで移動する。その際も、必ず毎日ボランティア本部のメンバーや、居合わせた日本人ボランティアは、OKOVOらのバスを見送る（図 4－5）。

宿舎に戻った後は、非公式の交流機会として、雪あかりの路事務局メンバーや地元のボランティアが何人か宿舎を訪ねることがある。また、eVolや橙などの団体との交流も持た

れることがあるため、就寝時間は深夜を過ぎるのが通常である。そうした背景もあり、午前中は休息時間となっている。

表 4－5 小樽雪あかりの路会期中のOKOVOの1日の予定

午前	宿舎にて休息、または自由時間。各自で本部まで移動。
13:20 - 13:30	雪あかりの路ボランティア本部に集合。諸連絡。
13:30 - 14:00	ローテーション表に従って移動をしたのち、担当エリアにて作業分担。
14:00 - 16:00	オブジェ修復作業
16:00 - 17:00	点灯
17:00 - 20:50	ロウソクのメンテナンス、観光客への対応など (この間に、エリアリーダーの指示に従い、夕食時間をとる)
20:50 - 21:00	ロウソク消灯
21:00 - 21:30	作業道具の片付け後、本部に集合。
21:30 - 22:10	本部から宿舎への移動（貸切バス）
22:10 -	グループ・ミーティング後休憩

出典：OKOVO 2017年1月直前合宿資料を元に筆者作成



図 4－5 OKOVOのバスを見送る事務局メンバー

出典：2017年2月筆者撮影

5) 小樽での宿舎と宿舎での交流

OKOVOの小樽滞在の特徴の一つは、メンバーでの合宿生活である。合宿は、小樽市中心部からバスで30分くらいの朝里川地区にある貸別荘ウインケルである。10班に分かれて、2班ごとに分かれて独立した棟に宿泊する。eVolや橙もウインケルに滞在し、同様の合宿生活を送る。

OKOVOらが利用するウインケルの建物は、ログハウス風で、一棟の面積は約80㎡から110㎡である。1階にはリビングと台所があり、2階を寝室として使っている場合が多い。そこで10名ほどが2週間以上に渡って寝食を共にする。お風呂やお手洗いは各棟に1箇所ずつしかないため、入浴は、近隣のホテルの温泉を使用することもある。

日中のボランティア活動に加え、このウインケルでのOKOVOのメンバー同士、他の団体や小樽メンバーとの非公式の交流がOKOVOの滞在の大きな特徴の一つである。台所があるため、朝ごはんは自分たちで自炊をする。また、夜は互いの宿舎を訪問しあって、「飲み会」をすることも多い。歓談をしたり、簡単なゲームをしたり、訪問してくれたゲスト向けに、簡単な料理を作って振舞うことも多い。その様子について、橙のメンバーは次のように語っている。

飲み会では、たわいのない話をする。飲み会の内容は・・・韓国チームが日本人チームのゲストハウスに遊びにきたり、中国人チームが遊びにきたりで、それぞれの国の料理を作り合う。韓国チームが辛すぎるものを作って笑わせてくれたり。eVolの人が本場の餃子の作り方-包み方をおしえてくれて、焼いてくれたり。大量の餃子で、すごいおいしかったです²¹。

21回答者Wは、小樽以外からの「橙」参加者。2017年2月に聞き取りを行った。



図4－6 ウィンケルの宿舎

出典：ウィンケル 2017

しかし、このようなインフォーマルな相互交流も初めからあった訳ではない。実行委員会としての戦略的な取り組みについては、次項で触れるが、それ以前にもウィンケルのスタッフなどによる自主的な関わりがあった。ウィンケルの元スタッフは、当時のことを次のように語っている。

初めの1期、5人²²から付き合いが始まった。（中略）初めはあまりOKOVOへの訪問者はいなかった。役所の一人が来たり。お酒を飲む機会もほとんどなかった。宿舎で仲間で飲んでいる状況だった。（中略）日本側からのアプローチ、小樽の実行委員からのアプローチを色々していくうちに、OKOVOのメンバーも人が訪れてくることを知っていった。今は色々な人が遊びに来てくれるのが当たり前と思っていると思う²³。

このように、交流は段階的に活発になっていった。

22先述のとおり、第1期参加者の人数についての認識はさまざまである。

23 ウィンケル元スタッフに2011年2月に聞き取りを行った。

4-3 OKOVOを例にしたボランティア・ツーリストの役割の変遷

前項では、OKOVOの成り立ちや現在の活動の概要について説明してきた。本項では、さらにOKOVOの雪あかりの路における役割の変遷をたどり、ボランティア・ツーリストが地域の活動で果たす役割を整理する（表4-6）。

（1）観光的要素の強い参加（2003年）

第3章で述べたとおり、OKOVOの始まりは、小樽商科大学を卒業後、小樽市内の企業に勤めていた韓国人Yさんに、実行委員会の一人が声を掛け、Yさんが韓国在住の友人を中心に勧誘したことがきっかけであった。Yさんによると、9名が参加し、参加者の約半数は小樽以外の日本観光を主な目的としたため、雪あかりの路には部分的に参加した。また、作業内容は一般ボランティア同様の補助的作業だったということである。先述のとおり、雪あかりの道への参加度合も参加者によりさまざまであったため、「韓国人ボランティア団」参加者としての定義も団体や個人により曖昧な状態であったと推測される緩やかな参加形態であった。以上のように、この段階では、人数面でも作業面でも貢献が限定的で、ボランティア活動よりも参加者個人の観光が優先されていた。

（2）人数での貢献と自発的活動の始まり（2004～2005年）

翌年2004年には、実行委員会のリクエストに応じて、Yさんが既に持っていた自分のウェブサイトに加えて、韓国人ボランティアの募集を行い、28名が参加した。この規模は、当時の雪あかりの路ボランティア延べ人数合計の約1/3に相当した。自分たちでデザインしたオブジェの製作も始まった。続く2005年には40名が参加し、人数的にはさらに大きな貢献をするようになった。その背景には、2004年の参加者らが小樽での活動に感銘を受け、この活動を広げるためにホームページを作り、韓国内での参加者募集の役務をYさんより引き継いだことがある。

その当時のことについて、第2期参加者であり第3期団長であるHさんは、次のように語っている。「日本からのEメール1本で募集されたツアーに対し、韓国人参加者は不安を持っていたために、日本に行く前にソウルで自分たちだけでミーティングを開催した。そこで、自分たち自身を信じることにし、雪のオブジェのデザインを事前に考えて日本に向かった。」

ところが、実際に小樽に着てみると、「小樽雪あかりの路」は市から補助金が出る正式

で大規模な行事であった。また、当時は「国際交流としての意図が強く、中学訪問や蕎麦のふるまい、クロスカントリースキー体験」などのプログラムもあった（Yさん）。その滞在を通じて「日本と韓国は関係がよくなかったのに、みんな親切で支えてくれるし、情が深い」（Hさん）ということを感じ、「小樽を好きになって、みんなに知ってほしいと思った」（Hさん）。そこで、有志で集まり、この活動の組織化やHP作成を始めることとなった。これは、情報の限界から参加に不安を感じた体験から、信用を得るために必要だと判断して進めたことである。また、「大切な役割は、行く人を選ぶこと」であり、「韓国人として恥ずかしくない人」を選びたいというOKOVOの参加者を選考する基本方針もこの時期にすでに定まった（Hさん）。

また、韓国の有名なスキー場ドラゴンバレーでの「雪あかりの路in韓国」の実施を、小樽の実行委員会の一部メンバーが支援するなど²⁴、両者の関係性は急速に深まった。しかし、雪あかりの路の現場での仕事内容については、「重要なポジションを担当させていたわけではなかった（当時の市役所担当者）」。「ほかにも（姉妹都市などから）海外ボランティアが来ていたので、海外ボランティア団のひとつ（同）」という扱いであった。

このように、この段階では、人数での貢献は拡大してきているものの、仕事の重要性はまだ低いことが伺える。しかし、現場以外で自分たちにできることを自発的に始めたことが前段階との違いである。

（３）内部体制構築（2006～2007年）

OKOVO2006年参加OBによると、韓国でのホームページ開設と募集開始により、40名を超える参加人数が標準となったため、それまで実行委員会から現場で直接作業の指示を受けていたのを、2006年には韓国ボランティア団内部で作業分担や指示ができる体制を確立し、30mの距離がある手宮会場を担当するようになった。

また、定員を大きく上回る応募があったため²⁵、韓国内での参加者の選考、訓練、フォローの一連の流れもこの頃に確立された。聞き取り内容を元にまとめた、具体的な流れは以下のとおりである。

選考はOBOG有志で結成された選考委員会で行われる。名前や大学名などを匿名とした

24雪の質や量の問題で、韓国でのイベントは継続されなかった。

25 40人の参加者枠に対し、ホームページを作成した最初の公募時（2005年2月実施の雪あかりの路対象）には130人の応募が、翌年には260人、翌々年には756人の応募があった。

書類審査を初夏に通過した応募者に対し、電話または対面での面接を実施し、最終決定する。審査の際には、OKOVOの活動に対する情熱の有無が重視される。また、韓国では人口の約2割が首都のソウル市で暮らしているが、韓国を代表する団体として、韓国全土から参加者を集めるように配慮もしている。参加者の選考が終了すると、夏休み期間中にオリエンテーションを、日本に行く数週間前に直前合宿を実施する。特に後者への参加は必須となっており、雪あかりの路の趣旨説明や小樽での生活についての注意、オブジェのデザインなどが行われる。また、帰国後には、事後合宿が行われ、そこで新年度の運営チームを選出する。これらのプロセスには、OBが参加し、運営チームを支援する仕組みとなっている。

このように、この段階のOKOVOでは組織化が一段と進んだ。自分たちで団体としての方針や運営の仕組みなどを創り上げ、内部体制が整えられたことが伺える。

（４）主要団体として区画を担当（2008～2012年）

2008年は220mにわたる運河B会場を、特殊技術が必要なところは地元業者の支援を受けながらではあるが、単独で担当するようになった。2008年に参加したOBによると、それを受けて、これまで「韓国人ボランティア団」と称していた自団体を「OKOVO」と命名し、担当会場は「OKOVOストリート」と命名されることになった。また、この頃に、OKOVOのロゴが入ったオリジナルヨットパーカーの作成も始めた。ヨットパーカーの色とデザインは毎年変わるため、見ただけで何期の参加者かがわかるようになっている。



図４－７ OKOVOのヨットパーカー（OKOVO第10期）

出典：2017年8月筆者撮影

OKOVOが同会場を担当することになった背景だが、当時の市役所担当者によると、高齢化や地元団体の経済状況悪化によるボランティア数の減少などの課題に加え、経費削減の必要性が高まり、業者への業務委託範囲を減少する必要性が生じたことがある。また、韓国人ボランティアの内部体制が整い、仕事の質が向上した結果、彼らに対する信頼が生れてきたこともあった。同担当者は、「日本側でもOKOVOというのは、きちっとやる団体だと思い始めた。ちゃんと言ったら、任せて（おける団体だと思った）」と振り返っている。中でも、OKOVOの自発的な活動の成果である効率的な組織運営と、提案能力の高さを評価したとのことである。

さらに、同担当者は、「雪あかりの路が大きなイベントになればなるほど、作品の質や点火時間の厳守など『きっちりとした』運営が必要になり、そのためには、より多くのボランティアが必要となり、その意味でも韓国人ボランティアの重要性が高まった」と、振り返っている。そのため、韓国人ボランティアの継続を促進するための工夫として、作業後の宿舎へ訪問し、「日本の若者と交流する」非公式な機会を作ることを心掛けた。具体的には、仕事が終わった後に、実行委員会のメンバーや地元の日本人ボランティアがOKOVOの宿舎を訪ね、時間を区切って交流するようになった。宿舎では、OKOVOが簡単な韓国料理を用意するほか、日本人が韓国語を習ったり、韓国の若者の間で流行っているゲームを行ったりして遊ぶ。

また、新聞やテレビなどのメディアにも韓国人ボランティアを積極的に紹介し、彼らの仕事が公に認められるように努めたと述べている。また、事務局メンバーの一部が韓国に私用で遊びに行くなど、会期外での相互交流も深まったとのことであった。

OKOVOが雪あかりの路に占める重要性については、さまざまな公式の挨拶の席で述べられている。その内容は、廣谷昭（ひろや あきら）小樽雪あかりの路検討委員長が、2012年1月30日のオリエンテーションで述べた下記の挨拶に典型的に現れている。

OKOVO（オコボ）のみなさん、今年も雪あかりの路への参加をありがとうございます。OKOVOの参加も今年で10回目です。雪あかりの路は、皆さんなしではできない祭りになりました。

ボランティア全体に関することとしては、2008年に初めてオブジェ製作団体の公募が行われたほか、パンフレットにオブジェ製作団体名と展示場所が明記されるようになった。

その中では、OKOVOも他の主要団体とともに明記されている。以上のことから、この時期は、OKOVOが名実共に、雪あかりの路の主要活動団体の一つとなったと考えられる。

表４－６ 合宿型外国人ボランティアのメイン会場での役割の変化および実行委員会との交流

年	2003年	2004年～2005年	2006年～2007年	2008～2010年	2011～2012年	2013～2016年
雪あかりの路(回)	5	6～7	8～9	10～12	13～14	15～18
OKOVO(期)	1	2～3	4～5	6～8	9～10	11～14
OKOVO (2003 年設立)	・参加者9名。4人が全会期参加、残りの5名は部分参加 ・他の団体のオブジェ作りや維持管理の手伝い、点灯消灯など指示された活動に従事	・2004年は28名が参加。帰国後、ホームページを立ち上げ、2005年は40名参加 ・3組に分かれて、指示された補助作業を分担 ・オブジェを2期は2基、3期は4基製作	・42～43名が参加。 ・OKOVO内で作業分担や指示ができる体制を確立 ・手宮会場30mを担当	・52～57名が参加 ・「OKOVOストーリー」として、運河Bエリア(220mx約5～8m)を担当 ・2008年からは、作品の質を上げるため、会期4日前には小樽に到着	・47～52名参加 ・「OKOVOストーリー」として、手宮Aエリア(184mx約15m)でオブジェ5基製作	・49～59名参加 ・「OKOVOストーリー」として、手宮Bエリア(293mx約15mの一部)でオブジェ5基製作
eVol (2008 年設立)				・2008年6名が初参加。2009年14名、2010年10名参加。 ・杜のつどいと手宮の一部を担当	・両年とも12名参加 ・2012年に「eVol」と命名。地元国際交流団体と手宮Bエリアでオブジェ1基製作	・13～15名参加 ・「eVol」として、手宮Bエリアでオブジェ1基製作 (2013年は、日本人合宿生の手伝いあり)
橙 (2013 年設立)					・2012年に2名で開始。 ・他団体の補助作業	・2013年は2名、2014年以降は13～17名参加 ・2014年に「橙」と命名 ・2013年はeVolの補助、2014年以降は「橙」として手宮Bエリアにオブジェ1基製作
合宿型ボランティア団体と実行委員会を中心とした地元ボランティアとの交流	・小樽市の国際交流の一環としての公式の交流	・2004年12月に実行委員会有志が韓国のドラゴンバレーを訪問し、韓国メンバーとともに、「雪あかりの路in韓国」を実施	・2006年2月に実行委員会有志が韓国メンバーとともに、韓国の龍平リゾートで「雪あかりの路in韓国」を実施	・実行委員会や事務局有志が作業後にOKOVO宿舎を訪ね、非公式な交流が開始 ・実行委員会や事務局有志が、会期外にOKOVOメンバーを韓国に訪問する非公式な交流が開始	・2011年に雪あかりの路地元ボランティアが、夏の行事「潮まつり」に参加し始め、翌年にはOKOVO有志も合流	・2016年に実行委員会及び小樽地元ボランティア有志、橙メンバーがOKOVOの韓国内での行事に初めて参加

出典：小樽雪あかりの路事業報告書、公式パンフレット、聞き取り調査をもとに筆者作成

（５）合宿型ボランティアの拡大（2013年～2016年）

2013年以降は、日中韓の大学生を中心とした合宿型ボランティア団体が確立した。OKOVO以外の海外団体としては、OKOVOを立ち上げたYさんが中国留学時の2008年に立ち上げた中国人ボランティア団（現「eVol」）がある。当時Yさんが留学していた深圳大学をベースに活動しており、同大学の学生が多い。

また、2018年に韓国で開催予定の冬季オリンピックが韓国人学生ボランティアのリクルートに与える影響を鑑み、雪あかりの路事務局の主導で日本人大学生ボランティアの募集が2013年に始まり、初年度は2名の大学生が参加した。さらに、2013年に小樽市議会議員のインターンとして合宿型ボランティアを訪問した小樽在住の大学生ら3名が主導して、翌年には日本人学生ボランティアの自主運営組織「橙」を設立した。「橙」設立の理由について、代表のMさん（当時大学生、現在は大学院修士課程）は、2017年2月の聞き取りで、次のように述べている。

いろいろありますが、一つは人との交流。地元にながら中国・韓国、ふだんは関わらない地元の人たちと。それと地元が小樽なので、地元に貢献したいなという気持ちがありました。

3団体の中で活動年数が一番長く、組織化も進んでいるOKOVOは、中国や日本のボランティア団体のモデルとなっていると考えられる。例えば、OKOVOはリピーター（OB）の参加を全体の2割以下に絞っているが「OB」という呼び名や、新規参加者とリピーターの割合に対する配慮は、他団体でも引き継がれている。また、事務局では、OKOVO現地団長を実行委員会ボランティア部会の主要メンバーと考えており、他ボランティア団体への活動説明や地元高校でのボランティア活動紹介などにも加わってもらっている。

こうして日中韓の合宿型ボランティア団体が揃ったことで、当初は冬季の観光振興とコミュニティ再生を主たる目的として始まった雪あかりの路だが、テーマとして「国際交流」の重要性が高まったと事務局は考えている。そのため、これら3団体間の交流促進を狙い、3団体の展示を同じエリアに集約した。

4-4 考察：ボランティア・ツーリストが地域イベントで果たす役割

(1) ボランティア・ツーリストの役割とその変化

本章では、雪あかりの路に参加するボランティア全体の傾向や構成を整理したのち、10年以上の実績があり、最大の合宿型ボランティア団体であるOKOVOが雪あかりの路で果たす役割について、時系列に沿って整理した。当初は、一般ボランティアと同様に補助的業務を担当していたOKOVOが、自分たちで活動内容を改善しようとする自主的な実践を行った結果、小樽側からの信頼を得、団体名を記した展示、担当面積の拡大、会期中の実行委員会会議への参加など、より重要な役割を担うようになった。その仕事の重要性の水準は、地元の主要ボランティア団体と同等である。医療等の専門性が高い分野でのボランティア・ツアーでは、ボランティア・ツーリストが活動における重要な役割を担うと考えられるが、地域が主催する祭りやイベントでは、補助的な役割を担うことがほとんどである(小泉ほか 2008、今瀬 2015)。本事例においても、他事例同様に、当初は補助的な仕事から始まった。しかし、本事例では、幾つかの「段階(ステージ)」を経て、重要な仕事を任されるようになった。このように協働の参加が段階的に変化することは、地域内の協働でも見られることである(Arnstein 1969)。

また、補助的な仕事から重要性の高い仕事への変化は、単純作業から、より創造的な仕事への変化を伴った。ここでの創造性とは、オブジェのデザインや製作に限らず、Hackman and Oldham (1980:71-98) が「職務特性モデル」で言及している職務特性の次元の一つである「自律性(autonomy)」、すなわち、「自分のやっている仕事の中で、自分なりに工夫して仕事のやり方を決められる度合い」に近い。同様の概念として、川喜田 (2010:74) は「自発性に支えられた問題解決」を創造性と呼んでいる。そこで、本研究では、Hackman and Oldhamによる「自律性」や川喜田の「自発性に支えられた問題解決」や、創作作業を含めた概念として、「創造性」という表現を用いる。そこで、以下では、ツーリスト団体の役割の変化を、仕事の「重要性」と「創造性」を軸に整理した(表4-7)。

表４－７ 仕事の「創造性」と「重要性」によるボランティア・ツーリスト団体の役割の時
系列変化と受け入れ地域の動機・状況

段階 ²⁶	役割の特徴		仕事の特徴や位置付け	ボランティア・ツーリスト団体		受け入れ地域・団体	
	創造性	重要性		使命・目的	団体の状況	受け入れ動機	受け入れ側の状況
ステージ１ (2003年～ 2004年)	低い	低い	・指示された仕事をそのまま行う、単純作業 ・代替可能 ・重要性の低い作業	・地域やイベントへの関心など観光目的が主 ・地域の人びと他の参加者との交流	・団体ではあるが、ツアー参加者の集まりであって、組織化はされていない	・活動を楽しんでもらうことや交流が主 ・仕事の成果は従	・公式な交流を中心に、観光者として受け入れる
ステージ２ (2005年～ 2007年)	自組織内で高まる	量的重要性	・与えられた仕事をより良く実行するための、自発的な創意工夫 ・工夫による仕事の質の向上と、代替可能性の低下 ・組織化による人数の確保	・地域の人びとやイベントへの感謝に基づいて生まれた、「活動に貢献したい、活動をもっと多くの人に知ってほしい」という使命感 ・地域の人びとや他の参加者との交流	・情報発信力や外部からの信頼を得るために、組織化を進める。 ・自分たちの権限で創意工夫ができる範囲（自組織内）で、創造的活動が始まる	・活動を楽しんでもらうことや交流など、仕事の成果以外の期待が引き続き大きい ・ボランティア・ツーリストの人数面で貢献に期待	・ボランティア・ツーリストの量的貢献に助けられ、地域だけでは実現できない仕事で達成できる ・ボランティア・ツーリストの創意工夫に開かれた姿勢
ステージ３（2008年以降）	イベント全体で高まる	量的にも質的にも高い	・中核メンバーとして地域の主要団体と同等の重要な責務を負担 ・自組織内に加え、イベントの核となる部分での創造的活動への従事	・活動を成功させたいという思い ・地域の人たちや他の参加者との交流	・中核メンバーとして、重要な仕事を分担する ・幅広い分野において、自分たちの工夫や努力で結果に影響を与えることができる ・受け入れ側の人たちとの関係が強化される	・活動の実現にボランティア・ツーリストが欠かせない ・ボランティア・ツーリストとの公式・非公式の交流の魅力が増加する。	・ボランティア・ツーリストの参加により、自分たちだけでは達成できないことが達成できるという自覚が高まり、協働者として接するようになる ・当該イベント以外での交流や活動へと協働範囲が広がる。

出典：筆者作成

「ステージ1」は、仕事の重要性も創造性も低い役割である。前項の（１）や（２）の前半で示したOKOVOの初期が該当する。指示に従い、他団体の補助的業務を行っていた。また、部分参加が許されるなど、責任も軽かった。地域への貢献よりも、与えられた仕事を「体験する」要素が強い。これは、従来の観光における地域と観光者の役割分担、すなわち観光体験を提供する地域と消費する観光者という役割分担と変わらない状態である。

「ステージ2」では、与えられた仕事の内容は変わらないが、工夫できる領域を自ら探し、創造性を発揮している点が「ステージ1」と異なる。前項の４－２で、OKOVOが2005年に降に自分たちで組織を整え、実行委員会からの指示系統を簡素化したことなどが、Hackman and Oldhamによる「自律性」や川喜田の「自発性に支えられた問題解決」に該当する。し

26表4-6では最初の年区分が「2003年」で、次が「2004年～2005年」となっているが、表4-5では最初の区分が「2003年～2004年」で、次の区分が「2005年～2007年」となっている。両者の区分が一致しないのは、先述のとおり、2004年参加の結果として組織化が始まり、2005年2月から役割の位置付けが変わったという2004年から2005年にかけての移行期があるためである。

かし、この段階では、創造性を発揮できる範囲が自組織内に限られている。

「ステージ3」では、より重要な仕事を任せられ、責任も増える。仕事の範囲が広がることで、創造性を発揮する余地も広がる。また、「ステージ2」では、受け入れ先からは創造性を発揮することは期待されていなかったが、「ステージ3」では、創造性を発揮することが当初から期待されている点異なる。前項の4-4ではOKOVOが「運河会場B」を任せられたことに触れたが、その時期以降がこのステージに該当する。会期中の実行委員会の打ち合わせにも参加するようになり、雪あかりの路に参加する他の主要団体と同じ責任を持つようになった。

「ステージ3」への移行は、「ステージ2」の段階でボランティア・ツーリスト団体が示した創造行為に対するポジティブな評価の結果として生まれた信頼に基づく。従って、ボランティア・ツーリスト団体の役割が「ステージ1」から「ステージ3」へ直接移行することは考え辛く、「ステージ2」を経なければ、「ステージ3」への移行は生じないと考えられる。

以上の役割のステージはOKOVOを元にしてしているが、eVolや橙にも該当する。両団体も、他団体の補助的作業、すなわち、「ステージ1」から始まり、内部体制を自主的に整えることで「ステージ2」に移行した。その後、自団体のオブジェの創作を開始し、仕事の量的な貢献ではOKOVOには及ばないものの、核となるボランティア団体の一つと数えられており、2013～2014年頃から「ステージ3」へ移行したと考えられる。

このようにボランティア・ツーリスト団体の役割は、観光者的な位置付けから始まり、地域の団体と同等の役割を担うまでに変化した。このことは、博物館ボランティアの事例から、訪問者とボランティアは非連続な存在というよりは、むしろ連続線上にあるというHolmes and Edwards(2008:160-163)の指摘と一致する²⁷。また、ボランティア・ツーリストの類型として頻繁に言及されるCallanan and Thomas (2005:195-199) の「浅い、中程度、深い」という分類との関連では、「ステージ1」は「浅い」に、「ステージ3」は「深い」に該当すると考えられるが、同じボランティア・ツーリスト団体であっても類型は時間を経て変化する可能性があるという示唆を本研究は新たに加えた。また、Callanan and Thomasが分類に用いている6項目の中でも、「参加期間」や「参加の動機」よりも、「参加者の能動性」のようなボランティア・ツーリストの創造性に関わる項目や「地域への貢献度合い」など

27 Holmes(2003)を参照し、non-visitor, occasional visitor, frequent visitor, and volunteerが連続線上にあることを指摘している。

の項目の方が、ボランティア・ツーリストの地域との関わりの変化の方向性を考えていく上では、より重要だと考えられる。

（２）相互作用としての役割の変化とその要因

前項では、ボランティア・ツーリスト団体の役割の変化を時系列で整理し、異なるステージを示した。次に、ボランティア・ツーリスト団体の役割に変化をもたらした要因について考察する。

初めに、「ステージ1」から「ステージ2」への変化については、「使命感に基づく自発性」が生まれたことが要因だと考えられる。前項で述べたように、複数の参加者が活動内容に感銘を受け、この活動を知ってほしいという思いのもとに、それまでは個人で行っていた広報や募集活動を組織的なものにしようとする動きが始まった。

次に、「ステージ2」から「ステージ3」への変化については、以下の3点が重要な要因だと考えられる。

第1の要因としては、個人の呼び掛けに応じたボランティア・ツーリストの集まりから、自分たちで運営する団体へと「組織化」したことの効果が挙げられる。OKOVOの場合、第2回参加者を中心に参加者が構成員となって「韓国人ボランティア団」として組織化された。その結果、参加者自身がやるべきことを主体的に考え、個人では難しい広報や参加者募集の活動を行うことが可能となり、これまでになかった創造性が発揮されるようになった。

さらに、「組織化」されたことで、一部の参加者が次回にも参加し、雪あかりの路についてのノウハウを新規参加者と共有する「仕組み」ができ、仕事の質も維持または向上できるようになり、そのことが信頼関係の構築につながった。

第2に、受け入れ側がボランティア・ツーリスト団体の自発的な活動を受容し、さらに大きな活動の場を与えたことである。ボランティアの参加度合いを高めるために、ボランティアが活動のさまざまな局面を楽しむことを阻害しないことについては、Edwards (2006)の指摘と一致するが、OKOVOのケースでは、より大きな活動の場を積極的に与えた点や、次項にも関連するが、それを契機にOKOVOの活動がさらに積極化したことが注目される。その意味で、ボランティア・ツーリストの役割の拡大は、ボランティア・ツーリストの一方的な意思や行動だけで実現するのではなく、受け入れ側とボランティア・ツーリストの相互作用の結果として実現すると考えられる。

第3に、仕事内容がより創造的になったことで、仕事自体の楽しさが活動の動機付けとなったと考えられる。OKOVOの事例でも、自団体だけの展示コーナーを持ち始め、活動の創造性の度合いが高まった時期が一つの転機となり、団体に名前を付ける、来日のタイミングを早めるなど、団体として活動の積極化が見られた²⁸。

これらの要因を概観すると、ボランティア・ツーリスト団体の役割の変化は、ボランティア・ツーリスト団体と受け入れ地域との相互作用に基づき生じていることがわかる。その相互作用を支えた要因として、全ステージを通しての積極的な交流が挙げられる。「ステージ1」では、観光者としてのボランティア・ツーリストを公式な交流で迎え、その体験での感動が「ステージ2」への変化を生む要因となった。「ステージ2」では、実行委員の韓国訪問が始まり、相互交流となった。さらに、「ステージ3」では、非公式な交流が活発化し、私的な交流が頻繁になったほか、他のイベントやOKOVOの韓国での活動への参加も始まった。このような交流の量的質的变化は、相互理解の促進や、雪あかりの路というイベントへの帰属意識の醸成にも貢献し、より建設的な相互作用の実現に貢献したと考えられる。

これまで、受け入れ地域とツーリスト双方にメリットのあるボランティア・ツアーを実現するための研究では、ツーリストの選別、事前事後教育など、ツーリストの管理を強化する視点 (Raymond and Hall 2008:9-10) や、旅行会社など中間業者への認証制度の導入 (Fee and Mdee 2010) などが提案されてきた。しかし、相互作用の結果として良い展開が生まれるという本研究で得られた示唆からは、それらに加え、受け入れ地域の態度や現地でのマネジメント方法も重要な鍵となると考えられる。また、組織化が始まるきっかけとしては、特に「ステージ1」から「ステージ2」への変化を生み出す要因が鍵となるため、個々のボランティア・ツーリストの参加や継続動機について理解する必要がある。

28 こうした仕事内容自体が内発的な動機となることについては、(1)で言及したHackman and Oldham(1980)が指摘している。

4-5 まとめ

本章では、＜モビリティ＞社会におけるボランティア・ツーリズムの一例として、小樽雪あかりの路で活動をするOKOVOが地域で果たす役割を時系列で整理し、考察を行った。先述のとおり、＜モビリティ＞社会においては、ツアーはツアー期間だけで完結するのではなく、そこから関係性が始まり、継続する可能性が高くなっている。雪あかりの路の事例では、14年間で、①OKOVOが雪あかりの路で果たす役割が段階的に拡大し、地域の主要団体と同等以上の責任を負うようになってきたこと、②そのような環境下における地域とボランティア・ツーリストの役割の拡大は、ボランティア・ツーリスト団体の組織化と受け入れ地域による外部者の役割拡大の受容という信頼形成と相互作用の結果であること、③ボランティア・ツーリストが組織化を進めた背景には、個人としての使命感の芽生えがあったこと、などが明らかになった。

特定の地域に対して責任を負う関係性は、従来の消費者としての観光者とは異なる関係性である。それは、ボランティア・ツーリストが地域活動の「主体」として関わる関係である。しかし、これはあくまで地域活動の一部について責任を持つということであり、福祉や医療、防災、教育など地域の根幹を支える一員になった訳ではない。こうした地域への関わりが＜モビリティ＞社会における期間限定的、分野限定的な地域コミュニティのあり方を示唆している可能性もあると考えられるが、この件については、他の事例も合わせ、後で検討したい。

また、継続的な活動を行うためには、OBOGと呼ばれる継続参加者の役割が大きいことも明らかになった。次章では、継続参加者の動機について検討する。

第5章 <モビリティ>社会におけるボランティア・ツーリストの初参加および継続動機：小樽雪あかりの路 韓国人ボランティア団（OKOVO）

5-1 研究の目的と方法

前項では、観光者として雪あかりの路を訪れた韓国人ボランティア・ツーリストが、段階を経て、地域の主要団体と同等の責任を持つ活動をする団体へと変容したことを明らかにした。また、その変化には、ボランティア・ツーリストが「ツアー参加者の集まり」から、自ら企画運営を担うボランティア・ツーリスト団体へと組織化を進めたことが重要な転機となったこと、また、団体の運営には、OBOGと呼ばれる元参加者の韓国内および小樽での貢献が重要であることを明らかにした。そこで、本項では、このような組織化された団体運営の要である継続参加者に焦点を当て、彼ら彼女らの参加動機を明らかにすることを目的とする。

（1）研究方法と事例の選定

OKOVOの初参加動機および継続動機の調査にあたっては、参与観察やインタビュー、アンケート調査を中心とした質的調査を行なった。その際、OKOVOに加え、eVolと橙の参加者も対象とした。eVolは、OKOVO同様に10年以上に渡って雪あかりの路に参加し、オブジェ作りなど中心的業務を担当してきた実績がある。「橙」の実績は5年と短く、小樽在住者を一部含むが、同団体を含むことで、異なる文化背景や活動場所との距離を持つ参加者の比較が可能となるため、調査対象として加えた。

調査に際しては、2010年2月から2017年2月に「小樽雪あかりの路」会場・宿舍および韓国でのOKOVOの活動での参与観察を実施し、3団体の活動内容を把握した。2017年2月の会期直前には、「事前アンケート」を用意し、全参加者に対し初参加動機を、リピーターには、それに加えて継続動機を、2017年2月「雪あかりの路」会期直前に尋ねた。アンケート項目は、ボランティア動機分野における「複数動機アプローチ」の代表的なモデルである「VFIモデル」の要因（Clary et al. 1998, Clary and Snyder 1991）を元に、予備調査やそれまでの参与観察の結果を参考に、訪問先やイベントの魅力などの観光的要素を加えて設定した。加えて、OKOVOについては2010年8月に半構造化したグループインタビューを2回行ったほか、2013年2月と2017年2月～4月に、eVolと橙については2017年2月～4月に、複数回参加者を対象に初参加動機と継続動機について30分から1時間の半構造化インタビュー

ーを行った。インタビューは理論的飽和（Flick 2007＝2011:145-146）に達するまでサンプルを追加した。インタビューおよびアンケートの実施状況は以下のとおりである。

表５－１ アンケート実施概要

団体	事前アンケート			
	実施日*	対象者	回収数	回収率
OKOVO	2017/1/30	45	41	91%
eVol	2017/2/1	13	13	100%
橙（小樽在住者以外）	2017/2/1～ 2017/2/6	15	13	87%
橙（小樽在住者）	2017/2/1～ 2017/2/6	9	9	100%

注）橙は「全参加」と「後半のみ」の二つの参加期間オプションがあるため、アンケートの実施日が複数となっている。

出典：筆者作成

表５－２ インタビュー対象者一覧

所属団体	調査年月	名前	職業	年齢	参加回数	所属団体	調査年月	名前	職業	年齢	参加回数
OKOVO	2010年8月	A	学生	20	3	eVol	2017年2月	P	社会人	30	5
OKOVO	2010年8月	B	学生	25	2	eVol	2017年2月	Q	学生	26	4
OKOVO	2010年8月	C	学生	22	1	eVol	2017年2月	R	学生	24	2
OKOVO	2010年8月	D	学生	20	1	eVol	2017年2月	S	社会人	27	5
OKOVO	2010年8月	E	学生	24	1	橙（小樽以外）	2017年2月	T	学生	22	2
OKOVO	2010年8月	F	学生	20	4	橙（小樽以外）	2017年2月	U	学生	21	2
OKOVO	2010年8月	G	学生	21	2	橙（小樽以外）	2017年4月	V	学生	25	2
OKOVO	2010年8月	H	学生	20	2	橙（小樽以外）	2017年4月	W	学生	20	2
OKOVO	2013年2月	I	学生	24	3	橙（小樽在住）	2017年2月	X	学生	24	5
OKOVO	2013年2月	J	社会人	25	3	橙（小樽在住）	2017年2月	Y	学生	22	5
OKOVO	2013年2月	K	学生	22	3	橙（小樽在住）	2017年2月	Z	学生	21	4
OKOVO	2017年2月	L	社会人	24	4	橙（小樽在住）	2017年2月	AB	学生	22	4
OKOVO	2017年2月	M	社会人	27	5						
OKOVO	2013年2月 2017年4月	N	社会人	33	12						
OKOVO	2017年4月	O	社会人	26	4						

注）年齢はインタビュー当時（複数回インタビューの場合は、直近）。参加回数は、公式参加と非公式な一部参加を含む。OKOVO2010年8月の対象者に雪あかりの路への参加が1回の者が含まれているが、これらの対象者はOKOVOの韓国国内での活動に参加しているOBOGである。

出典：筆者作成

5-2 ボランティア・ツーリストの初期参加動機と継続動機

(1) アンケートに基づくボランティア・ツーリストの参加動機

初めに、2017年2月会期直前に実施したアンケートから、初参加動機と継続動機の概要を理解する。初参加時の動機についての結果は以下のとおりである(図5-1、表5-3)。
 橙については、小樽在住者と小樽在住以外に分け、集計した。

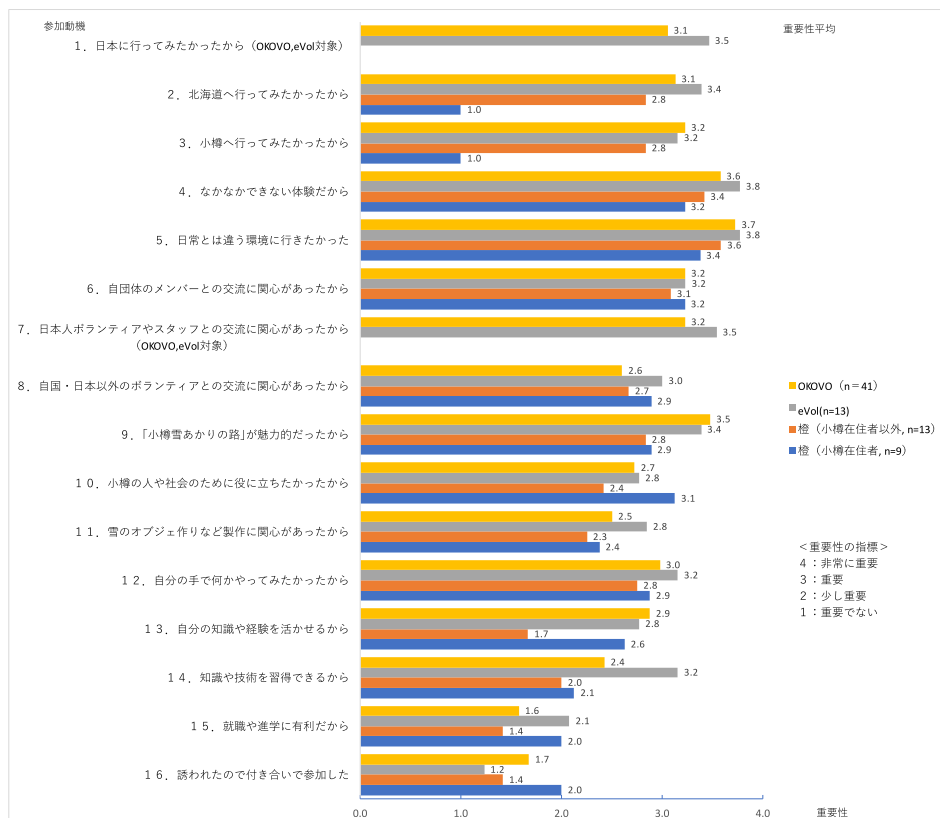


図5-1 初期参加動機

出典：筆者作成

初期参加動機の中で、各団体共通で重要性が特に高かったのは、「日常とは違う環境に行きたかった」と「なかなかできない体験だから」であった。ボランティア・ツーリズムの参加動機には、観光的要素とボランティア的要素の双方があると考えられるが、これらの項目は、非日常を求める観光的要素の高い項目だと考えられる。また、「橙」の小樽在住者についても、この項目は他の項目よりも高い重要性となっており、小樽在住参加者にとっても、雪あかりの路の合宿型ボランティアは、「非日常性」をもたらす時間や活動であることが伺える。

次に、OKOVOやeVolについては、「『小樽雪あかりの路』が魅力的だったから」の重要性が上位に来ており、同イベントの魅力がボランティア・ツーリストを惹きつける役割を果たしていると考えられる。また、「日本に行ってみたかった」「北海道へ行ってみたかった」「小樽へ行ってみたかった」などの訪問先の重要性も総じて高く、日本や北海道、小樽市への関心も重要な動機となっていた。行き先は、小樽以外からの橙参加者にとっても上位項目となっていた。

加えて、「自団体のメンバーとの交流」や「日本人ボランティアやスタッフ（OKOVOやeVolの場合）」との重要性が高くなっている。それ以外の団体との交流については、これら2項目に比べるとやや低い。一方、各団体ごとに程度に差があるものの、総じて重要性が低かったのは、「就職や進学に有利だから」と「誘われて付き合いで参加した」であった。

また、小樽在住の橙参加者に特徴的だったのは、他団体では10位以下となった「小樽の人のために役に立ちたかったから」が4番目に重要な動機として挙げられていたことである。地元参加者は、地元への貢献が特に強い参加動機となっていると考えられる。

（２）アンケートに基づくリピーターの継続動機

リピーターを対象に実施した継続動機についてのアンケート結果は以下のとおりである（図5-2、表5-3）。リピーターはOBOGとしてリーダー的役割を担うことが多いため、初参加動機で挙げた項目に、「自団体のメンバーのために役立ちたかったから」という項目を足した。

まず、継続に際して重要性の高い動機項目を見ると、「日常とは違う環境に行きたかった」が、初期参加時同様に各団体において上位に挙げられている。また、新たに加えた「自団体のメンバーのために役立ちたかった」も、OKOVOとeVolでは上位3位以内に、橙では小樽在住者も小樽以外からの参加者においても上位ではないものの、3.0（重要）の水準となり²⁹、所属団体への貢献が重要な継続動機となっていることがわかった。また、橙（小樽在住者）に特徴的なこととしては、「小樽の人や社会のために役に立ちたかったから」が上位3項目の一つとなったことが挙げられる。自団体への貢献への関心と小樽への貢献の

²⁹橙には小樽在住参加者がおり、彼らが地元在住者としてプロジェクトの運営に大きな役割を果たしていることが影響している可能性が考えられる。

関心のポイントで、後者が前者を上回っているのは、橙（小樽在住者）のみであり、他団体では、自団体への貢献の方が小樽に対する貢献よりも重要な動機となっている。

次に、初参加動機との比較では、「オブジェ作り」に関する動機がOKOVO、eVol、橙（小樽在住者）の3団体で0.5ポイント以上上昇しており（表5-4）、リピーターがオブジェ作り自体を楽しみにしていることがわかる。海外の2団体については、就職に関する動機の重要度が上昇したことと、行き先としての北海道の重要性が低下したことが共通の特徴である。前者はOBOGとして責任のある役割をとることなどがアピールポイントとなる可能性、後者は小樽というより特定の地域への関心が高まったためと考えられる。また、OKOVOと橙（小樽在住者、在住者以外とも）では、「自団体メンバーとの交流に関心があったから」の重要性が、eVolと橙（小樽在住者、在住者以外とも）では「自国・日本以外のメンバーとの交流」の重要性が、それぞれ0.5ポイント以上高まった。特に、橙（小樽在住者）では、両項目とも1.3ポイントと大きく上昇していることが特徴的である。これらのことから、「参加者間の交流」はどの分類の参加者にとっても初参加時よりもさらに重要な動機となっていることがうかがえる。

表 5－3 初期参加動機と継続動機（上位3項目と重要性指標参加者平均）

初期参加同期

OKOVO	
1. 日常とは違う環境に行きたかった	3.7
2. なかなかできない体験だから	3.7
3. 「小樽雪あかりの路」が魅力的だから	3.5
eVol	
1. なかなかできない体験だから	3.8
日常とは違う環境に行きたかった	3.8
3. 日本に行ってみたかったから	3.5
日本人ボランティアやスタッフとの交流に関心があったから	3.5
橙（小樽以外からの参加者）	
1. 日常とは違う環境に行きたかった	3.6
2. なかなかできない体験だから	3.4
3. 自団体のメンバーとの交流に関心があったから	3.1
橙（小樽在住参加者）	
1. 日常とは違う環境に行きたかった	3.4
2. なかなかできない体験だから	3.2
自団体のメンバーとの交流に関心があったから	3.2

継続動機

OKOVO	
1. 日常とは違う環境に行きたかった	4.0
自団体メンバーとの交流に関心があったから	4.0
3. 小樽へ行ってみたかったから	3.8
自団体のメンバーのために役に立ちたかったから	3.8
eVol	
1. なかなかできない体験だから	3.8
日常とは違う環境に行きたかった	3.8
自団体のメンバーのために役に立ちたかったから	3.8
橙（小樽以外からの参加者）	
1. 自国・日本以外のボランティアとの交流に関心があったから	4.0
2. 自団体のメンバーとの交流に関心があったから	3.8
3. 日常とは違う環境に行きたかった	3.2
橙（小樽在住参加者）	
1. 自団体のメンバーとの交流に関心があったから	3.8
2. 日常とは違う環境に行きたかった	3.7
小樽の人や社会のために役に立ちたかったから	3.7

出典：筆者作成

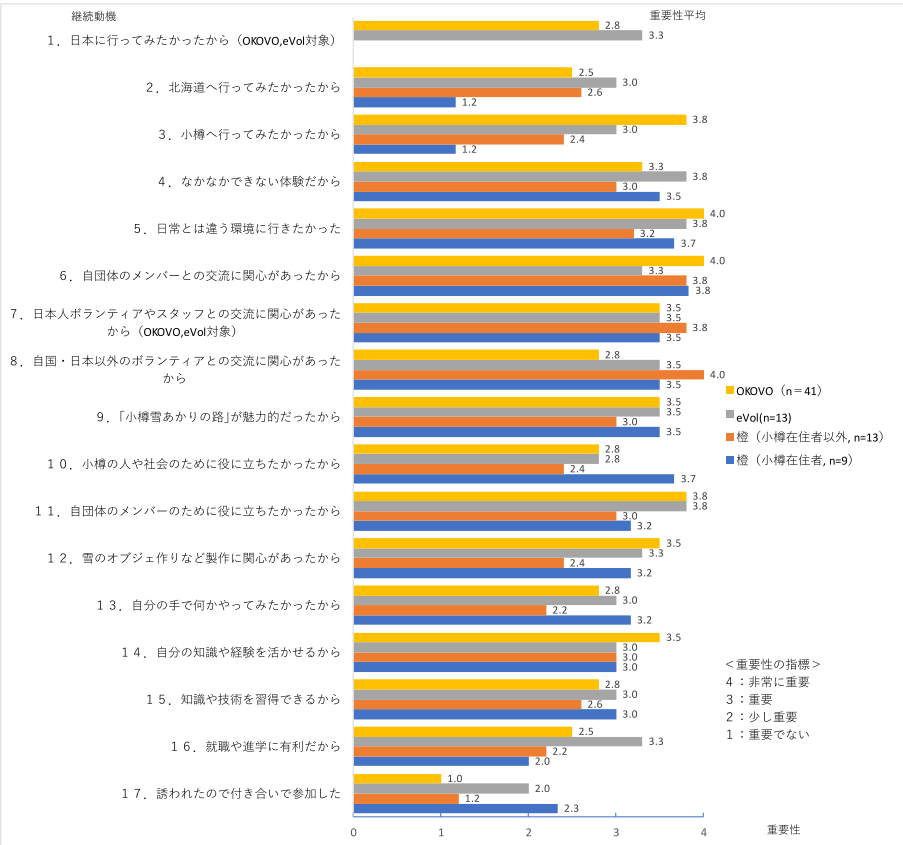


図5－2 継続参加動機

出典：筆者作成

表5－4 初期参加動機と継続動機の比較（継続動機の重要度－初期参加の重要度）

	1. 日本に行ってみたかったから (OKOVO, eVol対象)	2. 北海道へ行ってみたかったから	3. 小樽へ行ってみたかったから	4. なかなかできない体験だから	5. 日常とは違う環境に行きたかった	6. 自団体のメンバーとの交流に関心があったから	7. 日本人ボランティアやスタッフとの交流に関心があったから (OKOVO, eVol対象)	8. 自国・日本以外のボランティアとの交流に関心があったから	9. 「小樽雪あかりの路」が魅力的だったから
OKOVO	-0.3	-0.6	0.6	-0.3	0.3	0.8	0.3	0.2	0.0
eVol	-0.2	-0.4	-0.2	0.0	0.0	0.1	0.0	0.5	0.1
檜（小樽以外）	N.A.	0.2	0.2	0.3	0.3	0.6	N.A.	0.6	0.6
檜（小樽在住）	N.A.	-0.2	-0.4	-0.4	-0.4	0.7	N.A.	1.3	0.2
	10. 小樽の人や社会のために役に立ちたかったから	11. 自団体のメンバーのために役に立ちたかったから	12. 雪のオブジェ作りなど製作に関心があったから	13. 自分の手で何かやってみたかったから	14. 自分の知識や経験を活かせるから	15. 知識や技術を習得できるから	16. 就職や進学に有利だから	17. 誘われたので付き合いで参加した	
OKOVO	0.1	N.A.	1.0	-0.2	0.6	0.4	0.9	-0.7	
eVol	0.0	N.A.	0.5	-0.2	0.2	-0.2	1.2	0.8	
檜（小樽以外）	0.5	N.A.	0.8	0.3	0.4	0.9	0.0	0.3	
檜（小樽在住）	0.0	N.A.	0.2	-0.6	1.3	0.6	0.8	-0.2	

出典：筆者作成

（3）インタビュー結果に基づく初期参加動機と継続動機

次に、インタビューに基づき、初期参加動機と継続動機を整理した。インタビューによる初期参加動機についてのコメントは表5－5のとおりである。

初期参加動機については、団体に関わらず、訪問先のような重要な観光的動機が動機と

して挙げられた。また「友達に誘われて」という理由が多い結果となった。後者については、友達が誘ったことがきっかけになったものの、動機が「友だちへの付き合い」なのか、それ以外の要素があったのかが明確に述べられていないケースが多かった。

団体ごとに詳細を見ると、OKOVOの場合は、「日本」や「北海道」「小樽」に関心を持っていた参加者が多かった（A,D,I,J,K,O）。「友達に誘われて」と回答した者が次に多く（D,E,G,H,N）、そのうち1名は、日本に関心があることを知って教えてくれたと述べている。また、3名はOKOVO経験者から話を聞いており、OKOVOの活動に関心を持って参加したと推定される。eVolの場合は全員が直接誰かに誘われていた。そのうち、2名は当初から日本に関心があった。対照的に、橙の小樽以外からの参加者で友人から誘われたものは一人もおらず、3名がボランティア情報のサイト（ACTIVO）で見つけたと回答している。一方で、3名が「北海道」に行きたかったと行き先を重視している点は他の団体と同様である。残る1名についても、「違う環境」に行きたかったと訪問先の重要性に触れている。橙の小樽在住者については、3名が友達に誘われたことに言及している。残り1名は、実際に雪あかりの路の合宿型のボランティア活動をインターンとして一部体験したことがきっかけになっている。

表5－5 初期参加動機に関するコメント

(i) OKOVO

回答者	初期参加動機
A	ただの旅行より、地域の人と本物のことがしたくて、ボランティア情報を探していた。日本人の人とも何かしたかった。
B	写真がきれいで興味が湧いた。OKOVOの映像にも惹かれた。
C	校外活動が（韓国で）ブームになっている。就職のためにプラスになる。みんなやっているの、やらないと不利になる。
D	他のボランティア活動をしていた友達がネットでみつけて、日本に興味があるのを知っていて教えてくれた。
E	2期に友達がいて、その話を聞いて。
F	旅行カフェ（ネットコミュニティの一つ）でみて。
G	友達が5期にいた。
H	3期の人が自分の友達の友達にいた。話を聞いた
I	小樽に行きたかった。
J	北海道に行きたかった。
K	OKOVOに最初に参加した時には、ただ日本に行きたかった。ボランティアっていう目的がありましたけれど、日本に興味があって、日本に行きたいという気持ちで志願したけれど、面白くて楽しくて日本に毎年行きたいと思った。
L	OKOVOに参加する前の年に札幌で日韓中の学生合宿セミナーがあって、それに参加しました。（その時に）小樽雪あかりの路に一日参加して、OKOVOのことを知りました。セミナーはまだ初日だったのでまだみんなが親しくなれない状態で、小樽に来て

	OKOVO みんなが仲良しで親しく見えて、「ああ、いいな」と思って「私も来年参加してみようか」と思って参加しました。
N	友達の勧めです。でも友達は仕事の都合で参加できませんでした。
N	友達に誘われて。
O	伝統的建築について勉強していたので、小樽に興味があった。Love Letter（小樽を舞台にした日本映画）も見ていた。

(ii) eVol

回答者	初期参加動機
P	高校の同級生だった友達に誘われて。日本の文化に関心があった。
Q	最初は友達にイベントのことを聞いて参加した。アニメが好きだったけど、日本の文化についてネットで書かれていることは本当かどうかわからない。それを確かめようと思った。
R	友達に誘われて。
S	親戚の人に誘われて。

(iii) 橙：小樽以外在住者

回答者	初期参加動機
T	ACTIVO のサイトで知った。東京じゃないこと、海外も含めて、環境の違うところでボランティアがしたかった。
U	私はボランティアが好きなので、しょっちゅう ACTIVO をみていて、タイミング的に一番上にあったのが雪あかりでした。直感で行動するタイプなので、「雪国体験したことない」「集団生活したことない」「北海道好き」というので、そういう小さな理由で参加を決めました。行かない理由はない、と。
V	北海道に行きたいという気持ちがずっとありました。たぶん1年生ぐらいの時に橙、雪あかりのボランティアのことをインターネットでたまたまみつけて、その時はもう募集が終わっていたので、「また行けたらいいな」と思っていて、2年生の春休みに参加しました。北海道に長くいられるので。 長期休暇の時は大学の友達と旅行したりしますが、それだともったいないという気持ちが自分の中にありました。せっかくなら遠くに行ったり、知らなかった人と出会う・関わると、いい時間になるんじゃないかと思いました。北海道に行くと話し方も違うし、穏やかな人が多い。食べ物もすごくおいしいし。
W	ボランティアの授業をとっていて興味があった。ACTIVO サイトを見つけて目に止まった。北海道は行ったことがなかったし、ボランティアのいい入り口になると思った。気軽に参加できそうな感じがした。自分にも雪のオブジェなら作れそうだった。

(iv) 橙：小樽在住者

回答者	初期参加動機
X	インターンで参加した。初めての日本人合宿に参加している二人の様子を見て、自分も来年はもっと雪あかりにどっぷり浸かりたい、来年は合宿したいと思った。
Y	友達に誘われて。
Z	友達に誘われて
AB	友達に誘われて

(注) 強調のための下線は筆者による。

次に、継続動機については、表5-6のとおりである。団体を問わず、「自団体や他団体、小樽の人びととの交流」を重要な要因として挙げた回答者が多かった。

OKOVOについては、7名が「人」や「交流」を継続理由として挙げた(A,B,I,J,K,L,N)。交流の内容については、①自団体での生活を共にした交流、②他団体との合宿所でのおしゃべりや料理会などを通じた交流、③小樽の人びととの交流、などが挙げられた。

自団体の交流については、小樽にいる時だけではなく、その後も韓国における公式の交流や活動などの「団体としての体系」ができていることが助けとなっていることに言及する回答者もいた(C)。それに加えて、非公式な交流が継続し、OKOVO参加以前にはなかった豊かな人間関係を得ている発言もあった(K,L)。

それに加えて、ほぼ初対面の参加者同士が共同生活をすることや、日中韓の参加者や小樽の他団体のボランティアとの交流を通して、「多様な人びと」や「他者に対する優しさ」などに触れ、「活動を後輩や若い人に伝えたい」という継続への使命感を持つコメントも聞かれた(I,N,O)。これは、「自団体のメンバーのために役に立ちたかったから」というアンケート項目に近いと考えられる。

また、4名の回答者が雪あかりの路の美しさや小樽という場所に言及し、「小樽の魅力」が継続動機の一つとなっていることがうかがえた(A,J,L,N)。また、小樽の人びとについて、感謝を示す発言もあった(J,O)。また、オブジェ作りやリーダーとしての仕事などについて、チャレンジするためという回答もあった(B,M)。

eVolの回答者についても、全員が「人」や「交流」について言及しており、その内容は自団体だけではなく、日本や韓国のメンバーも含めた交流だった。また、会期終了後の非公式な交流について言及した回答者もいた(R)。

小樽以外に在住している橙の回答者についても、2名が具体的に「人」に会うことを継続理由として挙げていた(V,T)。また、団体のために何かしたいという回答もあった(T)。小樽在住者にかんしても全員が交流を継続動機として挙げていた。また、2名が「オブジェ作り」でさらに良い仕事をしたいことを挙げた(Y,AB)。

表5-6 継続動機に関するコメント

(i) OKOVO

回答者	継続動機
A	仕事も楽しいけれど、<u>3回行ったのは、人が1番</u>。OKOVO との思い出もあるけれど、日本の人たちにも会いたかった。(中略) きれいなお祭りに参加するだけでも意味がある。帰ってきたら、OKOVO のみんなと過ごした時間が心に残っている。1日の作業が終って、ウィンケルに戻って、遊んだり、お酒飲んだり。日本人も一緒に。
B	2回目に参加した時は、<u>人と作った思い出を味わいたかった</u>ので参加した。その次は、雪あかりでもっといいオブジェを作れるのではないかと自信。3回目になったら、もっと仕事を好きになった。昔は仕事（オブジェ作り）をすること自体は、そこまで懐かしくなかった。
C	また行きたいと思うのは当たり前。だけど事情がある。体調は心配だけど、また行きたい。今度行くならば(映像ではなく)普通の仕事をしたい。前に行った時と係が変わるし、時間もたったので、違う感じがすると思う。他の祭りのボランティアは続いているけれど、OKOVO は続いている。<u>団体で体系ができて</u>いるところが違う。
I	<u>去年友達となった人たちとまた会いたいので、絶対に行きたいと去年からずっと考えて</u>いました。中国の友達もいますが、日本の友達もいるので、また会いたいと思いました。(中略) 去年日本に来る前は、自分がこんな風に OKOVO に熱心になるとは予想できませんでした。去年は一般のメンバーとして、一生懸命に働くことがすべてだったけれど、今は責任がある副団長としてきたので、去年よりも難しい。(中略) YB (Young Boy; 現役のこと) が終わってから一生懸命やっていこうと思ったのは、自分の持った良い経験を後輩にも伝えたいから。彼らが今、どんなふう感じているかはわからないけれど。(中略) 去年小樽にいたときにも来年も来たいと思いました。天気が悪い時に仕事をして、みんなと一生懸命にやったことがいいなと思いました。そのあとで、ウィンケルとかでお疲れ様でしたといって、飲み会をしたり、食べたりしたり、交流をしたのがよかった。
J	最初に参加したのは10年も前になる。OKOVO の人も小樽の人もとてもいい人だったから、<u>いつも思い出してありがたいなあ</u>と思っていた。韓国ではずっと活動はできなかったけれど、いつも OKOVO のことをしたいなと思っていた。今回は、時間があって、参加することができた。(中略) 知らない人と10日間ずっと生活しているということは、大人になるとあまりない。だけど、空気も水もいいところで、いい人と一緒に暮らして良かった。いつも雪が降ったら、小樽に行きたいと思う。私だけではなくて、みんなそう思っていると思う。(中略) あの時から10年たって、最初は年の差がある YB(現役)と一緒にするのは大変ではないかと思ったが、全然大丈夫でした。楽しかった。ボランティアをしている最中は大変だけど、それを10日間やったら、いい思い出になる。
K	副団長をやろうと思ったのは、3回目の参加だし、日本語もだんだん上手になってきたので。推薦されたけれど、自分でもやろうかと思っていた。深い考えではなく、軽い気持ちで。でもやってみたら重たいことだった。(中略) 今年も OKOVO に来ようと思ったのは、OKOVO が面白いから。OKOVO は毎年違う。雰囲気も人も。去年と今年では生まれるエピソードが違う。仕事は難しくて大変だけど、一緒に飲みながら話しながら。小樽にいる時だけでなく、運動会とかメンタリングとか韓国でもすっごく集まるので。(中略) OKOVO に最初に参加した時には、ただ日本に行きたかった。ボランティアっていう目的があったけれど、日本に興味があって、日本に行きたいという気持ちで志願した。だけど、面白くて楽しくて日本に毎年行きたいと思った。(中略) 難しいことがある時に、相談できる人が全国にできる。OKOVO は小樽でボランティアをするだけではなくて、人間関係ができる。たとえば、大学での勉強のことについて、同じ専攻の人に相談できる。ボランティアで始めて、人生の友達ができる。それが毎年毎年重なっていく。

L	(また来たいと思ったのは) <u>日本が好きなのもあって。小樽という町の魅力と、OKOVOの人たちとふれあう機会と、日本人や中国人との交流。</u>(中略) OKOVO のいちばんいいところはたくさんの人に会えること。それまでは自分が住んでいる地域や通っている大学の人たちが知り合いの半分以上でしたが、OKOVO に参加してから専攻や職業・・・いろんな人に触れ合って、地域もさまざまでした。そのあとに全国(韓国国内)旅行に行っても、その地域地域に知り合いがいるほどになりました。
M	最初に来た時に班長をやったのだけれど、二回目はもっとうまくやりたいと思って来て、それが続いています。二回目までは、<u>自分に対するチャレンジ</u>でした。それ以降は「<u>楽しみ</u>」です。
N	初めはただ楽しかったから。小樽が好きになった。(中略) 続けたのは、自分たちで作って来た団体だから。政府や企業のサポートもない。日本を知らなかった若者に交流の機会をあげたいと思った。(中略) 自分が初めて日本に行った時、日本には関心がなかった。韓国人は日本人についてはよく思っていなかった。生まれてから一度も日本の人と会って、話をしたこともなかった。そういう人が日本人と仲良くなって、仕事をしたり、飲み食いすれば、そういう人だからこそ、交流を熱心してくれると思う。大変な仕事も一緒にして、個人ベースで仲良くなる。
O	参加してすぐにもう一度行こうと思った。OKOVO は韓国の中でも色々集まる活動があるので、<u>仲良くなる</u>。また、小樽に行って、同じ部屋で暮らすので、家族みたいに仲良くなる。(中略) OKOVO が 15 年間続いているのは、みんなも同じように思っているから。来年も行きたいと思う人がたくさんいる。社会人で行けないけど、そんな経験を若い人に教えたいと思っている。毎年、新しい人を選んで、小樽の経験を教えて、OKOVO という団体を大切にしている。(中略) 外国 2 週間以上暮らす経験は初めてだった。目的がボランティアで色々な人と、ほとんど初めてあった人と生活することが面白かった。それに、12～15 期と本当によく飲んで遊ぶ。家族となる。(中略) 小樽の人がもてなしてくれた。ウィンケルの家を貸してくれた。政寿司の社長が寿司を握ってくれる。町を歩いていると、小樽のおじさんおばさんがお菓子をポケットに入れてくれる。食堂に行ったら、サービスしてくれる。薮半の社長も優しい。あまとうの社長も優しい。日本の人たちが本当に優しくしてくれて、すぐにもう一度行こうと思った。

(ii) eVol

回答者	継続動機
P	女性と娘さんがいて、 <u>eVol に優しくて</u> 、肉を持って来てくれた。それから、たまにお土産とかを持って来てくれた。今は（お年を召したのか）参加していない。それで、また（eVol に）参加したいと思った。（中略） 初めての海外がここだった。思い出がすごくいい。こういうイベントをもっと学生とかに伝えたい。（日中韓の）コミュニケーションがいい。
Q	他団体との交流。それと、留学したいという気持ちがあったので、日本の大学について色々情報を得るため。
R	みんなと一緒につくる時は、楽しいです。eVol のメンバーだけでなく、他のボランティアも。たくさんの橙の人と知り合って、去年から 1 年間ずっと連絡しました。 <u>もう一度会える</u> といいなあと思いました。国内の人は Wechatd で連絡を取っています。
S	なぜか毎年行きたい。交流が楽しい。 みんなで笑う時が一番楽しい。OKOVO と橙との飲み会は楽しい。前はゲーム大会、最近料理大会。

(iii) 橙：小樽以外在住者

回答者	継続動機
U	私は母に「相当なことがない限り、来年も行くからね」と言いました。終わった直後に。こんなに <u>収穫を得る場</u> はない、と。次の年には違ったものが見えてくるだろうし。「やめる理由なんかないから」と。たしかに就活で忙しかったけど、逆に <u>息抜き</u> として行きました。
V	2 年生で終わった時に「また行こう」とすごく思いました。終わってから一年間はみんなに連絡とったり、東京に行ったりしました。小樽の人でも大阪に来てくれました。行きたいなと思いつつ、「今回はやめておこう」と考えました。（中略） もう一回行こうと思ったのは、単純に言うと、「寂しい」という感じ。2 週間が終わって、地元の小樽のメンバーはそのまま継続しているので、自分もそこに行きたいなあ、と。懐かしい感じ。
T	ひとつは、「 <u>みんなで共通の目標に向かうのは楽しそうだから</u> 」。二つめは「 <u>いろんな人と関われる</u> 」、気付きがあるだろう。前回いろいろ苦労した経験があって、気付きがあるだろう。三つめは「 <u>橙のために何かしたい</u> 」。去年自分の未熟さを痛感させてもらって、その上でやさしく受け入れてもらって感謝してた。なので橙のために何か自分にできることはないだろうか、と思いました。

(iv) 橙：小樽在住者

回答者	継続動機
X	毎年モチベーションはちょっと違います。最初は「チームで楽しみたい」「地元に貢献したい」「国際交流を楽しみたい」。去年くらいからは、この合宿をするとメンバー同士・それ以外の<u>つながりができて、輪が広がっているのがいい</u>と思います。これがなければ出会わない人たちが出会うのいいな、と。ボランティアだけでなく、成長するような場にしたい。年々違うかんじです。 自分が楽しいだけでなく。僕はこれをきっかけに韓国留学したし、参加した人が何か変わるきっかけになればいいなという気持ちが強くなっています。
Y	オブジェ作りで新しいことをしていきたい。もともと小学低学年のときに自宅で親と雪あかり「もどき」をやっていたので、大人になってからは誰にも作れないものを作りたいと思いました。（中略） 想像以上に楽しいです。大学の友達との飲み会がありますが、外国人との交流はめったにないし楽しくて、一年にこの時期しかないののために一年がんばっている。「自分の学生生活の中にあって当たり前のもの」になっています。
Z	<u>価値観の違う人と関わりたい</u>。大学の友達じゃなくて、他の大学の人や外国人と。大学入ってから他のボランティアもしましたが、ここに来て「チャンスだ」と思いました。僕にとっての一年の始まりは1月じゃなくて2月です。
AB	<u>人との交流、地域貢献</u>もですが、作業していて「寒い」と思ったことはありますが「作業がつらくて、やめたい」と思ったことはない。<u>スノーキャンドルを作っているのが楽しかった</u>です。 小学生の時は雪でいろいろ作ってましたが、それ以降は何か作ることと雪を触るというのはありませんでした。子供の頃に戻るといえるか。作ってみたら楽しかったです。

(注) 強調のための下線は筆者による。

5-3 雪あかりの路における「小樽」と体験の意味

前項では、初期参加動機に基づくと「浅い」ボランティア・ツーリストと考えられるOKOVOの参加者が、小樽での体験を経て、当初とは異なる継続動機を持つことが明らかになった。また、中でも「交流」が重要な継続動機となっており、交流のあり方はモビリティ社会における情報や人の移動の特徴を反映した形となっていた。また、会期外の交流では、小樽での体験の共有が重要なテーマになっていることが明らかになった。そこで、本項では、ボランティア・ツーリストの継続動機をさらに理解するために、継続参加者にとっての「小樽」や自分自身に起こった変化や他の類似体験と雪あかりの路における違いについて整理する。

(1) ボランティア・ツーリストにとっての小樽

インタビューの結果から、小樽についての印象をまとめた（表5-7）。橙の小樽在住者については、対象から外した。

まず、OKOVO OBOGのコメントだが、小樽に関する印象で、一番多く出てくるのは雪についてのコメントである（A,B,D,E,F,H,J,M）。「真っ白」で「すごい量」の雪が、小樽の運河や港や雪あかりの作業場の景色や寒さと結びついて想起されている。その雪は、参加者らにとっては「予想を超えた」量であり寒さであったが、そこに付随する感情は、肯定的な（「いい」「ロマンのある」）感情であり、小樽を想起させるきっかけにもなる。関連して、町の雰囲気に関するコメントとしては、「小さくて田舎っぽく」「懐かしく」「暖かい」感じで、雪あかりの路は、うるさい音楽などがなく、「静か」で「ろうそくの灯りがきれい」とであると述べられていた（B,F,M）。

次に多く出てくるのは、小樽の人びとについてのコメントである（A,B,D,E,G,J）。自分たちを歓迎してくれた小樽の人たちは、「都会人ではなく、純粋な感じ」であり、親切で優しい人たちである。作業をしていると「アメとかチョコとか持ってきて」くれたり、宿舎を貸してくれたり、飲食業に従事している人たちはご馳走をしてくれる。町を歩いても「お菓子をポケットに入れて」くれる。また、小樽の人たちは町を愛しており、町のために雪あかりの路の作業を自らやっており、その様子は、業者が作る韓国のイベント（祭り）とは異なっていた。

それ以外では、小樽を非日常の場として捉えるコメントも4名から出された（D,G,H,L）。

韓国での現実の生活は就職活動などもあり、厳しい生活である。それに対し、小樽での生活は「小樽マジック」という「幻想」の世界であり、「現実を忘れる」「現実逃避」できる場所である。そこでは、「何も考えずに」「小学生」のように、「働いて、遊ぶ」生活を送った。

次にeVolのメンバーについては、2名が小樽の人びとの優しさについて、一番印象に残っていることとして語った（P,R）。それ以外では、雪についてのコメントがあった。また、橙の小樽以外からの参加者では、雪や寒さについての言及が全員からあった。また、小樽の人びとの優しさや郷土愛についても全員が言及した。東京や大阪とは「全然違って」、住んでいる人がちょっとゆっくり、のびのびと暮らしていると映ったようだ。

このように、①小樽についての記憶は、視覚や体感などと結びついていること、②小樽という土地の記憶は建物や風景だけではなく、そこにいる人びとと結びついていること、③特に、OKOVOの参加者にとっては、小樽という場所は非日常の場所であること、が回答者の発言からわかる。

表5－7 小樽で印象に残っていること

(i) OKOVO

回答者	小樽で印象に残っていること
A	風景が雪。夜中が白い。真っ白になっている。（中略） 日本人の人が歓迎してくれて、都会人じゃない。純粹な感じ。（中略） きれいなお祭りに参加するだけでも意味がある。帰ってきたら、OKOVO のみんなと過ごした時間が心に残っている。1日の作業が終って、ウィンケルに戻って、遊んだり、お酒飲んだり。日本人も一緒に。
B	雪の量がすごい。南ではそんなにない。思ったより、小樽は小さくて田舎っぽい。懐かしい感じ。暖かい。（中略） ボランティアをしていたら、お年寄りがアメとかチョコとか持って来てくれるところが違う。（中略） オブジェを完成させて、ろうそくに日をつけた。毎日、組によって違うけど、火をつけた瞬間に良かったと思う。胸が一杯になる。（中略） 一緒に過ごした人と小樽の話をするのが楽しい。同じ話を何度もしているはずなのだけれど、何度話しても楽しい。飽きない。（中略） 小樽は雪が降っているの、感傷的になる。暑かったら、人が隣にいるのは嫌だけれど、寒いから人が近くにいたのが心地よい。
D	海外は初めてだった。外国に行ったという感じ。（中略） 人が印象に残っている。場所じゃない。韓国人と日本人と一緒に良かった。（中略） 知らない人に紹介されて、そこで働いている私は小学生みたいだった。日常の生活の悩みを考えずに、働いて、遊んだ。楽しかった。ずっと何も考えずに働いた。
E	港だったことが印象深い。雪と運河と港の風景が珍しかった。（中略） 色々なことが心に残っている。毎日毎日作業が終わってからの帰り道。本部に帰ってから、みんなで「お疲れ様」って言ったり、ハグしたり、食べたりするのを一番覚えている。（中略；次ページへ続く）

	不思議な感じ。地域でみんなが仕事をしているところ。小樽の人が、みんなが作っていることが不思議だった。ボランティアなのに、あんな風にやっているのが不思議。
F	(小樽で印象に残っているのは) 雪。2006 年 2 月に初めて行った。本当に積もっていて、小樽築港で降りて小さなバスで行ったが、雪の壁とかで見えなかった。(中略) (雪あかりの) 会場の姿(も印象に残っている)。電気を使わない。ほかの祭りは音楽もうるさいけれど、運河は静か。笑い声もいいし、ろうそくの光がきれい。特に OKOVO の作ったところには愛情がこもる。(中略) 自分と合わない人もいる。知らない人が 50 人で一緒に暮らす。ウィンケルで同じグループになって、寝たり食べたりする。全員とうまくいくわけではない。でも、時間がたつと、嫌なことはなくて、いい思い出になる。1 年とか 2 年たつと、OKOVO のイベントに来る人は 25% もいない。今、参加している人は OKOVO が好き。OKOVO は一回しかできないこと。何の悩みもなかった 2 週間の記憶。就職活動大変だけれど、自分を癒す記憶になっている。
G	現実と離れることができた。現実を忘れる。携帯も通じない。ニュースも見ない。ウィンケルで遊んだ。(中略) 小樽の人がもてなしてくれた。ウィンケルの家を貸してくれた。政寿司の社長が寿司を握ってくれる。町を歩いていると、小樽のおじさんお婆さんがお菓子をポケットに入れてくれる。食堂に行ったら、サービスしてくれる。薮半の社長も優しい。あまとうの社長も優しい。日本の人たちが本当に優しくしてくれて、すぐにもう一度行こうと思った。(中略) 感動した。緑の会の人たちは自分の街を愛する人。自分のためではなく、町のために働いている。彼らを助けたいと思った。韓国では、イベントは商人が集まってお金稼ぎをする場所。(中略) 小樽にはたくさん友達がいる。FB, Kakao, LINE でつながっている。日本の人がよく遊びに来てくれる。(中略) 私 1 回小樽に遊びに行った。
H	北海道については本やテレビで見たことがあった。雪が降る寒いところと知っていたけれど、考えていたよりもすごかった。吹雪だったので雪が沢山で、寒かった。(中略) すべてのことが思い出に残る。仕事することも面白かったけれど、少しずつ休んだり、少しずつ遊んだりもした。朝里川の滑り台も楽しかった。(中略) 小樽は憩いの場。現実逃避。韓国に帰ってきて、何か話したい時、連絡をする。いつのまにか傷や悩みが癒される。
J	いつも思い出して、小樽は懐かしいところ。人もいいし、雪もいいし。全部が(いい)。(中略) 知らない人と 10 日間ずっと生活しているということは、大人になるとあまりない。だけど、空気も水もいいところで、いい人と一緒に暮らして良かった。いつも雪が降ったら、小樽のことを思い出す。
L	私たちの中では「小樽マジック」というのがあって、「韓国は現実、ここは幻想」みたいな。
M	小樽の風景にロマンがある。(中略) 特別な場所があるんじゃないくて、毎日仕事するときの雪の積もった風景です。

(ii) eVol

回答者	小樽で印象に残っていること
P	女性と娘さんがいて、eVol に優しくて、肉を持って来てくれた。それから、以前はたまにお土産とかを持って来てくれた。今は（お年を召したのか）参加していない。それで、また（eVol に）参加したいと思いました。
R	一番覚えてるのは、地元のお婆さんのことです。その日、私と他のボランティアがお店に入ったら、そのお婆さんは「え？！ あなたは中国人ですか？」と言って、中国の（メール）アドレスを聞きました。アドレスを言うと、「そのアドレスは正しいですか？」と聞きました。そんな短い会話のあとで、「一緒にご飯を食べませんか？」と誘われました。そのご飯は、楽しかった。あとでお婆さんは私と（他の）ボランティアを家に誘ってくれました。地元の日本人は、情が厚いです。
S	きれいだった。雪は初めてだった。

(iii) 橙：小樽以外在住者

回答者	小樽で印象に残っていること
T	（初めて参加して）すごく楽しかったです。小樽は本当に綺麗でした。観光も雪あかりも、楽しかったです。おいしいものもたくさん食べました。雪にも触れて。（中略） 人が温かかった。年配の方がすごく優しくて、みんなよくしてくれて、景色が綺麗だった。雰囲気が好きです。観光客がほとんどだったけど、東京に暮らしている身から見ると新鮮で、そんなにガヤガヤもしてない。（中略） （年配の人は）寒いからすごく声をかけてくれたり。外で作業していると声をかけてくれたり、豚汁ふるまってくれたり、たまに話したし。知らない人と関わることは少ないので、暖かい。東京ではまずありません。田舎に帰った感じ。時の流れがちょっとゆっくり。東京みたいに、みんな焦ってないし。
U	知らない土地で、雪まみれで、めちゃ寒くて、知らない人と、初めての作業で、一瞬一瞬が新鮮で、ついていくのに精一杯。（中略） 2年を通じて思ったことは、雪あかりは小樽市全体一丸となってやっているということです。しかも100%ボランティアで。今年札幌雪まつりを見て、ますます雪あかりが好きになりました。ロウソクのあたたかさも、人のあたたかさもある。議員さんも社会的地位はよっぽど上の方なのに同じ目線で支えてくれて。さらに、食券で食堂にご飯食べに行くと、「ボランティアおつかれさま」「今年、どうなの？」と気にかけてくれます。直接関わってない人も、小樽市が一丸となって協力している。そういうのは少なくとも私が住んでる市にはないので、ものすごくそれは魅力だし、誇らしいし、愛おしいなと思います。気にかけてくれるんです。
V	普通の観光と違って、雪作業をすると寒さが倍増する。初め行った時は「これくらいの気温なら、できるかも」と思いましたが、作業をすると寒さがダイレクトにきます。寒さはやはり辛かったですけど、環境は同じ日本でも外国にいるみたいな気分で、そこが違いました。一回目は北海道の人が多くて、出会う人出会う人がほんとに親切でした。（中略）大阪とですか？ ぜんぜん違う（笑）。（中略） 北海道に行くと話し方も違うし、穏やかな人が多い。食べ物もすごくおいしいし。特にお寿司は全然違います。雪あかりではボランティアで、国際的。中国や韓国の人がたくさんいて、一緒に活動して新鮮でした。（中略） 小樽は来るといつも思いますが、観光地で外国の人も年中通して来られますが、住んでいる人ものびのび暮らしていて、雪あかりに参加している小樽市民も「小樽好き」「帰りたくない」と言っています。それは自分には羨ましい。私は大阪に住んでいます。大阪にいたいとは全然思いません。「自分の住んでいる町に対して愛はあるか」と問われれば、自分にはないので、故郷が観光地化していても住んでいたいと思うみんなが羨ましい。住みやすいんじゃないかな。

関連して、「自分にとっての小樽」についての発言をまとめた（表5－8）。一部、小樽の印象と重なる回答もある。

回答者にとっての小樽は、主に二つの要素に分かれる。一つは、「ふるさと」や「ベースキャンプ」という言葉に表現される「憩いの場」であり、「懐かしく」「暖かい」場である（A,B,D,E,G,H,J）。しかし、その場は、「幻想」や「夢」のような場でもあると認識し、「戻れそうで戻れない」と感じている回答者もいる（F,G,H,L）。また、人や人との関係性についての言及も多かった（B,C,F,G,J）。ここから、自分の基点となる大切な場所であり、それはそこで一緒に時間を過ごした人と結びついているが、非日常の場所であることがわかる。これらの点は、小樽の印象でも述べられた点である。

eVolの参加者からは、この件についてのコメントは得られなかったが、橙の小樽以外の在住者からは、「戻る場所」であり（W）、「歓迎してくれる」場所（U）であるとのコメントがあった。また、自分にとっての小樽で重要なのは、「（地理的な空間という意味での）場所」ではなく、そこで行われた雪あかりの路というイベントのために実施された橙への参加によって得られた「人との関係」が重要だと述べた回答者もいた（T）。

表5－7と表5－8から明らかになったことをまとめると、小樽という場所の記憶は建物や風景だけではなく、そこにいる人びとや厳しく美しかった自然環境と結びついている。また、そこでの体験は非日常的なことであり、そこは戻りたい場所である。このような感覚に代表される小樽の魅力とそこで出会った人びとへの思いが、継続的な参加の背景にある。

表 5－8 自分にとっての小樽

(i) OKOVO

回答者	自分にとっての小樽
A	小樽は第2のふるさと。韓国では大学生だし、将来のことを心配したりして、現実的な問題を考えるけれど、小樽では全部忘れて話せる。心が楽になる。(中略) ろうそくの色が、特に運河のオレンジ色が他の場所にはない。人の気持ちを楽にさせる。
B	第2のベースキャンプ。ふるさと。不思議な感じ。たった20日間でしんどいけれど、夜遅くまで遊ぶので、本当にしんどいけれど、20日より長く感じる。20日しか一緒に過ごしていない友達だけれど、昔から知っていた感じ。一緒に過ごした人と小樽の話をするのが楽しい。同じ話を何度もしているはずなのだけれど、何度話しても楽しい。飽きない。(中略) 小樽は雪が降っているの、感傷的になる。暑かったら、人が隣にいるのは嫌だけれど、寒いから人が近くにるのが心地よい。
C	色々な人と会って、一人で移動することが多かったけれど、小樽の風景、自分のこととか、他の人との関係などを考えた。自分の本当の姿を発見する機会だった。(中略) 普段とは違う。別のところで、違う人と違う環境で考えること。雪をみていると感傷的になる。
D	いつかもう一度戻っていけるかもしれない場所。子どもの頃のような場所。
E	自分にとっての小樽やOKOVOとは、暖かくなる場所。寒かったのに暖かかった。ウイナールや温泉の思い出。
F	小樽は夢のような場所。夏にも行ったけど、冬の小樽は違う。冬の雪あかりは夢のよう。OKOVOの人は夢のよう。
G	いつでも戻れそうだけれど、現実には戻れない。同じメンバーで同じことを繰り返すことはできない。懐かしい時。卒業したら、なかなか行けないのは悲しい。だから、戻りたいけど、戻れない場所。
H	小樽は憩いの場。現実逃避。
J	いつも思い出して、小樽は懐かしいところ。人もいいし、雪もいいし。全部が(いい)。
L	私たちの中では「小樽マジック」というのがあって、「韓国は現実、ここは幻想」みたいな。

(ii) 橙：小樽以外在住者

回答者	自分にとっての小樽
W	はい。戻りたいです。小樽が大好きになりました。(中略) (市民ではないのに) 図々しいけど、「戻る」です。
T	小樽に対しては、「橙と雪あかりがあるところ」という印象だけで、自分にとっては「小樽」そのものというより、雪あかりや橙や合宿に思い出があると思います。(中略) 雪あかりがあって、ボランティアをしているいろいろな経験があるということで、「小樽」だからじゃなくて、雪あかりでのいろいろな人との関わりが大事なんだ、と感じます。
U	どこの馬の骨かわからない都会の小娘を大歓迎・ウェルカムしてくれる町。とても可愛がってくれました。

（２）自分自身の変化

次に、もう一つの重要な継続動機である、この体験を若い人に伝えたいという「使命感」について理解するために、雪あかりの路の合宿型ボランティアに参加したことより生じた自分自身の変化についての発言を表５－９にまとめた。その内容は以下のとおりである。

まず、OKOVOのメンバーについては、「色々な人に対応ができるようになった」「人との関係について考えるようになった」など、対人関係についての変化に言及する回答者が多かった（F,H,A,L）また、語学の勉強をするようになったこと（C,F）に言及した回答者もいた。さらに、「旅行についての考え方」や「日本人についての考え方」など思想や価値観の変化について言及するものもあった（D,N）。

eVolの回答者からは、この点についてのコメントはなかった。小樽以外在住の橙の回答者からは、「リーダーや先輩としての自分の意識や成長」（T,U,V）、「語学を含めた学びや関心の広がり」（U,V,W）、「他者理解」（T）などの変化が挙げられた。

また、小樽在住者については、「人と関わること」「リーダーシップをとること」が苦手でなくなったこと（X,Y,Z,AB）や、「中国や韓国への関心」や「視野の広がり」（X,Z）などについて述べている。インタビューの回答では触れていないがXも雪あかりの路への参加をきっかけに1年間の韓国留学をしており、橙小樽在住者4人のうち、2人が韓国へ留学をし、一人が中国に研修に行った。また、Yは自分の変化について、「人が変わったくらい影響を受けた」と表現しており、橙の小樽在住者への影響の大きさがうかがえる。本インタビューの対象にはなっていないが、橙が設立される以前にも、雪あかりの路事務局ボランティア部会の手伝いをしていた小樽市内の高校生が卒業後に韓国や中国に留学をしたり、ウインケルのスタッフが海外で働くようになったりと、OKOVOを始めとした合宿型ボランティアを海外から受け入れてきたことは小樽関係者の進路や考え方、価値観に影響を与えている。以上より、雪あかりの路の合宿型ボランティアによる自己変化は、「他者との関わり合い」や「他者に対する理解」に関する変化が主であり、その結果、価値観や行動の変化が生じること、また、その変化は訪問者にも小樽在住者にも生じる相互作用であることが明らかになった。

表 5－9 自分の変化

(i) OKOVO

回答者	自分の変化
F	大学 1 年から OKOVO が始まったので、大学生活の半分は OKOVO。行く前には思っ てみなかった自分ができている。日本語を勉強したり。韓国人の友達や小樽の友達など、い い人たちに沢山出会った。今までもらわなかった愛情と暖かい気持ちをもたらした。(中略) 5 年前には想像もできなかった。色々な人を理解できるようになった。前は好きな人だ けに囲まれていたけれど、今は色々な人に対応できるようになった。
C	消極的な性格だけど、映像係なので、仲良くなるのは難しいけど、表現できるようにな った。カメラの装備を大切にするようになった。
H	人と人のつながり一きずなについて考える。その前は大切に思っても、関係について考 えたことはなかった。(中略) それから雪が好きになった。雪をみると小樽を思い出し、OKOVO を思い出す。女子大 出身で、遊びに行くことがあまりなかったが、遊びに行くことが増えた。
A	色々な特徴を持っている人びとと出会うので、融化させることを知った。一緒に何かを することができるようになった。人の特徴に合わせて、できる。
C	OKOVO 前も日本語の勉強をしていたが、もっとするようになった
D	変化かどうかはわからない。普通の観光はいらないと思った。OKOVO の旅行が本当の 旅行だ。OKOVO から帰ってきてからは、行った先の友達と遊ぶために旅行に行く。旅行 の目的が変わった。(中略) ヨーロッパに行くなら、ヨーロッパの人と一緒に何かしたい。創ったりするなら行きたく いけれど、ただ見て、そこに行ったことあるみたいな旅行はしたくない。見るだけなら本 もあるので、見るだけの旅なら行きたくない。
L	それまでは自分が住んでいる地域や通っている大学の人たちが知り合いの半分以上でし たが、OKOVO に参加してから専攻や職業・・・いろんな人に触れ合って、地域もさまざ までした。そのあとに全国(韓国国内)旅行に行っても、その地域地域に知り合いがいる ほどになりました。
N	自分が初めて日本に行った時、日本には関心がなかった。韓国人は日本人についてはよ く思っていなかった。生まれてから一度も日本の人と会って、話をしたこともなかった。 そういう人が日本人と仲良くなって、仕事をしたり、飲み食いすれば、そういう人だから こそ、交流を熱心にしてくれると思う。大変な仕事も一緒にして、個人ベースで仲良くな る。

(ii) 橙：小樽以外在住者

回答者	自分の変化
T	(橙の) リーダー的存在が周りの人に配慮しながら関われるのを見て、自分に足りないことがわかった。(中略) それで今回は周りのことを気遣って、自分のことだけでなく、みんなが楽しめる環境を創りたいなと思って行動しました。(中略) 中国人や韓国人に話しかけても日本人とはまったく違う対応で、興味ないとそっぽを向くと「俺のこと嫌ってるのかな」と思っていました、今は文化が違うとわかりました。挨拶して返事してくれなかった人も、「ここに来た目的は交流やボランティアだけじゃないんだな」とか。観光・文化を目的に来た人もいて、その人それぞれの背景を察しようという習慣が今年はつきました。(中略) 初めは自分のことしか考えてなくて、自分の価値観だけで判断しているというところがありました。
U	私は英語専攻なので、外国人と交流できるボランティアでは自分が活躍できると思っていましたが、韓国人や中国人は日本語も英語も話せない人が多い。だから韓国語話せる人がコミュニケーションのトップにいて、すごく悔しかった。語学専攻なのに！(他のメンバーに向かって) それでもうやめちゃったけど、その後、一緒に韓国語勉強したよね。(中略) 橙から一番影響を受けています。(中略) 視野が広くて、問題意識が高くて、今年は20数名いても配慮できている。慣れもあるんだなと今年思いました。どんなことをするのかあらかじめぜんぶ把握しているからそれだけの気遣いができる。(中略) 同い年や一つ上という同年代の仲間がそうやって隣で頑張っているということに強く影響を受けました。年上とは違って感情移入が強く、影響を受けました。(中略) 2週間が・・・1週間ですけど(注：今年は部分参加)、濃密なんです。毎日毎日、新しい友達ができるんです。それも大きい収穫。私はずっと実家暮らしなので、海外とかも行くけど、同年代とルームシェアというのは自立できる経験。どうしても実家では親に頼ってしまう。必然的にご飯も出てくる。すごく自立できた。言語面でもそう。
V	2回目参加ということで自分は今回OGなんですけど、初回は「参加者」という感じで、見るもの・すること新しく「わあー！」という感じでした。でも2回目は自分が知っている小樽のメンバーがリーダー役になってやっていたり、SkypeでOB・OGがミーティングがあって、運営側の大変さとかがわかりました。今回は人数が多くて調整もありました。そういう部分を見て「自分に何ができるかな」と考えました。(中略) 雪あかりで出会った人も、自分が中国に行った時も、暖かく迎えてくれました。いつでもメールで連絡とれるような友達もいます。もっと中国のことを知りたいと思うようになりました。3年生の春休みに中国政府が日本人学生100名を中国に招待するプログラムがあって、参加しました。自分の中の、とくにアジアに対して「もっと知りたいな」という幅が広がりました。
W	「何か始めなきゃ」と思って、英語の勉強をまた始めました。前向きになるので、いいことかなと。(中略) 地域のいろいろな世代の方や、ふだん関わらない人たち---OKOVOやeVol含めて---いろいろな交流やお話できたのはとても貴重な経験でした。自分がそれに刺激を受けて前向きに「他のボランティアしたいな」「もっと勉強しなきゃな」と思うようになったのは大きかったです。

(iii) 橙：小樽在住者

回答者	自分の変化
X	人と関わるのが楽しくなった。あまり好きじゃなかったんですけど。初回で地域の人や外国人と話して楽しかった。中国・韓国に興味なかったんですけど興味が湧いた。チームとしてなにかやるという経験があまりなかったので、いい経験ができた。合宿に参加した人の輪が広がるのを見ると、そういう人がつながる場を提供するのは素敵なことだと感じました。
Y	人が変わったくらい影響を受けました。夏休みに韓国に語学留学しました。高校生のときに外国人との交流もボランティアにもまったく興味なかったんです。（中略）韓国もですが、どんどん小樽が好きになりました。もともと小樽に残る気はまったくなかったんですが、こんな素晴らしい人がたくさんいる場所に残りたいと思うようになりました。（中略） あまりリーダーしたことはありませんでしたが、今年現場リーダーやってみて、考えることが多くて、人のことを・・・「今、この人は何をしたいんだろう」「どう思ってるんだろう」と思う機会がたくさんあって、そういうことを考えられるようになりました。
Z	去年は（活動をする時に）「周りを見るようにしよう」と思って（いました）。視野の広がり。2年目だから見れるかなと思いました。（中略） （雪あかりの路の）半年後に中国に研修に行きました。それも雪あかりの影響かも。10日間だったので観光みたいでしたけど、中国・韓国の人と関わりたいと思うようになりました。（中略） 人と話すのは得意ではありませんでしたが、雪あかりは「話す」のが前提。それが楽しくなっています。
AB	初対面の人とも話せるようになって、それが就職活動で役に立ったかも。地域の人・年上の人と話す機会があって、話しやすくなった。（中略） ボランティアは初めてだったので、道外から来たボランティア体験者の人たちがいて、経験を積んでるだけに改善点もどんどん出せました。自分は大学で野球しかやってこなかったんで、その人たちを見て自分が「考えて大学生活を送ってなかったな」と、自分を見つめるきっかけとなりました。（中略） 新しく始めたことは、北海道、小樽・札幌すら出たことがなかったのに、メンバーと旅行にも行くようになりました。3月に地元の人と韓国に行きますが、雪あかりがなかったら、まずそういうことはしなかったと思います。橙小樽・東京メンバーと行きます。（中略） 出たことなかったわりには、小樽のこともぜんぜん知らなかった。金券もらってお店に行くんですけど、お店のこともぜんぜん知りませんでした。（中略） それから、OKOVOのBBQ（行事に参加すること）を口実に、10日間ひとりで旅行しました。ソウル、大田でBBQ、全州、清州、ソウル。BBQ以外は10人くらいのOKOVOのメンバーに会いました。9泊のうち、1泊以外は誰かの家に泊めてもらいました。遊んだり食べるお金も、OKOVOの人たちが出してくれました。車を出してもらったり、バスに乗ったり。（中略） （OKOVOのメンバーは）めりはりがある。日本人の最近の若い人はできない。OKOVOは真面目なときは全員一致団結、遊ぶときは全員がはっちゃける。楽しんでいる。日本人にはなかなかできないので、それに近づけたらと思います。

（３）OKOVO体験の他の類似観光との違い

次に、このような合宿型ボランティアの特徴をより明らかにするために、合宿型ボランティアを参加者がどのように捉えているのかインタビューの該当する発言内容をまとめた（表５－１０）。

初めに、OKOVOの回答者については、「小樽の人たちと一緒に自分たちも雪あかりの路を作っている」ホストである点が、通常の旅行とは異なると考えている（A,B,C,F,G）。それは、「奉仕」のような強者が弱者を助ける活動ではなく、「一緒に」創造する活動であり、「観光ではない」（B,C,D,E,G）。また、OKOVOの活動は、「生活」と一緒になっている（F,H）。これは、自炊のできる宿舎に他のメンバーとともに滞在し、毎日そこから雪あかりの路の現場に通っている生活のサイクルがあることから得られる感覚だと考えられる。また、雪あかりの路での関係は、「利害関係がない」（D,N）ことや、地元の人と過ごし理解をすること（D,E,N）など、対等な関係性を示唆する表現があった。

次に、eVolの回答者からは、「家族」のようであり、心の奥を話したいとの発言があった。小樽以外在住者の橙の回答者からは、OKOVO同様に自分たちがもてなす側であり（W）、目的を共有している（T,V）との発言があった。このような目的の共有があるからこそ、雪や寒さなどの厳しい環境のもとでも頑張っていける（T）との発言もあった。また、活動の特徴として、言われたことをただやるだけではなく「裁量権がある」（U,W）という発言もあった。橙の小樽在住者からは、「消費する」祭りではなく、「作る」ことが、この活動の特徴だとの発言があった。また、それは暖かさのある手作り感のある活動でもある。

ボランティア・ツーリズムは、無償の仕事を目的とした観光であるがあるが、有償の仕事である「バイト」との違いについては、バイトは「賃金」のために気持ちを「割り切って」やらなければならないことを行う行為だと考えているが、橙での活動は「やりたいこと」ができる（W）。また、他の国際交流との違いについては、「作業を通じて頑張る」中での交流なのか、交流のための交流なのかが違いだと感じている（T）。

以上のように、本項では、ボランティア・ツーリストにとっての「小樽」や自分自身に起こった変化や他の類似体験との違いについて整理した。

表5-10 合宿型ボランティアの特徴

(i) OKOVO

回答者	合宿型ボランティアの特徴
A	韓国人も日本人と<u>一緒に作っている</u>。(中略) 観光客は、自分たちのオブジェを見て、感動してくれた。自分たちは感動させる側。(中略) (OKOVO と) ワークキャンプは似ている。地元の人のために奉仕する。色んな国から集まってやる。でも、ワークキャンプは、一回で終わる。OKOVO の場合は続くところが違う。(中略) 自分が小樽に行かなくても、OKOVO の人と会ったりできる。ワークキャンプは続かない。
B	奉仕の感覚ではない。奉仕と言ったら、弱い人を助けるけれど、それとは違う。観光では絶対ない。観光はどこかに行つて有名なものをみたり、グルメしたりすることが思い出。OKOVO は一緒に活動をしていることが思い出。韓国人でも日本人でも色々な人が集まって、一緒に活動をしたことが記憶に残っている。(中略) もちろん観光にもそういう観光があるかもしれないけれど、20 日間ずっと人と関係がある状況というのは普通ない。小樽にいる時間は観光客ではない。(中略) 雪あかりは 8 期とも話せるし、通じる。自分は 6 期とは直接の思い出なくても、活動については話せる。共通のことを知っている人。雪あかりが変わらなければ話せる。
C	感動する人を見て、自分も感動する。観光は消費(お金を使う、時間を使う、遊びが目的)で終わるが、OKOVO は生産して感動させるところが違う。
D	普通の観光はいらないと思った。OKOVO の旅行が本当の旅行だ。OKOVO から帰ってきてからは、行った先の友達と遊ぶために旅行に行く。旅行の目的が変わった。(中略) ヨーロッパに行くなら、ヨーロッパの人と一緒に何かしたい。創ったりするなら行きたいけれど、ただ見て、そこに行ったことあるみたいな旅行はしたくない。見るだけなら本もあるの、見るだけの旅なら行きたくない。(中略) OKOVO は、本当の旅行。現実から離れて、新しい人生を生きること。小樽の人が知っていることを知る。食べる。地域の人と離れて、自分だけで行って見るのは「見世物」。(中略) OKOVO のメンバーにはどんな利害も関係ない。ボランティアをするためだけに集まった。計算しない方がいい。
E	観光は見るだけ。OKOVO は<u>地元の人と話したり、小樽を理解するようになる。愛するようになる</u>。感動して、OKOVO の人を忘れられない。また行きたい。
F	<u>生活と一緒にになっている祭り</u>。日本人ボランティアは余った時間で来るけれど、OKOVO は<u>固定的なボランティアなので、ホスト意識がある</u>。自分の会場もある。
G	観光客は消費して帰るけど、OKOVO は<u>自分も役に立っている</u>。観光は体験して終わるけれど、<u>自ら何かを作ったり、スタッフとしてかかわる、地元の人と同じ立場になるところが OKOVO は違う</u>。観光客は地元ではない。OKOVO はその逆。<u>OKOVO はホスト(主人)</u>。(中略) 例えば、7 期の時はお客さんが少なかった。雪あかりは赤字だった。副団長だったので、毎回(実行委員会の)会議に出て、客数を聞いて、自分も反応していた。(中略) 一緒に行っていなくても共通の話ができる。エピソードは違うけど、話が通じる。毎日繰り返して、20 回話しても笑える。
H	小樽は旅行ではなくて、<u>生活みたいだった</u>。見るだけじゃなくて、人に触れて、色んな経験をして、学ぶこと。地元の人たちと生活して話して、学ぶ。
N	民間交流はたくさんあるけれど、本当の民間的交流があるかどうか。<u>利益が関わらない</u>。政府も企業も関わらない形はなかなかない。

(ii) eVol

回答者	合宿型ボランティアの特徴
R	やっぱり家族みたい。色々な話もできて、気にしない。 <u>心の奥を話したい感じ</u> 。みんなと知り合いになって、どんどん知り合う。最初あまり知らなかったメンバーと話を通じて知り合う。それがいい感じ。

(iii) 橙：小樽在住者以外

回答者	合宿型ボランティアの特徴
T	いろいろありますが、ひとつは、みんなで一つの目標に向かうのが魅力でした。<u>雪や風がたまたま強かった</u>ので、みんなで支え合って<u>頑張る</u>体験が良かったです。（中略） もうひとつ、韓国や中国の人たちと交流。短期間でどんどん仲良くなれるのが良かったです。（中略） （仲良くなれるのは）夜に飲み会をするのがあげられます。ただの交流じゃなくて、作業を通じて頑張っていこうという共通の目標があるからこそ、仲良くなれる。（中略） 二年生ぐらいの時に海外交流サークルにいたんですけど、それは海外の人がたまたま日本に来たら料理とかでもてなす「ただの交流会」でした。雪あかりは、みんなで頑張ってる中で交流するので交流の密度や楽しさが違いました。（中略） 交流は作業中もたくさんやっている。話したり。同じエリアを担当していることで、同じ目的意識で絆が強くなるというのはあるかも。オブジェに関しては担当はぜんぜん違いますが、夜の点灯がおわってから管理するゾーンは一緒なので「ここは大丈夫なの？」とか。目的意識はまったく同じ。（中略） 雪あかりは目的があるので、「みんなで頑張ろう」というがあるので、モチベーションが上がる。目的は決っていても、手段は自分たちで考えて工夫できるのが雪あかりの良さ。
U	会ったら「おつかれさま」「どうしてるの？」と話すし。ふざけてるけど。（笑）みんなチームなんで。それが（交流を深める理由としては）大きい。一つ屋根の下に24時間一緒にいる。そこが大きく違う。（中略） 24時間も一緒にいたら、疲れるじゃないですか。大学では「ONの私」「大学生としての私」がありますが、24時間一緒にいると、いろいろな人間の顔があって、嫌でもさらけ出す。生活習慣のもろもろが露になるんですよ。今年それを痛感しました。そういうのを見ると、見方が変わってきます。（中略） 今年橙に参加した男の子が言ってたのは、「僕、いろんなボランティアたくさんしてるけど、どれも無賃労働感・ただ働き感があるけど、橙はそれをまったく感じさせない。かつ貢献できる。それって、稀で貴重だよ」それにはとても共感しました。どのボランティアでもある無賃労働感を、雪あかりではまったく感じない。（橙は）楽しめる、そして裁量権がある。雪あかりを盛り上げるために、オブジェや仕事内容を自分で考えながら行動できる範囲が広い。（中略） （雪あかりの路は）「自分たちがやっている」と思っています。
V	私も不思議に思っています。ひとつは環境です。中国人・韓国人にとっては普通ではなくて、自ら望んで来ている違う環境で、我々も同じです。<u>同じ時間を共有して同じものを作った</u>。それだけで仲間意識ができるのかな、と。一緒に参加していない人でも「雪あかり参加したよ」と聞くと、なんとなく親近感があります。オリンピックみたいに何千人も参加するわけではないので、心の距離が縮まりやすい。
W	<u>自分たちがもてなす側として・・・ボランティアとして、お客さんとしてじゃなくて、お客さんが求めていること、お客さん目線で求められている以上のことをしなくちゃいけないし、そうできたらいいなと考えました</u>。旅行者として行くのとぜんぜん違う。（中略） バイトは「作業」。気持ちがあまり入らない。ボランティアは、お客さんの気持ちになって考えられる。バイトは割り切ってます。賃金も発生してるんで（笑）。「やらなきゃいけない」。雪あかりでは、自分がやりたいこともできるというのも違う。

(iv) 橙：小樽在住者

回答者	合宿型ボランティアの特徴
Z	他のお祭りは、一般市民目線では「消費するお祭り」。屋台があつたり食べたり。雪あかりはまったく違います。消費よりは <u>その空間を楽しむ、自分自身で作る。手作り感や暖かさが圧倒的に違う。</u>

(注) 強調のための下線は筆者による。

5-4 考察

(1) 変化する動機と交流の重要性

前項までの調査結果を踏まえ、ボランティア・ツーリストの初期参加動機と継続動機についての考察を加える。初めに、初期参加動機の内容だが、アンケートにおいてもインタビューにおいても、観光要素の強い動機が主な動機だった。これは、Callanan and Thomas (2005) の分類による「浅い」ボランティア・ツーリストに該当する。しかし、前章で考察したとおり、団体としてのOKOVOは、雪あかりの路の主要団体の一つであり、責任の重さは地域の参加団体と同等かそれ以上であり、同分類の「深い」ボランティア・ツーリストに該当する役割を担っていると考えられる。eVolや橙についても、同様のことが言える。

個々の継続動機については、「人」や「交流」に関する要因、すなわち「関係性」に関する要因がアンケートでもインタビューでも一番強い動機となった。また、このような体験を若い人たちにも持って欲しいという「使命感」や「小樽の魅力」「オブジェ作りへのこだわり」もアンケートとインタビュー双方で重要な動機として挙げられている。これらのことから、ボランティア・ツアーの参加者たちは、当初から継続参加への関心や意思を有していた訳ではなく、ボランティア・ツアーの現場での体験を通して、交流や使命感、小樽の魅力、仕事内容を動機として再訪したいという思いを持つように変化したと考えられる。

ボランティア・ツアー参加によるボランティア・ツーリストの意識や行動の変化については、より長期でより明確な社会的課題³⁰を取り扱うツアーについては、参加後の社会運動への参加や支援にポジティブな変化が生じていることが明らかになっている (McGehee and Santos 2005)。また、このような変化を促進するために、ツアー期間中やツアー後の参加者間のネットワーク作りや意識高揚活動の重要性について提言がされている。しかし、地域イベントを対象としている雪あかりの路のケースとは異なり、同研究の対象となったツアーはより深刻な社会課題の解決を目的として掲げている。また、1団体を除いて、参加期間が3か月以上に及ぶことなどから、「中程度」または「深い」ボランティア・ツーリストを対象にしたものである。一方、OKOVOを始めたとした雪あかりの路の合宿型ボラン

30 同研究では3団体が主催したボランティア・ツアーの参加者にフォーカス・グループ・インタビューを実施した。対象となった団体は、American Jewish World Service(AJWS)、World-PULSE(WP)、Mobility International USA(MIUSA)である。AJWSは人道支援、WPは低所得者支援、MIUSAは身体障害者支援を目的としており、それぞれのボランティア・ツアーの期間は3か月 (AJWS)、9か月 (WP)、2-3週間 (MIUSA) である。

ティア・ツーリストの事例では、「浅い」ツーリストであってもツアーを通じて変化が起きていること、また、その変化の連鎖により、ツーリストによる自律的な団体運営が継続している点がMcGehee and Santos (2005) が取り上げたケースとは異なる。

次に、継続動機の中でも、特に多くの参加者から指摘のあった「交流」について考察する。受け入れ地域と観光者の関係性を変えるかもしれないと期待されているボランティア・ツーリズム研究においては、地域と観光者の関係について論じられることが多いが、その論点は、訪問地域を消費の対象とみる「商品化」としての関係性か否かという議論が繰り広げられてきたことは第2章で述べたとおりである。一方、雪あかりの路の事例では、実行委員会も含め、関係者が全てボランティアであり、小樽の関係者と3団体の参加者間の交流は、公式な行事においても、非公式な宿舎訪問においても、双方向性の高い、対等なコミュニケーションによる交流である。また、会期終了後も日常的にSNSなどを通じたやり取りが行われており、雪あかりの路という場で始まったボランティア・ツーリスト間や受け入れ地域の人々との関係性は継続している。また、会期外における相互訪問も年を経るに従い活発化している。このような交流のあり方は、＜モビリティ＞社会において、SNSなどの情報のやり取りが活発になることが、さらに人の移動を加速とするアーリの主張と一致している（Urry2007=2015:256）。

（2）OKOVO参加者にとっての小樽と雪あかりの路

次に、OKOVOのOBOGの継続参加の動機で重要な意味を持つ「OKOVO参加者にとっての小樽」と「小樽での体験」について考察を加える。

まず、OKOVO参加者の「小樽での体験」は、「小樽の自然や人」という前提があって成立しており、その体験に場所と結びついた固有性があると考えられる。具体的には、雪の降る小樽での「厳しい寒さ」が「目的の共有」を強化し、その結果として、「一緒に作る」仲間として交流が深まるという体験である。

この、「一緒に作る」仲間としての体験は、「自分の変化」や「活動の特徴」で語られた自己認識に密接に結びついていると考えられる。それは、自分は「観光」をしているのではなく、「もてなす側」であるという認識である。ボランティア・ツーリストが自らを観光客（ツーリスト）と考えていないという指摘は、Wearing(2001)の指摘と一致する。また、Sin (2009)、Swarbrooke (2003)、Campbell and Smith (2006)、Halpenny and Caissie (2003)、Ellis (2003)はボランティア・ツアーの参加者は、自らを「ボランティア・ツーリスト」ではなく、それぞれの活動（サービスラーニング、アドベンチャーツーリズム、エコツーリズム

ム、環境調査など）の参加者だと認識していることを明らかにしたが、雪あかりの路の合宿型ボランティア参加者らの多くは自らを「雪あかりの路のボランティア」と認識しており、「ツーリスト」もしくは「観光」という表現には否定的だが、「ボランティア」に対しては肯定的である。このようにボランティア・ツーリストが「ツーリスト」としての自己認識を持たない傾向があるのは、文化や環境について意識の高い旅行者は、（マス）ツーリズムを非常にマイナスとみているために、（マス）ツーリストとレッテルを貼られることを好まないことが、一つの理由だと考えられるが、雪あかりの路合宿型ボランティアのスケジュールには実際にほとんど観光の時間がないこともその理由だと考えられる（MacCannell 1976, 1992）。

加えて、雪あかりの路の活動では、人との関わりやリーダーシップ、他者理解における自己成長が体験され、考え方や価値観の変化を体験した参加者もいた。ボランティア・ツーリズムにおける自己発見や自己成長、価値観の変化などは、これまでのボランティア・ツーリズム研究においても認められてきたことである（Wearing 2001等）。欧米（Western）のボランティア・ツーリストが発展途上国に行くケースを対象としてきたほとんどの先行研究では、これらの変化は訪問先の文化や現状に対峙した結果として生じたことがほとんどであった。雪あかりの路では、日本や小樽の人びとに対してと共に、参加者間での影響が大きかったことが特徴的である。

最後に、活動の特徴として、「裁量権」があることを挙げたボランティア・ツーリズムの事例はこれまでほとんどなかった。これは、ボランティア・ツーリストの現場でのマネジメントに関する研究がほとんどないことに加え（Benson 2011:248）、研究対象がオブジェ作りのボランティアであり、創作が活動の一つであったことが理由の一部であると考えられる。

5-5 まとめ

本章では、継続するボランティア・ツーリズムにとっての鍵となる継続参加者の初参加動機と継続参加動機について、アンケートとインタビューを通じて調査をし、その内容を整理した。

その結果、ボランティア・ツーリストは初期参加時には観光的動機が強いが、継続動機では小樽という場所の魅力や交流が重要な役割を負っていること、などが明らかになった。

それは、「厳しい寒さ」の中で「共通の目的」のために活動する「仲間」としての体験であり、そこでは自己成長や自己変容を体験する者もあった。また彼ら彼女らは、自分たちは「観光客」ではなく「もてなす側」の「ボランティア」である自己認識をしていた。このような関係は、従来の消費者としての観光者と、サービス提供者としての「地域」とは異なり、旅行者であるボランティア・ツーリストも共に責任を持ってイベントを作っていく関係である。

しかし、これはあくまで地域活動の一部について責任を持つということであり、福祉や医療、防災、教育など地域の根幹を支える一員になった訳ではない。こうした地域への関わりがモビリティ社会における期間限定的、分野限定的な地域コミュニティのあり方を示唆している可能性もあると考えられるが、この件については、他の事例も合わせ、7章で検討したい。

第6章 ボランティア・ツーリストの初期参加および継続動機：「越後妻有大地の芸術祭」＜こへび隊＞

本章では、＜モビリティ＞社会におけるボランティア・ツーリストと地域が構築する関係性およびその背景にある両者の動機、関係性を支える仕組みについて明らかにするために、新潟県十日町市と津南町で2000年から3年ごとに開催されている「大地の芸術祭」のボランティア組織の一つである＜こへび隊＞を取り上げる。先述のとおり、＜モビリティ＞社会の特徴の一つは、「共在」「不在」の時を通して関係性が続くことである。本章で取り上げる＜こへび隊＞は、1999年から15年以上の実績があることに加え、芸術祭期間中の複数回参加や期間延長が可能なほか、複数年に渡る継続参加の実績もある。また、活動内容が多岐にわたり、多様な役割を取る余地があるため、多面的に活動の継続性を考察できると判断した。

6-1 調査の目的と方法

本章では、具体的には、以下のリサーチクエスチョンに答えていく。

第1に、地域とボランティア・ツーリスト（団体）は、どのような関係性を構築しているのか。地域とボランティア・ツーリストはそれぞれ、活動を実現するにおいて、どのような役割を果たしているのか。

第2に、どのような仕組みにより、これらの関係性は実現しているのか。

第3に、このような関係性を実現している地域とボランティア・ツーリスト（団体）それぞれの動機は何なのか。特に、長期または継続参加しているボランティア・ツーリストの継続動機はなんなのか。

調査方法は、参与観察と聞き取り調査である。参与観察は、2009年秋の予備調査を経て、2010年春から本格的に開始した。調査地は越後妻有に限らず、東京での＜こへび隊＞の活動を含め、2012年夏の大地の芸術祭が終了し、撤収するまで続けた。調査方法としては、大地の祭りや大地の芸術祭および会期外活動に＜こへび隊＞のメンバー（以後、＜こへび＞）として参加した。

加えて、複数回参加者より具体的な情報を得るため、2012年大地の芸術祭に2週間以上（同

一会期中の複数回参加者含む）参加した9名の〈こへび〉に、2012年7月から10月に渡り、聞き取り調査を行った。聞き取りは半構造化インタビューで、理論的飽和（Flick 2011:145-146）に達するまで、サンプルを追加した。

聞き取り調査は、15～30分の短いものも一部含まれるが、ほとんどは1時間半程度を要した。〈こへび〉に対しては、（i）〈こへび隊〉に参加したきっかけと動機、（ii）〈こへび隊〉での体験とその意味、（iii）継続している理由、（iv）今後の関わり方について、を中心にインタビューを行なった。地域住民に対しては、（i）居住集落と芸術祭の関わり、（ii）芸術祭に参加することによる集落の変化、（iii）〈こへび〉との関わり、を中心にインタビューを行った。

また、補足的な資料として、〈こへび事務局〉が実施したアンケートを参照している。アンケートの方法と概要については、該当箇所の説明する。

6-2 大地の芸術祭における〈こへび隊〉の位置付けと活動内容

(1) 大地の芸術祭における〈こへび隊〉の位置付け

初めに、リサーチクエスションとして言及した、地域とボランティア・ツーリスト（団体）の関係性とそれぞれの役割と、それを実現するための仕組みについての情報を整理する。第3章で、大地の芸術祭や〈こへび隊〉の目的や設立にいたる経緯については述べたが、大地の芸術祭における〈こへび隊〉の位置付けが、通常、観光分野で地域と旅行者の関係性について議論される際の「ホスト（受け入れ地域）」対「ゲスト（ボランティア・ツーリスト）」という二項対立的な捉え方に単純には当てはまらない。それは以下の理由による。

第3章で述べたとおり、大地の芸術祭は、現代アートによる地域活性化プロジェクトの先駆けである。県の事業として始まったが、前例のない、しかも地域の多くの人びとにとって馴染みのない現代アートを活用した計画には地域からの反対が強く、当初1999年に予定されていた開催は2000年に遅れたほどである³¹。初回の参加集落は28あったが（第3章表3-2参照）、そのうち自主的に立候補したのは2集落だけであったことが（北川2014:231）、当時の状況を表している。

従って、本事例については、「ホスト（受け入れ地域）」と「ゲスト（ボランティア・ツーリスト）」の関係性を考える際に、「ホスト（受け入れ地域）」と「ゲスト（ボランティア・ツーリスト）」の間にある「受け入れ団体」自体が当初は地域に受け入れられていなかったということを考慮する必要がある。すなわち、地域の人びとからは、対象プロジェクトである「大地の芸術祭」や実施に関わる事務局スタッフなどを含めて、「外部者」として見なされていたということである。〈こへび隊〉は、それら「外部者」の一部という位置付けであり、〈こへび隊〉の地域との関係性は、「大地の芸術祭」が地域にどのように受け入れられるかということと密接に関わっていた。

そうした背景の中で、第1回の芸術祭では、7ヶ月の準備期間で146作品を制作し、53日間に渡る芸術祭を運営しなければならなかった。地域の人びとの積極的なボランティア参加が期待できない中で、「大地の芸術祭」における〈こへび隊〉の役割は、当初より重要で創造的であった。重要であったというのは、〈こへび隊〉が制作補助や運営に関わる作業の多くを担当したからである。創造的であったというのは、作品制作などにおける創造性

³¹ 当時の状況については、北川（2010:18-27）に詳しい。

ということもあるが、それ以上に、このような形での芸術祭、すなわち、ボランティアや地域住民の協力のもとに現代アートを用いて地域活性化を進めるという芸術祭の前例がこれまでになかったために、地域内外での広報活動、＜こへび＞の募集やマネジメント、期間中のアート管理などの運営方法などにいたるまで、全てを一から作らなければならなかったことを意味している。その状況について、手記では以下のようにまとめられている。

こへび隊は、何もかもを一から築き上げなくてはならなかった。

与えられたのは、茫洋としたフィールドと大きな理想。なすべきことは山のようにあった。しかしいったいどこから手をつけていいのか、暗中模索しながら、とにかく前へ進んでいくしかなかった。(越後妻有大地の芸術祭実行委員会 2001:207)

芸術祭の回数を重ねるに連れ、参加集落も増加し（第3章表3-2参照）、地元サポーターの組織化も始まった。このように、＜こへび隊＞を含む芸術祭関係者に対する地域住民の理解と協力は深まってきている。それには、芸術祭の経済的な効果や芸術祭訪問者の増加による市民の地域への誇りの醸成などの影響もあると考えられるが、それと同時に、芸術祭の現場において＜こへび隊＞を含む関係者が活動が続けてくる中で生まれた相互理解の影響も大きいと考えられる。中でも、2004年10月の中越大震災の復興支援のために、震災翌日から始めた「大地の手伝い」で築かれた「人間関係、信頼関係」は、地域の空き家を活用したプロジェクトの増加につながるなど、一つの大きな転機となった（北川 2014:236）。

（２）＜こへび隊＞の自律性

＜こへび隊＞は大地の芸術祭プロデューサーの北川氏の要請で設立された団体であり、前項で述べたとおり、地域の人びとからは「芸術祭」関係者の一部と見なされている。しかし、その活動は、芸術祭事務局等から細かな指示があった訳ではなく、当初より自律的であった。立ち上げは、北川氏の知り合いであった20代前半の若者3名を中心に行われた（北川 2005:287）。1999年11月に第1回のボランティア説明会が開催され、12月には活動が開始した。その当時の＜こへび隊＞の活動に対する姿勢や、北川氏との関係性については、2000年春に行われたシンポジウムに現れる呼称、すなわち、「自分たちが何者か」に

についての意識と、「地元広報」と呼ばれる活動に表れていると考えられる。以下に簡単に説明をする。

1) <こへび隊>という名前と妻有ボランティアシンポジウム

<こへび隊>の募集は1999年11月に始まり、その後、12月の現地ツアーを経て、2000年より本格的な活動が開始されたが、芸術祭実行委員会による記録では、1999年は「ボランティア」という呼称を、2000年以降は<こへび>という呼称を使用している（越後妻有大地の芸術祭実行委員会 2001:209）。これは、大地の芸術祭を支援するボランティアとして活動をするに当たって、自分たちが「時間やお金に余裕がある人たちがする活動というイメージがあった『ボランティア』（十日町市 2012）と呼ばれることに抵抗があったためである。その時の様子を越後妻有大地の芸術祭実行委員会（2001）は、次のように要約している。

「こへび隊」とは、なんだったのか。

「首都圏を中心とした学生ボランティア」

「東京から来たサポーター」

「若者を中心とするボランティア」

マスコミではそう形容されることが多かった。対外的にはそうかも知れない。何も知らない人に説明するには、確かに手っ取り早い呼び方だろう。

「ボランティアと呼ばれるのを嫌い、もっと主体的に参加し積極的な役割を担うといった意味合いで自らを『サポーター』と呼び、『こへび隊』という愛称がつけられた」かなりの確な表現だろう。

なにしろ2000年3月には、「大地の芸術祭におけるボランティアの意義—ボランティアに代わる新しい呼び名はないのか—」と題してシンポジウムまで開いているのだ。（越後妻有大地の芸術祭実行委員会 2001:205）

<こへび>という呼称がどれだけ自主的に決められたかについては、<こへび隊>の立ち上げメンバーの一人が、以下のように振り返っている。

それまでは、「こへび隊」という名前はなかったんです。2000年3月の定例会でこの集まりの名前を募ったら、三つの候補があがり、フラムさんはどれもイヤだったみたい

でした。とりわけ「こへびだけはやめておけ」と（笑）。でも、多数決をとったら、圧倒的にこへびで……。妻協連＝妻有協働連合で、通称こへび隊。そしてなぜか、この「こへび隊」という通称だけが定着していったんです。（北川 2005:285）

また、2000年3月に「妻有ボランティアシンポジウム」と称して、北川フラム氏以外にもゲストを呼び、＜こへび隊＞のメンバー数名が壇上に上がるパネルディスカッションが開催された。ボランティアと呼ばれることを否定し、自分たちで名称を選択した行為から、北川氏の呼びかけにより始まった活動であるが、＜こへび＞たちが設立当初から主体的かつ自律的に活動をしていた様子がうかがえる。

2) 「地元広報」活動

＜こへび隊＞の設立当時の自律性を表すもう一つの事例としては、初回の芸術祭の実施前の2000年3月から5月にかけて行われた「地元広報」活動が挙げられる。これは、集落の一軒一軒を回って、「大地の芸術祭」についての説明をするという活動である。この活動が始まったきっかけについては、北川氏が発案したと当時の＜こへび＞は理解をしているが、北川氏は「行った方がいいっていったかもしれないけど、具体的にはまったくタッチしていない」（北川 2005:288）と述べている。当時の中心メンバーは、地図で分担を決め、自分たちで計画を立てて、戸別訪問を行なった。

当時の地域住民の芸術祭に対する理解は少なく、説明をしようとして、追い返されることも少なくなかった（北川 2005:287-288、北川 2010:77-82）。しかし、泣き出すメンバーや胃が痛くなるほど辛い活動だったが、＜こへび隊＞は每晚報告会を開き、コミュニケーションの仕方を工夫し、自炊をしながら、広報活動を続けた。自身も＜こへび＞の出身で、のちに芸術祭の共催者となるNPO法人越後妻有里山協働機構の事務局長を勤めた関口正洋は、活動について以下のように述べている。

この時の経験は、こへび隊一人ひとりにとって、その後幾多となく訪れる危機を乗り越える糧となった。地元の目に映る姿も、回を重ねるごとに、「不審者」から「大地の芸術祭のこへび隊」へと変わっていき、中には共感してくれる人も現れた。制作に入ってから訪問した住民との交流が続いたケースもある（北川 2010:77-82）

このように、自分たちで努力をしながら、大地の芸術祭の一部としての〈こへび隊〉として、地域の人に認知されるようになり、また、大地の芸術祭自体が地域に受け入れられるために貢献をした。

（３）こへび隊の現況と課題

前節では、〈こへび隊〉設立当初の状況を振り返ることにより、同団体が芸術祭の一部として見なされていたことと、北川氏の発案でできた団体ではあるが、当初から自律性の高い活動を行っていたことを見てきた。大地の芸術祭が始まってから、10年以上が経ち、芸術祭を取り巻く環境も変化している。

環境の変化の一つとしては、芸術祭の規模が年々大きくなる一方で（作品数、参加集落数など）、〈こへび〉と同様の活動をする機会、すなわちアートを使った芸術祭の支援活動（例：瀬戸内芸術祭のこへび隊やリボン・アート・フェスティバルのこじか隊など）や、他のボランティアの機会が増えてきたことが挙げられる。その結果、仕事へのニーズは高いにもかかわらず、芸術祭開始当時に比べると〈こへび〉の募集が難しくなっていることが挙げられる。その影響は、実働者数が、2009年にかけて減少してきたことにも現れている（第3章表3-2を参照）。

このような課題への対応として、芸術祭の運営で中心的な役割を担うNPO法人越後妻有里山協働機構は、より組織的な取り組みを2012年から始めている。その中の一つが、初回に〈こへび〉として参加したH氏を責任者に指名し、初回〈こへび〉をリーダーとして、現役の大学生〈こへび〉の組織化を進めたことである。これをきっかけに、2000年に参加した〈こへび〉には、すでにNPO法人越後妻有里山協働機構やアートフロントギャラリーなどで勤務している者もいたが、さらにそれ以外の初期の芸術祭に参加した〈こへび〉が有償無償の形で積極的に〈こへび〉活動に関わるようになった。

（４）〈こへび〉の活動内容と運営体制

これまでに、〈こへび隊〉の歴史的経緯と現在の課題について外観した。次に、より具体的に現在の〈こへび〉の活動を理解するために、本項では、〈こへび〉の活動内容と運営体制をまとめる。

１）〈こへび〉の活動内容

＜こへび＞隊の主な活動は、3年毎の「大地の芸術祭」と、その間に開催される「大地の祭り」やその他の関連イベントの支援である。具体的には、会期前の作品制作や広報の手伝い、会期中の展示会場での受付、作品メンテナンス、イベント手伝い、ツアーガイド、会期後の作品撤収に加え、会期外における作品メンテナンス（例：草刈、雪囲いなど）なども含む。加えて、芸術祭の最終的な目標が地域活性化であることから、必要に応じて、農作業その他を通じ、地域住民の支援も行っている。

2) ＜こへび＞の運営体制

＜こへび＞隊の活動は、実行委員会の指示の元に行われている。実際に＜こへび隊＞の募集や移動・宿舍のアレンジ、仕事の割り振りを行うのは、大地の芸術祭の企画運営を担うNPO法人越後妻有里山協働機構（以下、NPO）のスタッフである。夏の芸術祭のように規模の大きなイベントが行われる時期には、NPOの有償スタッフを支援しつつ、＜こへび隊＞による主体的な運営が可能となるように、「こへび事務局」が大学生を中心に3～5名で編成されることが通例となっている。＜こへび事務局＞の構成員は、以前の芸術祭や芸術祭会期以外に参加した経験者にNPOスタッフが声を掛けることで決まることが多い。

NPOスタッフと＜こへび事務局＞の役割分担は、その年の体制により多少変わるが、参加受付から東京～越後妻有の移動や宿舍の手配など、外部との調整や安全管理が必要となる業務はNPOスタッフが行い、より柔軟な対応が許容される＜こへび＞業務の設計や運用については、＜こへび事務局＞が責任を持つことが多い。後者には、＜こへび隊＞の重要業務である「作品管理」に必要な道具がまとめられたキットの設計やマニュアルの用意、宿舍での過ごし方などが含まれる。NPOスタッフと＜こへび事務局＞は、密接なコミュニケーションを取りつつ、それぞれの責務を実行する。＜こへび事務局＞の役割は、芸術祭全体の運営上も重要なものであり、代表者は会期中毎日行われる実行委員会の打ち合わせにも参加する。

NPOスタッフや＜こへび事務局＞に加え、実際の現場では、長期滞在者や複数回参加者が臨機応変に運営を支援している。特に社会人経験のある長期滞在者は、＜こへび事務局＞の手の回らない様々な雑務や新規参加者へのケアなどを自主的に行っている。中でも、退職者を中心としたシニアの＜こへび隊＞は、プラチナと呼ばれている。彼らは超長期で滞在することも多い。

また、ここ数年は、越後妻有だけではなく首都圏での広報活動等にも、社会人となった＜こへび隊＞経験者が積極的に参加するようになっているが、それらのメンバーには＜こ

へび隊>としての登録をしていない者もいる。また、先述のとおり、<こへび隊>とは別に、2012年からは地元サポーターを募集している。

3) <こへび隊>の現地での活動スケジュールや費用負担

<こへび隊>の大部分は越後妻有以外に居住しており、その多くは首都圏からの参加者である。そのため、会期中は東京～越後妻有間に週に1～2往復の「<こへび>バス」が運行される。乗車費は無料である。

越後妻有では、<こへび>宿舎が用意され、そこで合宿生活を送る。2012年夏は、閉校した中学の寮を利用した。各部屋には2段ベッドが8床あるほか、畳にも3人程度眠ることができる。また、朝食と夕食は宿舎で提供されるが、昼食はコンビニで調達することが多い。宿舎で支払う滞在費用は、2012年の場合、シーツ代(300円/滞在)、朝食(100円/食)、夕食(300円/食)であった。入浴は活動の帰りに外部の温泉施設を利用する（実行委員会の補助で100円/回）。

典型的な一日の流れは、表6－1のとおりである。表6－1の活動に加え、夕食後に短いミーティングを行う場合もある。

表6－1 <こへび>の1日

6:30	起床（まかない班は5時頃起床）
7:00	朝食
7:30	朝礼場所へ出発
8:00	朝礼と担当の発表
8:30～19:00頃	
	担当作品への移動と管理準備
	作品管理（開館は10:00～17:30）
	片付けの後、<こへび事務局>へ移動
18:30～20:00頃	
	入金・報告の後、入浴をし、宿舎へ移

出典：2012年「こへび手帳」を参考に筆者作成

6－3 2012年大地の芸術祭を事例として

(1) <こへび隊>のプロフィール

本項以下では、2012年の大地の芸術祭で得られたデータを元に、<こへび隊>が地域で果たす役割を検討して行く。まず、<こへび隊>の参加者のプロフィールだが、参加者全員のプロフィールについての詳細情報は入手できなかったため、<こへび事務局>が2012年の<こへび隊>参加者を対象に、参加のきっかけや動機を明らかにする目的で実施したアンケートを参考にする。アンケートの呼びかけは、実行委員会事務局のメーリングリストと<こへび隊>Facebookページを通して2012年9月会期終了後10日間行われ、125名の回答を得た（回収率26.4%）。なお、参加期間については、アンケートでは「2週間以上」が13.6%と回答しているが、実際に14日以上活動した<こへび>は7.2%であるため、回答内容を解釈する際には、長期参加者比率が高いことに留意する必要がある。

1) 職業年齢別分布

回答者の年代別性別職業別(学生または非学生)の分布は表6－2のとおりである。開始当時の2000年は大学生が主だったと言われているが（越後妻有大地の芸術祭実行委員会2001:228）、現在は会社員が4割を占めている。また、年齢も上がってきており、30代以上の参加者が半数以上を占める。

表 6－2 回答者の年代別性別職業別分布

(回答者数)		大学生、大学院生 (社会人学生を除く)	その他学生 専門学校、小中高生)	会社員	教員・公務員	自営業	フリー	その他	総計	構成比
10代	女性	8	4	0	0	0	0	0	12	9.6%
	男性	2	1	0	0	0	0	0	3	2.4%
	合計	10	5	0	0	0	0	0	15	12.0%
20代	女性	15	1	16	3	0	3	0	38	30.4%
	男性	8	0	4	1	0	0	1	14	11.2%
	合計	23	1	20	4	0	4	0	52	41.6%
30代	女性	0	0	9	3	2	2	1	17	13.6%
	男性	0	0	12	1	1	1	1	16	12.8%
	合計	0	0	21	4	3	3	2	33	26.4%
40代	女性	0	0	8	0	0	0	0	8	6.4%
	男性	0	0	2	0	1	0	2	5	4.0%
	合計	0	0	10	0	1	0	2	13	10.4%
50代	女性	0	0	1	0	0	2	0	3	2.4%
	男性	0	0	1	0	0	0	0	1	0.8%
	合計	0	0	2	0	0	2	0	4	3.2%
60代	女性	0	0	0	0	0	1	0	1	0.8%
	男性	0	0	0	0	3	3	1	7	5.6%
	合計	0	0	0	0	3	4	1	8	6.4%
総計		33	6	53	8	7	13	5	125	100.0%
構成比		26.4%	4.8%	42.4%	6.4%	5.6%	10.4%	4.0%	100.0%	

2) 大学生の専攻

大学生は全回答者の26.4%を占めるが、そのうちの約半数が芸術系を除く文系、4割が芸術系の専攻学生である（表 6－3）。理系や建築系の学生の割合は、約1割である。＜こへび隊＞に参加している大学生の芸術学部比率は高いと言えよう。その一方で、全国の理工系大学生比率は32.0%だが、＜こへび隊＞に占める理工系学生の比率は10.3%と低い。全国の文系学生比率は47.0%と、＜こへび隊＞の構成比率と大きな差はない。

表 6－3 大学生回答者の専攻

		芸術系	文系	理系、建築系	総計
女性	回答者数	12	13	2	27
	構成比	44.4%	48.1%	7.4%	100.0%
男性	回答者数	3	7	2	12
	構成比	25.0%	58.3%	16.7%	100.0%
総計	回答者数	15	20	4	39
	構成比	38.5%	51.3%	10.3%	100.0%

3) 参加の状況-複数年参加者

回答者のうち、複数年にまたがって参加した者は26名だった（表6－4）。それぞれの回答者が＜こへび隊＞への参加を開始した年は、以下のとおりである。2006年以降が多い。特に女性は2009年以降に集中しており、2012年に開始した回答者比率が、男性の同比率を約15%上回っている。また、回答者のうち、2000年の芸術祭開催以来、3年以上連続で参加した回答者は、男性女性とも6名ずつ(男性回答者の13.0%、同女性7.6%)で、2009年以降に参加開始をしたものが男性3名女性4名だった。男性のほうが細く長く活動に参加する傾向があると考えられる。

表6－4 ＜こへび隊＞活動の参加開始年

参加開始年	合計(人)	構成比	男性(人)	構成比	女性(人)	構成比
2000	2	1.6%	2	4.3%	0	0.0%
2001	1	0.8%	1	2.2%	0	0.0%
2005	2	1.6%	1	2.2%	1	1.3%
2006	5	4.0%	4	8.7%	1	1.3%
2009	6	4.8%	2	4.3%	4	5.1%
2010	4	3.2%	2	4.3%	2	2.5%
2011	6	4.8%	2	4.3%	4	5.1%
2012	99	79.2%	32	69.6%	67	84.8%
合計	125	100.0%	46	100.0%	79	100.0%

4) ＜こへび隊＞を知ったきっかけ

＜こへび隊＞を知ったきっかけとしては、「越後妻有大地の芸術祭の公式ホームページ」や「＜こへび隊＞の公式ホームページ」などネットによる情報をあげる回答者が多かった（表6－5）。＜こへび隊＞HPをみた29人のうち、19人は「越後妻有公式ホームページ」もきっかけとして挙げている一方で、「＜こへび隊＞に参加している人に誘われて」を挙げた回答者は4人、「友達から聞いて」は3人、「家族から聞いて」は1人と少なかった。芸術祭への関心から、公式に発信される情報により、こへび活動を知るようになったと思われる。

次に多かったのが、面識のある人からの誘いによる参加だ。「＜こへび隊＞に参加している人に誘われて」、「友達から聞いて」「家族から聞いて」などである。これらの回答を選択した回答者純合計51人のうち、「越後妻有公式ホームページ」をきっかけとして挙げたのは6人、「＜こへび隊＞の公式ホームページ」は7人と少なかった。

表 6－5 <こへび隊>を知ったきっかけ

きっかけ	回答者数	回答者純数 (125人)比	きっかけ	回答者数	回答者純数 (125人)比
越後妻有公式ホームページ	38	30.4%	こへび隊(2010年～)を通して	3	2.4%
こへび隊公式ホームページ	29	23.2%	瀬戸内芸術祭(2010年)で	3	2.4%
こへび隊に参加している人に誘われて	23	18.4%	越後妻有バスツアー、ガイドツアー	3	2.4%
友達から聞いて	21	16.8%	雑誌など	3	2.4%
渋谷ヒカリエでのトークイベント・写真展(2012年6月13～25日)	12	9.6%	越後妻有トリエンナーレ代官山インフォメーションセンター	2	1.6%
家族から聞いて	11	8.8%	以前のトリエンナーレを訪れて	2	1.6%
「こへび隊へのお誘い」フライヤー	8	6.4%	スタッフや作家に聞いて	2	1.6%
こへび隊公式Facebookページ	7	5.6%	地元の人や現地で聞いて	2	1.6%
2012年越後妻有公式ガイドブック	7	5.6%	横浜トリエンナーレ2011(Bankart)	2	1.6%
大学での掲示案内、説明会	6	4.8%	こへび新聞	1	0.8%
先生から聞いて	6	4.8%	棚田バンク	1	0.8%
その他	6	4.8%	会社で	1	0.8%
六本木アートナイト(2012年3月24・25日)	3	2.4%	十日町市報	1	0.8%
北川フラム講演会(2012年5月30日)	3	2.4%	回答数合計	206	—

(複数回答可)

5) 年代性別参加日数の状況

<こへび隊>のホームページでは、1週間以上の参加を好ましいと呼びかけているが、実際の参加日数は、「1-3日間」が一番多く36.8%を占める(表6-6)。年代性別では、20代30代の女性が多い。次に多いのは、「3～7日間」である。このふたつで、約7割の<こへび>を占める。一方で、「1週間～2週間」参加する回答者が17.6%、「2週間以上」滞在する回答者が13.6%を占めた。

これらの長期滞在者は、<こへび>活動の具体的なノウハウを身に着けているほか、参

加者や関係者との面識もあるので、多数の短期参加者が＜こへび＞の生活と仕事になじむのを助ける役割を担っている。また、2週間以上滞在している参加者の中には、51日間の会期中に加え、事前の準備や事後の片付けなども通し、1か月以上滞在する者がいることも聞き取り調査からわかっている。これらの超長期滞在者には、＜こへび＞事務局として公式の役割を負っているものもいるが、2012年の＜こへび事務局＞は大学生4名で構成されていた。超長期滞在者の半数以上は、公式な役割を持たないものである。

表 6－6 年代性別参加日数

		1～3日間		3～7日間		1週間～2週間		2週間以上		総計	
		回答者	全体に占める構成比	回答者	構成比	回答者	構成比	回答者	構成比	回答者	構成比
10代	女性	4	3.2%	6	4.8%	2	1.6%		0.0%	12	9.6%
	男性	0	0.0%	0	0.0%	2	1.6%	1	0.8%	3	2.4%
小計		4	3.2%	6	4.8%	4	3.2%	1	0.8%	15	12.0%
20代	女性	14	11.2%	8	6.4%	8	6.4%	8	6.4%	38	30.4%
	男性	3	2.4%	6	4.8%	1	0.8%	4	3.2%	14	11.2%
小計		17	13.6%	14	11.2%	9	7.2%	12	9.6%	52	41.6%
30代	女性	9	7.2%	5	4.0%	2	1.6%	1	0.8%	17	13.6%
	男性	7	5.6%	7	5.6%	1	0.8%	1	0.8%	16	12.8%
小計		16	12.8%	12	9.6%	3	2.4%	2	1.6%	33	26.4%
40代	女性	0	0.0%	6	4.8%	2	1.6%	0	0.0%	8	6.4%
	男性	3	2.4%	2	1.6%	0	0.0%	0	0.0%	5	4.0%
小計		3	2.4%	8	6.4%	2	1.6%	0	0.0%	13	10.4%
小計	女性	2	1.6%	0	0.0%	1	0.8%	0	0.0%	3	2.4%
	男性	0	0.0%	0	0.0%	1	0.8%	0	0.0%	1	0.8%
50代 集計		2	1.6%	0	0.0%	2	1.6%	0	0.0%	4	3.2%
60代	女性	0	0.0%	0	0.0%	1	0.8%	0	0.0%	1	0.8%
	男性	4	3.2%	0	0.0%	1	0.8%	2	1.6%	7	5.6%
小計		4	3.2%	0	0.0%	2	1.6%	2	1.6%	8	6.4%
総計		46	36.8%	40	32.0%	22	17.6%	17	13.6%	125	100.0%

6) 参加日数別、今後の＜こへび＞活動への参加意図の有無

回答者の93.6%が今後も＜こへび＞活動に参加したいと回答している（表 6－7）。1週間以上滞在している参加者は、全員が今後も参加したいと回答している一方で、「1～3日間」の回答者の15%は、今後の参加する意思はないと回答している。

表 6－7 参加日数別の今後の活動参加意思

会期中の参加日数	今後のこへび活動への参加の意図の有無		
	いいえ	はい	総計
1～3日間	7	39	46
3～7日間	1	39	40
1週間～2週間	0	22	22
2週間以上	0	17	17
総計	8	117	125

6-4 <こへび隊>の運営の特徴と継続性

次に、2012年における<こへび>の運営の特徴と継続性についてのデータをまとめる。

(1) <こへび隊>の活動状況

2012年会期中（7月29日～9月17日）には延べ2,497名の<こへび>の参加があった。実働者は427名で、内46名が十日町市や津南町在住の地元<こへび>である。また、大学のゼミや海外からの団体参加を含めると、473名となる。1日当たりの参加人数は、図6-1のとおりである。芸術祭の運営には、1日あたり40～50名の<こへび>が必要となるが、実際の<こへび>の参加状況は日によりばらつきがある。週末やお盆の時期に参加が集中する。また、会期前半は特に人手が足りない。また、会期の前後は、団体参加を除くと、10名に満たない日がほとんどである。

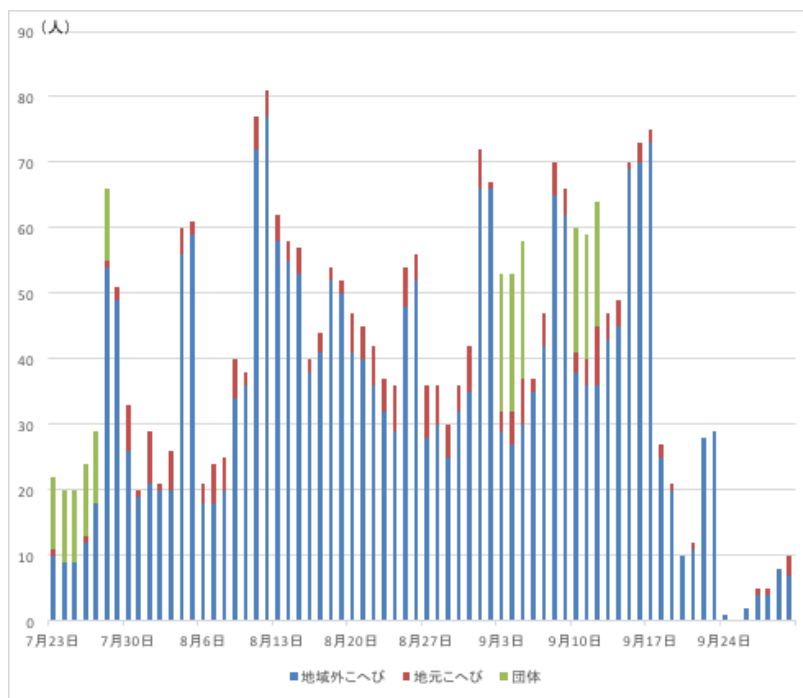


図6-1 2012年夏会期1日あたり<こへび>参加人数

出典：<こへび>事務局資料をもとに筆者作成

次に、地域外から参加している<こへび>の一人当たり活動参加日数は図6-2とおりである。2日間の参加者が最も多く、全体の36.2%を占める。これは、週末の<こへび>バスを利用した参加が多いためである。1～3日間の参加者合計が、全体の51.0%を占める。す

なわち、＜こへび＞の約半数は、1回の週末、もしくはそれに1日追加して3日間の活動に参加する短期ボランティア・ツーリストである。

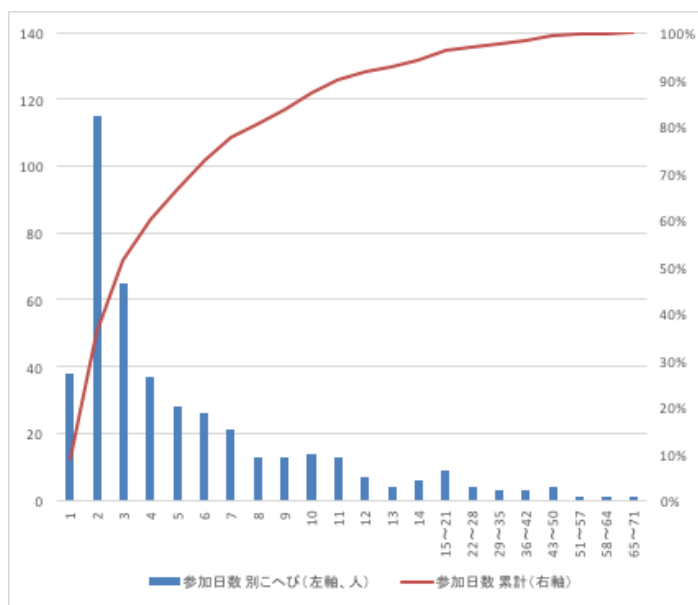


図 6－2 2012年夏会期参加日数別地域外＜こへび＞分布

出典：＜こへび事務局＞資料をもとに筆者作成

（２）＜こへび隊＞活動を継続するための課題

前節では、2012年大地の芸術祭における＜こへび隊＞の参加状況や運営体制、参加者のプロフィールを概観した。これらの情報からは、参加日数や参加のタイミングが限定されているパッケージ化されたボランティア・ツアーとは異なり、その日ごとに参加人数が変化し、それに合わせて移動の手配や日々の作業のアサインメントを実行委員会との連携の上で実施しなければならない、＜こへび隊＞の運営が複雑な業務であることがわかる。この複雑な業務をNPOスタッフ2名と＜こへび事務局＞4名が担当しているが、＜こへび事務局＞は会期中全員が常駐している訳ではないため、これらスタッフの日々の業務は多大である。しかも、NPOスタッフも＜こへび事務局＞も「大地の芸術祭」の＜こへび隊＞の運営を実際に担当したことのある経験者が担当することは稀であり、彼ら彼女ら自身も運営方法を学びながら実施しなければならないという課題を抱えている。

加えて、週末やお盆の時期を除くと、＜こへび＞の人数が必要数を下回る日も多い。51日の会期中、16日は団体参加者を含めても参加人数が40名未満であった。従って、芸術祭

を十分に支援するためには、新規参加者の継続的な募集と、募集や教育コストの低い、＜こへび＞経験者の再訪促進が重要である。そのためには、初参加の＜こへび＞が再訪したいと思うような体験を提供することが大切であるが、運営業務で多忙を極めるスタッフが一人一人の新規参加者と十分に関わる時間がないという課題がある。

（３）非公式な支援体制の重要性

これらの課題に対処し、＜こへび隊＞の活動の継続を可能としている要因として、長期滞在者や複数回参加者が臨機応変にNPOスタッフや＜こへび事務局＞運営を支援していることがあげられる。本研究では、便宜上、複数年または同一期間内に複数回参加し、2012年度参加日数が＜こへび隊＞の推奨参加期間である1週間を上回る者を「長期継続参加者」と呼ぶことにする。これらの「長期継続参加者」の中でも、特に社会人経験のある者は、NPOスタッフや＜こへび事務局＞の手の回らない様々な雑務や新規参加者へのケアなどを自主的に行っていた。半構造化インタビューの中で、何人かの＜こへび＞は自分が＜こへび隊＞の中で果たしている役割について言及している。なお、()内の補足は筆者による。

（自分のやっていることの）ひとつは作品管理。もうひとつは＜こへび＞の管理。＜こへび＞の管理とは、バックアップや緊急時の対応。（他のメンバーの）足りない所を補う。たとえば、アイデア出しや、サービスの企画コンサルなど。（中略）運転をしながら、実際は色々な情報を集めている。本来であれば、農舞台（NPO）または実行委員会の運営チームがすべきこと（を支援している）。（60代、社会人）

自分がある時から自主的に始めたのは、＜こへび＞と＜こへび＞をつなぐこと。一回で帰ってしまう人も多い。交流する時間がない。作品管理で使われて帰ってしまう。ちょっといい体験したな、ではなく、芸術祭につなぐ、＜こへび＞同志をつなぐことをしたい。長くいる人たちは事務局などをしているので、ここ（宿舎）に残る人は新しい人ばかり。その中でぽつんとしている人たちをつなげる。食事の配膳に加わって、「今日はどこにいったの？」「何をしたの？」などの話を聞く。毎日それをやっていると、話が生まれてくる。（20代、社会人）

これらの発言からも、＜こへび＞活動を継続していくために、長期継続参加者が自発的に＜こへび＞運営に関わる責任を果たしていることがわかる。さらに、＜こへび＞の募集

や広報・教育活動は首都圏で行われることも多いため、現地に来ることはできないが、首都圏での活動を支援している＜こへび＞経験者もいる。このような重層的かつ自己組織化された支援体制が背景にあって、＜こへび隊＞の運営が可能となっている。

6-5 長期継続参加者の活動継続動機

前節では、＜こへび隊＞の運営には、自らも長期継続参加者である＜こへび事務局＞に加え、公式な役割はないが自主的に運営を支援している長期継続参加者の貢献が重要であることをまとめた。次に、本節では、これらの長期継続参加者が活動を継続している動機について、半構造化インタビューで得た資料を分析することで明らかにしていく。また、継続動機と比較する目的で、初参加の背景についても整理していく。インタビューの対象としたのは、長期継続参加者の中でも2012年の活動が2週間以上に及んだ参加者である。また、「大地の芸術祭」に加え、「大地の祭り」や「雪アートプロジェクト」の構想が生まれ、現在と同じイベント・サイクルが確立した2009年以降に初参加をした者を対象とした。対象者には、＜こへび事務局＞を担当した4名が含まれている。

（１）当初参加理由

長期継続参加者9名の当初参加理由は、現代アートへの関心が多かった(表6-8；回答者B, C, D, H)。4名が＜こへび隊＞参加以前に大地の芸術祭を訪問し、内3名は複数回訪問している。それ以外では、「人との出会い(A, E)」、「地域への関心(D)」、「自然(E)」、「普段できないこと(H)」などが具体的な動機として挙げられているが、「何となく(F)」という回答者も一人いる。また、知り合いや家族、友人などがきっかけになって、越後妻有と関わるようになった回答者が4名いる。

表 6－8 参加に至った背景

聞き取り対象者 (職業、性別、年代、 初回参加年)	当初参加に至った背景
A. 大学生、20 代男性 (2009 年)	中学くらいの時に家族で何度か芸術祭を訪れたことがあった。こへびとして、最初に参加したのは大学 2 年生の 7 月。他のボランティア活動の経験から、こへびなら、ただの旅よりも <u>人と出会って話すきっかけが</u> できると思った。
B. 社会人、20 代女性 (2009 年)	2009 年に芸術祭のツアーに参加して、こへびのことを知った。 <u>もともと現代アートが好きだったし、滞在費があまりかからないので</u> 、2009 年 9 月の閉幕 1 週間前に初めて来た。その時は、三省ハウスで棚田バンクの打ち上げやこへびスタッフの誕生祝いがあった。初めて来た時には、合わないと思った。大学生が多いし、スタッフが自分と同じくらいの年齢だった。でも次々と違う人が現れた。
C. 社会人、30 代女性 (2009 年)	<u>現代アートが好きで、作品がただで見れる</u> と思って、こへび隊に参加したのがきっかけだった。
D. 大学生、10 代男性 (2010 年)	こへびに入るきっかけは、2006 年、2009 年と芸術祭に行ったこと。大学生になったら、参加しようと思った。美術作品を作れるとか、管理できるところが魅力だった。もともとアートは好きだった。また、 <u>地域のこへび</u> にも関心があった。東京出身の東京育ちだったので、初めて越後妻有に行った時は、こんなところが本当にあるんだなと思った。こへびには、2010 年夏に初めて参加したが、事前ミーティングには 5 月位に行った。こへび活動自体は、そんなに考えていたのとは違わなかった。
E. 社会人、40 代男性 (2010 年)	初めて越後妻有に来たのは、知り合いに誘われて、2008 年の冬だった。6 メートルも積もった雪と 3 メートルはある氷柱に感動して、好きになった。こんな日本があるんだと思った。その後、2010 年 2 月からこへびとして参加した。 <u>三省ハウスの印象が良かった</u> 。みんないい人たちだった。
F. 大学生、20 代女性 (2012 年)	<u>家族が仕事で越後妻有に来ていて、呼ばれたのが越後妻有を訪問した最初だった</u> 。 <u>なんとなく何かやってみようか</u> と思い、ゴールデンウィークのこへび合宿のついでに、ガイド研修に参加した。
G. 大学生、20 代女性 (2012 年)	知ったきっかけは、2009 年にテレビ番組で見て。2010 年にはこへび（瀬戸内芸術祭のサポーター）に参加して、2012 年 5 月には大学の友人に聞いて、（こへび隊主催の）東京での講演会を手伝った。越後妻有には、7 月の終わり頃、 <u>NP0 の人がアレンジしたツアー</u> で行った。（芸術祭で使う）キットの準備とこへび活動をした。
H. 大学生、20 代女性 (2012 年)	2011 年夏の横浜トリエンナーレにこへび隊のブースがあって知った。 <u>大学の先輩に「滅多にない機会だから」と勧められたことがきっかけで</u> 、（東京で開催した）六本木アートナイトに参加したのが、最初のこへび活動だった。菅笠をかぶったり、仮装をしたりして、色々な人がいることに驚いた。 <u>普段できないことが出来るかもしれない</u> と思った。
I. 社会人、20 代男性 (2012 年)	<u>2003 年、2006 年、2009 年と芸術祭に来て、2006 年からこへび隊に入りたかったが、個人的な事情で参加できなかった</u> 。 <u>時間が出来た時に</u> 、こへびのことを思い出した。

注）強調のための下線と（ ）内の補足は筆者による。

（２）継続参加理由

継続参加については、当初から長い関わりを意識し、そのことに言及したのはひとりであった（表 6－9；回答者E）。回答者の多くは、当初参加後に、他の参加者からの誘いや支え（A,B）、他の参加者やスタッフ、作家との交流（A,B,C,D,F,H,I）を継続参加動機として挙げた。＜こへび隊＞における交流では、日頃会えないような人たちと話をすることができることが魅力となっていた。そのような場では、話が面白いだけでなく、承認や受容の感覚(F,I)を受けることもあった。それ以外では、芸術祭の目的やスタッフの気迫(H)や、他の参加者への心理的契約（B,F,G,H）も再訪する動機として挙げられている。

ここで注目されるのは、彼らが3年に1度の大きな芸術祭の会期中以外に参加し始めていることである。Dが「トリエンナーレ(3年に1度の芸術祭)の年でない方が、交流はよく出来た」と発言しているが、同様の発言がインタビューの中で、BやCからもあった。

＜こへび＞は、トリエンナーレじゃない年の方がいい。トリエンナーレの年は、＜こへび＞の距離が遠い。人数が多過ぎて、名前と顔がわからない。お客さんともゆっくり話せない。この人は何ものなのかがわからない。（20代、社会人）

2012年会期中の1日あたりの＜こへび隊＞参加者の平均人数は47名であった。また、最も参加者が多いお盆の時期には80名/日ほどになった。このように、トリエンナーレの会期中は参加人数が多く、じっくり話をする機会が限られている。しかし、会期中以外の参加者は先述のとおり10名に満たないこともあるため、個々に話す機会も生まれやすい。

それ以外の動機としては、他の参加者の頑張りを契機にする例も見られた（B,F,H）が、これは＜こへび隊＞に対する心理的契約の一つと考えることができよう。また、芸術への更なる関わりの欲求(A,D)や、趣旨への賛同や使命感（H）も挙げられた。NPOスタッフの声掛けが、継続のきっかけとなっている場合もある（B,H）。

表 6－9 継続参加に至った背景

聞き取り対象者 (職業、性別、年代、 初回参加年)	継続参加に至った背景
A. 大学生、20 代男性 (2009 年)	こへびに初めて参加した時に、 <u>I さん（他のこへび）が助けてくれたので、続けられたと思う。</u> それ以外の人は閉鎖的だと思った。2 度目に行ったのは、9 月になってから。9 月は何度か通った。再び行ったのは、 <u>作品がある、集落がある、作家がいる</u> ので。ある集落に行った時に、「今までみたことのないものを見た」と思った。それは、「人と人とをつなぐもの」としての芸術。それまで、アートは一人でやるものと思っていた。
B. 社会人、20 代女性 (2009 年)	何人か社会人がいて、 <u>メールで一緒に行く付き合いが出来てきた。</u> 特に誰かという訳ではないけれど、誰かからメールが来た。また、 <u>2009 年冬の忘年会では、2010 年に雪アートをやるから事務局として手伝ってと言われた。</u> その時の仲間が次の夏に事務局をする時には、 <u>私も手伝おう</u> と思った。人とつながりが大切に、ここに来ている。
C. 社会人、30 代女性 (2009 年)	繰り返し参加するようになったのは、 <u>人に会いたいから。</u> 自分の普段の生活は似たような人ばかりに囲まれているけれど、 <u>ここでは聞いたことのない生活をしている人が多い。</u>
D. 大学生、10 代男性 (2010 年)	2 回目（のこへび隊参加）は、（最初から申し込んだのではなく、1 回目の後）追加して行った。1 年の夏で、そんなに忙しくなかったし、他の作品の管理にも入りたかった。 <u>こへび同志の話を聞けるのも楽しかったし、NPO のスタッフとかと話す機会もあった。</u> トリエンナーレの年でない方が、交流はよく出来た。
E. 社会人、40 代男性 (2010 年)	<u>場所と付き合う時には、細く長く付き合いたいという思いがあった。</u>
F. 大学生、20 代女性 (2012 年)	（こへび合宿のついでにガイド研修も受けたので）結局、ゴールデンウィークを全て越後妻有で過ごすことになった。 <u>楽しかった。人も面白かった。話していて面白い。認めてもらったり、ほめてもらうことも多かった。</u> とにかく居心地が良かった。それから月に 1～2 回、越後妻有に行っていた。7 月からは毎週末行った。最初は 1 週間くらい行くつもりだったけど、 <u>他のメンバーが 1 か月丸々行く</u> と聞いて、私も行って見ようかと思った。
G. 大学生、20 代女性 (2012 年)	（東京での）こへびミーティングには毎週出ていた。7 月に初めて行った時の印象はあまりないが、開会 2 週間前なのに、キットの中身が決まっていなくて、 <u>大変だと思った。</u> その後、越後妻有に行ったのは 8 月半ばだったけれど、みんながへたっていたので、 <u>自分がやらなきゃダメだ</u> と思った。それに、日々新しい人に会って、仲間として、 <u>芸術祭を作っていく</u> 、そういう経験は他にはなかった。色々な思いを持ってここに集まっている人を受け入れるこへび隊は寛容だと思った。
H. 大学生、20 代女性 (2012 年)	（東京で開催される）こへびミーティングの（参加）1 回目か 2 回目で、芸術祭が単なるお祭りではなく、 <u>根本的に日本を変えようとしている試みだ</u> ということがわかった。それから、こへびミーティングに毎週行くようになった。初めて新潟に行ったのは、ゴールデンウィークの合宿だった。初めて会った人と共同生活をするには不安があったけど、夜とか、 <u>色んな人と話せた。</u> その時、ほかの参加者がガイドになるために作品の勉強をしていたのを見て、 <u>自分もがんばろう</u> と思った。（こへび）事務局をやるきっかけは、 <u>NPO の人から誘われたから。</u> 7 月半ばに下見に行った時に、スタッフが会議をしている姿を見て、 <u>気迫を感じた。</u>
I. 社会人、20 代男性 (2012 年)	（継続して参加しているのは、） <u>ここは自分の話を聞いてくれる人たちのいる場所だから。</u> 作品と一緒に作ったり、 <u>ここの良さを知ってもらいたい</u> ことがきっかけとなって、普段では <u>絶対合わないような人と交流できた。</u>

注）傍線と（ ）内の補足は筆者による。

(3) アンケートに見る当初参加動機と継続参加動機

前節で検討した、長期継続参加者の当初参加動機と継続参加動機をさらに検討するために、＜こへび事務局＞が行ったアンケートから、類似グループの回答をまとめた（表6－10）。本表の対象となった回答者は、2012年夏会期に複数回参加し、合計参加日数が1週間以上の者である。

両動機の比較では、「現代アートへの関心」「作品制作への関心」が、当初参加動機に比べ継続参加動機では、それぞれ17.4%と7.2%ポイント低下している。一方で、「新たな人との出会い」「他の参加者との交流」が16%ポイント以上上昇している。また、「越後妻有へ行ってみたかった」も4.3%上昇しており、人や場所に関する動機が高まっている。

当初は、現代アートへの関心から参加し、継続するにあたっては、他者との出会いや交流が主たる動機となっている点については、インタビューの結果と同じ傾向となっている。

表6－10 複数回・長期参加者の当初参加動機と継続参加動機

参加動機	継続参加動機(A)		当初参加動機(B)		継続動機(A)
	回答者数 (人)	純回答者 比率(A)	回答者数 (人)	純回答者 比率(B)	一当初参加 動機(B)
新たな人との出会い	30	43.5%	18	26.1%	17.4%
地域活性化に関心があった	28	40.6%	29	42.0%	-1.4%
他の参加者との交流	24	34.8%	13	18.8%	16.0%
大地の芸術祭の趣旨や目的に賛同したから	20	29.0%	24	34.8%	-5.8%
現代アートに関心があった	16	23.2%	28	40.6%	-17.4%
なかなかできない体験だから	15	21.7%	15	21.7%	0.0%
越後妻有に行ってみたかったか	13	18.8%	10	14.5%	4.3%
作品制作に関心があった	11	15.9%	16	23.2%	-7.2%
やりたいことがあった。自分の 手で何かやりたかった	9	13.0%	10	14.5%	-1.4%
他人や社会のために役に立ちた かった	8	11.6%	11	15.9%	-4.3%
日常とは違う環境に行きたかつ たから	7	10.1%	10	14.5%	-4.3%
知識や技術を習得できるので	5	7.2%	7	10.1%	-2.9%
自分の知識や経験を活かせる	4	5.8%	3	4.3%	1.4%
付き合いで	3	4.3%	3	4.3%	0.0%
業務・授業だった	2	2.9%	2	2.9%	0.0%
その他	1	1.4%	0	0.0%	1.4%
就職や入試に有利	1	1.4%	1	1.4%	0.0%
その土地/食が好きだから	1	1.4%	1	1.4%	0.0%
芸術祭を見に行きたかった、 ファンだから	0	0.0%	2	2.9%	-2.9%
純回答者数	69	--	69	--	--

出典：＜こへび事務局＞資料をもとに筆者作成

6-6 考察

(1) 「ホスト-ゲスト」という二項対立の限界と協働者としての視点

本研究では、先ず、＜こへび隊＞の大地の芸術祭における位置付けを確認した上で、その自律性と創造性の高さを特徴として指摘した。さらに、活動継続を支える組織的な特徴を検討し、長期継続参加者が他の＜こへび＞や事務局に対して行う、自主的な支援活動が重要であることを明らかにした。加えて、これらの長期継続参加者の継続参加の動機を検討した結果、「他の参加者やスタッフ、アーティストなどとの交流」が重要であり、それらの交流を通して、多様な人と出会い、自らが承認される体験を持つことが動機となっていることを明らかにした。

組織的な特徴として新たに明らかになったのは、＜こへび＞活動の運営が、公式スタッフ以外の長期継続参加者によって、支えられているということである。これらの長期継続参加者は、指示に基づくのではなく、運営に重要な役割を自主的に担っている。このような非公式な役割の重要性は、これまでのボランティア・ツーリズムの先行研究では指摘されなかった点である。Holmes and Smith (2009) は、イベントのホスト・ボランティア(イベント開催地のボランティア)を、長期間に渡って活動し、より多くの責任を持つコア・ボランティア(核となって活動するボランティア)とそれ以外の非コア・ボランティアの2種類に分類している(Holmes and Smith 2009:30)。＜こへび隊＞は地域外からのボランティアであるが、同分類を援用し、＜こへび事務局＞やその他の長期継続参加者をコア・ボランティア、その他の短期参加者を非コア・ボランティアと区分することができよう。

このように、コアとなるボランティア・ツーリストが他のボランティア・ツーリストを迎える「ホスト」としての役割を持ち、さらに受け入れ機関のスタッフに対しても支援をする関係性は、地域の受け入れ機関や仲介者を「ホスト」とし、ボランティア・ツーリストを「ゲスト」として二項対立的な関係性で分析してきたこれまでの枠組みに収まりきらない。従来、「ゲスト」として見られてきたボランティア・ツーリストにも「ホスト」となる場面があり、それはどちらのボランティア・ツーリストが相対的にベテランか等の文脈に依存する。同様に、受け入れ機関のスタッフに対しても、相対的にボランティア・ツーリストの知見や技術が優る場合には、ボランティア・ツーリストが「ホスト」となり、ボランティアの現場にスタッフを受け入れ、必要な知見や技術を提供する。このように一人のボランティアが状況に応じて多様な役割を柔軟に受け入れる組織の運営方法が、

Guttentag (2009) の指摘する「活動の非効率性と完成度の低さ」を補うための重要な方策となっている。

さらに、このように「ホスト」と「ゲスト」が交錯する関係性は、イベントを目的としたボランティア・ツーリズムの場合には、地元住民とボランティア・ツーリストの間においても発生する。大地の芸術祭を例にとれば、越後妻有という地域への受け入れにおいては、地元住民が「ホスト」であり、＜こへび＞が「ゲスト」であるが、芸術祭の作品を地元住民が訪問した場合には、＜こへび＞が「ホスト」となり、地元住民が「ゲスト」となる。

そもそも、このような「ホスト」と「ゲスト」が入れ替わり得る関係性は、「ゲスト」であるボランティア・ツーリストが訪問地域に貢献をするというボランティア・ツーリズムの定義自体に内在するとも考えられる。これまでのボランティア・ツーリズム研究では、一般的な観光研究の視点に基づき、ボランティア・ツーリストを単純に「ゲスト」と捉えてきたが、リピーターとして継続的に一つのプロジェクトや地域に関わり続けることを前提としてボランティア・ツーリストの役割を検討すると、先行研究が焦点を当てていた「作業員」としての役割 (Holmes and Smith 2009:24) 以上の役割を担うことも考えられる。実際、ボランティアは作業を実践するだけでなく、マネジメントの役割を担うこともできる (Holmes and Smith 2009:24)。これらを踏まえた上で、より良いボランティア・ツーリズムの実践方法を考えるためには、受け入れ地域や組織とボランティア・ツーリストを「ホスト」と「ゲスト」に二分せずに、共通の目的の実現のために働く対等な協働者として位置付け、理解するフレームワークが必要だと考えられる。

(2) 他の参加者との関係性の重要性

次に、継続参加の動機としては、他者との「出会い」や「交流」が重要なことが明らかになった。この結果は、面白さなどの「取引的」要因よりも、他者との相互作用を含む「関係性」がボランティア・ツーリストのリピーター獲得には重要とのBlackman and Benson (2010) の指摘と一致する。企業を分析の対象とした組織論では一般に心理的契約の対象は組織またはその代理人である。しかし、本事例では、受け入れ組織のスタッフ（この場合は、NPO）や地域住民ではなく、他のボランティア・ツーリストを対象とした心理的契約に言及する長期継続参加者が多いことが特徴的であった。この点については、(1) と関連して、本事例においては、「ホスト」と「ゲスト」の役割が、NPOスタッフやボラン

ティア・ツーリストの間で入れ替わり得る状態にあることの一つの表れと考えることもできる。

また、他の参加者について、長期継続参加者が重要視しているのは、ボランティア・ツーリズムの場で出会う人々の「非日常性」であった。その「非日常性」は、多様性に代表されており、そのような人々とともにいる状態を「居心地が良く、自分らしくいられる」と表現している。このようにボランティア・ツーリズムの場での多様性が、参加者への魅力となっていることは、現代日本の若者の友人関係が同質化（加藤 2014:121-124）していることの裏返しとも考えられる

また、このような関係性は、活動のピーク時以外の十分にコミュニケーションが取れる時期に参加し始めたことや、課題にともに取り組むことで可能となっている。従って、活動目的が実現する程度の効率性や作業の質は必要だが、効率性や仕事の質を追求すること（Guttentag 2009）が、参加者の関係性構築機会を奪う可能性があることにも留意する必要がある。

（３）コミュニティという視点

最後に、「ホスト」と「ゲスト」と言う二項対立的なフレームワークとは異なる分析のフレームワークの可能性を検討したい。2010年代に入ってから動きだが、アニメファンたちがアニメ聖地の自治体などと一緒にイベントを実施する動きが起こっている。無償で活動をしていることに着目すると、このような動きをボランティア・ツーリズムの類似行為と考えることができる。鈴木（2013）は、アニメファンの振る舞いが現実の地域を変化させることに着目し、それこそが「多孔化」した分断した社会を上書きする要素となりうると主張していることは、第２章で触れたとおりだが、同様のことが大地の芸術祭とそれに参加する＜こへび隊＞にも当てはまると考えられる。

かつては、芸術好きの若者が訪問することのなかった中山間地域で現代アート展が開催され、2015年の芸術祭には、51万人の来場者があった。＜こへび隊＞として参加した者の中から、NPO法人越後妻有里山協働機構などに就職をして、越後妻有に移住をする者や、移住はしなくても越後妻有に関わる仕事をするようになった者、継続的に＜こへび＞として、または一個人として越後妻有に通うようになった者がいる。これらのことを考慮すると、地域と外部者の関係性という観点では、越後妻有の事例の方がアニメファンの事例よりも、より深い関係性を構築していると考えられる。鈴木（2013）の表現を借りれば、よりしっかりと「上書き」されていることになろう。

Delanty (2003=2006) がコミュニケーション・コミュニティの課題と考えている「場所との結びつき」についても、越後妻有という地域を舞台とし、アーティストと地域住民と共に芸術祭を作り上げ、移住者やリピーターとなる訪問者を輩出している大地の芸術祭とくこへび隊>は、一定の結びつきを実現していると考えられる。鈴木 (2013) は、さらに、共同体と呼ばれるためには「再生産性」の機能を持つ必要があると述べていたが、その点に関しても、トリエンナーレという仕組みの元に活動をしている大地の芸術祭とくこへび隊>には再生産性の機能があると考えられる。

また、Urry (2007=2015:75) は人のつながりや社会的な集まりの多くは、近さに基づいたものではなく、共在と不在の間を絶え間なく動くプロセスがあると指摘しているが、芸術祭等の活動時に越後妻有を訪れ、それ以外の時には「不在」となるくこへび隊>の地域との関わりは、<モビリティ>社会に特徴的な関係性だとも考えられる。

(1) の論点とも考え合せた場合、継続的な関係性を持つボランティア・ツーリスト(団体)と地域の関係性は、これまでの「ホスト-ゲスト」というフレームワークではなく、コミュニケーション・コミュニティのようなフレームワークで捉えることが可能ではないだろうか。この点については、OKOVOの事例とも合わせ、次章で検討したい。

6-7 まとめ

本章では、モビリティ社会におけるボランティア・ツーリズムの一例として、越後妻有大地の芸術祭のくこへび隊>の役割や運営について整理し、くこへび隊>の活動を支える長期参加者や継続参加者の初参加および継続動機について考察を行った。先述のとおり、モビリティ社会においては、ツアーはツアー期間だけで完結するのではなく、そこから関係性が始まり、継続する可能性が高くなっている。くこへび隊>の事例では、①くこへび隊>は大地の芸術祭ディレクターの北川氏の呼びかけで始まったが、初期から自律的に活動する団体であったこと、②参加者の大半は1週間以下の短期参加であるが、そのような参加者を継続・長期参加くこへび>が支えていること、③これらの継続・長期参加くこへび>は当初から継続しようと考えていた訳ではなく、多様な他の参加者との交流の魅力や支え合いによって継続が実現していること、などが明らかになった。

小樽雪あかりの路のOKOVOの事例同様に、特定の地域に対して責任を負う関係性は、従来の消費者としての観光者とは異なる関係性である。それは、ボランティア・ツーリス

トが地域活動の「主体」として関わる関係である。つまり、これまでは地域の外側の人間「客体」として位置付けられていた観光客が、地域の人々の立場「主体」となる関係性である。このような関係は、外部からの観光客を対象としたイベントというこれら二つの事例の特徴であるからこそ表出しやすい可能性はあるものの、こうした地域への関わりが＜モビリティ＞社会における「共在」と「不在」の間を絶え間なく動くプロセスを伴う、新たな形のコミュニティを示唆している可能性もあると考えられる。この点も含め、次章では総合的に考察を進めたい。

第7章 総合考察

本章では、前章までの先行研究および実地調査の分析結果を元に、第1章で立てた問いに答えるために、考察を行う。まず、本研究の目的と方法を振り返る。本研究では、人やモノや情報の移動が常態化している<モビリティ>社会における観光の意味や役割を明らかにするために、共同体の崩壊や個人化からの揺り戻しとして起こったと考えられる社会貢献への関心と、移動の一形態である観光、この二つが交差したボランティア・ツーリズムの事例を取り上げた。中でも、<モビリティ>社会に特徴的な「共在」と「不在」を通じた地域とボランティア・ツーリストの関係を理解するために、受け入れ地域とボランティア・ツーリスト（団体）の継続的な関わりに着目し、(i)継続的な関係性の中で、ボランティア・ツーリスト（団体）が地域で果たす役割はどのように変化しているのか、(ii)そのような変化をもたらす要因は何か、(iii)活動の継続を可能にする要因は何か、を明らかにすることを試みた。そのため、10年以上の継続実績のある2つのボランティア・ツーリズム事例、すなわち、第4章と第5章では「小樽雪あかりの路」で活動をするOKOVOを、第6章では「越後妻有大地の芸術祭」で活動をする<こへび隊>を取り上げ、ボランティア・ツーリスト（団体）が地域で果たす役割や活動の継続要因について調査をした。

これらの事例では、i)外部者であるボランティア・ツーリストが活動に継続的に関わり、重要な役割を果たしていること、ii)継続的な関わりのはしめは、ボランティア・ツーリストが自律的に活動をし、ボランティア・ツーリストの団体が組織化され、運営ノウハウや地域とボランティア・ツーリストの関係性が継続参加者を通じて継承されていること、などの点で特徴が見られた。また、これらの事例では、継続参加者の存在が活動継続の鍵となるが、i)継続参加者の多くは、当初から継続参加を意図していた訳ではないこと、ii)当初の参加動機は、観光的要素の強い個人的な関心であること、iii)現場での体験を通して、人びととの交流や、地域や活動の魅力に惹かれ、また自己や他者の（再）発見を通じた使命感が誕生し、継続参加をするようになること、が明らかになった。つまり、組織のレベルにおいても、個人のレベルにおいても、重要な役割を負うことや継続的に参加することは、当初から予定されていた訳ではなく、ボランティア・ツーリズムという観光実践の場における人や自然などさまざまな要因との相互作用によって起こった変化の結果として生まれたということである。

以下では、これらの点をOKOVOと<こへび隊>を中心にさらに詳細に整理したのちに、ループ図を用いて、継続するボランティア・ツーリズムの組織面と個人面での考察を行い、

さらに＜モビリティ＞社会における共同体としての側面について検討する。その上で、＜モビリティ＞社会における観光の意味や役割について可能性を示唆する。

7-1 ボランティア・ツーリスト（団体）が地域で果たす役割と組織的特徴

（1）OKOVOとこへび隊の組織的な共通点と相違点

1）ボランティア・ツーリストと地域との関係

OKOVOと＜こへび隊＞が地域で果たす役割について考察を進めるにあたり、まず、初めに、両組織のイベントにおける位置付けを比較する。OKOVOとこへび隊の最も大きな相違点は、OKOVOは、雪あかりの路実行委員会のメンバーの知り合いに声を掛けたことがきっかけで始まった団体ではあるが、団体化は実行委員会からの要請ではなく、第2期の参加者たちが自らの意思で行った点である。その意味において、OKOVOは雪あかりの路実行委員会にとっては外部者であり（図7-1）、第4章で整理したとおり、雪あかりの路で一定の責任を持つためには、内部者である雪あかりの路実行委員会と段階的に信頼を構築する必要があった。信頼が構築されるに連れ、役割もより重要なものになった。

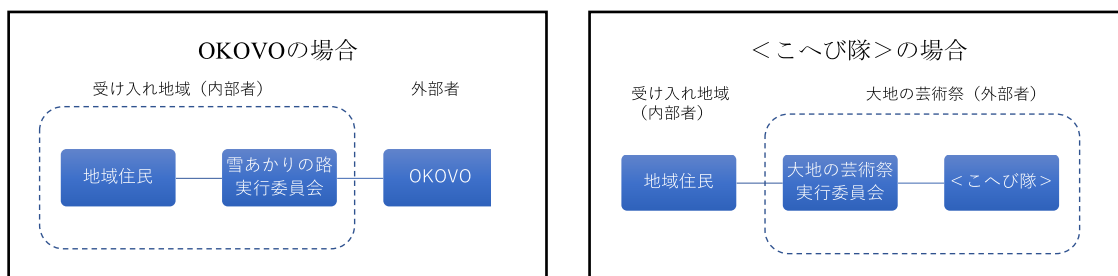


図7-1 地域とボランティア・ツーリスト団体の関係

出所：筆者作成

それに対し、＜こへび隊＞は総合ディレクターである北川氏によって設立されたため、芸術祭の実行委員会や事務局と信頼関係を築く必要はなかった。それよりも、芸術祭全体が外部者と見られていたため、芸術祭が地域の人びとと信頼関係を築くことが必要であった（図7-1）。芸術祭全体がどのように地域からの信頼を構築して行ったかという課題は、ボランティア・ツーリスト以外にアーティストや事務局など多様な関係者の分析を含むため、本論文のテーマを超えている。そのため、ここでは詳細は取り扱わない。しかし、6章で述べたとおり、芸術祭の実績が積み重なるにつれ、参加集落が増加するなど、「大地の芸術祭」自体が地域に受け入れられるようになったこと、特に初回の芸術祭における地域住民との会期前の関わりについては、総合ディレクターの北川氏ではなく、＜こへび隊＞が前面に出たことなど、「大地の芸術祭」が地域に受け入れられるために、＜こへび

隊>も一定の役割を果たしたことを確認しておきたい。

2) 組織レベルでの役割と運営の共通点

次に、OKOVOと<こへび隊>の組織運営上の共通点についてまとめる。

① 組織化された、自律性の高い運営

日々の運営においては、両団体とも、イベント事務局が直接ボランティア・ツーリストをマネジメントしているのではない。ボランティア・ツーリストは組織化され、その組織（団体）がボランティア・ツーリストをマネジメントしている。ここで言う組織化とは、OKOVOが自ら団体を立ち上げ、団体名を付け、ボランティア・ツアーの実施に必要な機能の仕組み化を行ったことや、<こへび>が自らを<こへび隊>と名付け、各芸術祭の会期前には<こへび事務局>が設立され、活動に必要な機能を仕組み化していくことである。

OKOVOはこのプロセスを全て自ら行い、<こへび>は芸術祭実行委員会事務局が<こへび事務局>の設置をリードする点は異なるが、この違いは団体の成り立ちや規模や会期の長さの違いも影響していると考えられる。「雪あかりの路」の会期は約10日間で、OKOVOは毎年度50名程度の参加者であるのに対し、「大地の芸術祭」は約50日間開催され、<こへび隊>の登録者は2015年で2000名超、2003年から2012年の実働人数は各年350名から500名と、期間も長く、規模も大きい。また、<こへび>は参加時期を選べるため、それぞれの<こへび>が他のすべての<こへび>を知ることは難しく、自ら運営チームのメンバーを選ぶことは困難である。

マネジメントとは、日々の仕事を割り振り、支援し、食事や睡眠のための環境の確保など合宿生活の管理のことである。これらの責務を全てボランティア・ツーリストだけで行なっているとは限らないが、OKOVOの運営チームや<こへび事務局>のようなボランティア・ツーリストで構成される運営チームが、日々の計画や実行に責任を持ち、必要に応じて、他の関係者の支援や指導を仰ぐという運営の仕組みである。さらに、公式の役割を持っていないボランティア・ツーリストも運営を助けるための行動をとっていることは、第4章と6章で述べたとおりである。

このようにボランティア・ツーリストによる運営チームが自ら組織化を進め、他のボランティア・ツーリストのマネジメントを行う事例というのは、先行研究ではほとんど触れ

られていない。これは、先行事例で取り扱われた事例が、先進国から発展途上国に行く事例が多く、現地での言語や文化の違いにより、受け入れ団体に頼る必要性が高かったことが影響しているのではないかと考えられる。また、異なる視点からの考察として、一般名詞の「ボランティア」ではなく、固有の団体名があることは、参加者にとっての帰属の体験（Delanty2003=2006:260-261）を強化すると考えられる。

② 重要で創造的な役割

①とも関連しているが、OKOVOも＜こへび隊＞もイベントにおいて、重要で創造的な役割を担っていた。先述のとおり、これらの団体がなければ、現在の規模や形でのイベントを行うことは、雪あかりの路についても大地の芸術祭についても難しい。また、ここでの創造性とは、4章で定義したHackman and Oldham(1980:71-98)による「自律性」や川喜田(2010:74)による「自発性に支えられた問題解決」の概念のことである。

③ 参加者の高い流動性

加えて、両団体の特徴としては、参加者の流動性が挙げられる。OKOVOの場合は、小樽でOKOVOとして活動するOBOGの割合を2割程度までにすることを規則化している。＜こへび＞の場合は規則化されたものはないが、第6章で示したとおり、参加者の約三分の一は1～3日の短期間の参加であり、1週間以内の参加者が7割近くを占める。すなわち、同会期中であったとしても、50日間の会期中のメンバーは入れ替わって行く。また、両団体とも会期ごとに新たな運営チームが組成される。

これは、各団体のメンバーが固定化されておらず、団体としては、新たな参加者を受け入れる開放的な性格を有しているということである。また、運営チームの定期的な入れ替わりは、2-4で言及した組織リーダーの長期政権による弊害（桜井 2007:79-80）を防ぐことにも寄与していると考えられる。

④ 共在と不在を通じたコミュニケーション

最後に、両団体とも、活動の現地にいる「共在」と現地にいない「不在」を通し、多様なコミュニケーションを行なっている。不在の時については、参加者同士のSNSやメール

などでのコミュニケーションは日常的に行われている。また、特にOKOVOについては、現地での活動の写真や動画がメディア班によって編集され、ホームページで公開されている。また、両団体とも、現地での会期中以外の学習会や研修があるほか、活動地域での他のイベントへの参加や個人旅行による相互訪問なども行われている。

このように、不在のモードでは、「移動と通信の複合的なテクノロジー」に立脚し、距離を克服するコミュニケーションが取られているのは、Urry (2007=2015:75)の指摘のとおりである。また、イベントでの出会いをきっかけとして触発されることによって、メンバー間の移動が活性化しているのも、Urry (2007=2015:338)の指摘のとおりである。

3) 組織レベルでの役割と運営の相違点

次に、両事例の組織レベルでの役割と運営の相違点について整理する。

第1に、本項(1)で触れた地域との関係性が挙げられる。すなわち、OKOVOは実行委員会を含む小樽市の人びとと信頼を構築する必要があったが、<こへび隊>の場合は、「大地の芸術祭」の公式な組織のひとつとして最初から設立された。従って、「大地の芸術祭」全体が地域と信頼を構築することの影響を受けるということである。これは成り立ちに由来する違いである。

しかし、個人のレベルでは、歴代の<こへび事務局>メンバーと芸術祭実行委員会事務局の間に、信頼関係の構築が必要だったことを補足しておく。ここでの信頼の構築は、前年や前シーズンの<こへび>としての活動や、東京での学習会などを通じて始まり、その結果として、<こへび事務局>への参加を芸術祭実行委員会事務局より打診される。

第2に、2)①でも触れたが、自律性に関する違いである。しかし、これは運営チームが組成される時点での違いに止まり、実際に運営が始まってからの運営チームや継続参加者を中心としたコアとなるボランティア・ツーリストの自律性には、内容や自己裁量の範囲を考えた時に、大きな差異はない。ただし、<こへび隊>の方が規模が大きく、会期中のメンバーの流動性も高いために、このようなコア・メンバーとして活動する参加者の全体に占める比率は低い。

第3に、参加条件の厳しさである。OKOVOの応募者は参加可能人数を上回っているため、参加するためには選考に合格する必要がある。また、全会期の参加や直前合宿への参加も必須となっている。

4) <モビリティ>社会におけるコミュニティとしての団体

両団体の組織レベルでの役割と運営の共通点としては、i)組織化された、自律性の高い運営、ii)重要で創造的な役割、iii)参加者の高い流動性、iv)共在と不在を通じたコミュニケーションが挙げられた。一方、相違点としては、信頼を築く対象の違い、自律性の程度の違い、参加条件の厳しさの違いが挙げられた。相違点のうちの2番目は程度の差であったことを考慮すると、両団体の組織運営には相違点よりも共通点が多いと考えられる。

① 環境としての<モビリティ>社会と団体マネジメント

これらの共通する特徴の中で、流動性の高さや共在と不在を通じたコミュニケーションの実践、その結果としての移動の活発化は、<モビリティ>社会の特徴（Urry 2007=2015:75-76）を表していると考えられる。このような特徴は、意図的に団体マネジメントの一環として仕組み化された結果であるが、そのような仕組みを可能とする環境-移動の常態化-がその前提としてあった。具体的には、流動性を取り入れることができるだけの十分な数の申込者、不在モードのコミュニケーションを可能とするメールやSNSへのメンバーや他の関係者の加入、会期中以外の旅行やその他の公式非公式イベントへの参加への関心と実行能力などである。

② 組織アイデンティティの構築と帰属としてのコミュニティ

さらに、団体の継続を支える重要な要素である組織へのコミットメントや活動への満足にかんしては、両団体が、一般名詞ではなく、自らが名付けた団体名を有していることが注目される。なぜなら、組織論の観点からの注目は、Tidwell(2005)が明らかにしたように組織アイデンティティは、組織へのコミットメントや活動への満足の双方に影響をしているからだ。

組織アイデンティティについては、組織の一員の意識のことであり、自身と組織は絡み合った一体のものとして認識された状態のことを指す（Ashforth and Mael 1989）が、<こへび隊>や<OKOVO>には、組織アイデンティティを感じることでできる仕組みが備わっている。<こへび隊>で言えば、<こへび>というメンバーに与えられる呼称がそれである。<こへび隊>に参加するということは、「<こへび>になる」という体験なのである。日々の活動の中で、<こへび>と呼ばれ、「<こへび>の〇〇です」と名乗ることによっ

て、その体験は強化される。OKOVOについても、ロゴマークやチームの名前の入ったスウェットシャツの製作、また小樽の人びとから「OKOVO」として接してもらう体験などから、OKOVOとしてのアイデンティティは強化される。

しかし、このようなアイデンティティ構築の仕組みがあっても、「自身と組織が絡み合った一体のものとしての認識」が生まれるかどうかをコントロールすることは団体にはできない。それは、個人の持つ背景やイベントを通じた体験により、個々によって異なる。その意味において、このようなアイデンティティ構築のための仕組みは、便宜的に「境界線」(Delanty 2003=2006:264)を構築する機能(例えば、誰が団員として登録しており、どのような仕事を担当するのかの区別となる機能)も有するが、それと同時に「帰属の感覚」を生むための仕組みでもある。さらに、重要なのは、団体名を含む、これらの仕組みが、実行委員会などの組織から与えられたものではなく、団体メンバー自らが話し合った結果として生まれてきたものだということだ。＜こへび隊＞の例では、シンポジウムを開催して名前を決めたこともあり、名前をめぐる対話は＜こへび＞だけではなく、それ以外の他者を含めて行われた開放的なものであった。Delanty(2003=2006:262-263)は、現代社会の帰属のあり方は、「より強力な対話的な要素を特徴としている点で、かつての集团的紐帯とは異なっている」と指摘しているが、＜こへび隊＞やOKOVO自らが自らを定義して組織を構築していくプロセスは、そのような現代社会の帰属のあり方の一例だと考えられる。

7-2 継続ボランティア・ツーリストの初参加動機と継続動機

前項では、本研究が対象とした2つの団体の組織レベルでの地域（イベント）での役割や特徴について、検討してきた。本項ではそれに続き、ボランティア・ツーリストという個人のレベルでの継続動機について検討する。

（1）OKOVOと＜こへび隊＞の初参加動機と継続動機の比較

1）初参加動機と継続動機の共通点

① 個人的な関心が高い、初参加動機

両団体とも、初参加動機は個人的な関心による動機が強かった。OKOVOの場合では、「日常とは異なる環境」へ行って、「なかなかできない体験」をするということや、イベントの魅力であり、日本や北海道や小樽に行ってみたいという関心である。＜こへび隊＞で言えば、現代アートや地域活性化への関心を挙げた回答者が4割程度を占めた。また、聞き取り調査からも現代アートへ関心を持って初参加する継続者が多いことが明らかになった。これらのことから、活動の継続の鍵である継続参加者の参加動機が、必ずしも社会貢献（だけ）に基づいているのではないことが明らかになった。これは、ボランティアは複数動機を持つという、ボランティア研究の分野で現在と主流となっている考え方（Clary et al. 1998; Clary and Snyder 1991）と一致する。しかし、相違点でも後述するが、＜こへび隊＞では、「芸術祭の趣旨や目的への賛同」と答える回答者が34.8%おり、3番目に重要な初参加動機となっているため、地域活性化への関心の高さも合わせて考えると、地域への貢献を含めた社会的な関心も高いと考えられる。

② 交流や使命感に基づく継続動機

次に、継続動機の主要因としては、両団体とも交流の重要性があげられる。また、自分たちで団体を設立し運営しているOKOVOの場合、この体験を若者に伝えたいという使命感も強かった。交流の内容としては、「日常とは違う人びととの交流；本音での付き合い；大切なことも話すことができる関係」が代表的な内容である。また、体験を伝えたいという使命感の背景としては、活動を通じて、自分の視野の狭さに気付いたり、世界観が変わるなどの自己成長や自己変容があったことが挙げられる。

これらの継続動機の多くは、初参加時には重要視されていなかった内容である。また、特に6章の＜こへび＞の聞き取り（表6－9）からも明らかなように、当初から継続参加を予定していた人はほとんどいない。つまり、ここで重要なことは、「ボランティア・ツアーの現場での体験を通して、継続動機が生まれる」ということである。

2) 初参加動機と継続動機の相違点

次に、OKOVOと＜こへび隊＞の参加動機の相違点について整理する。第1に、初参加動機における社会貢献の重要度が異なる点が挙げられる。＜こへび隊＞については、初参加動機として、「芸術祭の趣旨や目的への賛同」と答える回答者が34.8%おり、3番目に重要な初参加動機となっている。同じ項目はOKOVOのアンケートにはないが、地域社会への貢献に関連した「小樽の人や社会に役立ちたかったから」の重要性は、「重要（スケール3）」をやや下回る2.7となっており、順位も16項目中11番目となっていることから、地域貢献への関心はあまり高くないと言える。このように差があるのは、現代アートを用いた地域活性化の先駆的な事例として、越後妻有大地の芸術祭が広く知られるようになったことが背景にあると考えられる。

（2）継続動機を生み出した要因

次に、両事例で継続動機を生み出した要因について考察する。これについては、共通する点が多かった。初めに、継続動機の中でも重要性が高かった交流にかんする要因について整理し、次にその他の要因についてまとめる。

1) 交流にかんする要因

OKOVOの場合も＜こへび隊＞の場合も、他の参加者との交流は継続動機の中でも最も重要な要因となった。さらに初参加動機との比較では、もっとも変化率が大きかった。すなわち、ボランティア・ツアーへの参加前後で重要性が高まった項目であった。その特徴は以下のとおりである。

①非日常性

両団体の参加者とも、ボランティア・ツアーでの出会いについて、非日常性を感じていた。＜こへび隊＞では、「普段の生活では絶対会わないような人」や「面白い人」に会えることを継続動機として挙げていた。また、OKOVOの回答でも多様な人びととの出会いが触れられていた。それは、自団体内での出会いに加え、外国人である日本人や中国人ボランティアとの出会い、日本人スタッフとの出会いも含まれている。この非日常の交流は、日常とは異なる他者と出会うという意味でも重要であるが、それは、同時に自分の日常の役割や環境を離れた中での交流であるという点でも重要である。この非日常性は、ボランティア・ツーリズムの観光的側面を表していると考えられる。

② 共同生活と濃い交流

両団体の交流のもう一つの特徴は、共同生活を通した濃い交流である。両団体とも基本的に相部屋での共同生活を送る。＜こへび隊＞の調査では、特に他の参加者と「話をする」ことに触れる発言が多かった。OKOVOに対する調査では、共同生活を送る同室者とは「家族のように仲良く」なることに加え、他の団体や日本人スタッフとは、仕事が終わった後の宿舎での飲み食いを通して、交流が深まるという発言があった。また、このような他者との密度の濃い交流は、他者理解と自己成長の機会ともなっていることも明らかになった。さらに、特にOKOVOの参加者からは、他団体のメンバーや事務局メンバーも共通の目的を持つ仲間であることが、他の交流とは異なるという点も述べられていた。

対面での近接した空間での出会いには、豊かな情報フローと相互のフィードバックがあり、情動を生む効果がある（Thrft 2007:63-64）。このような情動が、団体の活動や地域への継続的な関心につながると考えられる。

③ 不在モードの交流

次に、両団体の参加者とも、活動場所にいない「不在モード」においても、メールやSNSなどを通じて、日常的にやり取りをしている。それは、団体のメンバー間だけではなく、他の団体や事務局スタッフや地域の人びとなどの、さまざまな活動を通じて知り合った幅広い人びとを含む。そうしたやり取りを通じて、不在モードの間においてもそれぞれに対する理解が進み、会期以外の交流も生まれている。＜こへび隊＞の場合であれば、芸術祭

の作業とは直接的に関係のない、私的な農作業への参加や地域のお祭りへの参加などである。OKOVOの場合であれば、観光を兼ねた相互訪問であり、他の祭りへの参加などである。

このように、共在と不在を通じた関係性の継続は、「ホーム」と「アウェイ」の境界の曖昧化（Cohen et al. 2013:162）であり、「多孔化」（鈴木 2013）と考えられるが、継続するボランティア・ツーリズムの実現という点で重要なのは、このような「不在モード」での継続的な交流によって、共在の時に始まった関係性が維持され、場合によっては、強化されるという点である。

2) 場所の魅力

交流の魅力に加え、場所の魅力も継続参加理由として重要であった。初期参加動機との比較では、「越後妻有」や「小樽」といった特定の場所への訪問の関心が継続動機の要因として高かった。また、聞き取り調査からは、場所は現場での体験と密接に結びつきあっており、厳しい寒さや暑さや雪など自然、活動を共にした仲間や偶然出会った人びととの交流などと切り離すことはできないことが明らかになった。これは、空間の諸関係と体験は切り離すことができないというHarvey（1993=1997）やMassey(1993=19996)の主張と一致する。

Urryは、また、「場所と移動は、情動と密接につながっている」と指摘し、「場所が情動を介して享受される」ための五感の重要性について考察しているが（Urry 2007=2015:373-374）、小樽や越後妻有の自然は、その厳しい寒さや暑さ、雪で真っ白になった街や山の濃い緑などを通じて情動を生んでいると考えられ、参加者にとってそれらの場所を特別な場所にしていると考えられる。

3) 使命感

交流や場所の魅力に加え、使命感も重要な継続動機の一つとして挙げられている。特に、自分たちで組織を設立し運営しているOKOVOについては、その継承のための強い意志を持つ者が、運営チームに加わっていることが多い。＜こへび隊＞については、そのような長期的な組織の継承というよりも、約50日間という長い会期をきちんとやり遂げることへの使命感が強い。

このような使命感も初めから備わっていたケースはほとんどない。＜こへび＞であれば、他のメンバーが頑張っている姿に触発されて、OKOVOであれば、体験を通じた自己成長や自己変容の自覚によるなど、参加者により異なるが、ここで重要なのは、現場での体験を通じて、このような使命感が構築されるということである。

7-3 <モビリティ>社会における観光の役割-ボランティア・ツーリスト（団体）と受け入れ地域の関係性構築プロセスの視点から

本章では、これまで、ボランティア・ツーリスト（団体）が地域で果たす役割と組織的特徴、および個人レベルでの動機、すなわち、継続ボランティア・ツーリストの初参加動機と継続動機について整理してきた。組織のレベルでは、外部者であるボランティア・ツーリストが組織化され、自律性の高い運営を行い、地域イベントの実現に欠かせない役割を果たしていること、また、その実現には、組織の流動性の高さや組織アイデンティティの重要性が重要であることが明らかになった。また、個人のレベルでは、初参加動機は個人的な関心によるものが多いが、継続動機では交流と場所、使命感が重要であること、また、これらの継続動機は、現場での体験を通して生まれるものであることが明らかになった。これらを受けて、本項では、ボランティア・ツーリスト（団体）と受け入れ地域が継続的な関係性を構築するプロセスについて分析をし、<モビリティ>社会における観光の役割について、その可能性を検討したい。

（1）継続するボランティア・ツーリスト（団体）と受け入れ地域のシステム

本項では、継続するボランティア・ツーリズムの組織的および個人的要因をループ図を用いて考察する。このようなアプローチを取るのは、<モビリティ・パラダイム>が、「さまざまな移動の複雑な組み合わせに力点を置くもの」（Urry 2004,, Urry 2007=2015:76）であるためである。したがって、継続するボランティア・ツーリズムの理解には、ツアーという人の移動とその時空間だけで起こったことを断片的に切り取るのではなく、不在の時の情報や人の移動とその影響なども含めて分析する必要がある。つまり、時空間を超えた事象に対する視点が重要となってくる。

それに加え、第2章で述べたとおり、Urryは、<モビリティ>社会を動的なシステムと捉え、「非線形の正のフィードバック・ループ」を分析することの重要性を指摘している（Urry 2007=2015:49）。そのためのツールとして、本項ではループ図を用いる。ループ図とは、「複雑なシステムのダイナミクスを理解できるようになるため」（Sternan 2000=2006:12）に、諸要素の関係性やフィードバック・ループを書き表すツールであり、環境や政治、経

済、経営など非線形の複雑な事象を理解するために用いられている方法の一つである³²。分析対象となるシステムに関連のある要素を矢印でつなぎ、それが同じ方向への変化をもたらす正のフィードバックか、逆のフィードバックを表すことで、フィードバック・ループを可視化する分析手法である。

図7-2は、二つの事例の調査から明らかになったボランティア・ツーリズムを継続するための要素とそれらを取り巻く環境を、地域、組織、個人のレベルにかかわらずに配置し、影響を与えるものと受けるものをつなげたループ図である。図を見やすくするために、矢印は全て同じ方向への変化、すなわち、ある要素が増加すれば、矢印の先の要素も増加するという正の関係を表すようにした。ただし、「新メンバーの参加」と「役割の固定化」の関係だけは、逆方向に動く関係であるため、矢印の横に「逆」と記した。また、大小の複数のフィードバック・ループが存在するが、見やすさのためにループの名称等は図中には記載していない。それらの代表的なものについては、個別に文中で述べていく。

³² Sterman(2000:13)は、「(システムの) 複雑な挙動は、システムの構成要素自体の複雑さではなく、構成要素間の相互作用(フィードバック)から生まれることが多い」と指摘した上で、「全てのダイナミクスは、『自己強化型ループ』(正のフィードバック・ループ)と『バランス型ループ』(負のフィードバック・ループ)の、たった2種類のフィードバック・ループの相互作用から生まれる」と述べ、個別の要素ではなく、システムの中にあるフィードバック・ループを分析することの重要性を主張している。

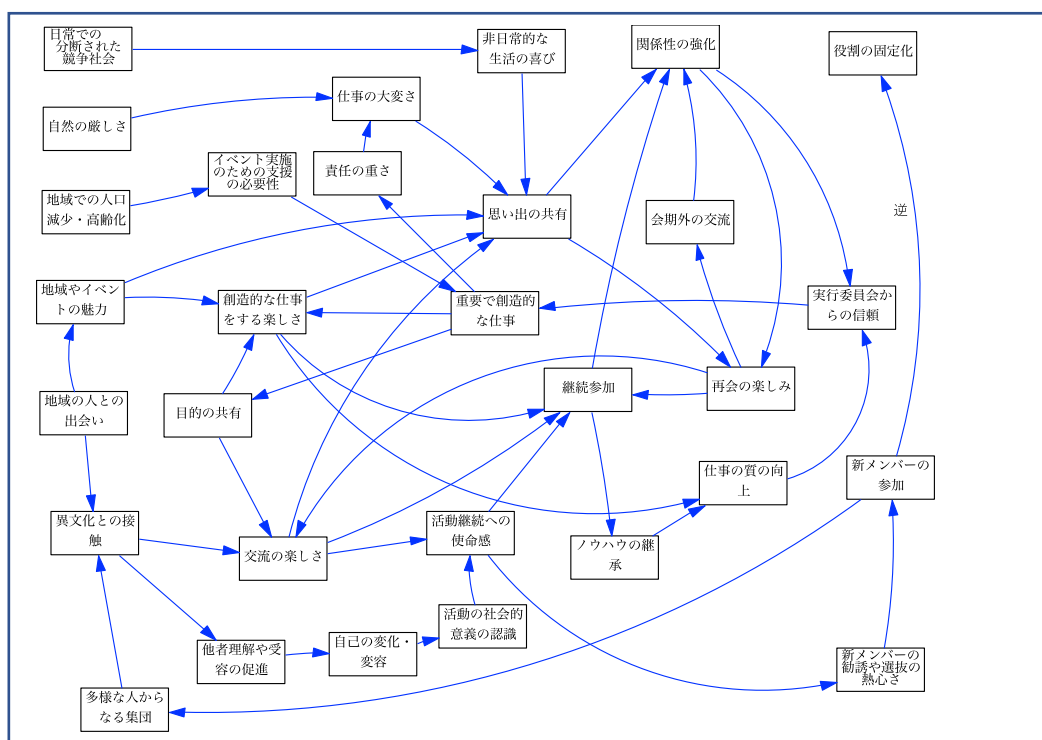


図7-2 イベント型ボランティア・ツーリズムの継続プロセス

出所：筆者作成

以下では、図7-2に沿って、イベント型ボランティア・ツーリズムの継続プロセスを確認していきたい。初めに、本研究の焦点である「継続参加」に関係の深い正のフィードバック・ループの主なものを下記に整理する。

まず、OKOVOが地域で重要な役割を担うように変化していったプロセスが代表的な事例として該当する仕事の質と信頼関係が、重要で創造的な仕事を任されることにつながり、その仕事の楽しみが継続参加につながるというループである。

ループ1：「仕事の質向上と信頼」ループ

継続参加→ノウハウの継承→仕事の質の向上→実行委員会からの信頼→重要で創造的な仕事→創造的な仕事をする楽しさ→継続参加（続く）

このループに関連して、「創造的な仕事をする楽しさ」が「仕事の質の向上」に結びつき、それが「実行委員会への信頼」へと結びつく正のフィードバック・ループも観察できる。

ループ2：「仕事の楽しさが質を生む」ループ

重要で創造的な仕事→創造的な仕事をする楽しさ→仕事の質の向上→実行委員会からの信頼→重要で創造的な仕事（続く）

次に、継続動機として重要であった交流に関連したフィードバック・ループを見ていく。初めに、交流についての思い出の共有が継続参加に結びつくループを記す。

ループ3：「思い出の共有が再会の楽しみを生む」ループ

交流の楽しさ→思い出の共有→関係性の強化→再会の楽しみ→交流の楽しさ（続く）

また、継続には新規参加者の勧誘が重要であるが、新規参加者に関するループとしては、活動継続への使命感が勧誘活動に結びつくことを示すループがある。さらに、新規参加者が加わることで、参加者の多様性が獲得され、それが異質で多様な他者との接触につながり、交流の魅力にもつながっている。

ループ4：「多様性への尊重と自己変容が活動への使命感を生む」ループ

新メンバーの参加→多様な人からなる集団→異文化との接触→他者理解や需要の促進→自己の変化・変容→活動の社会的意義の認識→活動継続への使命感→新メンバーの勧誘や選抜の熱心さ→新メンバーの参加（続く）

上記に、主な正のフィードバック・ループを整理した。ここで注意したいのは、ループ図に含まれる各要素は、この図に記されている以外の要素ともつながっており、ボランティア・ツーリズムの継続性もそれらの要素の影響を受けるということである。例えば、観光者の日常や、受け入れ地域の状況が、要素の一つとして挙げられているが、これらの要素はこのループ図の外の社会システムの一部である。そのように外部からの影響を受けることは、移動が常態化した＜モビリティ＞社会においては、避けがたいことである。そのため、本研究で取り上げた10年以上の実績がある、一見、安定していると思われるボランティア・ツーリズムであっても、＜モビリティ＞社会においては盤石ではなく、脆弱性を内包していると考えられる。それは、本事例で取り上げたボランティア・ツーリズムの空間とそこでの体験が、ループ図に掲げた要素に代表される要素間の絶え間ない複雑な相互

作用の結果、構築され続けているためである。

（２）創発のモチーフとコミュニティと観光

最後に、創発のモチーフとしての＜モビリティ＞社会と観光について触れる。本研究が取り扱った事例のうち、OKOVOが参加している雪あかりの路では、OKOVO以外にも中国や日本のボランティア団が生まれ、今では、国際交流が重要なテーマになっていることを第４章で述べた。これは、「雪あかりの路」を始めた1999年当時には強調されていなかったテーマである。当初の目的は、観光の観点からの冬の夜の活性化と地域コミュニティの再生であった。現在でも、当初の目的は重要であるが、それに加え、国際交流という計画になかった新たな側面が生まれたことが注目される。

合宿型ボランティア団体が3つ生まれ、国際交流をするようになったのは、第４章で触れたY氏が韓国と中国のボランティア団が始まるきっかけを作ったためである。そこから、Y氏以外の参加者が組織化を進め、小樽市の指示の元ではなく、自分たちで自律的に団体運営を続けたことが今日の成果につながった。詳細な検討は、本研究の範囲を超えているが、この発展の経緯は自己組織化³³の一例である可能性がある。

さらに、コミュニケーション・コミュニティとしてボランティア・ツーリズムを見た場合、本研究で取りあげた継続するボランティア・ツーリズムには、コミュニケーション・コミュニティの要素があることを事例から明らかにした。これらの事例では、参加者間に帰属に関する対話が存在していた。一方、Delanty(2003=2006:272)は、コミュニケーション・コミュニティが想像の共同体で終わるのか、場所への接続を持つことができるのかをコミュニケーション・コミュニティの課題として提示していたが、本研究が取り上げた2事例は、特定の場所との強いつながりを有していた。特定の場所への関心が高まったことを示す調査結果から考えると、そのつながりはボランティア・ツーリズムの体験をとおして、さらに強化されたと考えられる。これは、観光実践がそもそも身体の移動を伴うものであること、ボランティアの目的が地域活性化を含んでいたこと、厳しい自然の中での活動であったこと、地域の人びととの出会いがあったことなどが背景にあると考えられる。このようなボランティア・ツーリズム団体のコミュニティとしてのあり様は、「帰属への希求」

³³ 「物理学的な現象を対象としてIlya Prigogineが提唱した「散逸構造理論」と、その理論に基づく「自己組織化の3つの条件」条件は、物理学分野だけではなく、社会現象を含む幅広い分野で適応可能であると考えられている。（田坂 1997）

(Delanty2003=2006:272) としてのコミュニティと場所への接続を備え持つ、一つの新しいコミュニティの形を示唆している可能性がある。

7-4 まとめ

本章では、前章までの調査と考察を統合し、OKOVOと＜こへび隊＞の事例の組織レベルおよび個人レベルでの地域との関係性について考察した。その結果、組織の成り立ちや地域との位置付けは異なるものの、両事例に共通することとして、組織化された自律的な運営、重要で創造的な役割、参加者の高い流動性、共在と不在を通じたコミュニケーションが組織運営の特徴として挙げられた。その中でも、流動性の高さや共在と不在を通じたコミュニケーションは、＜モビリティ＞社会の特徴を表していることを確認した。さらに、両団体の構築的な命名プロセスを取り上げ、ボランティア・ツーリスト団体の帰属としてのコミュニティの可能性を示唆した。

加えて、ボランティア・ツーリストの継続参加動機については、当初は個人的な関心に基づく動機が多いが、現場での体験を通じて、交流や場所の魅力、使命感などが継続動機となることを明らかにした。交流については、非日常性、共同生活によって培われる濃い交流、不在モードの交流を特徴として確認した。

次に、地域、組織、個人のレベルでの継続するボランティア・ツーリズムにかんする要因を、ループ図でまとめ、俯瞰した。そこでは、多様な要素が複雑に影響しあっているが、その中に、仕事の質が信頼を生むフィードバック・ループや、仕事の楽しさが質を生むフィードバック・ループ、思い出の共有が再会の楽しみを生むフィードバック・ループ、多様性から生まれた自己変容が活動への使命感を生むフィードバック・ループなどが観察された。同時に、ここに表されたシステムは、より大きなシステムの一部であり、それらの影響を受ける脆弱性を有していることも指摘した。

最後に、小樽雪あかりの路の事例でOKOVOをはじめとした合宿型ボランティアが、自律的に生まれ運営されてきた結果、イベントに「国際交流」という新たなテーマを付与した過程を振り返り、そのプロセスが自己組織化である可能性を示唆した。また、本研究で取り上げた2事例がコミュニケーション・コミュニティの特徴を持つことを確認し、身体的移動とその結果としての自然や地域の人びととの出会いが、コミュニティを想像の領域だけのものではなく、場所へと接続し、一つの新たなコミュニティの形を示唆している可能性を述べた。

第8章 結語

8-1 全体のまとめ

本論文は、人、モノ、情報の移動が常態化し、新たなコミュニティの形が模索されている<モビリティ>社会で、観光が持つ意味や果たす役割を再考することを目的として、継続するボランティア・ツーリズムを事例として取り上げ、以下の三点について考察を行った。第1に、継続するボランティア・ツーリズムを通して、受け入れ地域と観光者の関係性について組織のレベルで考察を行なった。次に、組織レベルでの継続的な活動の鍵となる継続参加者の動機について、非営利組織論を参照しながら考察を行なった。第3に、それまでの考察結果を踏まえ、観光者と受け入れ地域の関係性をループ図を用いて分析し、その特徴を整理した。

以下で、各章の概要を述べる。まず、第1章では、序論として本論文の社会的・学術的背景、研究の目的、本論文における用語の定義と本論文の構成について述べた。

第2章では、先行研究の整理と本論文の独自性について述べた。ポストモダン地理学における空間論では、空間や場所は特定の存在ではなく、空間的諸関係と相互作用的であり、流動的であること、また「未来の進路を、変えることができる（Massey 1993=1997:135）」構築的なものであると認識されるようになった。さらに、<モビリティ>の議論では、社会は、不動と移動の複雑な交錯で構成される動的なシステムであり、システムの構成要素が相互作用を通して自己組織化すると論じられていること、また、<モビリティ>社会においては、コミュニティ概念の見直しが重要となっているが、近接性を越えたコミュニティの特徴として「不安定な世界の中での対話的な帰属の経験（Delanty 2003=2006:230）」が認識されるようになった経緯を確認した。

さらに、ボランティア・ツーリズム研究においては、同ツーリズムが利他的な活動を目的とした観光であることから、受け入れ地域を単なる消費対象としてみる「商品化」を是正するのではないかという期待がある一方で、期間限定的に地域外の人びとが地域に関わることによるマイナスの影響があることが論じられている。にも拘わらず、その解決の糸口となる可能性がある継続的なボランティア・ツーリズムについての研究がないことを指摘した。また、関連して、非営利組織経営の分野におけるボランティアの動機や組織上の課題を確認した。

次に、第3章では、ボランティア・ツーリズムという複雑な事象を扱うために、質的研究を採用することと、事例の選定にあたっては、活動の継続実績があり、ボランティア・ツーリストが多様な役割をとる条件が必要なことを説明した。その条件を踏まえ、調査対象となった「小樽雪あかりの路」のOKOVOと「越後妻有大地の芸術祭」〈こへび隊〉の概要を紹介した。

第4章では、「小樽雪あかりの路」のOKOVOが、同イベントにおいて、観光者的な位置付けから重要な役割を担うに至った経緯を時系列で整理した。さらに、その段階的な変化は、受け入れ地域と観光者の間の相互作用の結果として起こったこと、また、その過程においては、交流や組織化、受け入れ地域による観光者の自律的な活動の受容が大切であったことを明らかにした。

第5章では、継続するボランティア・ツーリスト団体の鍵である継続ボランティア・ツーリストに焦点を当て、「小樽雪あかりの路」のOKOVOの継続参加者にインタビューとアンケートを行い、その初期参加動機と継続参加動機を明らかにした。その結果、初期参加動機は、行き先などが重視される観光的な要因が大きかったが、継続動機では小樽という場所の魅力や自団体や他団体のメンバーなどとの交流が重要であることがわかった。

次に、第6章では、「越後妻有大地の芸術祭」のサポーターである〈こへび隊〉を取り上げ、〈こへび隊〉の成り立ちや、「大地の芸術祭」および地域におけるその位置付けを確認したのち、継続参加者の自律的な運営や支援が活動継続には重要であることを指摘した。その上で、運営の鍵となる継続参加者の初参加動機と継続動機を調査し、初参加動機では現代アートなど自らの関心が重要であったが、継続動機では、他者との交流や出会いなどが重要な因子となったこと、また当初から継続参加を予定していた訳ではないことが明らかになった。

第7章では、それまでに明らかになったOKOVOと〈こへび隊〉の組織的な特徴と継続参加者個人の動機を比較整理し、さらに組織と個人の変化をループ図でまとめ、分析した。その上で、新たなコミュニティが模索されている〈モビリティ〉社会における観光の役割や意味を考察した。

同章ではまた、第6章までの調査と考察を統合し、総合的な考察を行った。OKOVOと〈こへび隊〉の2事例の組織運営では、参加者の流動性の高さや共在と不在を通じたコミュニケーションなどに〈モビリティ〉社会の特徴が現れていることを明らかにした。また、構造的な命名プロセスを取り上げ、対話的なコミュニティの可能性を示唆した。個人の継続

動機については、それらが参加当初から存在するのではなく、現場での体験を通じて構築されることを明らかにした。加えて、地域、組織、個人のレベルでのボランティア・ツーリズムにかんする要因をまとめ、ループ図で分析した。そこでは、多様な要素が複雑に影響しあっているが、その中に、活動の継続に寄与する正のフィードバック・ループが観察された。さらに、「小樽雪あかりの路」の合宿型ボランティアの成り立ちとイベントのテーマの変遷を振り返り、そのプロセスが自己組織化と特徴付けられる可能性を示唆した。また、ボランティア・ツーリズムで体験される身体性を伴う移動とその結果としての自然や地域の人びととの出会いが、コミュニティを想像の領域だけのものではなく、具体的な場所と人びとを接続し、一つの新たなコミュニティの形となっている可能性を示唆した。

以上の考察から、＜モビリティ＞社会における観光の特徴とその意味や役割について明らかになったことを3点にまとめて確認しておく。

第1に、＜モビリティ＞社会における観光は、観光者にとっての「非日常」という観光実践における共在の時と、「日常」という不在の時を行き来しながら、訪問地域の人びとと観光者とが継続的な関係性を築き、その結果、育まれた信頼がさらなる関係の強化へと結びつく可能性がある。そのプロセスは一方的ではなく、対話的であり、その過程を通じて、地域を超えた人びとが帰属についてコミュニケーションをするコミュニティを育む可能性がある。

第2に、継続的な関係性を維持するためには組織的な仕組みに加え、その関係性にコミットする個人の動機が重要だが、個人の継続への関心は当初から存在している場合は少なく、現場の体験を通して構築される。非日常性や場所の魅力など、観光的な要素も継続的な参加動機として重要である。

第3に、観光に欠かせない身体的移動とその結果としての自然や地域の人びととの出会いは、コミュニティを想像の領域だけのものではなく、特定の場所へと接続し、一つの新たな実体的コミュニケーション・コミュニティを形作る可能性がある。

本研究では、2つのボランティア・ツーリズム事例を取り上げ、その実証的分析に基づきながら、経験的仮説にしたがって上記の可能性を明らかにした。

8-2 本論文の限界と今後の課題

本論文は、移動が常態化し、「ホーム」と「アウェイ」の境界が曖昧となる<モビリティ>社会の特徴を表す観光の事例として、継続するボランティア・ツーリズムを取り上げ、観光者と地域の関係性の変化や継続動機に着目し、経験的仮説に基づいた可能性を示唆するという点では、ボランティア・ツーリズム研究および<モビリティ>社会におけるコミュニティのあり方にかんする研究に新たな貢献をなしたと思われるが、イベント支援を対象とした2つ事例に基づいた考察であるという面からは、こうした可能性に関わる本論考が普遍的妥当性を有しているとは言い切れない限界がある。さらに多くの事例に基づく検証が必要だと考えられる。

また、本研究は、領域横断的な観光学研究として、社会学や経営学の理論や方法を用いて行われたが、<モビリティ>社会やコミュニケーション・コミュニティ、組織の発展・運営や参加者の動機などのテーマは、それぞれの分野において、個別に探求がされているテーマでもある。本研究は、それらを横断的につなぐという意味では独自の新たな貢献ができたが、各領域ではそれぞれ厚い研究の蓄積と現在進行中の実践がある。そのような各領域との知見との接続の深さが、領域をつなぐことの代償となったことは否めない。横断的な探求と共に、各領域での知見に基づく深耕も今後の課題である。

これらの課題については、今後の研究を通して、取り組んでいきたい。

謝辞

はじめに、本論文の作成にあたり、多大なご指導をいただいた指導教員の山田義弘教授に心から厚くお礼を申し上げます。東京に在住し、仕事をしながら研究を進めていた私と、時に札幌で、時に東京で、その合間や移動中には、インターネットを用いたビデオ会議やメールのやり取りを通じて、＜モバイル＞社会ならではの、ご指導をしていただきました。先生の辛抱強いご指導と励ましのお陰で、博士課程での研究を形にすることができました。あわせて副指導教員として、親身にご指導いただきました西川克之教授と山村高淑教授に感謝申し上げます。私の研究に対する幅広い視点からのご意見にいつも助けられました。

本研究が始まったきっかけは、小樽市の小川原格氏にOKOVOの話を聞いたことでした。毎年、「雪あかりの路」に韓国人ボランティアが50人もやってくるという話に驚き、早速、韓国のOKOVOに連絡を取りました。OKOVOの皆さまには、韓国や日本でのイベントや合宿に同行させていただきました。見知らぬ日本人を快く受け入れてくださったことを心から感謝いたします。また、小樽雪あかりの路実行委員会、特に代々のボランティア部会の皆さまに、多大なご協力をいただいたことを感謝申し上げます。静かな夜の揺らめくろうそくの光も、雪嵐の中の辛い作業も、忘れられない思い出です。

また、「越後妻有大地の芸術祭」の事務局の皆さまと、＜こへび隊＞の皆さまにも心より感謝を申し上げます。参与観察の形をとった調査だったため、私自身も＜こへび＞として、何度かの夏を越後妻有で過ごさせていただきました。この論文には書ききれなかった沢山の経験をさせていただきました。＜こへび隊＞ならではの魅力的な出会いに感謝しています。越後妻有の強い日射しと緑の山はいつも私の心に焼き付いています。

参与観察中心の調査と仕事で、不在がちな私を寛容に受けとめ、支えてくれた家族、深沢政彦と深沢ひとみに感謝します。調査当時、高校生だった娘は、夏休みに私の調査に同行することもありました。一緒に時間を過ごしてくれたことに感謝します。

最後に、今は亡き両親に心から感謝します。小さな時から出かけばかりの＜モバイル＞だった私を、自由に育ててくれました。そのお陰で、今の私がいます。

2017年11月

冬の始まりを感じる札幌で、

依田 真美

参考文献

- Ahmed, S., Castaneda, C., Fortier, A. and Sheller, M. eds., 2003, *Uprootings/Regroundings: Questions of Home and Migration*, Oxford: Berg Publishers.
- Allen, N. J. and Meyer, J. P., 1990, "The Measurement and Antecedents of Affective, Continuous and Normative Commitment to the Organization," *Journal of Occupational Psychology*, 63(1): 1-18.
- Arnstein, S. R., 1969, "A Ladder of Citizen Participation," *Journal of the American Planning Association*, 35(4): 216-224.
- Ashforth, B. E. and Mael, F., 1989, "Social Identity Theory and the Organization," *Academy of Management Review*, 14(1): 20-39.
- Atkinson, P. and Hammersley, M., 1998, "Ethnography and Participant Observation," Denzin, N. and Lincoln, Y.S. eds, *Strategies of Qualitative Inquiry*, London: Sage, 110-136.
- Ateljevic, I., 2009, "Transmodernity: Remaking Our (Tourism) World?," John Tribe ed., *Philosophical Issues in Tourism*, Bristol: Channel View Publications, 278-300.
- Bauman, Z., 2000, *Liquid Modernity*, Cambridge: Polity. (=2001, 森田典正訳『リキッド・モダニティ—液状化する社会』大月書店.)
- Beck, U., 1986, *Risikogesellschaft: Auf dem Wege in eine andere Moderne*, Berlin: Suhrkamp Verlag. (=1998, 東廉、伊藤美登里訳『危険社会—新しい近代への道』法政大学出版局.)
- Benson, A.M., 2011, "Volunteer Tourism: Structuring the Research Agenda," Angela Benson ed., *Volunteer Tourism: Theory Framework to Practical Applications*, London: Routledge: 240-251.

- Bhabha, H.K., 1994, *The Location of Culture*, Oxon: Routledge. (=2005, 本橋哲也・外岡尚美・正木恒夫・阪元留美訳『文化の場所: ポストコロニアリズムの位相』法政大学出版会.)
- Blackman, D. A. and Benson, A. M., 2010, "The Role of Psychological Contract in Managing Research Volunteer Tourism," *Journal of Travel & Tourism Marketing*, 27(3): 221-235.
- Boden, D., 1994, *The Business of Talk*, Cambridge: Polity.
- Brah, A., 1996, *Cartographies of Diaspora: Contesting Identities*, London: Routledge.
- Broad, S. J., 2003, "Living the Thai Life-A Case Study of Volunteer Tourism at the Gibbon Rehabilitation Project," *Tourism Recreation Research*, 28(3): 63-72.
- Brown, F., 1989, "Is tourism Really a Peacemaker?," *Tourism Management*, 10(4): 270-271.
- Brown, S., and Morrison, A. M., 2003, "Expanding Volunteer Vacation Participation: An Exploratory Study on the Mini-Mission Concept," *Tourism Recreation Research*, 28(3): 73-82.
- Bruner, E. M., 1991, "Transformation of Self in Tourism," *Annals of Tourism Research*, 18(2): 238-250.
- Buchanan, M., 2002, *Nexus: Small Worlds and the Groundbreaking Science of Networks*, London: W. W. Norton. (=2005, 坂本芳久訳『複雑な世界、単純な法則—ネットワーク科学の最前線』草思社.)
- Butcher, J., 2006, "A Response to Building a Decommodified Research Paradigm in Tourism: The Contribution of NGOs by Stephen Wearing, Matthew McDonald and Jess Ponting. *Journal of Sustainable Tourism*, Vol. 13, No. 5, 2005: 424-455," *Journal of Sustainable Tourism*, 14(3): 307-310.

- Butler, R. W., 1990, "Alternative Tourism: Pious Hope or Trojan Horse?," *Journal of Travel Research*, 3: 40-45.
- , 1991, "Tourism, Environment, and Sustainable Development," *Environmental Conservation*, 18: 201-209.
- Callanan, M. and Thomas, S., 2005, "Volunteer Tourism: Deconstructing Volunteer Activities within a Dynamic Environment," M. Novelli, ed., *Niche Tourism, Contemporary Issues, Trends and Cases*, Oxford: Butterworth-Heinemann, 183-200.
- Campbell, L. M. and Smith, C., 2006, "What Makes Them Pay? Values of Volunteer Tourists Working for Sea Turtle Conservation," *Environmental Management*, 38(1): 84-98.
- Chayko, M., 2002, *Connecting: How We Form Social Bonds and Communities in the Internet Age*, New York: State University of New York Press.
- Chen, L.-J., and Chen, J. S., 2011, "The Motivations and Expectations of International Volunteer Tourists: A Case Study of 'Chinese Village Traditions'," *Tourism Management*, 32(2): 435-442.
- Clary, E. G. and Snyder, M., 1991, "A Functional Analysis of Altruism and Prosocial Behavior: The Case of Volunteerism," Clark, M. S. ed., *Review of Personality and Social Psychology*, 12: 119-148.
- Clary, E. G., Snyder, M., Ridge, R. D., Copeland, J., Stukas, A. A., Haugen, J. and Miene, P., 1998, "Understanding and Assessing the Motivations of Volunteers: A Functional Approach," *Journal of Personality and Social Psychology*, 74(6): 1516-1530.
- Cnaan, R. A. and Cascio, T. A., 1999, "Performance and Commitment: Issues in Management of Volunteers in Human Service Organizations," *Journal of Social Service Research*, 24(3/4): 1-37.

- Coghlan A., 2008, "Exploring the Role of Expedition Staff in Volunteer Tourism," *International Journal of Tourism Research* 10: 183-191.
- Cohen, E., 1987, "Alternative Tourism: A Critique," *Tourism Recreation Research*, 12: 13-18.
- Cohen, S. A., Duncan, T. and Thulemark, M., 2015, "Lifestyle Mobilities: The Crossroads of Travel, Leisure and Migration," *Mobilities*, 10(1): 155-172.
- Coles, T. and Timothy, D. eds., 2004, *Tourism, Diasporas and Space*, London: Routledge.
- Colquhoun, R. and Martin, B., 2001, "Constructing Social Action," *Philosophy and Social Action*, 27(4): 7-23.
- Cresswell, T., 2006, *On the Move: Mobility in the Modern Western World*, New York: Routledge.
- Cresswell, T., 2010, "Mobilities I: Catching Up," *Progress in Human Geography*, 35(4): 550-558.
- Crompton, J. L., 1979, "Motivations for Pleasure Vacation," *Annals of Tourism Research*, 6(1): 408-424.
- Dailey, R. C., 1986, "Understanding Organizational Commitment for Volunteers: Empirical and Managerial Implications," *Journal of Voluntary Action Research*, 15(1): 9-31.
- Dann, G. M. S., 1977, "Anomie, Ego-Enhancement and Tourism," *Annals of Tourism Research*, 4(4): 184-194.
- Davidson, R. and Cope, B., 2003, *Business Travel: Conferences, Incentive Travel, Exhibitions, Corporate Hospitality, and Corporate Travel*, Harlow: Longman.

Delanty, G., 2003, *Community*, New York: Routledge. (=2006, 山之内靖・伊藤茂訳『コミュニティーグローバル化と社会理論の変容』NTT出版.)

Desforges, L., 1998, “Checking out the Planet’: Global Representations/Local Identities in Youth Travel,” Skelton, T. and Valentine, G. eds., *Cool Places: Geographies of Youth Cultures*, London: Routledge, 175-192.

Desforges, L., 2000, “Travelling the World: Identity and Travel Biography,” *Annals of Tourism Research*, 27(4): 926-945.

Din, K.H., 1988, “Social and Cultural Impacts of Tourism,” *Annals of Tourism Research*, 15(4): 563-566.

Drucker, P. F., 1990, *Managing the Nonprofit Organizations*, New York: Harper Collins Publishers. (=1991, 上田惇生・田代正美訳『非営利組織の経営—原理と実践』ダイヤモンド社.)

——, 1995, *Managing in a Time of Great Change*, New York: Truman Talley Books/Dutton. (=1995, 上田惇生・林正・佐々木実智男・田代 正美訳『未来への決断—大転換期のサバイバル・マニュアル』ダイヤモンド社.)

Duval, D., 2002, “The Return Visit-Return Migration Connection,” Hall, C. M. and Williams, A. M. eds., *Tourism and Migration: New Relationships Between Production and Consumption*, Dordrecht: Kluwer, 257-276.

越後妻有大地の芸術祭実行委員会, (2001、2004、2007、2010、2013、2016), 『越後妻有アートトリエンナーレ 大地の芸術祭・総括報告書』.

越後妻有大地の芸術祭実行委員会, 2001, 『大地の芸術祭—越後妻有アートトリエンナーレ2000』.

越後妻有里山協働機構, 2010, 『大地の芸術祭—越後妻有アートトリエンナーレ2009』.

- Edwards, M. D. G., 2006, "Museum Volunteers: A Discussion of Challenges Facing Managers in the Cultural and Heritage Sectors," *Australian Journal on Volunteering*, 11(1): 19-27.
- Ellis, S.J., 1997, "Trends and Issues in Volunteerism in the U.S.A.," *Australian Journal on Volunteering*, 2(2): 29-34.
- Ellis, C., 2003, "When Volunteers Pay to Take a Trip with Scientists: Participatory Environmental Research Tourism (PERT)," *Human Dimensions of Wildlife*, 8: 75-80.
- Facebook, 2017, "Stats", (Retrieved Oct. 16, 2017, <https://newsroom.fb.com/company-info/>).
- Farmer, S. M. and Fedor, D. B., 1999, "Volunteer Participation and Withdrawal: A Psychological Contract Perspective on the Role of Expectations and Organizational Support," *Nonprofit Management and Leadership*, 9(4): 349-367.
- Fee, L. and Mdee, A., 2010, "How Does It Make a Difference? Towards 'accreditation' of the Development Impact of Volunteer Tourism," Benson, A. ed., *Volunteer Tourism: Theory Framework to Practical Applications*, New York: Routledge. 223-239.
- Fitzpatrick L., 2007, "Vacationing Like Brangelina," *Time*, (Retrieved Aug. 15, 2013, <http://www.time.com/time/magazine/article/0,9171,1647457,00.html>).
- Flick, U., 2007, *Qualitative Sozialforschung: Eine Einführung*, Reinbek: Rowohlt Taschenbuch Verlag. (=2011, 小田博志監訳『新版 質的研究入門—<人間の科学>のための方法論』春秋社.)
- Fortier, A. M., 2000, *Migrant Belongings: Memory, Space, Identity*, Oxford: Berg.
- Gazley, B., 2001, "Volunteer Vacationers and What Research Can Tell Us About Them," *Volunteerism: The Electronic Journal of the Volunteerism Community*, 1(2): <http://www.e-volunteerism.com>.

- Giddens, A., 1991, *Modernity and Self-Identity*, Stanford: Polity Press. (=2005 秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳『モダニティと自己アイデンティティ—後期近代における自己と社会』ハーベスト社.)
- Glaser, B. T. and Strauss, A. L., 1967, *The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research*, New York: Aldine. (=1996, 後藤隆・大出春江・水野節夫訳『データ対話型理論の発見—調査からいかに理論をうみだすか』新曜社.)
- Gordon, L., 2002, “Social Movements, Leadership, and Democracy: Toward More Utopian Mistakes,” *Journal of Women's History*, 14(2): 102-117.
- Gray, N. J. and Campbell, L. M., 2007, “A Decommodified Experience? Exploring Aesthetic, Economic and Ethical Values for Volunteer Ecotourism in Costa Rica,” *Journal of Sustainable Tourism*, 15(5): 463-482.
- Guttentag, D. A., 2009, “The Possible Negative Impacts of Volunteer Tourism,” *International Journal of Tourism Research*, 11(6): 537-551.
- Hackman, J. R. and Oldham, G. R., 1980, *Work Redesign*, Boston: Addison-Wesley.
- Hall, C. M., 2005, “Reconsidering the Geography of Tourism and Contemporary Mobility,” *Geographies Research*, 43(2): 125-139.
- Hall, C. M., 2008, “Of Time and Space and Other Things: Laws of Tourism and the Geographies of Contemporary Mobilities,” Burns, P. M. and Novelli, M. eds., *Tourism and Mobilities*, Wallingford: CABI Publishing, 15-32.
- Halpenny, E. A. and Caissie, L. T., 2003, “Volunteering on Nature Conservation Projects: Volunteer Experience, Attitudes and Values,” *Tourism Recreation Research*, 28(3): 25-33.
- Hammersley, M. and Atkinson, P., 1995, *Ethnography: Principles in Practice*, London: Routledge.

Hannam, K., Sheller, M. and Urry, J., 2006, "Editorial: Mobilities, Immobilities and Moorings," *Mobilities*, 1(1): 1-22.

Harvey, D., 1989, *The Condition of Postmodernity: An Enquiry into the Origins of Cultural Change*, Hoboken: Wiley-Blackwell. (=1999, 吉原直樹監訳『ポストモダニティの条件』青木書店.)

——, 1993, "From Space to Place and Back Again: Reflections on the Condition of Postmodernity," Bird, J., Curtis, B., Putnam, T., Robertson, G. and Tickner, L. eds., *Mapping the Future: Local Cultures, Global Change*, London: Routledge, 3-29. (=1997, 加藤茂生訳「空間から場所へ、そして場所から空間へ—ポストモダニティの条件についての考察」メディア・デザイン研究所編『10+1』11, INAX出版, 85-104.)

——, 1996, *Justice, Nature, and the Geography of Difference*, Hoboken: Wiley-Blackwell.

Haywood, K.M., 1988, "Responsible and responsive tourism planning in the community," *Tourism Management*, 9(2): 105-118.

Harris, M., 1998, "Doing It Their Way: Organizational Challenges for Voluntary Associations," *Nonprofit and Voluntary Sector Quarterly*, 27(2):144-158.

Higgins-Desbiolles, F., 2003, "Reconciliation Tourism: Tourism Healing Divided Societies!," *Tourism Recreation Research*, 28(3): 35-44.

Hillery, G.A., 1955, "Definitions of Community: Areas of Agreement," *Rural Sociology*, 20, 111-123.

Holmes, K. (2003), "Volunteers in the Heritage Sector: A Neglected Audience?," *International Journal of Heritage Studies*, 9(4): 341-355.

- Holmes, K. and Edwards, D., 2008, “Volunteers as Hosts and Guests in Museums,” Lyons, K. D. and Wearing, S. eds., *Journeys of Discovery in Volunteer Tourism*, Wallingford: CABI, 155-165.
- Holmes, K. and Smith, K., 2009, *Managing Volunteers in Tourism: Attractions, Destinations and Events*, Oxford: Butterworth-Heinemann.
- ICAO, 2016, “Annual Reports 2015,” (Retrieved Oct. 15, 2017, https://www.icao.int/annual-report-2015/Documents/Appendix_1_en.pdf).
- 今瀬政司, 2015, 「実践的教育・研究「今瀬ゼミとちお祭への裏方参画と調査・情報発信」ー地域を支える「裏方」と必要性からの「協働」」『長岡大学研究論叢』第13号: 45-50.
- International Airport Review, 2017, “The Top 20 Largest Airports by Passenger Number: 20 years of International Airport Review,” (Retrieved Oct. 15, 2017, <https://www.internationalairportreview.com/news/32311/top-20-largest-airports-passenger-number/>).
- Internet World Stats, 2017, “Internet Usage Statistics, The Internet Big Picture,” (Retrieved Oct. 16, 2017, <http://www.internetworldstats.com/stats.htm>).
- 石森秀三, 2001, 「21世紀における自律的観光の可能性」『国立民族学博物館調査報告23』5-14.
- Iso-Ahola, S. E., 1982, “Towards a Social Psychological Theory of Tourism Motivation: A Rejoinder,” *Annals of Tourism Research*, 9(2): 256-262.
- 伊藤整, 2006, 『雪明りの路(愛蔵版詩集シリーズ)』日本図書センター.

張慶在, 2014, 『観光空間の構造とオーセンティシティに関する研究：多層的「ネットワーク」空間とオーセンティケーション概念を中心に』北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院観光創造専攻博士学位論文.

Jenner, J. R., 1981, “Volunteerism as an Aspect of Women’s Work’s Lives,” *Journal of Vocational Behavior*, 19: 302-314.

——, 1984, “Organizational Commitment among Women Volunteers: Meaning and Measurement,” *Psychological Reports*, 54: 991-996.

JICA, 2017, 「JICAボランティア」, (2017年11月9日取得, <https://www.jica.go.jp/volunteer/>).

加藤篤志, 2014, 「若者の<つながり>をどう考えるか—若者の友人関係を手がかりにして」
長田攻一・田所承己編『<つながる／つながらない>の社会学—個人化する時代のコミュニティのかたち』弘文堂, 108-133.

加藤政洋・大城直樹編著, 2006, 『都市空間の地理学』ミネルヴァ書房.

川喜田二郎, 2010, 『創造性とは何か』祥伝社, 74.

Kendall, J. and Knapp, M., 1996, *The Voluntary Sector in the United Kingdom*, Manchester, Manchester: Manchester University Press.

Kernan, J. B. and Domzal, T. J., 1999, “Playing on the Post-Modern Edge: Action Leisure as Self-Identity,” Woodside, A., Crouch, G., Mazanec, G. I., Mazanec, J., Oppermann, M. and Sakai, M. eds., *Consumer Psychology of Tourism, Hospitality and Leisure*, Wallingford: CABI, 91-101.

北川フラム, 2005, 『希望の美術・協働の夢—北川フラムの40年1965-2004』角川学芸出版.
北川フラム, 2010, 『大地の芸術祭』角川学芸出版.

北川フラム, 2014, 『美術は大地をひらく—大地の芸術祭10の思想』 現代企画室.

北川フラム・大地の芸術祭実行委員会, 2012, 『大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ2012公式ガイドブック—アートをめぐる旅ガイド』 株式会社美術出版社.

Klandermans, B., 1992, “Transient Identities? Membership Patterns in the Dutch Peace Movement,” Gusfield, J., Johnston, H. and Larana E. eds., *New Social Movements: From Ideology to Identity*, Philadelphia: Temple University Press, 168-184.

Knoke, D., 1988, “Incentives in Collective Action Organizations,” *American Sociological Review*, 53(3): 311.

小泉洋子・飯田和也・堂下恵, 2008, 「伝統祭事「キリコ祭」における体験参加の受け入れ体制整備の提案」『日本観光研究学会全国大会学術論文集』, No.23: 249-252.

Korten, D., 1990, *Getting to the 21st Century: Voluntary Action and the Global Agenda*, West Hartford: Kumarian Press, (=2004, 渡辺龍也訳『NGOとボランティアの21世紀』学陽書房.)

Krippendorff, J., 1987, *The Holiday Makers: Understanding the Impact of Leisure and Travel*, Oxford: Butterworth-Heinemann.

Lansley, J., 1996, “Membership Participation and Ideology in Large Voluntary Organizations: The Case of the National Trust,” *Voluntas*, 7(3): 221-240.

Larsen, J., Urry, J. and Axhausen, K.W., 2006, *Mobilities, Networks, Geographies*, New York: Routledge.

Lepp A., 2008, “Discovering Self and Discovering Others through the Taita Discovery Centre Volunteer Tourism Programme, Kenya,” Lyons, K. D. and Wearing, S. eds., *Journeys of Discovery in Volunteer Tourism*, Wallingford: CABI, 86-100.

- Liao-Troth, M. A., 2005, "Are They Here for the Long Haul? The Effects of Functional Motives and Personality Factors on the Psychological Contracts of Volunteers," *Nonprofit Voluntary Sector Quarterly*, 34(4): 510-530.
- Lo, A. S. and Lee, C. Y. S., 2011, "Motivations and Perceived Value of Volunteer Tourists from Hong Kong," *Tourism Management*, 32(2): 326-334.
- Lyons, K D., 2003, "Ambiguities in Volunteer Tourism: A Case Study of Australians Participating in a J-1 Visitor Exchange Programme," *Tourism Recreation Research*, 28(3): 5-14.
- Lyons, K.D. and Wearing, S., 2008, "Volunteer Tourism as Alternative Tourism: Journeys Beyond Otherness," Lyon, K. D. and Wearing S. eds., *Journeys of Discovery in Volunteer Tourism*, Wallingford: CABI, 3-11.
- MacCannell, D., 1976, *The Tourist: A New Theory of the Leisure Class*, London: MacMillan Press.
- , 1992, *Empty Meeting Grounds*, London: Routledge.
- MacNeille, S., 2006, "For Those Who Aid Others, 'Tourist' Doesn't Tell the Whole Story," *New York Times*. (Late Edition (East Coast)). New York, N.Y.: Nov. 13, 2006, F.8.
- Marshall, G. ed., 1994, *Oxford Dictionary of Sociology*, New York: Oxford University Press.
- Massey, D. B., 1993, "Politics and Space/Time," *Place and the Politics of Identity*, Michael Keith and Steve Pile eds., London: Routledge, 139-159. (= 1997, 篠儀直子訳「政治と空間/時間」メディア・デザイン研究所編『10+1』11, INAX出版, 121-137.)
- , 1993, "Power-Geometry and a Progressive Sense of Place," Bird J., Curtis, B., Putnam, T. and Tickner, L. eds., *Mapping the Futures: Local Cultures, Global Change*, London: Routledge, 59-69.

- Matthews, A., 2008, "Negotiated Selves: Exploring the Impact of Local-Global Interactions on Young Volunteer Travelers," Lyons, K.D. and Wearing, S. eds., *Journeys of Discovery in Volunteer Tourism*, Wallingford: CABI, 101-117.
- McGehee, N. G., and Andereck, K., 2008, "'Pettin' the Critters': Exploring the Complex Relationships and the Voluntoured in McDowell Country, West Virginia, USA, and Tijuana, Mexico," Lyons, K.D. and Wearing, S. eds., *Journeys of Discovery in Volunteer Tourism*, Wallingford: CABI, 12-24.
- McGehee, N. G. and Andereck, K., 2009, "Volunteer Tourism and the 'Voluntoured': the Case of Tijuana, Mexico," *Journal of Sustainable Tourism*, 17(1): 39-51.
- McGehee, N. G. and Santos, C. A., 2005, "Social Change, Discourse and Volunteer Tourism," *Annals of Tourism Research*, 32(3): 760-779.
- McIntosh, A. J. and Zahra, A., 2007, "A Cultural Encounter through Volunteer Tourism: Towards the Ideals of Sustainable Tourism?," *Journal of Sustainable Tourism*, 15(5): 541-556.
- Mdee, A. and Emmott, R., 2008, "Social Enterprise with International Impact: The Case for Fair Trade Certification of Volunteer Tourism," *Education, Knowledge and Economy*, 2(3): 191-201.
- 水内俊雄・大城直樹・多木浩二, 1997, 「新しい地理学」をめぐって— 地図の解体,空間のマッピング、『10+1』11, 1997, INAX出版, 64-84.
- Mol, A. and Law, J., 1994, "Regions, Networks and Fluids: Anaemia and Social Topology," *Social Studies of Science*, 24(4): 641-671.
- Morrison, E. W. and Robinson, S. R., 1997, "When Employees Feel Betrayed: A Model of How Psychological Contract Violation Develops," *Academy of Management Review*, 22(1): 226-256.

内閣府, 1974-2016, 『社会意識に関する世論調査』.

中村憲司, 松本秀人, 敷田麻実, 2008, 「『労働』と観光が融合したボランティアツーリズムに関する研究」, 日本観光研究学会全国大会学術論文集2008年11月: 427.

Nandhakumar, J., 1999, “Virtual Teams and Lost Proximity: Consequences on Trust Relationships,” Jackson, P. ed., *Virtual Working: Social and Organisational Dynamics*, London: Routledge, 46-56.

西浦功, 1997, 「表出的役割からみたボランティア団体の組織運営—余暇活動としてのボランティア活動」『現代社会学研究』 10: 118-131.

日本社会学会社会学事典刊行委員会編, 2010, 『社会学事典』.

小川原格, 2008, 「雪あかりの路とサステイナブルツーリズム」, もう一人の蕎麦屋親爺の独り言, 2008年05月23日, (2010年5月21日取得, <http://sobaya-oyaji.jugem.jp/?cid=22>).

O'Reilly, K., 2003, “When Is a Tourist? The Articulation of Tourism and Migration in Spain’s Costa del Sol,” *Tourist Studies*, 3(3): 301-317.

小樽市, 2014, 『総合戦略～OTARU PRIDE～ 2015-2019 総合戦略』, (2017年10月28日取得, https://www.city.otaru.lg.jp/sisei_tokei/koso_keikaku/otaru_pride/index.data/senryaku_siryou.pdf#search=%27%E7%B7%8F%E5%90%88%E6%88%A6%E7%95%A5%E3%80%9COTARU+PRIDE%E3%80%9C+20152019+%E7%B7%8F%E5%90%88%E6%88%A6%E7%95%A5%27).

小樽市, 2017a, 『平成24年市民経済計算推計結果報告書』, (2017年10月28日取得, https://www.city.otaru.lg.jp/sisei_tokei/reiki_tokei_siryo/toukei/shiminkeizaikaisan.data/24siminkeizaihoukokusyo.pdf).

小樽市, 2017b, 「観光入り込み客数の推移」, (2017年10月28日取得,
<https://www.city.otaru.lg.jp/kankou/torikumi/irikomi/gaiyou.html>).

小樽市, 2017c, 「小樽観光基本マップ」, (2017年10月29日取得,
https://www.city.otaru.lg.jp/kankou/torikumi/kanko_kihonmap/).

小樽雪あかりの路実行委員会, 2005-2017, 『小樽雪あかりの路公式パンフレット』 第7回-
第19回.

小樽雪あかりの路実行委員会, 1999-2016, 『小樽雪あかりの路事業報告書 決算書 第1-18
回』.

Pearce, P. L. and Lee, U. I., 2005, “Developing the Tourist Career Approach to Tourist Motivation,”
Journal of Travel Research, 43(3): 226-237.

Perkins, K. B. and Poole, D. G., 1996, “Oligarchy and Adaptation to Mass Society in an
All-Volunteer Organization: Implications for Understanding Leadership, Participation, and
Change,” *Nonprofit and Voluntary Sector Quarterly*, 25(1): 73-88.

Pizam, A., 1996, “Does Tourism Promote Peace and Understanding between Unfriendly Nations?,”
Pizam, A. and Mansfeld, Y. eds., *Tourism, Crime and International Security Issues*,
Chichester: Wiley and Sons, 203-213.

Prigogine, I., 1997, *The End of Certainty*, New York: Free Press.

Prigogine, I. and Stengers, I. (1984): *Order Out of Chaos - Man's New Dialogue with Nature*, Bantam
Books, 伏見康治他(1987)訳: 『混沌からの秩序』 みすず書房.

Raymond, E. and Hall, C., 2008, “The Development of Cross-Cultural (Mis)Understanding through
Volunteer Tourism,” *Journal of Sustainable Tourism*, 16(5): 530-543.

- Robinson, S. L., 1996, "Trust and Breach of the Psychological Contract," *Administrative Science Quarterly*, 41(4): 574-599.
- Robinson, S. L., Kraatz, M. S. and Rousseau, D. M., 1994, "Changing Obligations and the Psychological Contract: A Longitudinal Study," *Academy of Management Journal*, 37(1): 137-152.
- Robinson, S. L. and Morrison, E. W., 1995, "Psychological Contracts and Organization Citizenship Behavior: The Effect of Unfulfilled Obligations on Civic Virtue Behavior," *Journal of Organizational Behavior*, 16: 289-298.
- Robinson, S. L. and Rousseau, D. M., 1994, "Violating the Psychological Contract: Not the Exception but the Norm," *Journal of Organizational Behavior*, 15(3): 245-259.
- Rousseau, D. M., 1989, "Psychological and Implied Contracts in Organizations," *Employee Responsibilities and Rights Journal*, 2(2): 121-139.
- 桜井正成, 2007, 『ボランティアマネジメント—自発的行為の組織化戦略』ミネルヴァ書房.
- 札幌市, 2015, 「平成26年度観光入り込み状況」, (2017年10月28日取得,
https://www.city.sapporo.jp/city/mayor/interview/text/2015/20150730/documents/kankou.pdf#search=%27%E6%9C%AD%E5%B9%8C%E5%B8%82+%E5%B9%B3%E6%88%90%E5%BC%92%E5%BC%96%E5%B9%B4%E5%BA%A6%E8%A6%B3%E5%85%89%E5%85%A5%E3%82%8A%E8%BE%BC%E3%81%BF%E7%8A%B6%E6%B3%81%27)).
- 札幌市, 2015, 「平成26年度版 札幌の観光」, (2017年10月28日取得,
<http://www.city.sapporo.jp/keizai/kanko/statistics/documents/sapporonokannkouzenbun.pdf>).
- Schein, E. H., 1965, *Organizational Psychology*, Oxford: Prentice Hall.
- Scheyvens R., 2002, *Tourism for Development: Empowering Communities*, Toronto: Prentice Hal.

Sheller, M. and Urry, J. eds., 2004, *Tourism Mobilities: Places to Play, Places in Play*, London: Routledge.

Sheller, M and Urry, J., 2006, “The New Mobilities Paradigm,” *Environment and Planning A*, 38(2): 207-226.

Shore, L.M. and Tetrick, L.E., 1994, “The Psychological Contract as an Explanatory Framework in the Employment Relationship,” *Journal of Organizational Behavior*, 1: 91-109.

Shurmer-Smith, P. and Hannam, K., 1994, *Worlds of Desire, Realms of Power: A Cultural Geography*, London: Arnold.

Simon, H. A., 1997, *Administrative Behavior*, 4th ed., New York: Free Press.

Simpson, K., 2004, “‘Doing Development’: the Gap Year, Volunteer-Tourists and a Popular Practice of Development,” *Journal of International Development*, 16(5): 681-692.

Sin, H. L., 2009, “Volunteer Tourism: ‘Involve Me and I Will Learn’?,” *Annals of Tourism Research*, 36(3): 480-501.

Smith, D.H., 2000, *Grassroots Associations*, Sage

総務省, 2012, 「創造的人材の定住・交流の促進に向けた事例調査～定住自立圏の形成を目指して～」, (2017年10月28日取得,

http://www.soumu.go.jp/main_content/000160578.pdf#search=%27%E5%89%B5%E9%80%A0%E7%9A%84%E4%BA%BA%E6%9D%90%E3%81%AE%E5%AE%9A%E4%BD%8F%E3%83%BB%E4%BA%A4%E6%B5%81%E3%81%AE%E4%BF%83%E9%80%B2%E3%81%AB%E5%90%91%E3%81%91%E3%81%9F%E4%BA%8B%E4%BE%8B%E8%AA%BF%E6%9F%BB%E3%80%9C%E5%AE%9A%E4%BD%8F%E8%87%AA%E7%AB%8B%E5%9C%8F%E3%81%AE%E5%BD%A2%E6%88%90%E3%82%92%E7%9B%AE%E6%8C%87%E3%81%97%E3%81%A6%E3%80%9C%27)).

総務省, 2017a, 「国勢調査」, (2017年10月28日取得,
<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/GL02100104.do>).

総務省, 2017b, 「平成28年社会生活基本調査」, (2017年10月28日取得,
<http://www.stat.go.jp/data/shakai/2016/index.htm>).

Starr, J. M., 1994, “Peace Corps Service as a Turning Point,” *International Journal of Aging and Human Development*, 39(2): 137-161.

Stebbins, R. A., 2004, *Between Work and Leisure: The Common Ground of Two Separate Worlds*, New Brunswick: Transaction.

Sterman, J., 2000, *Business Dynamics: Systems Thinking and Modeling for a Complex World*, Boston: Irwin/McGraw-Hill. (=2006, 小田理一郎訳『システム思考—複雑な問題の解決技法』東洋経済新報社.)

鈴木謙介, 2013, 『ウェブ社会のゆくえ 〈多孔化〉した現実のなかで』 NHK出版.

Swarbrooke, J., Beard, C., Leckei, S. and Pomfret, G., 2003, *Adventure Tourism: The New Frontier*, Oxford: Butterworth-Heinemann.

田坂広志, 1997, 『複雑系の経営—「複雑系の知」から経営者への七つのメッセージ』(kindle版) 東洋経済新報社.

Thrift, N., 2007, *Non-Representational Theory*, London: Routledge.

Tidwell, M. V., 2005, “A Social Identity Model of Prosocial Behaviors within Nonprofit Organizations,” *Nonprofit Management and Leadership*, 15(4): 449-467.

十日町市, 2012, 「大地の芸術祭—越後妻有アートトリエンナーレ」とは, (2012年10月30日取得, <http://www.city.tokamachi.lg.jp/kanko/10170400003.html>).

十日町市, 2016, 「統計で見る十日町市（平成27 年度版）」.

Tolia-Kelly, D., 2006, “Mobility/Stability: British Asian Cultures of ‘Landscape and Englishness’,”
Environment and Planning A, 38(2): 341-358.

Tourism Research and Marketing, 2008, *Volunteer Tourism: A Global Analysis*, Arnhem: ATLAS.

UNHCR, 2017, “UNHCR Statistics,” (Retrieved Oct. 15, 2017,
<http://popstats.unhcr.org/en/overview>).

United Nations, 1994, *Recommendations on Tourism Statistics*.

United Nations Volunteers, “2017, Statistical and Financial Information for 2016,” *UNV 2016 Report*, (Retrieved Nov. 9, 2017,
https://www.unv.org/sites/default/files/UNV_Annual_Report_Statistics_2016_EN.pdf).

UNWTO, 2017, "Sustained Growth in International Tourism Despite Challenges"(09.2017),"
UNWTO World Tourism Barometer, 15, (Retrieved Nov. 8, 2017,
http://cf.cdn.unwto.org/sites/all/files/pdf/unwto_barom17_01_january_excerpt_.pdf).

占部都美, 1974, 『近代組織論 <1> バーナードとサイモン』白桃書房.

Urry, J., 2000a, “Mobile Sociology,” *The British Journal of Sociology*, 51(1): 185-203.

——, 2000b, *Sociology Beyond Societies: Mobilities for the Twenty-First Century*, London:
Routledge. (=2005, 吉原直樹監訳『社会を越える社会学—移動・環境・シチズンシッ
プ』法政大学出版局.)

——, 2002, “Mobility and Proximity,” *Sociology*, 36(2):255-274.

——, 2004, “Connections,” *Environment and Planning D: Society and Space*, 22:27-38.

- , 2007, *Mobilities*, Cambridge: Polity. (=2015, 吉原直樹・伊藤嘉高訳『モビリティーズ—移動の社会学』作品社.)
- Ver Beek, K. A., 2006, “The Impact of Short-Term Missions: A Case Study of House Construction in Honduras after Hurricane Mitch,” *Missiology: An International Review*, 34(4): 477-496.
- Wall, G and Mathieson, A., 2006, *Tourism: Change, Impacts and Opportunities*, Toronto: Prentice Hall.
- Wearing, S., 2001, *Volunteer Tourism Experiences That Make a Difference*, Wallingford: CABI.
- Wearing, S. and McDonald, M., 2002, “The Development of Community-based Tourism: Re-thinking the Relationship between Tour Operators and Development Agents as Intermediaries in Rural and Isolated Area Communities,” *Journal of sustainable tourism*, 10(3): 191-206.
- Wearing, S. and McGehee, N., 2013, “Volunteer tourism: A review,” *Tourism Management*, 38: 120-130.
- Wearing, S. and Ponting, J., 2006, “Reply to Jim Butcher’s Response (Vol.14, No.3) to ‘Building a Decommodified Research Paradigm in Tourism: The Contribution of NGOs’ (Vol.13, No.5),” *Journal of Sustainable Tourism*, 14(5): 512-515.
- Wearing, S. and Ponting, J., 2009, “Breaking Down the System: How Volunteer Tourism Contributes to New Ways of Viewing Commodified Tourism,” Jamal, M. and Robinson, M. eds., *The SAGE Handbook of Tourism Studies*, London: Sage Publications, 256-258.
- Weaver, D. B., 1991, “Alternatives to Mass Tourism in Dominica,” *Annals of Tourism Research*, 18: 414-432.
- , 1995, “Alternative Tourism in Montserrat,” *Tourism Management*, 16: 593-604.

Wellman, B., 2001, “Physical Place and Cyberplace: The Rise of Networked Individualism,”
International Journal of Urban and Regional Research, 25: 227-252.

ウインケル, 2017, スタッフ・ブログ, (2017年10月27日取得,
<http://www.winkel.co.jp/korean/staff/page/43>).

依田真美, 2009, 「ボランティア・ツーリズムにかんする国内外の研究動向と日本社会における可能性」『日本観光研究学会全国大会学術論文集』, No.24: 329-332.

Yoda, M., 2010, “Volunteer Tourism in Japan: Its Potential in Transforming ‘Non-volunteers’ to Volunteers,” proceedings, the JANPORA 12th Annual Conference.

依田真美, 2012, 「首都圏住民のボランティアツーリズムの参加と意識にかんする調査(2012年)」『観光創造研究』 8: 1-48.

吉原直樹, 2008, 『モビリティと場所—21世紀都市空間の転回』東京大学出版会.

全国ボランティア活動振興センター編, 2002, 『全国ボランティア活動実態調査報告書』.